

CZ
781
020

刑民事
事
訴訟法

037061-000-8

CZ-781-020

民事刑事訴訟法

文昌堂

M23

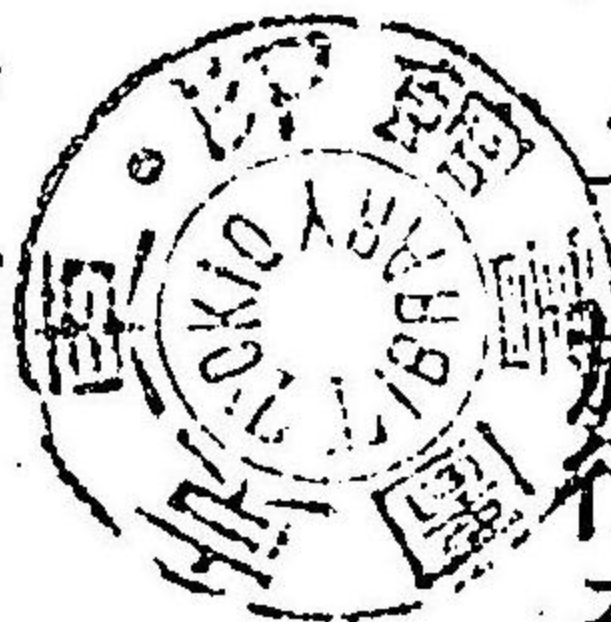
BBS-0648



CZ
781
020

№65257

23

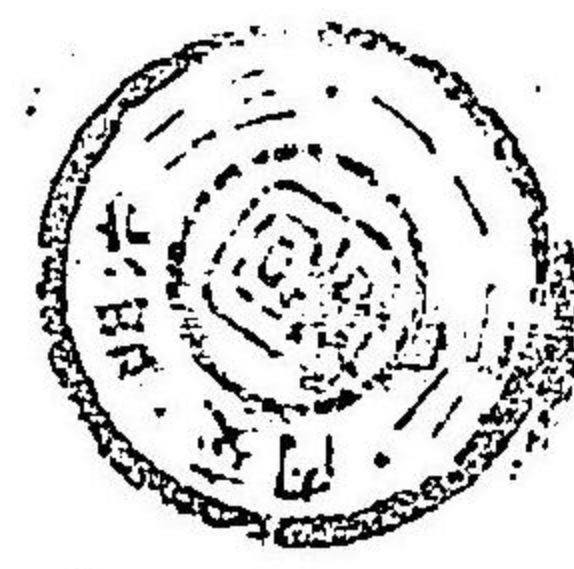


持14
58

朕民事訴訟法ヲ裁可シ之ヲ公布セシム此法律ハ明治三十四年一月一日ヨリ
施行スヘキコトヲ命ス

御名 御璽

明治二十三年三月二十七日



農	外	遞	文	陸	大	司	海	内閣總理大臣兼内務大臣
務	務	信	部	軍	藏	法	軍	
大	大	大	大	大	大	大	大	
臣	臣	臣	臣	臣	臣	臣	臣	伯爵
	子爵	伯爵	子爵	伯爵	伯爵	伯爵	伯爵	山縣
岩	青	後	榎	大	松	山	西	有
村	木	藤	本	山	方	田	郷	朋
通	周	象	武		正	顯	從	
俊	藏	二	揚	巖	義	義	道	

法律第二十九號

民事訴訟法目錄

第一編 總則

第一章 裁判所

第一節 裁判所ノ事物ノ管轄

第二節 裁判所ノ土地ノ管轄

第三節 管轄裁判所ノ指定

第四節 裁判所ノ管轄ニ付テノ合意

第五節 裁判所職員ノ除斥及ヒ忌避

第六節 行事ノ立會

第二章 當事者

第一節 訴訟能力

第二節 共同訴訟人

第三節 第三者ノ訴訟參加

第四節 訴訟代理人及ヒ輔佐人

第五節 訴訟費用

第六節 保證

第七節 訴訟上ノ救助

第三章 訴訟手續

第一節 口頭辯論及ヒ準備書面

第二節 送達

第三節 期日及ヒ期間

第四節 懈怠ノ結果及ヒ原狀回復

第五節 訴訟手續ノ中斷及ヒ中止

第二編 第一審ノ訴訟手續

第一章 地方裁判所ノ訴訟手續

第一節 判決前ノ訴訟手續

第二節 判決

第三節 缺席判決

第四節 計算事件、財産分別及ヒ此ニ類
スル訴訟ノ準備手續

第五節 證據調ノ總則

第六節 人證

第七節 鑑定

第八節 書證

第九節 檢證

第十節 當事者本人ノ訊問

第十一節 證據保全

第二章 區裁判所ノ訴訟手續

第一節 通常ノ訴訟手續

第二節 督促手續

第三編 上訴

第一章 控訴

第二章 上告

第三章 抗告

第四編 再審

第五編 證書訴訟及ヒ爲替訴訟

第六編 強制執行

第一章 總則

第二章 金錢ノ債權ニ付テノ強制執行

第一節 動産ニ對スル強制執行

第一款 通則

第二款 有體動産ニ對スル強制執行

第三款 債權及ヒ他ノ財産權ニ對スル強制執行

強制執行

第四款 配當手續

第二節 不動産ニ對スル強制執行

第一款 通則

第二款 強制競賣

第三款 強制管理

第三節 船舶ニ對スル強制執行

第三章 金錢ノ支拂ヲ目的トセサル債權ニ
付テノ強制執行

第四章 假差押及ヒ假處分

第七編 公示催告手續

第八編 仲裁手續

民事訴訟法

第一編 總則

第一章 裁判所

第一節 裁判所ノ事物ノ管轄

第一條 裁判所ノ事物ノ管轄ハ裁判所構成法ノ規定ニ從フ

第二條 訴訟物ノ價額ニ依リ管轄ノ定マルトキハ以下數條ノ規定ニ從フ

第三條 訴訟物ノ價額ハ起訴ノ日時ニ於ケル價額ニ依リ之ヲ算定ス

果實、損害賠償及ヒ訴訟費用ハ法律上相牽連スル主タル請求ニ附帶シ一ノ訴ヲ以テ請求スルトキハ之ヲ算入セス

第四條 一ノ訴ヲ以テ數箇ノ請求ヲ爲ストキハ前條第二項ニ掲クルモノヲ除ク外其額ヲ合算ス

本訴ト反訴トノ訴訟物ノ價額ハ之ヲ合算セス
第五條 訴訟物ノ價額ハ左ノ方法ニ依リ之ヲ定

第一 債權ノ擔保又ハ債權ノ擔保ヲ爲スニ從タル物權カ訴訟物ナルトキハ其債權ノ額ニ依ル但物權ノ目的物ノ價額寡キトキハ其額ニ依ル

第二 地役カ訴訟物ナルトキハ要役地ノ地役ニ依リ得ル所ノ價額ニ依ル但地役ノ爲メ承役地ノ價額ノ減シタル額カ要役地ノ地役ニ依リ得ル所ノ價額ヨリ多キトキハ其減額ニ依ル

第三 貸借又ハ永貸借ノ契約ノ有無又ハ其時期カ訴訟物ナルトキハ爭アル時期ニ當ル借賃ノ額ニ依ル但一个年借賃ノ二十倍ノ額カ右ノ額ヨリ寡キトキハ其二十倍ノ額ニ依ル

第四 定時ノ供給又ハ収益ニ付テノ權利カ訴訟物ナルトキハ一个年收入ノ二十倍ノ額ニ依ル但收入權ノ期限定マリタルモノ

ニ付テハ其將來ノ收入ノ總額カ二十倍ノ額ヨリ寡キトキハ其額ニ依ル

第六條 訴訟物ノ價額ハ必要ナル場合ニ於テハ

第三條乃至第五條ノ規定ニ從ヒ裁判所ノ意見ヲ以テ之ヲ定ム

裁判所ハ申立ニ因リ證據調ヲ命シ又ハ職權ヲ以テ檢證若クハ鑑定ヲ命スルコトヲ得

第七條 地方裁判所ノ判決ニ對シテハ其事件カ區裁判所ノ事物ノ管轄ニ屬ス可キ理由ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第八條 事物ノ管轄ニ付キ區裁判所又ハ地方裁判所カ管轄違ナリト宣言シ其裁判確定シタルトキハ此裁判ハ後ニ其事件ノ繫屬ス可キ裁判所ヲ羈束ス

第九條 地方裁判所カ事物ノ管轄違ナリトシテ訴ヲ却下スルトキハ原告ノ申立ニ因リ同時ニ判決ヲ以テ原告ノ指定シタル自己ノ管轄内ノ區裁判所ニ其訴訟ヲ移送ス可シ

區裁判所カ事物ノ管轄違ナリトシテ訴ヲ却下スルトキハ同時ニ判決ヲ以テ其訴訟ヲ所屬ノ地方裁判所ニ移送ス可シ

移送ノ申立ハ判決ニ接著スル口頭辨論ノ終結前ニ之ヲ爲ス可シ

移送言渡ノ判決確定シタルトキハ其訴訟ハ移送ヲ受ケタル裁判所ニ繫屬スルモノト看做ス

第二節 裁判所ノ土地ノ管轄(裁判籍)

第十條 人ノ普通裁判籍ハ其住所ニ依リテ定ム

普通裁判籍アル地ノ裁判所ハ其人ニ對スル總テノ訴ニ付キ管轄ヲ有ス但訴ニ付キ專屬裁判籍ヲ定メサル場合ニ限ル

第十一條 軍人、軍屬ハ裁判籍ニ付テハ兵營地若クハ軍鑑定營所ヲ以テ住所トス但此規定ハ豫備、後備ノ軍籍ニ在ル者及ヒ兵役義務履行ノ爲メノミニ服役スル軍人、軍屬ニ之ヲ適用セス

第十二條 外國ニ在ル本邦ノ公使及ヒ公使館ノ

官吏並ニ其家族、從者ノ裁判所上ノ住所ハ本邦ニ於テ本人ノ最後ニ有セシ住所ナリトス此住所ナキモノ付テハ司法大臣ノ命令ヲ以テ豫メ定ムル東京内ノ區ヲ以テ其住所ナリトス

第十三條 內國ニ住所テ有セサル者ノ普通裁判籍ハ本人ノ現在地ニ依リテ定マル若シ其現在地ノ知レサルカ又ハ外國ニ在ルトキハ其最後ニ有セシ內國ノ住所ニ依リテ定マル

第十四條 國ノ普通裁判籍ハ訴訟ニ付キ國ヲ代表スル官廳ノ所在地ニ依リテ定マル但訴訟ニ付キ國ヲ代表スルニ付テノ規定ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

公又ハ私ノ法人及ヒ其資格ニ於テ訴ヘラル、コトヲ得ル會社其他ノ社團又ハ財團等ノ普通

六

裁判籍ハ其所在地ニ依リテ定マル此所在地ハ別段ノ定ナキトキハ事務所所在ノ地トス若シ事務所ナキトキ又ハ數所ニ於テ事務ヲ取扱フトキハ其首長又ハ事務擔當者ノ住所ヲ以テ事務所ト看做ス

第十五條 生徒、雇人、營業使用人、職工、習業者其他性質上一定ノ地ニ永ク寓在ス可キ者ニ對スル財產權上ノ請求ニ付テノ訴ハ其現在地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

第十六條 製造、商業其他ノ營業ニ付キ直接ニ取引ヲ爲ス店舗ヲ有スル者ニ對シテハ其店舗所在地ノ裁判所ニ營業上ニ關スル訴ヲ起スコトヲ得

前項ノ裁判籍ハ住家及ヒ農業用建物アル地所ヲ利用スル所有者、用益者又ハ賃借人ニ對ス

ル訴ニ付テモ亦之ヲ適用ス但此訴カ地所ノ利用ニ付テノ權利關係ヲ有スルトキニ限ル

第十七條 內國ニ住所ヲ有セサル債務者ニ對スル財產權上ノ請求ニ付テノ訴ハ其財產又ハ訴ヲ爲シテ請求スル物ノ所在地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

債權ニ付テハ債務者(第三債務者)ノ住所ヲ以テ其財產ノ所在地トス又債權ニ付キ物カ擔保ノ責ヲ負フトキハ其物ノ所在地ヲ以テ財產ノ所在地トス

第十八條 契約ノ成立若クハ不成立ノ確定又ハ其履行若クハ銷除、廢罷、解除又ハ其不履行若クハ不十分ノ履行ニ關スル賠償ノ訴ハ其訴訟ニ係ル義務ヲ履行ス可キ地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

第十九條 會社其他ノ社團ヨリ社員ニ對シ又ハ社員ヨリ社員ニ對シ其社員タル資格ニ基ク請

求ノ訴ハ其會社其他ノ社團ノ普通裁判籍アル

地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

第二十條 不正ノ損害ノ訴ハ責任者ニ對シ其行為ノ有リタル地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

第二十一條 辨護士又ハ執達吏ノ手数料及ヒ立替金ニ付キ其委任者ニ對スル訴ハ訴訟物ノ價額ノ多寡ニ拘ハラス本訴訟ノ第一審裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

第二十二條 不動産ニ付テハ其所在地ノ裁判所ハ總テ不動産上ノ訴殊ニ本權並ニ占有ノ訴及ヒ分割並ニ經界ノ訴ヲ專ラニ管轄ス

第二十三條 不動産上ノ裁判籍ニ於テハ債權ノ擔保ヲ爲ス從タル物權ニ基ク不動産上ノ訴ニ附帶シテ同一被告ニ對スル債權ノ訴ヲ起スコトヲ得

不動産上ノ裁判籍ニ於テハ不動産ノ所有者若クハ占有者ニ對スル入權ノ訴又ハ不動産ニ加

七

ハタル損害ノ訴ヲ起スコトヲ得

第二十四條 相續權、遺贈其他死亡ニ因リテ效果ヲ生スル處分ニ基ク請求ノ訴ハ遺產者死亡ノ時普通裁判籍ヲ有セシ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

相續裁判籍ニ於テハ遺產債權者ヨリ遺產者又ハ相續人ニ對スル請求ノ訴ヲ起スコトヲ得但遺產ノ全部又ハ一分カ其裁判所ノ管轄區内ニ存在スルトキニ限ル

第二十五條 第二十三條ノ規定ヲ除外原告ハ數箇ノ管轄裁判所ノ中ニ就キ選擇ヲ爲スコトヲ得

第三節 管轄裁判所ノ指定

第二十六條 管轄裁判所ノ指定ハ裁判所構成法ニ定メタル場合ノ外尙ホ不動産上ノ裁判籍ニ訴ヲ起スコキ場合ニ於テ不動産カ數箇ノ裁判所ノ管轄區内ニ散在スルトキモ亦之ヲ爲ス

第二十七條 管轄裁判所ノ指定ニ付キ申請ヲ爲

ス場合及ヒ其決定ヲ爲ス裁判所ハ裁判所構成法第十條ノ規定ニ從フ

第二十八條 管轄裁判所ノ指定ニ付テノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ其中請ニ付キ管轄權ヲ有スル裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

右裁判所ハ口頭辯論ヲ經スシテ其申請ヲ決定管轄裁判所ヲ定メタル決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第四節 裁判所ノ管轄ニ付テノ合意

第二十九條 第一審裁判所ハ當然管轄權ヲ有セサルモ當事者ノ合意ニ因リ管轄權ヲ有ス但書面ヲ以テ合意ヲ爲シ且其合意カ一定ノ權利關係及ヒ其權利關係ヨリ生スル訴訟ニ係ルトキニ限ル

第三十條 被告カ管轄違ノ申立ヲ爲サスシテ本案ノ口頭辯論ヲ爲ストキハ亦前條ト同一ノ效力ヲ生ス

第三十一條 左ノ場合ニ於テハ第二十九條及ヒ

第三十條ノ規定ヲ適用セス

第一 財産權上ノ請求ニ非サル訴訟ニ係ルトキ

第二 專屬管轄ニ屬スル訴ナルトキ

第五節 裁判所職員ノ除斥及ヒ忌避

第三十二條 判事ハ左ノ場合ニ於テ法律ニ依リ

其職務ノ執行ヨリ除斥セラル可シ

第一 判事又ハ其婦カ原告若クハ被告タルトキ又ハ訴訟ニ係ル請求ニ付キ當事者ノ一方若クハ雙方ト共同權利者共同義務者若クハ償還義務者タル關係ヲ有スルトキ

第二 判事又ハ其婦カ當事者ノ一方若クハ雙方又ハ其配偶者ト親族ナルトキ但姻族ニ付テハ婚姻ノ解除シタルトキト雖モ亦同シ

第三 判事カ同一ノ事件ニ付キ證人若クハ鑑定人ト爲リテ訊問ヲ受クルトキ又ハ訴訟

認代理人タル任ヲ受クルトキ若クハ受ケタルトキ又ハ法律上代理人ト爲ル權利ヲ有スルトキ若クハ之ヲ有セタルトキ

第四 判事カ不服ノ申立アル裁判ヲ前審又ハ仲裁ニ於テ爲スコ當リ判事又ハ仲裁人トシテ干與シタルトキ但此場合ニ於テ判事ハ受命判事又ハ受託判事トシテハ職務ノ執行ヨリ除斥セラル、コト無シ

第三十三條 判事カ法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セラル、トキ及ヒ偏頗ノ恐アルトキハ總テノ場合ニ於テ各當事者ヨリ之ヲ忌避スルコトヲ得

偏頗ノ忌避ハ判事ノ不公平ナル裁判ヲ爲スコトヲ疑フコ足ル可キ事情アルトキ之ヲ爲スコトヲ得

第三十四條 判事カ法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セラル、場合ニ於ケル判事ノ忌避ハ其訴訟ニ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハズ之ヲ爲ス

トテ得

偏頗ノ恐アル場合ニ於テハ原告若クハ被告其
覺知シタル忌避ノ原因ヲ主張セスシテ判事ノ
面前ニ於テ中立ヲ爲シ又ハ相手方ノ中立ニ對
シ陳述ヲ爲シタル後ハ其判事ヲ忌避スルコト
ヲ得ス

第三十五條 忌避ノ申請ハ判事所屬ノ裁判所ニ
書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

忌避ノ原因ハ之ヲ説明スルコトヲ要ス忌避セ
ラレタル判事ノ職務上ノ陳述ハ其説明ノ用ニ
充ツルコトヲ得

原告若クハ被告カ判事ノ面前ニ於テ申立ヲ爲
シ又ハ相手方ノ中立ニ對シ陳述ヲ爲シタル後
其判事ニ對シ偏頗ノ忌避ヲ爲スコトキハ忌避ノ
原因其後ニ生シ又ハ之ヲ其後ニ覺知シタルコ
トヲ説明ス可シ

第三十六條 忌避セラレタル判事合議裁判所ニ
屬スルトキハ其裁判所忌避ノ申請ヲ裁判ス但

完結スルマテ總テノ行爲ヲ避ク可シ然レトモ
偏頗ノ爲ニ忌避セラレタル判事ハ猶豫ス可カ
ラサル行爲ヲ爲ス可シ

第四十條 忌避申請ノ管轄裁判所ハ其申請アラ
サルモ忌避ノ原因タル事情ニ付キ判事ヨリ申
出アルトキ又ハ他ノ事由ヨリシテ判事カ法律
ニ依リ除斥セラレ、疑アルモ亦裁判ヲ爲ス
此裁判ハ豫メ當事者ヲ審訊セスシテ之ヲ爲ス
又其裁判ハ之ヲ當事者ニ送達スルコトヲ要セ
ス

第四十一條本節ノ規定ハ裁判所書記ニモ之ヲ準
用ス但其裁判ハ書記所屬ノ裁判所之ヲ爲ス

第六節 檢事ノ立會

第四十二條 檢事ハ左ノ訴訟ニ付キ意見ヲ述フ
ル爲メ其口頭辯論ニ立會フ可シ

第一 公ノ法人ニ關スル訴訟

第二 婚姻ニ關スル訴訟

第三 夫婦間ノ財産ニ關スル訴訟

十

忌避セラレタル判事ハ其裁判ニ參與スルコト
ヲ得ス

若シ其裁判所右判事ノ退去ニ因リ決定ヲ爲ス
コト能ハサルトキハ直近上級ノ裁判所其申請
ヲ裁判ス

區裁判所判事忌避セラレタルトキハ上級ノ地
方裁判所其申請ヲ裁判ス若シ區裁判所判事カ
忌避ノ申請ヲ正當ナリト爲スコトキハ裁判ヲ要
セス

第三十七條 忌避ノ申請ニ付テノ裁判ハ口頭辯
論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得忌避セラレタ
ル判事ハ先ツ申請ノ理由ニ付キ職務上意見ヲ
述フ可シ

第三十八條 忌避ノ申請ヲ正當ナリト宣言スル
決定ニ對シテハ上訴ヲ爲スコトヲ得ス其申請
ヲ不當ナリト宣言スル決定ニ對シテハ即時抗
告ヲ爲スコトヲ得

第三十九條 忌避セラレタル判事ハ忌避申請ノ

第四 親子若クハ養親子ノ分限其他總テ人
ノ分限ニ關スル訴訟

第五 無能力者ニ關スル訴訟

第六 養料ニ關スル訴訟

第七 失踪者及ヒ相續人虧缺ノ遺産ニ關ス
ル訴訟

第八 證書ノ偽造若クハ變造ノ訴訟

第九 再審

檢事ノ陳述ハ當事者ノ辨論終リタルトキ之ヲ
爲ス

當事者ハ檢事ノ意見ニ對シ事實ノ更正ノミコ
付キ陳述ヲ爲スコトヲ得

第二章 當事者

第一節 訴訟能力

第四十三條 原告若クハ被告カ自ラ訴訟ヲ爲シ
又ハ訴訟代理人ヲシテ之ヲ爲サシムル能力ト
法律上代理人ニ依レル訴訟無能力者ノ代表ト
法律上代理人カ訴訟ヲ爲シ又ハ一ノ訴訟行爲

十一

ヲ爲スニ付テノ特別授權ノ必要トハ民法ノ規定ニ從フ

第四十四條 外國人ハ自國ノ法律ニ從ヒ訴訟能力ヲ有セサルモ本邦ノ法律ニ從ヒ訴訟能力ヲ有スルモノナルトキハ之ヲ有スルモノト看做ス

第四十五條 裁判所ハ訴訟ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハズ職權ヲ以テ訴訟能力法律上代理人タル資格及ヒ訴訟ヲ爲スニ必要ナル授權ニ欠缺ナキヤ否ヤヲ調査ス可シ

裁判所ハ遲滯ノ爲メ原告若クハ被告ニ危害アリ且其欠缺ノ補正ヲ爲シ得ルモノト認ムルトキハ原告若クハ被告又ハ其法律上代理人ニ其ノ欠缺ノ補正ヲ爲ス條件ヲ以テ一時訴訟ヲ爲スヲ許スコト得此場合ニ於テ裁判所ハ欠缺補正ノ爲メ相當ノ期間ヲ定メ其期間ノ満了前ニ判決ヲ爲スコトヲ得ス但其欠缺ノ補正ハ判決ニ接若スル口頭辯論ノ終結マテ之ヲ追完スル

コトヲ得

第四十六條 訴訟無能力者又ハ相續人ノ未定ノ遺產又ハ不分明ナル相續人ニ對シ訴訟ヲ起ス可キ場合ニ於テ法律上代理人アラサルトキハ其事件ノ繫屬ス可キ裁判所ノ裁判長ハ申立ニ因リ遲滯ノ爲メ危害ノ恐アル場合ニ限り特別代理人ヲ任ス可シ

右申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得此裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲シ其裁判ハ申請人ニ之ヲ送達シ又申請ヲ認許シタルトキハ其任セラレタル特別代理人ニモ亦之ヲ送達ス可シ

申請ヲ却下スル裁判ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得
裁判長ヨリ任セラレタル特別代理人ハ法律上代理人又ハ相續人ノ出頭スルマテ訴訟行爲ニ付キ法律上代理人ノ權利及ヒ義務ヲ有ス
第四十七條 第十五條ニ掲ケタル場合ニ於テ訴訟

十二

訴訟無能力者カ其現在地又ハ兵營地若クハ軍艦定繫所ノ裁判所ニ訴テ受ク可キ場合ニ於テ其法律上代理人他ノ地ニ住スルトキハ遲滯ノ爲メ危害ナシト雖モ前條ノ規定ニ從ヒ特別代理人ヲ任スルコトヲ得

此他裁判ニ對シ抗告ヲ許ス規定ヲ除ク外總テ前條ノ規定ヲ適用ス

第二節 共同訴訟人

第四十八條 左ノ場合ニ於テハ共同訴訟人トシテ數人カ共ニ訴ヲ爲シ又ハ訴ヲ受クルコトヲ得

第一 數人カ訴訟物ニ付キ權利共通者クハ

義務共通ノ地位ニ立ツトキ

第二 同一ナル事實上及ヒ法律上ノ原因ニ

基ク請求又ハ義務カ訴訟ノ目的物タルトキ

第三 性質ニ於テ同種類ナル事實上及ヒ法律上ノ原因ニ基ク同種類ナル請求又ハ義務

務カ訴訟ノ目的物タルトキ

第四十九條 共同訴訟人ハ其資格ニ於テハ各別ニ相手方ニ對立シ其一人ノ訴訟行爲及ヒ懈怠又ハ相手方ヨリ其一人ニ對スル訴訟行爲及ヒ懈怠ハ他ノ共同訴訟人ニ利害ヲ及ボサス

第五十條 然レトモ總テノ共同訴訟人ニ對シ訴訟ニ係ル權利關係カ合一コトニ確定ス可キトキニ限り左ノ規定ヲ適用ス

共同訴訟人中ノ或ル人ノ攻撃及ヒ防禦ノ方法(證據方法ヲ包含ス)ハ他ノ共同訴訟人ノ利益ニ於テ效ヲ生ス

共同訴訟人中ノ或ル人カ爭ヒ又ハ認諾セサルトキト雖モ總テノ共同訴訟人カ悉ク爭ヒ又ハ認諾セサルモノト看做ス

共同訴訟人中ノ或ル人ノミカ期日又ハ期間ヲ懈怠シタルトキハ其懈怠シタル者ハ懈怠セサル者ニ代理ヲ任シタルモノト看做ス

然レトモ懈怠シタル共同訴訟人ニハ其懈怠セ

十三

サリシ場合ニ於テ爲ス可キ總テノ送達及ヒ呼
出ヲ爲スコトヲ要ス其懈怠シタル共同訴訟人
ハ何時タリトモ其後ノ訴訟手續ニ再ヒ加ハル
コトヲ得

第三節 第三者ノ訴訟參加

第五十一條 他人ノ間ニ權利拘束ト爲リタル訴
訟ノ目的物ノ全部又ハ一分ヲ自己ノ爲ニ請求
スル第三者ハ本訴訟ノ權利拘束ノ終ニ至ルマ
テ其訴訟力第一審ニ於テ擊屬シタル裁判所ニ
當事者雙方ニ對スル訴(主參加)ヲ爲シテ其請
求ヲ主張スルコトヲ得

第三者カ原告及ヒ被告ノ共謀ニ因リ自己ノ債
權ニ損害ヲ生スルコトヲ主張スルトキモ亦同
シ

第五十二條 本訴訟ハ第一審ニ擊屬スルト上級
審ニ擊屬スルト中間ハ原告、被告若クハ主
參加人ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ主參加ニ
付テノ權利拘束ノ終ニ至ルマテ之ヲ中止スル

從參加人ノ陳述及ヒ行爲ト主タル原告若クハ
被告ノ陳述及ヒ行爲ト相抵觸スル場合ニ於テ
ハ主タル原告若クハ被告ノ陳述及ヒ行爲ヲ以
テ標準ト爲ス但民法ニ於テ此ニ異ナル規定アリ
ルトキハ此限ニ在ラス

第五十五條 從參加人ハ訴訟ヨリ脱退シタルト
キト雖モ其補助シタル原告若クハ被告トノ關
係ニ於テハ其訴訟ノ確定裁判ヲ不當ナリト主
張スルコトヲ得ス

從參加人ハ其附隨ノ時ノ訴訟ノ程度ニ因リ又
ハ主タル原告若クハ被告ノ所爲ニ因リ攻撃及
ヒ防禦ノ方法ヲ施用スルコトヲ妨ケラレハト
キ又ハ主タル原告若クハ被告カ從參加人ノ當
時知ラザリシ攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ故意又ハ
重過失ニ因リ施行セザリシトキニ限リ其補助
シタル原告若クハ被告カ訴訟ヲ不十分ニ爲シ
タリト主張スルコトヲ得

第五十六條 從參加ハ本訴訟ノ審屬スル裁判所

コトヲ得

中止ノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ本訴訟ノ審
屬スル裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得
決定ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得
中止ヲ命スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲ス
コトヲ得

第五十三條 他人ノ間ニ權利拘束ト爲リタル訴
訟ニ於テ其一方ノ勝訴ニ依リ權利上利害ノ關
係ヲ有スル者ハ訴訟ノ如何ナル程度ニ在ルテ
間ハ權利拘束ノ繼續スル間ハ其一方ヲ補助
(從參加)スル爲メ之ニ附隨スルコトヲ得

第五十四條 從參加人ハ其附隨スル時ニ於ケル
訴訟ノ程度ヲ妨ケサル限リハ其主タル原告若
クハ被告ノ爲ニ攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ施川シ
且總テノ訴訟行爲ヲ有效ニ行ヒ殊ニ主タル原
告若クハ被告ノ爲ニ存スル期間内ニ故障、支
拂命令ニ對スル異議又ハ上訴ヲ爲ス權利ヲ有
ス

ニ申請ヲ以テ之ヲ爲ス可シ申請ニハ當事者及
ヒ訴訟ヲ表示シ又一定ノ利害關係及ヒ附隨セ
ントスル陳述ヲ開示ス可シ

申請ハ當事者ニ之ヲ送達ス可シ
從參加ハ故障異議又ハ上訴ト併合シテ之ヲ爲
スコトヲ得

第五十七條 原告若クハ被告カ從參加ニ付キ異
議ヲ述フルトキハ當事者及ヒ從參加人ヲ審訊
シタル後決定ヲ以テ參加ノ許否ヲ裁判ス其裁
判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得
利害關係ノ存否ニ付キ爭アルトキハ從參加人
其關係ヲ説明スルノミヲ以テ參加ヲ許スニ足
ル

右ノ決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得
參加ヲ許サル裁判確定セサル間ハ從參加人
本訴訟ニ立會ハシメ殊ニ總テノ期日ニ之ヲ
呼出シ又本訴訟ニ關係アル裁判ヲ爲シタル
キハ從參加人ニ其裁判ヲ送達ス可シ

第五十八條 從參加人ハ當事者雙方ノ承諾ヲ得
テ其附隨シタル原告若クハ被告ニ代リ訴訟ヲ
擔任スルコトヲ得此場合ニ於テハ其原告若ク
ハ被告ノ申立ニ因リ判決ヲ以テ訴訟ヨリ其原
告若クハ被告ヲ脱退セシム可シ

第五十九條 原告若クハ被告若シ敗訴スルトキ
ハ第三者ニ對シ擔保又ハ賠償ノ請求ヲ爲シ得
ヘシト信シ又ハ第三者ヨリ請求ヲ受ク可キコ
トヲ恐ル、場合ニ於テハ訴訟ノ權利拘束間第
三者ニ訴訟ヲ告知スルコトヲ得

第六十條 訴訟告知ハ訴訟ノ繫屬スル裁判所ニ
其訴訟告知ノ理由及ヒ訴訟ノ程度ヲ記載シテ
及書面ヲ提出シテ之ヲ爲ス可シ
此書面ハ第三者ニ送達スルコトヲ要ス又訴訟
ヲ告知スル原告若クハ被告手相方ニハ其原本
ヲ送付ス可シ

第六十一條 訴訟ハ訴訟告知ニ拘ハラヌ之ヲ續
行ス

第三者參加ス可キコトヲ陳述スルトキハ從參
加ノ規定ヲ適用ス

第六十二條 第三者ノ名ヲ以テ物ヲ占有スルコ
トヲ主張スル者其物ノ占有者トシテ被告ト爲
リタルトキハ本案ノ辯論前第三者ヲ指名シ之
ニ陳述ヲ爲シシムル爲メ其呼出ヲ求ムルトキ
ハ第三者ノ陳述ヲ爲シ又ハ之ヲ爲ス可キ期日
マテ本案ノ辯論ヲ拒ムコトヲ得

第三者カ被告ノ主張ヲ争フトキ又ハ陳述ヲ爲
サハルトキハ被告ハ原告ノ申立ニ應ズルコト
ヲ得
第三者カ被告ノ主張ヲ正當ト認ムルトキハ被
告ノ承諾ヲ得テ之ニ代リ訴訟ヲ引受クルコト
ヲ得

第三者カ訴訟ヲ引受ケタルトキハ裁判所ハ被
告ノ申立ニ因リ其被告ヲ訴訟ヨリ脱退セシム

可シ其物ニ付テノ裁判ハ被告ニ對シテモ効力
ヲ有シ且之ヲ執行スルコトヲ得

第四節 訴訟代理人及ヒ輔佐人

第六十三條 原告若クハ被告自ラ訴訟ヲ爲サ、
ルハ辨護士ヲ以テ訴訟代理人トシ之ヲ爲テ
辨護士ノ在ラサル場合ニ於テハ訴訟能力者ヲ
親族若クハ雇人ヲ以テ訴訟代理人ト爲シ若
シ此等ノ者ノ在ラサルトキハ他ノ訴訟能力者
ヲ以テ訴訟代理人ト爲スコトヲ得

萬裁判所ニ於テハ辨護士ノ在ルトキト雖モ訴
訟能力者タル親族若クハ雇人ヲ以テ訴訟代理
人ト爲スコトヲ得

第六十四條 訴訟委任ハ裁判所ノ記録ニ備フ可
シ書面委任ヲ以テ之ヲ證ス可シ

私署證書ハ相手方ノ求ニ因リ之ヲ認證ス可シ
其認證ハ公證人之ヲ爲シ又相當官吏之ヲ爲ス
コトヲ得

口頭辯論ノ期日又ハ受命判事若クハ受託判事

ノ面前ニ於テ口頭委任ヲ爲シ其陳述ヲ調書ニ
記載セシムルトキハ書面委任ト同一ナリトス

第六十五條 訴訟委任ハ反訴、主參加故障、假
差押若クハ假處分又ハ強制執行ニ因リ生スル
訴訟行爲ヲ併セ訴訟ニ關スル總テノ訴訟行爲
ヲ爲シ及ヒ相手方ヨリ辨濟スル費用ノ領收ヲ
爲ス權ヲ授與ス

訴訟代理人ハ特別ノ委任ヲ受クルニ非サレハ
控訴若クハ上告ヲ爲シ再審ヲ求メ、代人ヲ任
シ、和解ヲ爲シ訴訟物ヲ拋棄シ又ハ相手方ヨ
リ主張シタル請求ヲ認諾スル權ヲ有セズ
第六十六條 訴訟委任ハ法律上ノ範圍(第六十
五條第一項)ヲ制限スルモ其制限ハ相手方ニ
對シ効力ナシ

然レトモ辨護士ニ依レル代理ヲ除ク外ハ各箇
ノ訴訟行爲ニ付キ委任ヲ爲スコトヲ得

第六十七條 訴訟代理人數人アルトキハ共同若
シハ各別ニテ代理スルコトヲ得但委任ニ此ト

爲シタル訴訟上ノ行爲及ヒ不行爲ハ原告若クハ被告ニ對シテハ其本人ノ行爲又ハ不行爲ト同一ナリトス

第六十八條 訴訟代理人カ委任ノ範圍内ニ於テ爲シタル訴訟上ノ行爲及ヒ不行爲ハ原告若クハ被告ニ對シテハ其本人ノ行爲又ハ不行爲ト同一ナリトス

然レトモ代理人ノ事實上ノ陳述ハ其代理人ト共ニ裁判所ニ出頭シタル原告若クハ被告ヨリ即時ニ之ヲ取消シ又ハ更正シタルトキニ限リ其効力ヲ失フ

第六十九條 委任者ノ死亡、訴訟能力若クハ法律上代理ノ變更委任ノ廢罷及ヒ代理ノ謝絶ニ因リ委任ノ消滅ハ其消滅ヲ通知スルマテ相手方ニ對シ其効力ナシ

此通知書ハ原告若クハ被告ヨリ受訴裁判所ニ之ヲ差出シ裁判所ハ相手方ニ之ヲ送達ス可シ代理人ハ謝絶ヲ爲スモ委任者他ノ方法ヲ以テ自己ノ權利ノ防衛ヲ爲シ、ル間ハ其委任者ノ爲ニ行爲ヲ爲スコトヲ得

消シ又ハ更正セサルトキニ限リ原告若クハ被告自ラ演述シタルモノト看做ス

第五節 訴訟費用

第七十二條 敗訴ノ原告若クハ被告ハ訴訟費用ヲ負擔シ殊ニ訴訟ニ因リ生シタル費用ヲ相手方ニ辨濟ス可シ但其費用ハ裁判所ノ意見ニ於テ相當ナル權利伸張又ハ權利防禦ニ必要ナリト認ムルモノニ限ル

訴訟中ニ訴ヲ取下ケ、請求ヲ拋棄シ又ハ相手方ノ請求ヲ認諾スル原告若クハ被告ハ敗訴ノ原告若クハ被告ニ同シ

第七十三條 當事者ノ各方一分ハ勝訴ト爲リ一分ハ敗訴ト爲ルトキハ其費用ヲ相消シ又ハ割合ヲ以テ之レヲ分擔ス可シ第一ノ場合ニ於テハ各當事者ハ其ノ支出シタル費用ヲ自カラ負擔シ他ノ一方ニ對シ辨濟ヲ請求スルコトヲ得

然レトモ裁判所ハ相手方ノ要求格外ニ過分ナ

第七十條 委任ノ欠缺ハ原告若クハ被告ノ爲メ其代理人ナキモノト看做ス

裁判所ハ職權ヲ以テ委任ノ欠缺ヲ調査シ委任ナク又ハ適式ノ委任ナク代理人トシテ出頭スル者ニ事情ニ從ヒ費用及ヒ損害ノ保證ヲ立テシメ又ハ之ヲ立テシメヌシテ假ニ訴訟ヲ爲スヲ許スコトヲ得

判決ハ欠缺ヲ補正シ又ハ之ヲ補正スル爲メ裁判所ノ適宜ニ定ムル期間ノ滿了後ニ限リ之ヲ爲スコトヲ得但欠缺ノ補正ハ判決ニ接著スル口頭辨論ノ終結マテ之ヲ追完スルコトヲ得

第七十一條 原告若クハ被告ハ辨護士ヲ輔佐人ト爲シ又ハ何時ニテモ裁判所ノ取消ヲ得ヘキ許可ヲ得テ他ノ訴訟能力者ヲ輔佐人ト爲シテ共ニ出頭スルコトヲ得其輔佐人ハ口頭辨論ニ於テ權利ヲ伸張シ又ハ防禦スル爲メ原告若クハ被告ヲ補助スルモノトス

ルニ非ス且別段ノ費用ヲ生セサリトキ又ハ判事ノ意見、鑑定人ノ鑑定若クハ相互ノ計算ニ因リ要求額ヲ定ムルニ非サレハ容易ニ過分ノ要求ヲ避クルコトヲ得サリトキハ當事者ノ一方ニ訴訟費用ノ全部ヲ負擔セシムルコトヲ得

第七十四條 被告直チニ請求ヲ認諾シ且其作爲ニ因リ訴ヲ起スニ至ラシメタルニ非サルトキハ訴訟費用ハ原告ノ勝訴ト爲リタルニ拘ハラズ其負擔ニ歸ス

第七十五條 期日若クハ期間ヲ懈怠シ又ハ自己ノ過失ニ因リ期日ノ變更、辨論ノ延期、辯論續行ノ爲ニスル期日ノ指定、期間ノ延長其他訴訟ノ遲滯ヲ生セシメタル原告若クハ被告ハ本案ノ勝訴者ト爲リタルニ拘ハラズ此力爲メ生シタル費用ヲ負擔ス可シ

第七十六條 裁判所ハ無益ナル攻撃又ハ防禦ノ方法(證據方法ヲ包含ス)ヲ主張シタル原告若

ハ被告ヲシテ本案ノ騰訴者ト爲リタルコトヲ得
ハラス其方法ノ費用ヲ負擔セシムルコトヲ得
第七十七條 無益ナル上訴又ハ取下ケタル上訴
ノ費用ハ之ヲ提出シタル原告若クハ被告ノ負
擔ニ歸ス

第七十八條 上訴ニ因リ裁判ノ全部又ハ一分ヲ
廢棄若クハ破毀スルトキハ訴訟ノ總費用(上
訴ノ費用ヲ包含ス)ノ裁判ハ本案ノ終局裁判
ト併合シテ更ニ之ヲ爲ス可シ

原告若クハ被告カ前審ニ於テ主張スルコトヲ
得ヘカリシ事實又ハ攻撃若クハ防禦ノ方法ヲ
新ニ提出スルニ因リ勝訴者ト爲ルトキハ其原
告若クハ被告ニ上訴費用ノ全部又ハ一分ヲ負
擔セシムルコトヲ得

第七十九條 當事者カ訴訟物ニ付キ和解ヲ爲ス
トキハ其訴訟ノ費用及ヒ和解ノ費用ハ共ニ相
消シタルモノト看做ス但當事者別段ノ合意ヲ
爲シタルトキハ此限ニ在ラス

判ヲ爲ス可シ

第八十二條 費用ノ點ニ限リタル裁判ニ對シテ
ハ不服ヲ申立ツルコトヲ得然レトモ本案ノ
裁判ニ對シ許ス可キ上訴ヲ提出シ且追行スル
トキニ限リ費用ノ點ニ付キ不服ヲ申立ツルコ
トヲ得

費用ノ點ニ限リタルトキト雖モ相手方ヨリ提
出シタル上訴ニ附帶スル場合ニ於テハ不服ヲ
申立ツルコトヲ得

第八十三條 裁判所書記、法律上代理人、辯護
士其他ノ代理人及ヒ執達吏ノ過失又ハ懈怠ニ
因リ費用ノ生シタルトキハ受訴裁判所ハ申立
シタル決定ヲ爲スコトヲ得但此決定前關係人
ニ口頭又ハ書面ニテ陳辯ヲ爲ス機會ヲ與フ可
シ

此裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ
得其決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第八十條 法律ノ規定ニ從ヒ費用ニ付キ共同訴
訟人ノ連帶義務ノ生セサルトキニ限リ其共同

訴訟人ハ相手方ニ對シ平等ニ費用ヲ負擔ス然
レトモ共同訴訟人ノ訴訟ニ於ケル利害ノ關係
著シク相異ナルトキハ裁判所ハ其利害關係ノ
割合ニ從ヒ費用ヲ負擔セシムルコトヲ得
共同訴訟人中ノ或ル人カ特別ノ攻撃又ハ防禦
ノ方法ヲ主張シタルトキハ他ノ共同訴訟人ハ
此カ爲ニ生シタル費用ヲ負擔セス

第八十一條 從參加ニ對シ原告若クハ被告カ異
議ヲ述フルトキハ其異議ノ決定ニ於テ從參加
人ト其原告若クハ被告トノ中間訴訟ノ費用ニ
付キ第七十二條乃至第七十八條ノ規定ニ從ヒ
テ裁判ヲ爲ス可シ

從參加ヲ許シタルトキ又ハ異議ヲ述ヘサルト
キハ本訴訟ノ判決ニ於テ從參加人ト相手方ナ
ル原告若クハ被告トノ間ニ從參加ニ因リ生シ
タル費用ニ付テモ亦前數條ノ規定ニ從ヒテ裁

第八十四條 辨濟ス可キ費用額ノ確定ハ申請ニ

因リ訴訟ノ第一審ニ繫屬シタル裁判所ノ決定
ヲ以テ之ヲ爲ス
申請ハ第七十二條第二項又ハ上訴取下ノ場合
ヲ除ク外執行ニ得ヘキ裁判ニ依ルトキニ限リ
之ヲ爲スコトヲ得

申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得
申請ニハ費用計算書、相手方ニ付與ス可キ計
算書ノ謄本及ヒ各箇費用額ノ説明ニ必要ナル
證書ヲ添附ス可シ

第八十五條 費用額確定ノ裁判ハ口頭辯論ヲ經
スシテ之ヲ爲スコトヲ得

裁判所ハ裁判所書記ニ費用計算書ノ計算上ノ
檢査ヲ命スルコトヲ得
裁判所ハ費用額確定ノ決定ヲ爲ス前相手方ニ
計算書ヲ付與シテ裁判所ノ定ムル期間内ニ陳
述ヲ爲ス可キ旨ヲ之ニ催告スルコトヲ得此決
定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第八十六條 當事者ハ訴訟費用ノ全部又ハ一分

ニ割合ニ從ヒ分擔ス可キトキハ裁判所ハ費用額確定ノ決定ヲ爲ス前相手方ニ裁判所ノ定ムル期間内ニ其費用ノ計算書ヲ差出ス可キ旨ヲ催告ス可シ此期間ヲ徒過シタル後ハ費用額確定ノ決定ハ相手方ノ費用ヲ願ハス之ヲ爲ス可シ但相手方ハ後ニ自己ノ費用ヲ以テ其費用額確定ノ申請ヲ爲ス妨ト爲ルコト無シ

第六節 保證

第八十七條 訴訟上ノ保證ハ當事者カ別段ノ合意ヲ爲ス場合又ハ此法律ニ於テ保證ヲ定ムルコトヲ裁判所ノ自由ナル意見ニ任スル場合ヲ除ク外裁判所ノ意見ニ於テ擔保ニ十分ナリトスル現金又ハ有價證券ヲ供託シテ之ヲ爲ス
第八十八條 原告又ハ原告ノ從參加人タル外國人ハ被告ニ對シ其求ニ因リ訴訟費用ニ付キ保證ヲ立ツ可シ
左ノ場合ニ於テハ保證ヲ立ツル義務ヲ生ゼス

第一 國際條約又ハ原告ノ屬スル國ノ法律

ニ依リ本邦人カ同一ノ場合ニ於テ保證ヲ立ツル義務ナキトキ

第二 反訴ノ場合

第三 證書訴訟及ヒ爲替訴訟ノ場合

第四 公示催告ニ基キ起シタル訴ノ場合

第八十九條 裁判所ハ前條第一項ノ場合ニ於テハ保證ヲ立ツ可キ數額ヲ確定ス可シ
此數額ヲ確定スルニハ被告ノ訴ヲ受ケタルカ爲メ各審級ニ於テ支出ス可キ訴訟費用ノ額ヲ標準ト爲ス可シ

訴訟中ニ保證ノ不足ヲ生シ且追増保證ヲ立ツ可キコトヲ被告カ求ムルトキハ前項ト同一ノ手續ニ依ル可シ但爭ナキ請求ノ部分カ擔保ニ十分ナルトキハ此限ニ在ラス

第九十條 裁判所ハ保證ヲ立ツ可キ期間ヲ定ム可シ
此期間ノ經過後裁判アルマデニ保證ヲ立テサ

ル場合ニ於テハ被告ノ申立ニ因リ判決ヲ以テ訴ヲ取下ケタリト宣言シ又原告カ上訴ヲ爲シタルトキハ其上訴ヲ取下ケタリト宣言ス可シ

第七節 訴訟上ノ救助

第九十一條 何人ヲ問ハス自己及ヒ其家族ノ必要ナル生活ヲ害スルコト非サレハ訴訟費用ヲ出カスコト能ハサル者ハ訴訟上ノ救助ヲ求ムルコトヲ得但其目的トスル權利ノ伸張又ハ防禦ノ輕忽ナラス又ハ見込ナキニ非スト見ユルトキニ限ル

第九十二條 外國人ハ國際條約又ハ其屬スル國

ノ法律ニ依リ本邦人カ同一ノ場合ニ於テ訴訟上ノ救助ヲ求ムルコトヲ得ルトキニ限リ之ヲ求ムルコトヲ得

第九十三條 訴訟上救助ノ申請ハ訴訟ノ關係ヲ表明シ且證據方法ヲ開示シテ其救助ヲ求ムル審級ノ裁判所ニ之ヲ提出ス可シ其申請ハ口頭以テ之ヲ爲スコトヲ得

原告若クハ被告ハ申請ノ提出ト共ニ管轄市町村長ヨリ發シタル證書ヲ出カスコトヲ要ス其證書ニハ原告若クハ被告ノ身分、職業、財産并ニ家族ノ實況及ヒ其納ム可キ直税ノ額ヲ開示シテ訴訟費用支拂ノ無資力ヲ證ス可シ

第九十四條 訴訟上ノ救助ハ各審ニ於テ各別ニ之ヲ付與ス第一審ニ於テハ強制執行ニ付テモ之ヲ付與スルモノトス

前審ニ於テ訴訟上ノ救助ヲ受ケタルトキハ上級審ニ於テハ無資力ヲ證スルコトヲ要セズ相手方訴訟ヲ提出シタルトキハ上級審ニ於テハ訴訟上ノ救助ヲ求ムル原告若クハ被告ノ權利ノ伸張又ハ防禦ノ輕忽ナラス又ハ見込ナキニ非スト見ユルヤウ調査スルコトヲ要セズ

第九十五條 訴訟上ノ救助ハ之ヲ受ケタル條件ノ存セザリシトキ又ハ消滅シタルトキハ何時タリトモ之ヲ取消スコトヲ得

第九十六條 訴訟上ノ救助ハ之ヲ受ケタル原告

若クハ被告ノ死亡ト共ニ消滅ス

第九十七條 訴訟上ノ救助ハ之ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ爲ニ左ノ効力ヲ生ス

第一 裁判費用(國庫ノ立替金ヲ包含ス)ヲ濟清スルコトノ假免除

第二 訴訟費用ノ保證ヲ立ツルコトノ免除

第三 送達及ヒ執行行爲ヲ爲サシムル爲メ一時無報酬ニテ執達吏ノ附添ヲ求ムル權利

受訴裁判所ハ必要ナル場合ニ於テ訴訟上ノ救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ一時無報酬ニテ辯護士ノ附添ヲ命スルコトヲ得

第九十八條 訴訟上ノ救助ハ相手方ニ生シタル費用ヲ辨濟スル義務ニ影響ヲ及ホサス

第九十九條 救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ爲メ假ニ濟清ヲ免除シタル裁判費用ハ訴訟費用ニ付キ確定裁判ヲ受ケタル相手方又ハ訴若

二十五

クハ上訴ノ取下、拋棄、認諾若クハ和解ニ因リ訴訟費用ヲ負擔ス可キ相手方ヨリ之ヲ取立ツルコトヲ得

救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ニ附添ヒタル執達吏又ハ辯護士ハ同一ノ條件アルトキハ亦自己ノ權利ニ依リ費用確定ノ方法ヲ以テ其手數料及ヒ立替金ヲ取立ツルコトヲ得

第一百條 救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ハ自己及ヒ其家族ノ必要ナル生活ヲ害セスシテ費用ノ濟清ヲ爲シ得ルニ至ルトキハ假免除ヲ得タル數額(第九十七條第一號)ヲ直チニ追拂ヒスル義務アリ

第一百一條 裁判所ハ檢事ノ意見ヲ聽キタル後訴訟上救助ノ付與並ニ辯護士附添ノ命令ヲ付テノ申請、訴訟上救助ノ取消及ヒ數額追拂ノ義務ニ付キ決定ヲ爲ス
此裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

第一百三條 訴訟上ノ救助ヲ付與シ又ハ其取消ヲ拒ミ若クハ費用追拂ヲ命スルコトヲ拒ム決定

ニ對シテハ檢事ニ限リ抗告ヲ爲スコトヲ得
辯護士ノ附添ヲ命スル決定ニ對シテハ上訴ヲ爲スコトヲ得ス

訴訟上ノ救助ヲ拒ミ若クハ取消シ又ハ辯護士ノ附添ヲ拒ミ又ハ費用ノ追拂ヲ命スル決定ニ對シテハ原告若クハ被告ハ抗告ヲ爲スコトヲ得

第三章 訴訟手續

第一節 口頭辯論及ヒ準備書面

第一百三條 判決裁判所ニ於ケル訴訟ニ付テノ當事者ノ辯論ハ口頭ナリトス但此法律ニ於テ口頭辯論ヲ經スシテ裁判ヲ爲スコトヲ定メタルトキハ此限ニ在ラス

第一百四條 口頭辯論ハ書面ヲ以テ之ヲ準備ス

第一百五條 準備書面ニハ左ノ諸件ヲ掲ク可シ
第一 當事者及ヒ其法律上代理人ノ氏名、

身分、職業、住所、裁判所、訴訟物及ヒ附屬書類ノ表示

第二 原告若クハ被告カ法廷ニ於テ爲サント欲スル申立

第三 申立ノ原因タル事實上ノ關係

第四 相手方ノ事實上ノ主張ニ對スル陳述

第五 原告若クハ被告カ事實上主張ノ證明又ハ攻撃ノ爲メ用ヰントスル證據方法及ヒ相手方ノ申出テタル證據方法ニ對スル陳述

第六 原告若クハ被告又ハ其訴訟代理人ノ署名及ヒ捺印

第七 年月日

第一百六條 準備書面ニ於テ提出ス可キ事實ハ簡明ニ之ヲ記載ス可シ

此他事實上ノ關係ノ説明並ニ法律上ノ討論ハ書面ニ之ヲ掲クルコトヲ得

第一百七條 準備書面ニハ訴訟ヲ爲ス可キ資格ニ

付テノ證書ノ原本、正本又ハ謄本其他總テ原告若クハ被告ノ手中ニ存スル證書ニシテ書面中ニ申立ノ原因トシテ引用シタルモノノ謄本ヲ添附ス可シ

證書ノ一部分ノミヲ要用トスルトキハ其冒頭事件ニ屬スル部分、終尾、日附、署名及ヒ印章ヲ謄寫シタル抄本ヲ添附スルヲ以テ足ルルトキハ其證書ヲ表示シ且相手方ニ之ヲ閱覽セシメント欲スル旨ヲ附記スルヲ以テ足ル

第百八條 當事者ハ準備書面及ヒ其附屬書類並ニ相手方ニ付與スル物ノ必要ナル謄本ヲ裁判所書記課ニ差出ス可シ

第百九條 裁判長ハ口頭辯論ヲ開キ且之ヲ指揮ス

裁判長ハ發言ヲ許シ又其命ニ從ハサル者ニ發言ヲ禁スルコトヲ得

裁判長ハ事件ニ付キ十分ナル説明ヲ爲サシメ

且間斷ナリ辯論ヲ終了スルコトニ注意ス又必要ナル場合ニ於テハ直ニ辯論續行ノ期日ヲ定ム

裁判所ニ於テ事件ニ付キ十分ナル説明ヲ爲セリト認ムルトキハ裁判長ハ口頭辯論ヲ開キ及ヒ裁判所ノ判決並ニ決定ヲ言渡ス

第百十條 口頭辯論ハ當事者ニ申立ヲ爲スニ因リテ始マル

當事者ノ演述ハ事實上及ヒ法律上ノ點ニ於ケル訴訟關係ヲ包括ス可シ

口頭演述ニ換ヘテ書類ヲ援用スルコトヲ許サズ文字上ノ旨趣ヲ要用トスルトキハ其要用ナル部分ニ限り之ヲ朗讀スルコトヲ得

第百十一條 各當事者ハ相手方ノ主張シタル事實ニ對シ陳述ヲ爲ス可シ

明カニ爭ハサル事實ハ原告若クハ被告ノ他ノ陳述ヨリ之ヲ爭ハントスル意思カ顯レサルトキハ自白シタルモノト看做ス

第百十三條 事件ノ指揮ニ關スル裁判長ノ命又ハ裁判長若クハ陪席判事ノ發シタル問ニ對シ

辯論ニ與カル者ヨリ不適法ナリトシテ異議ヲ述ベタルトキハ裁判所ハ其異議ニ付キ直チニ裁判ヲ爲ス

第百十四條 裁判所ハ事件關係ヲ明瞭ナラセムル爲メ原告若クハ被告ノ自身出頭ヲ命スルコトヲ得

第百十五條 裁判所ハ原告若クハ被告ノ援用シタル證書ニシテ其手中ニ存スルモノヲ提出ス可キヲ命スルコトヲ得

裁判所ハ外國語ヲ以テ作リタル證書ニ付テハ其譯書ヲ添附ス可キヲ命スルコトヲ得

第百十六條 裁判所ハ當事者ノ所持スル訴訟記録ニシテ事件ノ辯論及ヒ裁判ニ關スルモノヲ提出ス可キヲ命スルコトヲ得

第百十七條 裁判所ハ檢證及ヒ鑑定ヲ命スルコトヲ得

非ス又自己ノ實驗シタルモノモ非サル事實

ニ限り之ヲ許ス此場合ニ於テ不知ヲ以テ答ヘタル事實ハ爭ヒタルモノト看做ス

第百十二條 裁判長ハ職權上調査ス可キ點ニ關シ相手方ヨリ起ササル疑ノ存スルトキハ其疑ニ付キ注意ヲ爲スコトヲ得

裁判長ハ問ヲ發シテ不明瞭ナル申立ヲ釋明シ主張シタル事實ノ不十分ナル證明ヲ補充シ證據方法ヲ申出テ其他事件ノ關係ヲ定ムルニ必要ナル陳述ヲ爲サシム可シ

陪席判事ハ裁判長ニ告ケテ問ヲ發スルコトヲ得

當事者ハ相手手ニ對シ自ラ問ヲ發スルコトヲ得然レトモ其問ヲ發ス可キ旨ヲ裁判長ニ求ムルコトヲ得

若シ其問ニ對シテ答ヘヌ又ハ判然答ヘザルトキハ相手方ノ利益ト爲ル可キ答ヲ爲シタルモノト看做スコトヲ得

此手續ハ申立ニ因リ命スル檢證及ヒ鑑定ニ付
タノ規定ニ從フ

第百十八條 裁判所ハ一箇ノ訴ニ於テ爲シタル
數箇ノ請求又ハ本訴及ヒ反訴ニ付テノ辯論ヲ
分離シテ爲ス可キヲ命スルコトヲ得

第百十九條 同一ノ請求ニ關シ數箇ノ獨立ナル
攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ提出シタルトキハ裁判
所ハ先ツ辯論ヲ其一二ニ制限ス可キヲ命スル
コトヲ得

第百二十條 裁判所ハ同一ノ人又ハ別異ノ人ノ
數箇ノ訴訟ニシテ其裁判所ニ繫屬スルモノノ
辯論及ヒ裁判ヲ併合ス可キヲ命スルコトヲ得
但其訴訟ノ目的物タル請求ヲ元來一箇ノ訴ニ
於テ主張シ得ヘキトキニ限ル

第百二十一條 裁判所ハ訴訟ノ全部又ハ一分ノ
裁判カ他ノ繫屬スル訴訟ニ於テ定マル可キ權
利關係ノ成立又ハ不成立ニ繫ルトキハ他ノ訴
訟ノ完結ニ至ルマテ辯論ヲ中止ス可シ

第百二十二條 裁判所ハ民事訴訟中罰ス可キ行
爲ノ嫌疑生スルトキハ刑事訴訟手續ノ完結ニ
至ルマテ辯論ヲ中止ス可シ但其罰ス可キ行爲
カ訴訟ノ裁判ニ影響ヲ及ホストキニ限ル

第百二十三條 裁判所ハ分離若クハ併合ニ關シ
發シタル命ヲ取消ス可トヲ得

第百二十四條 裁判所ハ閉テタル辯論ノ再開ヲ
命スルコトヲ得

第百二十五條 裁判所ハ辯論ニ與カル者日本語
ニ通ゼサルトキハ通事ヲ立會ハシム但裁判所
構成法第百十八條ノ場合ハ此限ニ在ラス

第百二十六條 裁判所ハ辯論ニ與カル者又ハ
啞ナルトキ之ニ文字ヲ以テ理會セシムルコト
ヲ得サル場合ニ限リ通事ヲ立會ハシムルコト
ヲ得

第百二十七條 裁判所ハ相當ノ演述ヲ爲ス能力
ノ缺ケタル原告若クハ被告又ハ訴訟代理人若
クハ輔佐人ニ其後ノ演述ヲ禁シ且新期日ヲ定
ム

辯護士ヲシテ演述セシム可キコトヲ命ス可シ

裁判所ハ裁判所ニ於テ辯論ヲ業トスル訴訟代
理人若クハ輔佐人ヲ退斥セシムルコトヲ得此
場合ニ於テハ新期日ヲ定メ且退斥ノ決定ヲ原
告若クハ被告ニ送達ス可シ

本條ノ規定ニ從ヒ爲シタル命ニ對シテハ不服
ヲ申立ツルコトヲ得ス

辯護士ニハ本條ノ規定ヲ適用セス

第百二十八條 辯論ニ與カル者秩序維持ノ爲メ
辯論ノ場所ヨリ退斥セラレタルトキハ申立ニ
因リ本人ノ任意ニ退去シタルトキ同一ノ方法
ヲ以テ之ヲ取扱フコトヲ得但裁判所構成法第
百十條ニ依リ中止シタル場合ハ此限ニ在ラ
ス

第百二十九條 口頭辯論ニ付テハ調書ヲ作ル可シ

調書ニハ左ノ諸件ヲ掲ク可シ
第一 辯論ノ場所、年月日
第二 判事、裁判所書記及ヒ立會ヒタル檢
事若クハ通事ノ氏名

第三 訴訟物及ヒ當事者ノ氏名
第四 出頭シタル當事者、法律上代理人、
訴訟代理人及ヒ輔佐人ノ氏名若シ原告若
クハ被告闕席シタルトキハ其闕席シタル
コト

第五 公ニ辯論ヲ爲シ又ハ公開ヲ禁シタル
コト

第百三十條 辯論ノ進行ニ付テハ其要領ノミヲ
調書ニ載記ス可シ
調書ニ記載シテ明確ニス可キ諸件ハ左ノ如シ
第一 自白、認諾、拋棄及ヒ和解
第二 明確ニス可キ規定アル申立及ヒ陳述

第三 證人及ヒ鑑定人ノ供述但其供述ハ以前ノ供述ニ異ナルトキニ限ル

第四 檢證ノ結果

第五 書面ニ作リ調書ニ添附セザル裁判(判決、決定及ヒ命令)

第六 裁判ノ言渡

附録トシテ調書ニ添附シ且調書ニ附録トシテ表示シタル書類ニ於ケル記載ハ調書ニ於ケル記載ニ同シ

第三百三十一條 前條第一號乃至第四號ニ掲ケタル調書ノ部分ハ法廷ニ於テ之ヲ關係人ニ讀聞カセ又ハ閱覽ノ爲メ之ヲ關係人ニ示ス

調書ニハ前項ノ手續ヲ履ミタルコト及ヒ承諾ヲ爲シタルコト又ハ承諾ヲ拒ミタル理由ヲ附記ス可シ

第三百三十二條 調書ニハ裁判長及ヒ裁判所書記署名捺印ス可シ

裁判長差支アルトキハ官等最モ高キ陪席判事之ニ代リ署名捺印ス區裁判所判事差支アルトキハ其裁判所書記ノ署名捺印ヲ以テ足ル

第三百三十三條 受命判事若クハ受託判事又ハ區裁判所判事カ法廷外ニ於テ爲ス審問ニモ亦裁判所書記ヲ立會ハシム

前四條ノ規定ハ右ノ審問調書ニ之ヲ準用ス

第三百三十四條 口頭辨論ノ爲メ規定シタル方式ノ遵守ハ調書ヲ以テノミ之ヲ證スルコトヲ得

第三百三十五條 此法律ニ從ヒ口頭ヲ以テ訴抗告、申立、申請及ヒ陳述ヲ爲シ又ハ證言ヲ拒ム場合ニ於テハ裁判所書記ハ其調書ヲ作ル可シ

第二節 送達

第三百三十六條 送達ハ裁判所書記職權ヲ以テ之ヲ爲サシム

裁判所書記ハ執達吏ニ送達ノ施行ヲ委任シ又ハ送達ヲ施行ス可キ地ヲ管轄スル區裁判所ノ書記ニ送達ノ施行ヲ執達吏ニ委任ス可キコト

手囑託ス

裁判所書記ハ郵便ニ依リテモ亦送達ヲ爲サシムルコトヲ得

第二項ノ場合ニハ執達吏又第三項ノ場合ニ於テハ郵便配達人ヲ以下ニ規定スル送達吏ト爲ス

第三百三十七條 送達ハ其送達ス可キ書類ノ正本又ハ認證シタル謄本ヲ交付ス可キ規定アルトキハ其正本又ハ其謄本ノ交付ヲ以テ之ヲ爲シ

其他ノ場合ニ於テハ謄本ノ交付ヲ以テ之ヲ爲ス

原告若クハ被告數人ノ代理人ニ爲シ又ハ同一ナル原告若クハ被告ノ代理人數人中ノ一人ニ爲ス可キ送達ハ謄本又ハ正本ノ一通ヲ交付スルヲ以テ足ル

第三百三十八條 訴訟能力ヲ有セザル原告若クハ被告ニ對スル送達ハ其法律上代理人ニ之ヲ爲

公又ハ私ノ法人及ヒ其資格ニ於テ訴ヘ又ハ訴ヘラル、コトヲ得ル會社又ハ社團ニ對スル送達ハ其首長又ハ事務擔當者ニ之ヲ爲スヲ以テ

數人ノ首長若クハ事務擔當者アル場合ニ於テハ送達ハ其一人ニ之ヲ爲スヲ以テ足ル

第三百三十九條 豫備後備ノ軍籍ニ在ラサル下士以下ノ軍人軍屬ニ對スル送達ハ其所屬ノ長官又ハ隊長ニ之ヲ爲ス

第四百條 囚人ニ對スル送達ハ監獄署ノ首長ニ之ヲ爲ス

第四百一條 送達ハ財産權上ノ訴訟ニ付テハ總理代人ニ之ヲ爲シ又商業上ヨリ生シタル訴訟ニ付テハ代務人ニ之ヲ爲スヲ以テ原告若クハ被告ノ本人ニ爲シタルト同一ノ效力ヲ有ス

第四百二條 訴訟代理人アルトキハ送達ハ其代理人委任ノ旨趣ニ依リ原告若クハ被告ノ代理ヲ爲ス權ヲ有スルトキニ限リ其代理人ニ之

ト爲ス

然レトモ原告若クハ被告ノ本人ニ爲シタル送達ハ其訴訟代理人アルトキト雖モ効力ヲ有ス

第四百十三條 受訴裁判所ノ所在地ニ住居シモ事務所ヲモ有セサル原告若クハ被告ハ其所在地ニ假住所ヲ選定シテ之ヲ届出ツ可シ

假住所選定ノ届出ハ遅クモ最近ノ口頭辯論ニ於テ之ヲ爲シ又其前ニ書面ヲ差出ストキハ其書面ヲ以テ之ヲ爲ス可シ

前項ノ届出ヲ爲ササルトキハ裁判所書記又ハ其委任ヲ受ケタル吏員交付ス可キ書類ヲ原告若クハ被告ノ名宛ニテ郵便ニ付シテ送達ヲ爲ス

第四百十四條 送達ハ何レノ地ヲ問ハズ送達ヲ受ク可キ人ニ出會ヒタル地ニ於テ之ヲ爲スコ

三十二

トチ得然レトモ其人カ其地ニ住居又ハ事務所ヲ有スルトキ其住居又ハ事務所ノ外ニ於テ爲シタル送達ハ其受取ヲ拒マサリトキニ限リ効力ヲ有ス

第三百二十八條第二項ノ場合ニ於テ特別ノ事務所アルトキハ其事務所ノ外ニ於テ法律上代理人又ハ首長若クハ事務擔當者ニ爲シタル送達ハ其受取ヲ拒マサリトキニ限リ効力ヲ有ス

第四百十五條 送達ヲ受ク可キ人ニ住居ニ於テ出會ハサルトキハ其住居ニ於テスル送達ハ成長シタル同居ノ親族又ハ雇人ニ之ヲ爲スコトヲ得

此規定ニ從ヒ送達ヲ施行スルコトヲ得サルトキハ其送達ハ交付ス可キ書類ヲ其地ノ市町村長ニ預置キ送達ノ告知書ヲ作リ之ヲ住居ノ戸ニ貼附シ且近隣ニ住居スル者二人ニ其旨ヲ口頭ヲ以テ通知シテ之ヲ爲スコトヲ得

第四百十六條 住居ノ外ニ事務所ヲ有スル人ニ對スル送達ハ事務所ニ於テ之ニ出會ハサルト

キハ其事務所ニ在ル營業使用人ニ之ヲ爲スコトヲ得此規定ハ辯護士ニモ亦之ヲ適用ス但此場合ニ於ケル送達ハ學生ニモ亦之ヲ爲スコトヲ得

第四百十七條 第三百二十八條第二項ノ場合ニ於テ法律上代理人又ハ首長若クハ事務擔當者ニ

事務所ニ於テ出會ハズ又ハ此等ノ者受取ニ付キ差支アルトキハ送達ハ事務所ニ在ル他ノ役員又ハ雇人ニ之ヲ爲スコトヲ得

第四百十八條 前二條ノ規定ニ從ヒ送達ヲ執行スルコトヲ得サルトキハ第四百十五條第二項

ニ準シ送達ヲ爲スコシ但住居ニ於ケル送達ヲ施行スルヲ得サルコトノ明白ナルトキニ限リ前項ノ場合ニ於テハ送達告知書ノ貼附ハ事務所又ハ住居ノ戸ニ之ヲ爲ス

第四百十九條 法律上ノ理由ナクシテ送達ノ受

取ヲ拒ムトキハ交付ス可キ書類ヲ送達ノ場所ニ差置ク可シ

第四百十條 日曜日及ヒ一般ノ祝祭日ニハ執達吏ノ爲スコキ送達ハ裁判官ノ許可ヲ得ルトキニ限リ之ヲ施行スルコトヲ得

前項ノ規定ハ郵便ニ付シテ爲ス送達ヲ除ク外ハ夜間ニ爲スコキ送達ニ之ヲ適用ス夜間トハ日没ヨリ日出マテノ時間ヲ謂フ

右ノ許可ハ受訴裁判所ノ裁判長又ハ送達ヲ爲スコキ地ヲ管轄スル區裁判所ノ判事之ヲ與ヘ又ハ受命判事若クハ受託判事ノ完結ス可キ事件ニ在テハ其判事之ヲ與フ

許可ノ命令ハ認證シタル原本ヲ以テ送達ノ際之ヲ交付ス可シ

本條ノ規定ヲ遵守セサル送達ハ之ヲ受取リタルトキニ限リ効力ヲ有ス

第四百十一條 送達ニ付テハ之ヲ施行スル吏員ハ送達ノ場所、年月日時、方法及ヒ受取人ノ

三十三

受取證並ニ送達吏ノ署名捺印ヲ具備スル證書
ヲ作ルコトヲ要ス

受取人受取ヲ拒ミ若クハ受取證ヲ出ダスコト
ヲ拒ミタルトキ又ハ受取證ヲ作ルコト能ハサ
ル旨ヲ述ブルトキハ之ヲ送達證書ニ記載ス可
シ

第四百三十三條第三項ノ場合ニ於テハ郵便ニ付
シタル吏員ノ報告書ヲ以テ送達ノ證ト爲スニ
足ル

第五百十二條 外國ニ在ル本邦ノ公使及ヒ公使
館ノ官吏並ニ其家族、從者ニ對スル送達ハ外
務大臣ニ囑託シテ之ヲ爲ス

第五百十三條 前條ノ場合ヲ除ク外外國ニ於テ
施行ス可キ送達ハ外國ノ管轄官廳又ハ外國ニ
駐在スル帝國ノ公使又ハ領事ニ囑託シテ之ヲ
爲ス

第五百十四條 出陣ノ軍隊又ハ役務ニ服シタル
軍艦ノ乗組員ニ對スル人ニ屬スル送達ハ上班

ヲ命スルコトヲ得其抄本ニハ裁判所、當事者
并ニ訴訟物及ヒ送達ス可キ書類ノ要旨ヲ掲
ルコトヲ要ス

第五百十八條 公示送達ハ書類ノ貼附ヨリ十四
日ヲ經過シタル日ヲ以テ之ヲ爲シタルモノト
看做ス然レトモ裁判所ハ公示送達ヲ命スルニ
際シ此ヨリ長キ期間ヲ必要トスルトキハ相當
ナル期間ヲ定ムルコトヲ得

同一ノ事件ニ付キ同一ノ原告若クハ被告ニ對
シテ爲ス其後ノ公示送達ハ貼附ヲ以テ之ヲ爲
シタルモノト看做ス

第三節 期日及ヒ期間
第五百十九條 期日ハ裁判長日及ヒ時ヲ以テ之
ヲ定ム

第六十條 期日ハ已ムヲ得サル場合ニ限リ日
曜日及ヒ一般ノ祝祭日ニ之ヲ定ムルコトヲ得
第六十一條 期日ニ付テノ呼出ハ裁判長ノ命
ニ從ヒ裁判所書記正本ノ送達ヲ以テ之ヲ爲ス

司令官廳ニ囑託シテ之ヲ爲スコトヲ得
第五百十五條 前三條ノ場合ニ於テ必要ナル囑
託書ハ受訴裁判所ノ裁判長之ヲ發ス

送達ハ囑託ヲ受ケタル官廳又ハ官吏ノ送達施
行濟ノ證書ヲ以テ之ヲ證ス

第五百十六條 原告若クハ被告ノ現在地知レサ
ルトキ又ハ外國ニ於テ爲ス可キ送達ニ付テハ
其規定ニ從フコト能ハス若クハ之ニ從フモ其
效ナキコトヲ豫知スルトキハ其送達ハ公告
示ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第五百十七條 公示送達ハ原告若クハ被告ノ申
立ニ因リ裁判所ノ命ヲ以テ裁判所書記之ヲ取
扱フ

此送達ハ交付ス可キ書類ヲ裁判所ノ揭示板ニ
貼附シテ之ヲ爲ス判決及ヒ決定ニ在テハ其裁
判ノ部分ノミヲ貼附ス可シ
右ノ外裁判所ハ送達ス可キ書類ノ抄本ヲ一箇
又ハ數箇ノ新聞紙ニ一回又ハ數回掲載ス可キ

但在廷シタル者ニ期日ヲ定メ出頭ヲ命シタル
トキハ之ヲ送達スルコトヲ要セス

第六十二條 期日ハ裁判所内ニ於テ之ヲ開ク
但臨檢又ハ裁判所ニ出頭スルニ差支アル人ノ
審問其他裁判所内ニ於テ爲スコトヲ得サル行
爲ヲ要スルトキハ此限ニ在ラズ

第六十三條 期日ハ事件ノ呼上ヲ以テ始マル
原告若クハ被告カ期日ノ終ニ至ルマテ辯論ヲ
爲サ、ルトキハ期日ヲ怠リタルモノト看做ス
第六十四條 裁判所又ハ裁判長ノ定ムル期間
ノ進行ハ期間ヲ定メタル書類ノ送達ヲ以テ終
マリ又其送達ヲ要セサル場合ニ於テハ期間ノ
言渡ヲ以テ始マル但期間指定ノ際此ヨリ遅キ
起期ヲ定メタルトキハ此限ニ在ラズ

第六十五條 期間ヲ計算スルニ時ヲ以テスル
モノハ即時ヨリ起算シ又日ヲ以テスルモノハ
初日ヲ算入セズ

第六十六條 一日ノ期間ハ二十四時トシ一箇

月ノ期間ハ三十日トシ一年ノ期間ハ曆ニ從
フ

期間ノ終カ日曜日又ハ一般ノ祝祭日ニ當ルト
キハ其日ヲ期間ニ算入セズ

第六十七條 法律上ノ期間ハ裁判所ノ所在地
ニ住居セサル原告若クハ被告ノ爲メ其住居地
ト裁判所所在地トノ距離ノ割合ニ應シ海陸路
八里毎ニ一日ヲ伸長ス八里以外ノ端數三里ヲ
超ユルトキモ亦同シ

裁判所ハ外國又ハ島嶼ニ於テ住所ヲ有スル原
告若クハ被告ノ爲メ特ニ附加期間ヲ定ムルコ
トヲ得

第六十八條 期間ノ進行ハ裁判所ノ休暇ニ依
リテ停止ス其期間ノ殘餘ノ部分ハ休暇ノ終ヲ
以テ其進行ヲ始ム期間ノ初カ休暇ニ當ルトキ
ハ其期間ノ進行ハ休暇ノ終ヲ以テ始マル
前項ノ規定ハ不變期間及ヒ休暇事件ノ期間ニ
ハ之ヲ適用セズ

不變期間ハ此法律ニ於テ不變期間トシテ變
タル期間ニ限ル

第三百二十九條ニ掲ケタル事件ヲ謂フ

第六十九條 期日ノ變更、辨論ノ延期、辨論
續行ノ期日ノ指定ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以
テ之ヲ爲スコトヲ得但申立ニ因レル期日ノ變
更ハ合意ノ場合ヲ除ク外顯著ナル理由アルト
キニ限り之ヲ許ス

第七十條 期間ハ不變期間ヲ除ク外當事者ノ
合意ノ申立ニ因リ之ヲ短縮シ又ハ伸長スルコ
トヲ得

裁判所又ハ裁判長ノ定ムル期間及ヒ法律上ノ
期間ハ合意ナキモ申立ニ因リ顯著ナル理由アル
トキハ之ヲ短縮シ又ハ伸長スルコトヲ得然
レトモ法律上ノ期間ノ短縮又ハ伸長ハ此法律
ニ特定シタル場合ニ限り之ヲ許ス
伸長ニ係ル新期間ハ前期間ノ滿了ヨリ之ヲ起

算ス

第七十一條 期日ノ變更又ハ期間ノ短縮若ク
ハ伸長ニ付テノ申請ノ理由ハ之ヲ疎明ス可シ
其申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得
申請ノ裁判ハ口頭辨論ヲ經スルヲ之ヲ爲スコ
トヲ得

同一期日ノ再度ノ變更又ハ同一期間ノ再度ノ
伸長ハ相手方ノ承諾書ヲ提出セサルハ相手
方ヲ審訊シタル後ニ限リ之ヲ許スコトヲ得又
相手方カ異議ヲ述フルトキハ顯著ナル差支ノ
理由及ヒ其差支ヲ除去スルコトノ特別ナル困
難ヲ生シタルコトヲ證スルトキニ限り之ヲ許
スコトヲ得訴訟代理人ノ差支ニ原因スル期日
ノ再度ノ變更又ハ期間ノ再度ノ伸長ハ相手方
ノ承諾アルニ非サレハ之ヲ許サズ
期日ノ變更又ハ期間ノ伸長ニ付テノ申請ヲ却
下スル裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ
得ス

第三百七十二條

本節ニ於テ裁判所及ヒ裁判長ニ
與ヘタル權ハ受命判事又ハ受託判事モ亦其定
ム可キ期日及ヒ期間ニ付キ之ヲ行フコトヲ得

第四節

懈怠ノ結果及ヒ原狀回復

第七十三條 訴訟行爲ヲ怠リタル原告若クハ
被告ハ其訴訟行爲ヲ爲ス權利ヲ失フ但此法律
ニ於テ追完ヲ許ストキハ此限ニ在ラス

法律上懈怠ノ結果ハ當然生スルモノトス
但此法律ニ於テ失權ヲ爲サシムルコトコ付キ
相手方ノ申立ヲ要スルトキハ此限ニ在ラス

第七十四條 天災其他避ク可カラサル事變
爲ニ不變期間ヲ遵守スルコトヲ得サル原告若
クハ被告ニハ申立ニ因リ原狀回復ヲ許ス

原告若クハ被告カ故障期間ヲ懈怠シタルトキ
ハ其過失ニ非スシテ關席判決ノ送達ヲ知ラサ
リシ場合ニ於テモ亦之ニ原狀回復ヲ許ス

第七十五條 原狀回復ハ十四日ノ期間内ニ之
ヲ申立ツルコトヲ要ス

若期間ハ障礙ノ止ミタル日ヲ以テ始マル此期間ハ當事者ノ合意ニ因リ之ヲ伸長スルコトヲ得ス

懈怠シタル不變期間ノ終ヨリ起算シテ一年ノ満了後ハ原狀回復ヲ申立ツルコトヲ得ス

第百七十六條 原狀回復ハ追完スル訴訟行為ニ付キ裁判ヲ爲ス權アル裁判所ニ書面ヲ差出シテ之ヲ申立ツ可シ

此書面ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 原狀回復ノ原因タル事實

第二 原狀回復ノ疏明方法

第三 懈怠シタル訴訟行為ノ追完

即時抗告ノ提出ヲ懈怠シタルトキハ原狀回復ノ申立ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ抗告裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

第百七十七條 原狀回復ノ申立ニ付テハ訴訟手續ハ追完スル訴訟行為ニ付テハ訴訟手續トシテ併合ス然レトモ裁判所ハ先ツ申立ニ付テハ

申立ニ付テハ訴訟手續トシテ併合ス然レトモ裁判所ハ先ツ申立ニ付テハ

辯論及ヒ裁判ノミニ其訴訟手續ヲ制限スルコトヲ得

申立ノ許否ニ關スル裁判及ヒ其裁判ニ對スル不服ノ申立ニ付テハ追完スル訴訟行為ニ於テ行ハル可キ規定ヲ適用ス然レトモ申立ヲ爲シタル原告若クハ被告ハ故障ヲ爲スコトヲ得

原狀回復ノ費用ハ申立人之ヲ負擔ス但相手方ノ不當ナル異議ニ因リ生シタルモノハ此限ニ在ラス

第五節 訴訟手續ノ中斷及ヒ中止

第百七十八條 原告若クハ被告ノ死亡シタル場合ニ於テハ承繼人カ訴訟手續ヲ受繼クマテ之ヲ中斷ス

受繼ヲ遲滞シタルトキハ裁判所ハ申立ニ因リ受繼及ヒ本案辯論ノ爲メ其受繼人ヲ呼出ス

承繼人期日ニ出頭セサルトキハ申立ニ因リ相手方ノ主張シタル承繼ヲ自白シタルモノト看

做シ且裁判所ハ關帝判決ヲ以テ承繼人訴訟手續ヲ受繼キタリト言渡ス又本案ノ辯論ハ故障

期間ノ満了後始メテ之ヲ爲シ又其期間内ニ故障ヲ申立テタルトキハ其完結後始メテ之ヲ爲ス

第百七十九條 原告若クハ被告ノ財産ニ付キ破産ノ開始シタル場合ニ於テ訴訟手續カ破産財

産ニ關スルトキハ破産ニ付テハ規定ニ從ヒ手續ヲ受繼キ又ハ破産手續ヲ解止スルマテ之ヲ中斷ス

第百八十條 原告若クハ被告カ訴訟能力ヲ失ヒ

又ハ其法律上代理人カ死亡シ又ハ其代理權カ原告若クハ被告ノ訴訟能力ヲ得ル前ニ消滅シタルトキハ訴訟手續ハ法律上代理人又ハ新法律代理人カ其任設ヲ相手方ニ通知シ又ハ相手方カ訴訟手續ヲ續行セントスルコトヲ其代理人ニ通知スルマテ之ヲ中斷ス

第百八十一條 原告若クハ被告ノ死亡ニ因リ訴訟手續ヲ中斷スル場合ニ於ケル訴訟手續ノ受

繼ニ關シ遺産ニ付キ管理人ヲ任設スルトキハ前條ノ規定又遺産ニ付キ破産ヲ開始スルトキハ第百七十九條ノ規定ヲ適用ス

第百八十二條 戰爭其他ノ事故ニ因リ裁判所ノ行務ヲ止メタルトキハ此事情ノ繼續間訴訟手續ヲ中斷ス

第百八十三條 訴訟代理人ヲ以テ訴訟ヲ爲ス場合ニ於テ原告若クハ被告ノ死亡シ又ハ訴訟能力ヲ失ヒ又ハ法律上代理人カ死亡シ又ハ其代理權カ消滅スルトキハ委任消滅ノ通知ニ因リ訴訟手續ヲ中斷ス

第百八十四條 原告若クハ被告カ戰時兵役ニ服スルトキ又ハ官廳ノ布令、戰爭其他ノ事變ニ因リ受訴裁判所ト交通ノ絶エタル地ニ在ルトキハ受訴裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ

障碍ノ消滅スルマテ訴訟手續ノ中止ヲ命スル
コトヲ得

第百八十五條 訴訟手續中止ノ申請ハ受訴裁判
所ニ之ヲ提出ス其申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲ス
コトヲ得

此裁判ハ口頭辯論ヲ經シヌテ之ヲ爲スコトヲ
得

第百八十六條 訴訟手續ノ中斷及ヒ中止ハ各期
間ノ進行ヲ止メ及ヒ中斷又ハ中止ノ終リタル
後更ニ全期間ノ進行ヲ始ムル效力ヲ有ス
中斷及ヒ中止ノ間本案ニ付キ爲シタル原告若
シハ被告ノ訴訟行為ハ他ノ一方ニ對シ其效力
ナシ

口頭辯論ノ終結後ニ生シタル中斷ハ其辯論ニ
基キテ爲スコキ裁判ノ言渡ヲ妨クルコト無シ

第百八十七條 中斷シ又ハ中止シタル訴訟手續
ノ受繼及ヒ本節ニ定メタル通知ハ原告若シハ
被告ヨリ其書面ヲ受訴裁判所ニ差出シ裁判所

ハ相手方ニ之ヲ送達ス可シ

第百八十八條 當事者ハ訴訟手續ヲ休止ス可キ
合意ヲ爲スコトヲ得其合意ハ不變期間ノ進行
ニ影響ヲ及ボサス

口頭辯論ノ期日ニ於テ當事者雙方出頭セサル
トキハ訴訟手續ハ其一方ヨリ更ニ口頭辯論ノ
期日ヲ定ム可キコトヲ申立ツルマテ之ヲ休止
ス

一个年内ニ前項ノ申立ヲ爲ササルトキハ本訴
及ヒ反訴ヲ取下ケタルモノト看做ス

第百八十九條 本節ノ規定其他此法律ノ規定ニ
基キ訴訟手續ノ中止ヲ命スル裁判ニ對シテハ
抗告ヲナスコトヲ得又其中止ヲ拒ム裁判ニ對
シテハ即時抗告ヲナスコトヲ得

第二編 第一審ノ訴訟手續

第一章 地方裁判所ノ訴訟手續

第一節 判決前ノ訴訟手續

第百九十條 訴ノ提起ハ訴狀ヲ裁判所ニ差出シ

テ之ヲナス

此訴狀ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 當事者及ヒ裁判所ノ表示

第二 起シタル請求ノ一定ノ目的物及ヒ其

請求ノ一定ノ原因

第三 一定ノ申立

此他訴狀ハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ニ從

ヒ之ヲ作り且裁判所ノ管轄カ訴訟物ノ價額ニ

依リ定マル場合ニ於テ訴訟物カ一定ノ金額ニ

非サルトキハ其價額ヲ掲ケ可シ

第百九十一條 同一ノ被告ニ對スル原告ノ請求

數箇アル場合ニ於テ其各請求ニ付キ受訴裁判

所カ管轄權ヲ有シ且法律ニ於テ同一種類ノ訴

訟手續ヲ許ストキハ原告ハ其請求ヲ一箇ノ訴

ニ併合スルコトヲ得但民法ノ規定ニ反スルト

キハ此限ニ在ラス

第百九十二條 訴狀カ第百九十條第一號乃至第

三號ノ規定ニ適セサルトキハ相當ノ期間ヲ定

ハ相手方ニ之ヲ送達ス可シ

第百九十五條 訴訟物ノ權利拘束ハ訴狀ノ送達
ニ因リテ生ス

權利拘束ハ左ノ效力ヲ有ス

第一 權利拘束ノ繼續中原告若シハ被告ヨ

リ同一ノ訴訟物ニ付キ他ノ裁判所ニ於テ

裁判長ノ命令ヲ以テ其期間内ニ欠缺ヲ補正

ス可キコトヲ命ス若シ原告此命ニ從ハサルト

キハ其期間ノ滿了後訴狀ヲ差戻ス可シ

此差戻ノ命令ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコト

ヲ得

第百九十三條 訴狀カ第百九十條第一號乃至第

三號ノ規定ニ適スルトキハ口頭辯論ノ期日ヲ

定メテ之ヲ被告ニ送達ス可シ

第百九十四條 訴狀ノ送達ト口頭辯論ノ期日ト

ノ間ニハ少ナクモ二十日ノ時間ヲ存スルコ

トヲ要ス

外國ニ於テ送達ヲ施行ス可キトキハ裁判長相

當ノ時間ヲ定ム

第百九十五條 訴訟物ノ權利拘束ハ訴狀ノ送達

ニ因リテ生ス

權利拘束ハ左ノ效力ヲ有ス

第一 權利拘束ノ繼續中原告若シハ被告ヨ

リ同一ノ訴訟物ニ付キ他ノ裁判所ニ於テ

裁判長ノ命令ヲ以テ其期間内ニ欠缺ヲ補正

ス可キコトヲ命ス若シ原告此命ニ從ハサルト

キハ其期間ノ滿了後訴狀ヲ差戻ス可シ

此差戻ノ命令ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコト

ヲ得

本訴又ハ反訴ヲ以テ請求ヲ爲シタルトキハ相手方ハ權利拘束ノ抗辯ヲ爲スコトヲ得

第二 受訴裁判所ノ管轄ハ訴訟物ノ價額ノ増減住所ノ變更其他管轄ヲ定ムル事情ノ變更ニ因リテ變換スルコト無シ

第三 原告ハ訴ノ原因ヲ變更スル權利ナシ但變更シタル訴ニ對シ本案ノ口頭辯論前被告カ異議ヲ述ヘサルトキハ此限ニ在ラズ

第九十六條 原告カ訴ノ原因ヲ變更セシメテ左ノ諸件ヲ爲ストキハ被告ハ異議ヲ述フルコトヲ得ス

第一 事實上又ハ法律上ノ申述ヲ補充シ又ハ更正スルコト

第二 本案又ハ附帶請求ニ付キ訴ノ申立ヲ擴張シ又ハ減縮スルコト

第三 最初求メタル物ノ滅盡又ハ變更ニ因

第九十七條 訴ノ原因ニ變更ナシトスル裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第九十八條 訴ノ全部又ハ一分ハ本案ニ付キ被告ノ第一口頭辯論ノ始マルマテハ被告ノ承諾ナクシテ之ヲ取下ケ又其後口頭辯論ノ終結ニ至ルマテハ被告ノ承諾ヲ得テ之ヲ取下ケルコトヲ得

訴ノ取下ケ口頭辯論ニ於テ之ヲ爲ササルトキハ書面ヲ以テ之ヲ爲ス可シ

訴狀ヲ既ニ送達シタル場合ニ於テハ訴取下ノ書面ハ之ヲ被告ニ送達ス可シ適法ナル取下ノ權利拘束ノ總テノ效力ヲ消滅セシムル結果ヲ生ス

取下ケタル訴ヲ再ヒ起シタルトキハ被告ハ前訴訟費用ノ辨濟ヲ受クルマテ應訴ヲ拒ムコトヲ得

第九十九條 訴狀送達ノ際十四日ノ期間内ニ

答辯書ヲ差出ス可キコトヲ被告ニ催告ス可シ答辯書ニハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ヲ適用ス

第二百條 訴カ管轄裁判所ニ於テ權利拘束ト爲リタルトキハ被告ハ原告ニ對シ其裁判所ニ反訴ヲ起スコトヲ得

然レトモ財産權上ノ請求ニ非サル請求ニ係ル反訴又ハ目的物ニ付キ專屬管轄ノ規定アル反訴ハ若シ其反訴カ本訴ナルトキ其裁判所ニ於テ管轄權ヲ有ス可キ場合ニ限り之ヲ爲スコトヲ許ス

反訴ニ對シテハ更ニ反訴ヲ爲スコトヲ得ス

第二百一條 反訴ハ答辯書若シハ特別ノ書面ヲ以テ又ハ口頭辯論中相手方ノ面前ニ於テ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

然レトモ答辯書差出ノ期間内ニ差出シタル書面ヲ以テ起ササル反訴ハ被告ノ請求ノ全部又ハ一分ト相殺ヲ爲ス可キ場合ニ於テ同時ニ被

告カ自己ノ過失ニ因ラズシテ其以前反訴ヲ起スヲ得サリシコトヲ疎明スルトキニ限り之ヲ爲スコトヲ許ス

第二百二條 訴ニ關スル此法律ノ規定ハ反訴ニ之ヲ適用ス但其規定ニ因リ差異ノ生ス可キトキハ此限ニ在ラズ

第二百三條 裁判長ハ申立ニ因リ其命令ヲ以テ第九十九條ニ定メタル期間ヲ相當ニ短縮若シハ伸長シ又第九十四條ニ定メタル時間ヲ切迫ナル危險ノ場合ニ限リ二十四時マテニ短縮スルコトヲ得

前項時間ノ短縮ハ此カガメ答辯書ヲ差出スコトヲ得サルトキト雖モ亦之ヲナスコトヲ得本條ノ規定ハ第六十七條ニ掲ケタル規定ヲ妨ケス

第二百四條 各當事者ハ訴狀又ハ答辯書ニ掲ケザリシ事實上ノ主張若シハ證據方法又ハ申立ニ付キ相手方カ豫メ穿鑿ヲナスコト非サレハ

送テト能ハスト豫知スル事項アルハ口頭
辨論ノ前ニ書面ニテ差出ス可シ但其書面ヲ相
手方ニ送達スル時間及ヒ相手方ヲテ必要ナ
ル穿鑿ヲナス時間ヲ得セシム可シ
口頭辨論ノ延期ヲ爲ストキハ裁判所ハ爾後必
要ナル準備書面ヲ差出ス可キ期間ヲ定ムルコ
トヲ得

第二百五條 口頭辨論ハ一般ノ規定ニ從ヒテ之
ヲ爲ス

第二百六條 妨訴ノ抗辯ハ本案ニ付テノ被告ノ
辯論前同時ニ之ヲ提出ス可シ左ニ掲クルモノ
ヲ妨訴ノ抗辯トス

- 第一 無訴權ノ抗辯
- 第二 裁判所管轄違ノ抗辯
- 第三 權利拘束ノ抗辯
- 第四 訴訟能力ノ欠缺又ハ法律上代理ノ欠
缺ノ抗辯
- 第五 訴訟費用保證ノ欠缺ノ抗辯

第六 再訴ニ付キ前訴訟費用未済ノ抗辯
第七 延期ノ抗辯

本案ニ付キ被告ノ口頭辨論ノ始マリタル後ハ
妨訴ノ抗辯ハ被告ノ有効ニ拋棄スルコトヲ得
サルモノナルトキ又ハ被告ノ過失ニ非スシテ
本案ノ辯論前ニ其抗辯ヲ主張スル能ハサリシ
コトヲ疏明スルトキニ限り之ヲ主張スルコト
ヲ得

第二百七條 被告カ妨訴ノ抗辯ニ基キ本案ノ辯
論ヲ拒ムトキ又ハ裁判所カ中立ニ因リ若クハ
職權ヲ以テ別ニ辯論ヲ命スルトキハ其抗辯ニ
付キ別ニ辯論ヲ爲シ及ヒ判決ヲ以テ裁判ヲ爲
ス可シ
妨訴ノ抗辯ヲ棄却スル判決ハ上訴ニ關シテハ
終局判決ト看做ス但裁判所ハ申立ニ因リ本案
ニ付キ辯論ヲ爲ス可キヲ命スルコトヲ得
第二百八條 裁判所ハ計算事件財産分別及ヒ此
ニ類スル訴訟ニ於テハ口頭辨論ヲ延期ニ準備
ルコトヲ得

手續ヲ命スルコトヲ得但妨訴ノ抗辯アリタル
トキハ其完結後之ヲ爲ス

第二百九條 攻撃及ヒ防禦ノ方法(反訴、抗辯、
再抗辯等)ハ第二百一條ニ規定スル制限ヲ以
テ判決ニ接著スル口頭辨論ノ終結ニ至ルマテ
之ヲ提出スルコトヲ得

第二百十條 被告ヨリ時機ニ後レテ提出シタル
防禦ノ方法ハ裁判所カ若シ之ヲ許スニ於テハ
訴訟ヲ遅延ス可ク且被告ハ訴訟ヲ遅延セシメ
ントスル故意ヲ以テ又ハ甚シキ怠慢ニ因リ早
ク之ヲ提出セサリシコトノ心證ヲ得タルトキ
ハ申立ニ因リ之ヲ却下スルコトヲ得

第二百十一條 訴訟ノ進行中ニ争ヒト爲リタル
權利關係ノ成立又ハ不成立カ訴訟ノ裁判ノ全
部又ハ一分ニ影響ヲ及ホストキハ判決ニ接著
スル口頭辨論ノ終結ニ至ルマテ原告ハ訴ノ申
立ノ擴張ニ依リ又被告ハ反訴ノ提起ニ依リ判
決ヲ以テ其權利關係ヲ確定センコトヲ申立ツ

第二百十二條 訴狀其他ノ準備書面ニ於テ主張
セサル請求ノ權利拘束ハ口頭辨論ニ於テ其請
求ヲ主張シタル時ヲ以テ始マル

第二百十三條 各當事者ハ事實上ノ主張ヲ證明
シ又ハ之ヲ辯駁セン爲ニ用サントスル證據方
法ヲ開示シ且相手方ヨリ開示シタル證據方法
ニ付キ陳述ス可シ

各箇ノ證據方法ニ付テノ證據申出及ヒ之ニ關
スル陳述ハ第六節乃至第十節ノ規定ニ從フ
第二百十四條 證據方法及ヒ證據抗辯ハ判決ニ
接著スル口頭辨論ノ終結ニ至ルマテ之ヲ主張
スルコトヲ得

證據方法及ヒ證據抗辯ノ時機ニ後レタル提出
ニ付テハ第二百十條ノ規定ヲ準用ス
第二百十五條 證據調並ニ證據決定ヲ以テスル
特別ノ證據調手續ノ命令ハ第五節乃至第十節
ノ規定ニ從フ

第二百十六條 當事者ハ訴訟ノ關係ヲ表明シ證

據調ノ結果ニ付キ辯論ヲナス可シ

受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ證據調ヲ

爲シタルトキハ當事者ハ證據調ニ關スル審問

調書ニ基キ其結果ヲ演述ス可シ

第二百十七條 裁判所ハ民法又ハ此法律ノ規定

ニ反セサル限りハ辯論ノ全旨趣及ヒ或ル證據

調ノ結果ヲ斟酌シ事實上ノ主張ヲ眞實ナリト

認ム可キニ否ヤヲ自由ナル心證ヲ以テ判斷ス

可シ

第二百十八條 裁判所ニ於テ顯著ナル事實ハ之

ヲ證スルコトヲ要セス

第二百十九條 地方慣習法、商慣習及ヒ規約又

ハ外國ノ現行法ハ之ヲ證ス可シ裁判所ハ當事

者カ其證明ヲナスト否トニ拘ハラズ職權ヲ以

テ必要ナル取調ヲナスコトヲ得

第二百二十條 此法律ノ規定ニ依リ事實上ノ主

張ヲ疏明ス可キトキハ裁判官ヲシテ其主張ヲ

眞實ナリト認メシム可キ證據方法ヲ申出ツル
ヲ以テ足ル但即時ニ爲スコトヲ得サル證據調
ハ疏明ノ方法トシテハ之ヲ許サス

第二百二十一條 裁判所ハ事件ノ如何ナル程度

ニ在ルチ問ハス自ラ又ハ受命判事若クハ受託

判事ニ依リ訴訟又ハ或ル争點ノ和解ヲ試ムル

權アリ和解ヲ試ムル爲コハ當事者ノ自身出頭

ヲ命スルコトヲ得

第二百二十二條 判決ヲ受ク可キ事項ノ申立ハ

書面ニ基キ之ヲ爲スコトヲ要ス書面ニ掲ケサ

ル申立アルトキハ調書ニ附録トシテ添附ス可

キ書面ヲ差出シテ之ヲ爲スコトヲ要ス

重要ノ點ニ於テ以前申立テタルモノト異ナル

申立ニ付テモ亦同シ

本條ノ規定ヲ遵守セサルトキハ申立ナキモノ

ト看做ス

第二百二十三條 前條ノ申立ヲ除ク書面外ニ獨

クナル重要ナル陳述又ハ其書面ノ旨趣ト要

ノ點ニ於テ差異ノ存スル事項ハ其差異カ附加

ハ削除其他ノ變更ニ係ルチ問ハス申立ニ因リ

又ハ職權ヲ以テ調書若クハ其附録トシテ添附

ス可キ爲メ差出シタル書面ニ依リテ之ヲ明確

ニス可シ

第二百二十四條 當事者ハ訴訟記録ヲ閱覽シ且

裁判所書記ヲシテ其正本、抄本及ヒ謄本ヲ附

與セザルコトヲ得

裁判長ハ第三者カ權利上ノ利害ヲ疏明スルト

キニ限リ當事者ノ承諾ナクシテ訴訟記録ノ閱

覽及ヒ其抄本並ニ謄本ノ附與ヲ許スコトヲ得

判決、決定、命令ノ草案及ヒ其準備ニ供シタル

書類並ニ評議又ハ處罰ニ關スル書類ハ其原本

ナルト謄本ナルトヲ問ハス之ヲ閱覽スルコト

ヲ許サス

第二節 判決

第二百二十五條 訴訟カ裁判ヲ爲スコ熟スルト

キハ裁判所ハ終局判決ヲ以テ裁判ヲ爲ス

同時ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲ス爲メ合併シタル數

箇ノ訴訟中ノ一ノミ裁判ヲ爲スコ熟スルトキ

モ亦同シ

第二百二十六條 一ノ訴ヲ以テ起シタル數箇ノ

請求ノ中一箇又ハ一箇ノ請求中ノ一分又ハ反

訴ヲ起シタル場合ニ於テハ本訴若クハ反訴ノ

ミ裁判ヲ爲スコ熟スルトキハ裁判所ハ終局判

決(一分判決)ヲ以テ裁判ヲ爲ス

然レトモ裁判所ハ事件ノ事情ニ從ヒテ一分判

決ヲ相當トセサルトキハ之ヲ爲ササルコトヲ

得

第二百二十七條 各箇ノ獨立ナル攻撃若クハ防

禦ノ方法又ハ中間ノ争カ裁判ヲ爲スコ熟スル

トキハ中間判決ヲ以テ裁判ヲ爲スコトヲ得

第二百二十八條 請求ノ原因及ヒ數額ニ付キ争

アルトキハ裁判所ハ先ツ其原因ニ付キ裁判ヲ

爲スコトヲ得

請求ノ原因ヲ正當ナリトスル判決ハ上訴ニ關

スルコトヲ得

請求ノ原因ヲ正當ナリトスル判決ハ上訴ニ關

ハ終局判決ト看做シ其判決確定ニ至ルハ
爾後ノ手續ヲ中止ス然レトモ裁判所ハ申立
ニ因リ其數額ニ付キ辨論ヲ爲ス可キヲ命スル
コトヲ得

第二百二十九條 口頭辨論ノ際原告其訴ヘタル
請求ヲ拋棄シ又ハ被告之ヲ認諾スルトキハ裁
判所ハ申立ニ因リ其拋棄又ハ認諾ニ基キ判決
ヲ以テ却下又ハ敗訴ノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百三十條 判決ハ辨論ヲ經タル總テノ攻撃
及ヒ防禦ノ方法ヲ包括ス

然レトモ數箇ノ獨立ナル攻撃又ハ防禦ノ方法
中其一箇ヲ適切ナリトスルトキハ裁判所ハ他
ノ方法ニ付キ判斷スル義務ナシ

第二百三十一條 裁判所ハ申立テサル事物ヲ原
告若クハ被告ニ歸セシムル權ナシ

裁判所ハ終局判決ヲ爲ス場合ニ於テハ訴訟費
用ノ負擔ニ限リ申立アラサルモ判決ヲ爲ス可
シ然レトモ一分判決ヲ爲ス場合ニ於テハ費用

ノ裁判ヲ後ノ判決ニ讓ルコトヲ得

第二百三十二條 判決ハ其基本タル口頭辨論ニ
臨席シタル判事ニ限リ之ヲ爲ス

第二百三十三條 判決ハ口頭辨論ノ終結スル期
日又ハ直チニ指定スル期日ニ於テ之ヲ言渡ス
但其期日ハ七日ヲ過クルコトヲ得ス

第二百三十四條 判決ノ言渡ハ判決主文ノ朗讀
ニ因リ之ヲ爲ス闕席判決ノ言渡ハ其主文ヲ作
タル前ト雖モ之ヲ爲スコトヲ得

裁判ノ理由ヲ言渡スコトヲ至當ト認ムルトキ
ハ判決ノ言渡ト同時ニ其理由ヲ朗讀シ又ハ口
頭ニテ其要領ヲ告グ可シ

第二百三十五條 判決ノ言渡ハ當事者又ハ其一
方ノ在廷スルト否トニ拘ハラズ其效力ヲ有ス
言渡アリタル判決ニ基キ訴訟手續ヲ續行シ又
ハ他ニ其判決ヲ使用スル原告若クハ被告ノ權

ハ此法律ニ特定シタル場合ヲ除ク外相手方ニ
其判決ヲ送達スルト否トニ拘ハラサズモソト

裁判所書記ハ言渡ノ日及ヒ原本領収ノ日ヲ原

本ニ附記シ且其附記ニ署名捺印スヘシ

第二百三十八條 各當事者ハ判決ノ送達アラシ
コトヲ申立ツルコトヲ得其申立アリタルトキ

ハ判決ノ正本ヲ送達スヘシ

第二百三十九條 未タ判決ヲ言渡サズ又ハ未タ
判決ノ原本ニ署名捺印セサル間ハ裁判所書記

ハ其正本、抄本及ヒ謄本ヲ付與スルコトヲ得
ス

裁判所書記ハ判決ノ正本、抄本及ヒ謄本ニ署
名捺印シ且裁判所ノ印ヲ捺シテ之ヲ認諾ス可
シ

第二百四十條 裁判所ハ其言渡シタル終局判決
及ヒ中間判決ノ中ニ包含シタル裁判ニ羈束セ
ラル

第二百四十一條 裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權
ヲ以テ何時ニテモ判決中ノ違算、書損及ヒ此
ニ類スル著シキ誤謬ヲ更正ス

第二百三十七條 判決ノ原本ニハ裁判ヲ爲シタ
ル判事署名捺印ス若シ陪席判事署名捺印スル
ハ差支アルトキハ其理由ヲ開示シテ裁判長其
旨ヲ附記シ裁判長差支アルトキハ官等最モ高
キ陪席判事之ヲ附記ス
判決ノ原本ハ言渡ノ日ヨリ起算シテ七日内ニ
裁判所書記ニ之ヲ交付スヘシ

ス

第二百三十六條 判決ニハ左ノ諸件ヲ掲グヘシ

第一 當事者及ヒ其法律上代理人ノ氏名、
身分、職業及ヒ住所

第二 事實及ヒ争點ノ摘示但其摘示ハ當事
者ノ口頭演述ニ基キ殊ニ其提出シタル申
立ヲ表示シテ之ヲ爲ス

第三 裁判ノ理由

第四 判決主文

第五 裁判所ノ名稱裁判ヲ爲シタル判事ノ
官氏名

第二百三十七條 判決ノ原本ニハ裁判ヲ爲シタ
ル判事署名捺印ス若シ陪席判事署名捺印スル
ハ差支アルトキハ其理由ヲ開示シテ裁判長其
旨ヲ附記シ裁判長差支アルトキハ官等最モ高
キ陪席判事之ヲ附記ス
判決ノ原本ハ言渡ノ日ヨリ起算シテ七日内ニ
裁判所書記ニ之ヲ交付スヘシ

右更正ニ付テハ口頭辯論ヲ經スルヲ裁判ヲ爲
スコトヲ得

右更正ノ申立ヲ却下スル決定ニ對シテハ上訴
ヲ爲スコトヲ得ス更正ヲ宣言スル決定ニ對シ
テハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第二百四十二條 主ナル請求若シハ附帶ノ請求
又ハ費用ノ全部若クハ一分ノ裁判ヲ爲スニ際
シテ脱漏シタルトキハ申立ニ因リ追加ノ裁判ヲ
以テ判決ヲ補充スヘシ

判決ノ言渡後直チニ追加裁判ノ申立ヲ爲ササ
ルトキハ遅クモ判決ノ正本ヲ送達シタル日
ヨリ起算シテ七日ノ期間内ニ之ヲ爲スコトヲ
要ス

追加裁判ノ申立アルトキハ即時ニ又ハ新期日
ヲ定メテ口頭辯論ヲ爲サシム可シ其辯論ハ訴
訟ノ完結セサル部分ニ限り之ヲ爲ス

第二百四十三條 判決ヲ更正シ又ハ補充スル裁
判ハ判決ノ原本及ヒ正本ニ之ヲ追加シ若シ正

第二百四十七條 出頭セサル一方カ原告ナルト
キハ裁判所ハ闕席判決ヲ以テ其訴ノ却下ヲ言
渡ス可シ

第二百四十八條 出頭セサル一方カ被告ナルト
キハ裁判所ハ被告カ原告ノ事實上ノ口頭供述
ヲ自白シタルモノト看做シ原告ノ請求ヲ正當
ト爲ストキハ闕席判決ヲ以テ被告ノ敗訴ヲ言
渡シ又其請求ヲ正當ト爲サルトキハ其訴ノ
却下ヲ言渡ス可シ

第二百四十九條 延期シタル口頭辯論ノ期日又
ハ口頭辯論ヲ續行スル爲ニ定ムル期日モ亦第
二百四十六條ノ準論期日ニ同シ

第二百五十條 原告若クハ被告出頭スルモ辯論
ヲ爲ササルトキ又ハ辯論ヲ爲サスシテ任意ニ
退廷シタルトキハ出頭セサルモノト看做ス

第二百五十一條 原告若クハ被告カ本案ノ辯論
ヲ爲シタルトキハ各箇ノ事實證書又ハ發問ニ
付キ陳述ヲ爲サス又ハ任意ニ退廷スルモ本節

五十一

本ニ之ヲ追加スルコトヲ得サルトキハ更正又
ハ補充ノ裁判ノ正本ヲ作ル可シ

第二百四十四條 判決ハ注正文ニ包含スルモノ
ニ限り確定力ヲ有ス

第二百四十五條 口頭辯論ニ基キ爲ス裁判所ノ
決定ハ之ヲ言渡スコトヲ要ス

第二百三十三條 第二百三十四條ノ規定ハ裁判
所ノ決定ニ之ヲ準用シ又第二百三十五條第二
百三十九條及ヒ第二百四十條ノ規定ハ裁判所
ノ決定及ヒ裁判長並ニ受命判事又ハ受託判事
ノ命令ニ之ヲ準用ス

言渡ヲ爲ササル裁判所ノ決定及ヒ言渡ヲ爲サ
サル裁判長並ニ受命判事又ハ受託判事ノ命令
ハ職權ヲ以テ之ヲ當事者ニ送達ス可シ

第三節 闕席判決

第二百四十六條 原告若クハ被告口頭辯論ノ期
日ニ出頭セサル場合ニ於テハ出頭シタル相手
方ノ申立ニ因リ闕席判決ヲ爲ス

ノ規定ヲ適用セズ

第二百五十二條 左ノ場合ニ於テハ闕席判決ノ
申立ヲ却下ス然レトモ出頭シタル原告若クハ
被告ハ口頭辯論ノ延期ヲ申立ツルコトヲ得

第一 出頭シタル原告若クハ被告カ裁判所
ノ職權上調査ス可キ事情ニ付キ必要ナル
證明ヲ爲ス能ハサルトキ

第二 出頭セサル原告若クハ被告ニ口頭上
實事ノ供述又ハ申立ヲ適當ナル時期ニ書
面ヲ以テ通知セサルトキ

辯論ヲ延期シタルトキハ出頭セサル原告若ク
ハ被告ヲ新期日ニ呼出ス可シ

第二百五十三條 闕席判決ノ申立ヲ却下スル決
定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得又其決
定ヲ取消シタルトキハ出頭セカリシ原告若ク
ハ被告ヲ新期日ニ呼出サスシテ闕席判決ヲ爲
ス

第二百五十四條 裁判所ハ左ノ場合ニ於テハ闕

權ヲ以テ闕席判決ノ申立ニ付テノ辯論ヲ延期
スルコトヲ得

第一 出頭セサル原告若クハ被告カ合式ニ
呼出サレサリマトキ

第二 出頭セサル原告若クハ被告カ天災其
他避ク可カラサル事變ノ爲ニ出頭スル能
ハサルコトノ眞實ト認ム可キ事情アルト
キ

出頭セサリシ原告若クハ被告ハ新期日ニ之ヲ
呼出ス可シ

第二百五十五條 闕席判決ヲ受ケタル原告若ク
ハ被告ハ其判決ニ對シ故障ヲ申立ツルコトヲ
得

故障申立ノ期間ハ十四日トス此期間ハ不變期
間ニシテ闕席判決ノ送達ヲ以テ始マル

故障申立ハ判決ノ送達前ト雖モ之ヲ爲スコト
ヲ得

外國ニ於テ送達ヲ爲スコキトキ又ハ公ノ告示

ヲ以テ之ヲ爲スコキトキハ裁判所ハ闕席判決
ニ於テ故障期間ヲ定メ又ハ後日決定ヲ以テ之
ヲ定ム此決定ハ口頭辯論ヲ經スシテ爲スコト
ヲ得

第二百五十六條 故障申立ハ闕席判決ヲ爲シタ
ル裁判所ニ書面ヲ差出シテ之ヲ爲ス

此書面ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 故障ヲ申出テラレタル闕席判決ノ表
示

第二 其判決ニ對スル故障ノ申立

此書面ニハ本案ニ付テノ口頭辯論準備ノ爲ニ
必要ナル事項アルトキモ亦之ヲ掲ク可シ

第二百五十七條 判然許スコカラサル故障又ハ
判然法律上ノ方式ニ適セス若クハ其期間ノ經
過後ニ起シタル故障ハ裁判長ノ命令ヲ以テ之
ヲ却下ス可シ

此却下ノ命令ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコト
ヲ得

第二百五十八條 前條ノ場合ヲ除ク外裁判所ハ

故障申立ノ書面ヲ相手方ニ送達シ且故障ニ付
キ口頭辯論ノ新期日ヲ定メ當事者ノ雙方ヲ呼
出ス可シ

第二百五十九條 裁判所ハ職權ヲ以テ故障ヲ許
ス可キヤ否ヤ又法律上ノ方式ニ從ヒ若クハ其
期間ニ於テ故障ヲ申立テタルヤ否ヤヲ調査ノ
可シ

若シ此要件ノ一ヲ缺クトキハ判決ヲ以テ故障
ヲ不適法トシテ棄却ス

第二百六十條 故障ヲ適法トスルトキハ訴訟ハ
闕席前ノ程度ニ復ス

第二百六十一條 新辯論ニ基キ爲スコキ判決カ
闕席判決ト符合スルトキハ闕席判決ヲ維持ス
ルコトヲ言渡シ其符合セサル場合ニ於テハ新
判決ニ於テ闕席判決ヲ廢棄ス

第二百六十二條 法律ニ從ヒ闕席判決ヲ爲シタ
ルトキ闕席ニ因リテ生シタル費用ハ相手方ノ

不當ナル異議ニ因リ生セルモノニ限り故障ノ
爲メ闕席判決ヲ變更スル場合ニ於テモ其闕席
シタル原告若クハ被告ニ之ヲ負擔セシム

第二百六十三條 故障ヲ申立テタル原告若クハ
被告口頭辯論ノ期日又ハ辯論延期ノ期日ニ出
頭セサルトキハ第二百五十二條及ヒ第二百五
十四條ニ規定シタル場合ヲ除ク外出頭シタル
相手方ノ申立ニ因リ故障ヲ棄却スル新闕席判
決ヲ言渡ス

新闕席判決ニ對シテハ故障ヲ申立ツルコトヲ
得ス

第二百六十四條 故障ノ拋棄及ヒ其取下ニ付キ
テハ控訴ノ拋棄及ヒ其取下ニ付テノ規定ヲ準
用ス

第二百六十五條 本節ノ規定ハ反訴又ハ既ニ原
因ノ確定シタル請求ノ數額ノ定テ目的物トス
ル訴訟手續ニ之ヲ準用ス

中間訴訟ノ辯論ノ爲メ期日ヲ定メタルトキ其

中間訴訟ノ辯論ノ爲メ期日ヲ定メタルトキ其

中間訴訟ノ辯論ノ爲メ期日ヲ定メタルトキ其

國府訴訟手續及ヒ關席判決ハ其中間訴訟ヲ完結スルニ止マリ本節ノ規定ヲ之ニ準用ス

第四節 計算事件財產分別及ヒ此ニ類スル訴訟ノ準備手續

第二百六十六條 計算ノ當否財產ノ分別又ハ此ニ類スル關係ノ目的トスル訴訟ニ於テ計算書又ハ財產目錄ニ對シ許多ノ爭アル請求ノ生シ又ハ許多ノ爭アル異議ノ生シタルトキハ受訴裁判所ハ受命判事ノ面前ニ於ケル準備手續ヲ命スルコトヲ得

第二百六十七條 準備手續ヲ命スル決定ヲ言渡スニ際シ裁判長ハ受命判事ヲ指定シ決定施行ノ期日ヲ定ム可シ若シ裁判長此期日ヲ定メサルトキハ受命判事之ヲ定ム又受命判事其委任ヲ施行スルニ差支アルトキハ裁判長更ニ他ノ判事ヲ任ス

第二百六十八條 準備手續ニ於テハ調書ヲ以テ左ノ諸件ヲ明確ニス可シ

付與シテ新期日ニ之ヲ呼出ス可シ

原告若クハ被告カ新期日ニモ亦タ出頭セサルトキハ送達セシ調書ニ掲ケタル相手方ノ事實上ノ主張ヲ明白シタリト看做シ其主張ニ付テノ準備手續ハ完結シタルモノトス

第二百七十條 受訴裁判所ハ準備手續ノ終結後ニ口頭辨論ノ期日ヲ定メ之ヲ當事者ニ通知ス可シ

第二百七十一條 當事者ハ口頭辨論ニ於テ準備手續ノ結果ヲ調書ニ基キ演述ス可シ
原告若クハ被告カ出頭セサルトキハ準備手續ニ於テ爭ハサル請求ハ一分判決ヲ以テ之ヲ完結ス其他ニ付テハ申立ニ因リテ關席判決ヲ爲ス可シ

第二百七十二條 受命判事ノ調書ヲ以テ明確ニス可キ事實又ハ證書ニ付キ陳述ヲ爲サヌ又ハ之ヲ拒ミタルトキハ口頭辨論ニ於テ之ヲ追完スルコトヲ得ス

五十四

第一 如何ナル請求ヲ爲スヤ及ヒ如何ナル攻撃防禦ヲ方法ヲ主張スルヤ

第二 如何ナル請求及ヒ如何ナル攻撃防禦ノ方法ヲ爭フヤ又ハ之ヲ爭ハサルヤ

第三 爭ト爲リタル請求及ヒ爭ト爲リタル攻撃、防禦ノ方法ニ付テハ其實質上ノ關係及ヒ當事者ノ表示シタル證據方法、主張シタル證據抗辨、證據方法、並ニ證據抗辨ニ關シテ爲シタル陳述及ヒ提出シタル申立

此手續ハ受訴裁判所ニ於テ訴訟又ハ中間訴訟カ判決又ハ證據決定ヲ爲スニ熟スルマテ之ヲ續行ス可シ

第二百六十九條 原告若クハ被告カ期日ニ於テ受命判事ノ面前ニ出頭セサルキハ受命判事ハ前條ノ規定ニ依リ調書ヲ以テ出頭シタル原告若クハ被告ノ提供ヲ明確ニシ且新期日ヲ定メ出頭セサル原告若クハ被告ニハ調書ノ原本ヲ

請求攻撃若クハ防禦ノ方法證據方法及ヒ證據抗辨ニシテ受命判事ノ調書ヲ以テ之ヲ明確ニセサルモノニ付テハ後日ニ至リ始メテ生シ又

ハ後日ニ至リ始メテ原告若クハ被告ノ知リタルコトヲ疏明スルトキニ限り口頭辨論ニ於テ之ヲ主張スルコトヲ得

第五節 證據調ノ總則

第二百七十三條 證據調ハ受訴裁判所ニ於テ之

ヲ爲スヲ以テ通例トス
證據調ハ此法律ニ定メタル場合ニ限り受訴裁判所ノ部員一名ニ之ヲ命シ又ハ區裁判所ニ之ヲ囑託スルヲ得

此證據調ヲ命スル決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第二百七十四條 當事者ノ申立テタル數多ノ證據中其調フ可キ限度ハ裁判所之ヲ定ム
當事者ノ演述ニ引續キ直チニ證據調ヲ爲サズニテ受訴裁判所ニ於テ新期日ニ之ヲ爲シ又ハ

受命裁判事者ハ受託裁判事ノ面前ニ於テ之ヲ爲

ス可キトキハ證據決定ニ因リ之ヲ命ス可シ

第二百七十五條 證據調ニ付キ不定時間ノ障礙

アルトキハ申立ニ因リ相當ノ期間ヲ定ム可シ

此期間ノ滿了後ト雖モ訴訟手續ヲ遲滞セシメ

サル限リハ其證據方法ヲ用ザルコトヲ得

第二百七十六條 證據決定ニハ左ノ諸件ヲ掲ク

可シ

第一 證ニ可キ係爭事實ノ表示

第二 證據方法ノ表示殊ニ証人又ハ鑑定人

ヲ訊問ス可キトハ其表示

第三 證據方法ヲ申出テタル原告若クハ被

告ノ表示

第二百七十七條 證據決定ノ變更ハ其決定ノ施

行完結前ニ在リテ新ナル辯論ニ基クトキニ限

リ之ヲ申立ツルコトヲ得

證據決定ノ施行ハ職權ヲ以テ之ヲ爲ス

第二百七十八條 受託裁判所ノ部員カ證據調ヲ

五十六

爲ス可キトキハ裁判長證據決定言渡ノ際受命

裁判事ヲ指名シ且ツ證據調ノ期日ヲ定ム若シ其

ノ期日ヲ定メサルトキハ受命裁判事之レヲ定

ム

受命裁判事其命ヲ施行スルニ差支アルトキハ裁

判長更ニ他ノ部員ヲ命ス

第二百七十九條 他ノ裁判所ニ於テ證據調ヲ爲

ス可キトキハ裁判長ハ其ノ囑託書ヲ發ス可シ

證據調ニ關スル書類ハ原本ヲ以テ受託裁判事ヨ

リ受託裁判所書記ニ之ヲ送致シ其書記ハ之ヲ

受領シタルコトヲ當事者ニ通知スベシ

第二百八十條 受命裁判事又ハ受託裁判事カ證據調

ノ期日ヲ定メタルトキハ其期日及ヒ場所ヲ當

事者ニ通知ス可シ

第二百八十一條 外國ニ於テ爲ス可キ證據調ハ

外國ノ管轄官廳又ハ其國駐在ノ帝國ノ公使若

クハ領事ニ囑託シテ之ヲ爲ス其囑託ニ付テハ

第二百五十二條及ヒ第二百五十五條ノ規定ヲ準用

又

第二百八十二條 受命裁判事又ハ受託裁判事ハ他ノ

裁判所ニ於テ證據調ヲ爲ス可キコトノ至當ナ

ル原因ノ爾後ニ生シタルトキハ其裁判所ニ證

據調ヲ囑託スルコトヲ得此囑託ヲ爲シタルト

キハ當事者ニ之ヲ通知ス可シ

第二百八十三條 受命裁判事又ハ受託裁判事ノ面前

ニ於テ證據調ノ際ニ爭ヲ生シ其爭ノ完結スル

ニ非サレハ證據調ヲ續行スルコトヲ得且其

判事之ヲ裁判スル權ヲキトキハ其完結ハ受託

裁判所之ヲ爲ス

第二百八十四條 當事者ノ一方又ハ雙方證據調

ノ期日ニ出頭セサルトキハ事件ノ程度ニ因リ

爲シ得ヘキ限リハ證據調ヲ爲ス可シ

原告若クハ被告ノ出頭セサルカ爲メニ證據調

ノ全部又タハ一分ヲ爲スコトヲ得ル場合ニ於

テハ其ノ追完又ハ補充ハ此カ爲メ訴訟手續ノ

遲滞セサルトキ又ハ舉證者其過失ニ非スシテ

前期日ニ出頭スル能ハサリシコトヲ疏明シル

トキニ限リ判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結ニ

至ルマテ申立ニ因リ之ヲ命ス

第二百八十五條 裁判所ハ事件ノ未タ判決ヲ爲

スニ熟セスト認ムルトキハ證據調ノ補充ヲ決

定スルコトヲ得

第二百八十六條 證據調又ハ其續行ノ爲メ新期

日ヲ定ムル必要アルトキハ舉證者又ハ當事者

雙方前期日ニ出頭セサリシトキト雖モ職權ヲ

以テ之ヲ定ム

第二百八十七條 受託裁判所ニ於テ證據調ヲ爲

キトキハ其期日ハ同時ニ口頭辯論ヲ續行スル

期日ナリトス

受命裁判事又ハ受託裁判事ノ面前ニ於テ證據調ヲ

爲ス可キコトヲ命シタルトキハ受託裁判所ハ

證據決定中ニ併セテ口頭辯論續行ノ期日ヲ定

ムルコトヲ得若シ之ヲ定メサルトキハ證據調

ノ終結後職權ヲ以テ其期日ヲ定メ之ヲ當事者

ニ通知ス可シ

第二百八十八條 舉證者ハ裁判所ノ定ムル期間内ニ證據調ノ費用ヲ豫納ス可シ若シ其期間内ニ豫納セサルトキハ證據調ヲ爲サズ但期間ノ滿了後ト雖モ豫納シタルトキハ訴訟手續ノ遲滯ヲ生セサル場合ニ限り證據調ヲ許ス

第六節 人證

第二百八十九條 何人ヲ問ハス法律ニ別段ノ規定ナキ限りハ民事訴訟ニ關シ裁判所ニ於テ證言スル義務アリ

第二百九十條 官吏公吏ハ退職ノ後ト雖モ其職務上默秘ス可キ義務アル事情ニ付テハ其所屬應又ハ其最後ノ所屬廳ノ許可ヲ得タルトキヨ限リ證人トシテ之ヲ訊問スルコトヲ得大旨ニ付テハ勅許ヲ得ルコトヲ要ス

此許可ハ證言カ國家ノ安寧ヲ害スル恐アルトキニ限り之ヲ拒ムコトヲ得
右許可ハ受訴裁判所ヨリ之ヲ求メ且證人ニ之

ニ通知ス可シ

第二百九十一條 證人ノ申出ハ證人ヲ指名シ及ヒ證人ノ訊問ヲ受ク可キ事實ヲ表示シテ之ヲ爲ス

第二百九十二條 證人ノ呼出狀ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

- 第一 證人及ヒ當事者ノ表示
- 第二 證據決定ノ旨趣ニ依リ訊問ヲ爲ス可キ事實ノ表示
- 第三 證人ノ出頭ス可キ場所及ヒ日時
- 第四 出頭セサルトキハ法律ニ依リ處罰ス可キ旨
- 第五 裁判所ノ名稱

第二百九十三條 豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ヲ証人トシテ呼出スニハ其所屬ノ長官又ハ隊長ニ囑託シテ之ヲ爲ス其長官又ハ隊長ハ期日ヲ遵守セシムル爲ニ其呼出ヲ受ケタル者ノ關勤ヲ許ス可シ若シ軍務上之ヲ許ス

能ハサルトキハ其旨ヲ裁判所ニ通知シ且他ノ期日ヲ定ムル爲メ義務アリ

第二百九十四條 合式ニ呼出サレタル證人コシテ正當ノ理由ナク出頭セサル者ニ對シテハ申立ナシト雖モ決定ヲ以テ其不參ニ因リ生シタル費用ノ賠償及ヒ貳拾圓以下ノ罰金ヲ言渡ス可シ

證人カ再度出頭セサル場合ニ於テハ更ニ費用ノ賠償及ヒ罰金ヲ言渡ス可シ又其勾引ヲ命スルコトヲ得

證人ハ右ノ決定ニ對シテ抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル效力ヲ有ス

豫備後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人軍屬ニ對スル罰金ノ言渡及ヒ執行ハ軍事裁判所又ハ所屬ノ長官又ハ隊長ニ囑託シテ之ヲ爲ス其勾引ニ付テモ亦同シ

第二百九十五條 證人其出頭セカリシコトヲ後日ニ正當ノ理由ヲ以テ辯解スルトキハ罰金及

五十八

ヒ賠償ノ決定ヲ取消ス可シ

證人ノ不參屆及ヒ決定取消ノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第二百九十六條 皇族證人トナルトキハ受命判事又ハ受託判事其所在ニ就キ訊問ヲ爲ス各大臣ニ付テハ其官廳ノ所在地ニ於テ之ヲ訊問ス若シ其所在地外ニ滞在スルトキハ其現在地ニ於テ之ヲ訊問ス

帝國議會ノ議員ニ付テハ開會期間其議會ノ所在地ニ滞在中ハ其所在地ニ於テ之ヲ訊問ス
第二百九十七條 左ニ掲クル者ハ證言ヲ拒ムコトヲ得

- 第一 原告若クハ被告又ハ其配偶者ト親族ナルトキ但姻族ニ付テハ婚姻ノ解除シタルトキト雖モ亦同シ
- 第二 原告若クハ被告ノ後見ヲ受クル者
- 第三 原告若クハ被告ト同居スル者又ハ雇人トシテ之ニ仕フル者

五十九

裁判長ハ訊問前ニ前項ノ者ハ證言ヲ拒ム權利アル旨ヲ告ク可シ

第二百九十八條 左ノ場合ニ於テハ證言ヲ拒ムコトヲ得

第一 官吏、公吏又ハ官吏公吏タリシ者カ其職務上黙秘ス可キ義務アル事情ニ關スルトキ

第二 醫師、藥商、穩婆、辯護士、公證人、神職及ヒ僧侶カ其身分又ハ職業ノ爲メ委託ヲ受ケタルニ因リテ知リタル事實ニシテ黙秘ス可キモノニ關スルトキ

第三 問ニ付テハ答辯カ證人又ハ前條ニ掲ケタル者ノ耻辱ニ歸スルカ又ハ其刑事上ノ訴訟ヲ招ク恐アルトキ

第四 問ニ付テハ答辯カ證人又ハ前條ニ掲ケタル者ノ爲メ直接ニ財産權ノ上損害ヲ生ゼシム可キトキ

第五 證人カ其技術又ハ職業ノ秘密ヲ公ニ

スルコト非ラサレハ答辯スルコトヲ能ハスルトキ

第二百九十九條 證人ハ第二百九十七條第一號

及ヒ第二百九十八條第四號ノ場合ニ於テ左ノ事項ニ付キ證言ヲ拒ムコトヲ得ス

第一 家族ノ出產婚姻又ハ死亡

第二 家族ノ關係ニ因リ生スル財産事件ニ關スル事實

第三 證人ト立會ヒタル場合ニ於ケル權利行爲ノ成立及ヒ旨趣

第四 原告若クハ被告ノ前主又ハ代理人トシテ係争ノ權利關係ニ關シ爲シタル行爲前條第一號、第二號ニ掲ケタル者其黙秘ス可キ義務ヲ免除セラレタルトキハ證言ヲ拒ムコトヲ得ス

第三百條 證言ヲ拒ム證人ハ其訊問ノ期日前ニ書面又ハ口頭ヲ以テ又ハ期日ニ於テ其拒絕ノ原因タル事實ヲ開示シ且之ヲ説明ス可シ

期日前ニ證言ヲ拒ミタル證人ハ期日ニ出頭スル義務ナシ

裁判所書記ハ拒絕ノ書面ヲ受領シ又ハ其陳述ニ付キ調書ヲ作りタルトキハ之ヲ當事者ニ通知ス可シ

第三百一條 拒絕當否ニ付テハ受訴裁判所當事者ヲ審訊シタル後決定ヲ以テ其裁判ヲ爲ス但

第二百九十八條第一號ノ場合ニ於テ爲シタル拒絕ノ當否ニ付テハ所屬廳又ハ最後ノ所屬廳ノ裁定ニ任ス

原告若クハ被告カ出頭セサルトキハ出頭シタル者ノ申述ヲ斟酌シテ決定ヲ爲ス

右決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル效力ヲ有ス

第三百二條 原因ヲ開示セシメテ證言ヲ拒ミ又ハ開示シタル原因ノ棄却確定シタル後ニ之ヲ拒ミタルトキハ申立ヲ要セシメテ決定ヲ以テ證人ニ對シ其拒絕ニ因リテ生シタル費用ノ賠

償及ヒ四十圓以下ノ罰金ヲ言渡ス

證人ハ費用ノ賠償及ヒ罰金ノ言渡ニ對シ抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル效力ヲ有ス

豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人軍屬ニ對スル罰金ノ言渡及ヒ執行ハ軍事裁判所ニ囑託シテ之ヲ爲ス

第三百三條 原告若クハ被告ハ相手方ト相手方ノ證人トノ間ニ第二百九十七條第一號乃至第三號ノ關係アルトキハ其證人ヲ忌避スルコトヲ得

第三百四條 忌避ノ申請ハ證人ノ訊問前ニ之ヲ爲スコシ此期限後ハ其前ニ忌避ノ原因ヲ主張スルヲ得サリシコトヲ説明スルトキニ限り其證人ヲ忌避スルコトヲ得

忌避ノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得忌避ノ原因ハ之ヲ説明ス可シ

第三百五條 忌避ノ申請ニ付テハ裁判ハ口頭辯

論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

忌避ノ原因アリト宣言スル決定ニ對シテハ上訴ヲ爲スコトヲ得ス忌避ノ原因ナシト宣言スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第三百六條 各證人ニハ其携帶ス可キ呼出狀其他適當ノ方法ヲ以テ人違ナラサルコトヲ判然ナラシメタル後訊問前各別ニ宣誓ヲ爲サシム可シ

然レトモ宣誓ハ特別ノ原因アルトキ殊ニ之ヲ爲サシム可キヤ否ヤニ付キ疑ノ存スルトキハ訊問ノ終ルマテ之ヲ延フルコトヲ得

第三百七條 証人ハ訊問前ニ宣誓ヲ爲スコキ場合ニ於テハ良心ニ從ヒ眞實ヲ述ヘ何事ヲモ默秘セヌ又何事ヲモ附加セサル旨ノ誓ヲ宣フ可シ

又訊問後ニ宣誓ヲ爲スコキ場合ニ於テハ良心ニ從ヒ眞實ヲ述ヘ又何事ヲモ默秘セヌ又何事ヲモ附加セサル旨ノ誓ヲ宣フ可シ

第三百八條 判事ハ宣誓前ニ相當ナル方法ヲ以テ宣誓者ニ偽証ノ罰ヲ諭示ス可シ

第三百九條 宣誓ヲ拒ム証人ニ付テハ第三百條乃至第三百二條ノ規定ヲ適用ス

第三百十條 左ノ者ハ宣誓ヲ爲サシメスニテ參考ノ爲メ之ヲ訊問スルコトヲ得

第一 訊問ノ時未タ滿十六歳ニ達セサル者
第二 宣誓ノ何物タルヤヲ了解スルニ必要ナル精神上發達ヲ缺クル者

第三 刑事上ノ判決ニ因リ公權ヲ剝奪又ハ停止セラレタル者

第四 第二百九十七條及ヒ第二百九十八條第三號並ニ第四號ノ規定ニ依リ證言ヲ拒絶スル權利アリテ之ヲ行使セサル者但第

二百九十八第三號並ニ第四號ノ場合ニ於テハ拒絕ノ權利ニ關スル事實ニ付キ證言ヲ爲スコキヲ申立テラレタルハ其ニ限ル

第五 訴訟ノ成績ニ直接ノ利害關係ヲ有ス

ル者

第三百十一條 証人訊問ハ後ニ訊問ス可キ證人ノ在ラサル場所ニ於テ各別ニ之ヲ爲ス

証人ノ供述互ニ齟齬シタルトキハ之ヲ對質セシムルコトヲ得

第三百十二條 証人訊問ハ証人ニ其氏名、年齢、身分、職業及ヒ住居ヲ問フヲ以テ始マル又必要ナル場合ニ於テハ其事件ニ於テ證言ノ信用ニ關スル事情殊ニ當事者トノ關係ニ付テノ問ヲ爲ス可シ

第三百十三條 証人ニハ其訊問事項ニ付キ知りタルモノヲ率直ニテ供述セシム可シ

証人ノ供述ヲ明白及ヒ完全ナラシメ且其知り得タル原因ヲ穿鑿スル爲メ必要ナル場合ニ於テハ尙他ノ問ヲ發ス可シ

第三百十四條 証人ハ其供述ニ換ヘテ書類ヲ朗讀シ其他覺書ヲ用サルコトヲ得ス但算數ノ關係ニ限リ覺書ヲ用サルコトヲ得

係ニ限リ覺書ヲ用サルコトヲ得

第三百十五條 陪席判事ハ裁判長ニ告ケテ証人ニ問ヲ發スルコトヲ得

當事者ハ証人ニ對シ自ラ問ヲ發スルコトヲ得然レトモ當事者ハ証人ノ供述ヲ明白ナラシムル爲メ其必要ナリトスル問ヲ發セシムコトヲ裁判長ニ申立ツルコトヲ得

發問ノ許否ニ付キ異議アルトキハ裁判所ハ直チニ之ヲ裁判ス

第三百十六條 調書ニハ証人カ其訊問ノ前若クハ後ニ宣誓シタルヤ又ハ宣誓セヌシテ訊問ヲ受ケタルヤヲ記載ス可シ

第三百十七條 受訴裁判所ハ左ノ場合ニ於テ証人ノ再訊問ヲ命スルコトヲ得

第一 証人訊問カ法律上ノ規定ニ違ヒタルトキ

第二 証人訊問ノ完全ナラサルトキ

第三 証人ノ供述カ明白ナラヌ又ハ兩義ニ關ルトキ

第四 證人カ其供述ノ補充又ハ更正ヲ申立
ツルトキ

第五 此他裁判所カ再訊問ヲ必要トスルト
キ

第三百十八條 左ノ場合ニ於テ證人ニ依レル證
據調ハ受訴裁判所ノ部員一名ニ之ヲ命シ又ハ
留裁判所ニ之ヲ囑託スルコトヲ得

第一 眞實ヲ探知スル爲メ現場ニ就キ證人
ヲ訊問スルノ必要ナルトキ

第二 證人カ疾病其他ノ事由ノ爲メ受訴裁
判所ニ出頭スル能ハサルトキ

第三 證人カ受訴裁判所ノ所在地ヨリ遠隔
ノ地ニ在リテ其裁判所ニ出頭スルニ付キ
不相應ノ時日及ヒ費用ヲ要スルトキ

第三百十九條 第二百九十四條第二百九十五條
第三百二十條及ヒ第三百九條ニ掲ケタル證人ニ

對スル受訴裁判所ノ權ハ受命判事又ハ受託判
事ニモ屬ス證人カ受命判事又ハ受託判事ノ前
之ヲ求ムルコトヲ得

舉証者ノ豫納シタル金額不足スルトキハ職權
ヲ以テ其不足額ヲ取立ツ可シ

第七節 鑑定

第三百二十三條 鑑定ニ付テハ以下數條ニ於テ
別段ノ規定ヲ設ケサル限りハ人證ニ付テノ規
定ヲ準用ス

第三百二十三條 鑑定ノ申出ハ鑑定ニ可キ事項
ヲ表示シテ之ヲ爲ス

第三百二十四條 立會ス可キ鑑定人ノ選定及ヒ
其員數ノ指定ハ受訴裁判所之ヲ爲ス其裁判所
ハ鑑定人ノ任命ヲ一名マテニ制限シ又ハ何時
コトモ既ニ任命シタル者ニ代ヘ他ノ鑑定人ヲ
任命スルコトヲ得

裁判所ハ鑑定人トシテ訊問ヲ受クルニ適當ナ
ル者ヲ指名ス可キ旨ヲ當事者ニ催告スルコト
ヲ得

當事者カ一定ノ者ヲ鑑定人ニ爲スコトヲ合意

六十四

面ニ於テ理由ヲ開示シテ證言ヲ拒ミ又ハ宣誓
ヲ拒ミ又ハ職權若クハ申立ニ因リ發シタル問
ニ答フルコトヲ拒ムトキハ此拒絕ノ當否ニ付
裁判ヲ爲ス權ハ受訴裁判所ニ屬ス

受命判事又ハ受託判事カ原告若クハ被告ヨリ
申立テタル問ヲ發スルコトヲ否ムトキハ原告
若クハ被告ハ其當否ニ付キ受訴裁判所ノ裁判
ヲ求ムルコトヲ得

証人ノ再訊問ハ受命判事又ハ受託判事ノ意見
ヲ以テ之ヲ命スルコトヲ得

第三百二十條 証人ヲ申出テタル原告若クハ被
告ハ其訊問ノ開始マテハ此證據方法ヲ拋棄ス
ルコトヲ得其後ハ相手方ノ承諾ヲ得ルトキニ
限り之ヲ拋棄スルコトヲ得

第三百二十一條 各証人ハ日當ノ辨濟及ヒ其出
頭ノ爲ニ旅行ヲ要スルトキハ旅費ノ辨濟ヲ請
求スルコトヲ得

此金額ノ拂渡ハ訊問期日ノ終リタル後直チニ

シタルトキハ裁判所ハ其合意ニ從フ可シ然レ
トモ裁判所ハ當事者ノ爲ス可キ鑑定ヲ一定ノ
員數ニ制限スルコトヲ得

第三百二十五條 外國ノ書類又ハ產物ノ審査ヲ
要スル場合ニ於テ必要ナル能力ヲ有スル本邦
人ノ在ラサルトキハ裁判所ハ外國人ヲ鑑定人
ニ任命スルコトヲ得

第三百二十六條 左ニ掲ケル者鑑定ヲ命セラレ
タルトキハ之ヲ爲ス義務アリ

第一 必要ナル種類ノ鑑定ヲ爲ス爲ニ公ニ
任命セラレタル者

第二 鑑定ヲ爲スニ必要ナル學術技能若ク
ハ職業ニ常ニ従事スル者又ハ學術技能若
クハ職業ニ従事スル爲ニ公ニ任命セラレ
若クハ授權セラレタル者

右ノ外鑑定ヲ爲ス可キ旨ヲ裁判所ニ於テ述ヘ
タル者ハ鑑定人タル義務ナキトモ雖モ鑑定
ヲ爲ス義務アリ

六十五

第三百二十七條 鑑定人ハ証人カ証言ヲ拒ムコ

トテ得ルト同一ノ原因ニ依リ鑑定ヲ拒ム權利アリ

官吏、公吏ハ其所屬屬コ於テ異議アルトキハ之ヲ鑑定人トシテ訊問スルコトヲ得ス

第三百二十八條 鑑定ヲ爲ス義務アル鑑定人出

頭セヌ又ハ鑑定ヲ拒ミタル場合ニ於テハ其者ニ對シ此カ爲ニ生シタル費用ノ賠償及ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但其鑑定人ヲ勾引スルコトヲ得ス

第三百二十九條 鑑定人ハ其鑑定ヲ爲ス前ニ其

鑑定人タル義務ヲ公平且誠實ニ履行ス可キ旨ノ誓ヲ宣フ可シ

第三百三十條 受訴裁判所ハ其意見ヲ以テ左ノ附件ヲ定ム可シ

第一 鑑定人ノ意見ハ口頭又ハ書面ニテ之ヲ述ヘシム可キヤ

第二 數名ノ鑑定人ヲ訊問ス可キ場合ニ於

六十六

テ各意見カ異ナルトキハ共同ニテ鑑定書ヲ作ラシム可キヤ又ハ各別ニ之ヲ作ラシム可キヤ

第三 口頭辯論ノ際鑑定人ノ總員又ハ其一名ヲシテ鑑定書ヲ説明セシム可キヤ

第四 鑑定ノ結果カ不十分ナルトキハ同一

又ハ他ノ鑑定人ヲシテ再ヒ鑑定ヲ爲サシム可キヤ

第三百三十一條 受訴裁判所ハ鑑定人ノ任命ヲ

受命判事又ハ受託判事ニ委任スルコトヲ得此場合ニ於テハ受命判事又ハ受託判事ハ第三百

二十四條及ヒ第三百三十條第一號並ニ第二號ノ規定ニ依リ受訴裁判所ニ屬スル權ヲ有ス

第三百三十二條 鑑定人ハ日當旅費及ヒ立替金ノ辨濟ヲ求ムルコトヲ得

此場合ニ於テハ第三百二十一條ノ規定ヲ準用ス

第三百三十三條 特別ノ智識ヲ要セシ過去ノ事

實又ハ事情ニシテ其實驗アル者ノ訊問ニ因リテ確定スヘキトキハ人證ニ付テノ規定ヲ適用ス

第八節 書證

第三百三十四條 書證ノ申出ハ證書ヲ提出シテ之ヲ爲ス

第三百三十五條 舉證者其使用セントスル證書

カ相手方ノ手ニ存スル旨ヲ主張スルトキハ書證ノ申出ハ相手方ニ其證書ノ提出ヲ命ゼンコトヲ申立テ之ヲ爲ス可シ

第三百三十六條 相手方ハ左ノ場合ニ於テ證書

ヲ提出スル義務アリ

第一 舉證者カ民法ノ規定ニ從ヒ訴訟外ニ於テモ證書ノ引渡又ハ其提出ヲ求ムルコトヲ得ルトキ

第二 證書カ其旨趣ニ因リ舉證者及ヒ相手方ニ共通ナルトキ

第三百三十七條 相手方ハ其手ニ存スル證書ニ

六十七

シテ其訴訟ニ於テ舉證ノ爲メ引用シタルモノヲ提出スル義務アリ準備書面中ニノミ引用シタルトキト雖モ亦同シ

第三百三十八條 證書ノ提出ヲ命ゼンコトノ申立ニハ左ノ諸件ヲ揭シ可シ

第一 證書ノ表示

第二 證書ニ依リ証ス可キ事實ノ表示

第三 證書ノ旨趣

第四 證書カ相手方ノ手ニ存スル旨ヲ主張スル理由タル事情

第五 證書ヲ提出ス可キ義務ノ原因ノ表示

第三百三十九條 裁判所ハ證書ニ依リ証ス可キ

事實ノ重要ニシテ且申立テ正當ナリト認ムル場合ニ於テ相手方カ證書ノ其手ニ存スルコトヲ自白スルトキ又ハ申立ニ對シ陳述セサルトキハ證據決定ヲ以テ證書ノ提出ヲ命ス

第三百四十條 相手方カ證書ヲ所持セサル旨ヲ申立ツルトキハ此申立ノ眞實ナルヤ否ヤヲ定

六十七

ル爲メ又ハ証書ノ所在ヲ穿鑿スル爲メ又ハ
舉証者ノ使用ヲ妨クル目的ヲ以テ故意ニ証書
ヲ隠匿シ若クハ使用ニ耐ヘサラシメタルヤ否
ヤヲ穿鑿スル爲メ本章第十節ノ規定ニ從ヒテ
相手方本人ヲ訊問ス可シ

相手方カ官廳ナルトキハ証書カ其官廳ノ保藏
ニ係ラス又ハ其所在ヲ開示スルヲ得サル旨ノ
長官ノ証明書ヲ以テ訊問ニ換フ裁判所ハ此証
明書ヲ差出サシムル爲メ相當ノ期間ヲ定ム可
シ

第三百四十一條 証書ヲ所持スルコトヲ明白シ
又ハ之ヲ所持セスト申立テサル相手方カ其証
書ヲ提出ス可シトノ命ニ從ハヌ又ハ相手方カ
所持セスト申立テタル証書ニ付キ訊問ヲ受
ケテ供述ヲ爲スコトヲ拒ミタルトキ又ハ舉証
者ノ使用ヲ妨クル目的ヲ以テ故意ニ証書ヲ隠
匿シ若クハ使用ニ耐ヘサラシメタルコトノ明
確ナルトキハ舉証者ノ差出シタル証書ノ謄本

ヲ正當ナルモノト看做ス若シ謄本ヲ差出サレ
ルトキハ裁判所ハ其意見ヲ以テ証書ノ性質及
ヒ旨趣ニ付キ舉証者ノ主張ヲ正當ナリト認ム
ルコトヲ得

前條第二項ニ掲ケタル証明書ヲ裁判所ノ定メ
タル期間内ニ差出サカルトキハ相手方タル官
廳ニ對シ前項ト同一ノ結果ヲ生ス

第三百四十二條 舉証者其使用ヲシテ証書
カ第三者ノ手ニ存スル旨ヲ主張スルトキハ書
証ノ申出ハ其証書ヲ取寄スル爲メ期間ヲ定メ
シコトヲ申立テ、之ヲ爲ス

第三百四十三條 第三者ハ舉証者ノ相手方ニ涉
ケルト同一ナル理由ニ因リ証書ヲ提出スル義
務アリ然レトモ強テ証書ヲ提出セシムルコト
ハ訴ヲ以テノミ之ヲ爲スコトヲ得

第三百四十四條 第三百四十二條ニ從ヒ申立テ
爲スコハ第三百三十八條第一號乃至第三號及
ヒ第五號ノ要件ヲ履ミ且証書カ第三者ノ手ニ

存スルコトヲ疏明ス可シ

第三百四十五條 証書ニ依リテ証ス可キ事實ノ
重要ニシテ且其申立カ前條ノ規定ニ適スルト
キハ裁判所ハ証書提出ノ期間ヲ定ム可シ

第三者ニ對スル訴訟ノ完結シタルトキ又ハ舉
証者カ訴ノ提起、訴ノ訟繼續又ハ強制執行ヲ
遅延シタルトキハ相手方ハ前項ノ期間ノ滿了
前ト雖モ訴訟手續ノ繼續ヲ申立ツルコトヲ得

第三百四十六條 舉証者其使用ヲシテ証書
カ官廳又ハ公吏ノ手ニ存スル旨ヲ主張スルト
キハ書証ノ申出ハ証書ノ送付ヲ官廳又ハ公吏
ニ囑託セラレシコトヲ申立テ、之ヲ爲ス
此規定ハ當事者カ法律上ノ規定ニ從ヒ裁判所
ノ助力ナクシテ取寄スルコトヲ得ヘキ証書ニ
ハ之ヲ適用セス

官廳又ハ公使カ第三百三十六條ノ規定ニ基キ
証書ヲ提出スル義務アル場合ニ於テ其送付ヲ
拒ムトキハ第三百四十二條乃至第三百四十五

條ノ規定ヲ適用ス

第三百四十七條 證據決定ヲ爲シタル後第三百
四十二條及ヒ第三百四十六條ノ規定ニ從ヒ書
証ヲ申出テタル場合ニ於テ証書取寄ノ手續ノ

爲ニ訴訟ノ完結ヲ遅延スルニ至ル可ク且裁判
所ニ於テ原告若クハ被告カ訴訟ヲ遅延スル故
意ヲ以テ又ハ甚シキ怠慢ニ因リ書証ヲ早ク申
出テサリシコトノ心証ヲ得タルトキハ申立ニ
因リ其書証ノ申出ヲ却下スルコトヲ得

第三百四十八條 口頭辨論ノ際證書ヲ提出スル
ニ於テハ其毀損若クハ紛失ノ恐アリ又ハ他ノ
顯著ナル障礙アルトキハ受命判事又ハ受託判
事ノ面前ニ證書ヲ提出ス可キ旨ヲ命スルコト
ヲ得

受命判事又ハ受託判事ハ証書ノ明細書及ヒ其
謄本ヲ調書ニ添附シ又証書ノ一分ノミ必要ナ
ルトキハ第七條第二項ノ規定ニ從ヒテ作り
タル抄本ヲ之ニ添附ス可シ

第三百四十九條 公正証書ハ正本又ハ認証ヲ受

タル謄本ヲ以テ之ヲ提出スルコトヲ得然レトモ裁判所ノ舉証者ニ正本ノ提出ヲ命スルコトヲ得

私署証書ハ原本ヲ以テ之ヲ提出スヘシ若シ當事者カ未ダ提出セサル原本ノ真正ニ付キ一致シ只其証書ノ效力又ハ解釋ニ付テノミ爭テ爲ストキハ謄本ヲ提出スルヲ以テ足ル然レトモ裁判所ハ職權ヲ以テ舉証者ニ原本ノ提出ヲ命スルコトヲ得

提出シタル謄本ニ換ヘテ正本又ハ原本ヲ提出ス可キ旨ノ命ニ從ハサルトキハ裁判所ハ心証ヲ以テ謄本ニ如何ナル證據力ヲ付ス可キヤト裁判ス

第三百五十條 舉証者ハ証書ヲ提出シタル後ハ相手方ノ承諾ヲ得ルトキニ限り此證據方法ヲ拋棄スルコトヲ得

第三百五十一條 公正証書又ハ檢眞ヲ經タル私

署証書ヲ偽造若シハ變造ナリト主張スル者ハ其証書ノ眞否ヲ確定セシメテ申立ヲ爲ス可シ此場合ニ於テハ裁判所ハ其証書ノ眞否ニ付キ中間判決ヲ以テ裁判ヲ爲ス可シ

第三百五十二條 私署証書ノ眞否ニ付キ爭アルトキハ裁判所ハ舉証者ノ申立ニ因リ檢眞ヲ爲スコトヲ得

第三百五十三條 私署証書ノ檢眞ハ總テノ證據方法及ヒ手跡若シハ印章ノ對照ニ因リ之ヲ爲ス

証書ノ眞否ヲ証セントスル當事者ハ裁判所ノ定ムル期間内ニ手跡若シハ印章ヲ對照スル爲ニ適當ナル書類ヲ提出ス可シ

眞正ナリトノ自白又ハ証明シタル適當ノ對照書類ナキトキハ對照ノ爲メ原告若シハ被告ニ對シ裁判所ニ於テ一定ノ語辭ノ手記ヲ命スルコトヲ得其手記シタル語辭ハ調書ノ附録トシテ之ニ添附ス可シ

裁判所ハ手跡若シハ印章ヲ對照シタル結果ニ付キ自由ナル心証ヲ以テ裁判ヲ爲シ又必要ナル場合ニ於テハ鑑定ヲ爲サシメタル後之ヲ爲ス

原告若シハ被告カ裁判所ノ定メタル期間内ニ對照書類ヲ提出セサルトキ又ハ對照ス可キ語辭ヲ手記シ可キ裁判所ノ命ニ對シ十分ナル辯解ヲ爲サスシテ之ニ從ハサルトキ又ハ書據ヲ變シテ手記シタルトキハ証書ノ眞否ニ付テノ相手方ノ主張ハ其他ノ證據ヲ要セスシテ之ヲ眞正ナリト看做スコトヲ得

第三百五十四條 提出シタル証書ハ直チニ之ヲ還付シ又適當ナル場合ニ於テハ其謄本ヲ記錄ニ留メテ之ヲ還付ス可シ

然レトモ証書ノ偽造又ハ變造ナリト爭フトキハ檢事ノ意見ヲ聽キタル後ニ非サレハ之ヲ還付スルコトヲ得ス

第三百五十五條 公正証書ノ偽造若シハ變造ナ

ルコトヲ眞實ニ反キテ主張シタル原告若シハ被告ニ惡意若クハ重過失ノ責アルトキハ五十圓以下ノ過料ヲ言渡ス

又私署証書ノ眞正ナルコトヲ眞實ニ反キテ爭フトキハ前項ト同一ナル條件ヲ以テ二十圓以下ノ過料ヲ言渡ス

第九節 檢證

第三百五十七條 檢證ノ申出ハ檢證物ヲ表示シ

及ヒ証ス可キ事實ヲ開示シテ之ヲ爲ス

第三百五十八條 受訴裁判所ハ檢證ヲ爲スニ際シ鑑定人ノ立會ヲ命スルコトヲ得

受訴裁判所ハ檢證及ヒ鑑定人ノ任命ヲ其部員一名ニ命シ又ハ區裁判所ニ囑託スルコトヲ得

第三百五十九條 檢證ヲ爲ス際發見シタル事項

ハ調書ニ記載シテ之ヲ明確ナラシメ又必要ナル場合ニ於テハ調書ノ附録トシテ添附ス可キ圖面ヲ作り之ヲ明確ナラシム可シ
若シ既ニ記録ニ圖面ノ存スルトキハ之ヲ檢証物ニ對照シ必要ナル場合ニ於テハ之ヲ更正ス可シ

第十節 當事者本人ノ訊問

第三百六十條 當事者ノ提出シタル許ス可キ證據ヲ調ヘタル結果ニ因リ証ス可キ事實ノ眞否ニ付キ裁判所カ心証ヲ得ルニ足ラサルトキハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ原告若クハ被告ノ本人ヲ訊問スルコトヲ得

第三百六十一條 裁判所ハ原告若クハ被告ヲ訊問スルコトヲ決定シ且原告若クハ被告ノ自身カ決定旨渡ノ際在廷スルトキハ直チニ其訊問ヲ爲メテ以テ通例トス

第三百六十二條 訊問ヲ受クル原告若クハ被告ハ供述ニ換ヘテ書類ヲ朗讀シ其他覺書ヲ用井

ルコトヲ得ス但算數ノ關係ニ限リ覺書ヲ用井ルコトヲ得

第三百六十三條 原告若クハ被告カ十分ナル理由ナクシテ供述スルコトヲ拒ミ又ハ訊問期日ニ出頭セサルトキハ裁判所ハ其意見ヲ以テ訊問ニ因リテ舉証ス可キ相手方ノ主張ヲ正當ナリト認ムルコトヲ得

第三百六十四條 訴訟無能力者ノ法律上代理人カ訴訟ヲ爲ストキハ法律上代理人若クハ訴訟無能力者ヲ訊問ス可キヤ又ハ此等ノ者ヲ其コ訊問ス可キヤ裁判所ノ意見ヲ以テ之ヲ決定ス法律上代理人數人アルトキハ其一人ヲ訊問ス可キヤ又ハ數人ヲ訊問ス可キヤモ亦前項ニ同シ

第十一節 證據保全

第三百六十五條 證據ヲ紛失スル恐アリ又ハ之ヲ使用シ難キ恐アルトキハ證據保全ヲ爲メ証人若クハ鑑定人ノ訊問又ハ檢証ヲ申立ツルコトヲ得

トヲ得

第三百六十六條 訴訟カ已ニ繫屬シタルトキハ此申請ハ受訴裁判所ニ之ヲ爲ス可シ

切迫ナル危險ノ場合ニ於テハ訊問ヲ受ク可キ者ノ現在地又ハ檢証ス可キ物ノ所在地ヲ管轄スル區裁判所ニ申請ヲ爲スコトヲ得
訴訟ノ未チ繫屬セサルトキハ前項ニ記載シタル區裁判所ニ申請ヲ爲スコトヲ要ス
右申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第三百六十七條 申請ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 相手方ノ表示

第二 證據調ヲ爲ス可キ事實ノ表示

第三 證據方法殊ニ証人若クハ鑑定人ノ訊問ヲ爲スコトキハ其表示

第四 證據ヲ紛失スル恐アリ又ハ之ヲ使用シ難キ恐アル理由此理由ハ之ヲ疏明ス可シ

第三百六十八條 申請ニ付テノ決定ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

申請ヲ許容スル決定ニハ證據調ヲ爲スコキ事實及ヒ證據方法殊ニ訊問ス可キ証人若クハ鑑定人ノ氏名ヲ記載ス可シ此決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得

第三百六十九條 證據調ノ當日コハ申立人ヲ呼出シ又決定及ヒ申請ノ勝本ヲ送達シテ其權利防衛ノ爲ニ相手方ヲモ呼出ス可シ
切迫ナル危險ノ場合ニ於テハ適當ナル時間ニ相手方ヲ呼出スコトヲ得サリシトキト雖モ證據調ヲ妨グルコト無シ

第三百七十條 證據調ハ本章第六節、第七節、及ヒ第九節ノ規定ニ從ヒテ之ヲ爲ス

證據調ノ調書ハ證據調ヲ命シタル裁判所ニ之ヲ保存ス可シ各當事者ハ證據調ノ調書ヲ訴訟ニ於テ使用スル權利アリ

受訴裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ再處ノ證據調ヲ命シ亦ハ既ニ調ヘタル證據ノ補充ヲ命スルコトヲ得

第三百七十一條 證據調ハ第三百六十五條ノ條件ナキトキト雖モ相手方ノ承諾ニ因リ之ヲ許スコトヲ得

第三百七十二條 申立人カ相手方ヲ指定セサルトキハ申立人自己ノ過失ニ非ヌシテ相手方ヲ指定シ能ハサルコトヲ疏明スル場合ニ限り其申請ヲ許ス
申請ヲ許容シタルトキハ裁判所ハ其知レサル相手方ノ權利防衛ノ爲ニ臨時代理人ヲ任スルコトヲ得

第二章 區裁判所ノ訴訟手續

第一節 通常ノ訴訟手續

第三百七十三條 區裁判所ノ通常ノ訴訟手續ニ付テハ區裁判所ノ構成又ハ第一編及ヒ本節ノ規定ニ依リ差異ノ生セサル限リハ地方裁判ノ

ハ豫メ期日ノ指定ナクシテ裁判所ニ出頭シ訴訟ニ付キ辯論ヲ爲スコトヲ得
此場合ニ於テ訴ノ提起ハ口頭ノ演述ヲ以テ之ヲ爲ス

第三百七十九條 數箇ノ妨訴ノ抗辯ヲ本案ノ辯論前同時ニ提出ス可キ規定ハ裁判所管轄違ノ抗辯ニ限リ之ヲ適用ス

被告ハ妨訴ノ抗辯ニ基キ本案ノ辯論ヲ拒ム權利ナシ然レトモ裁判所ハ職權ヲ以テ右抗辯ニ付キ分離シタル辯論ヲ命スルコトヲ得

第三百八十條 第二百二十二條、第二百六十六條乃至第二百七十二條ノ規定ハ區裁判所ノ訴訟手續ニ之ヲ適用セス

然レトモ原告若クハ被告ノ申立及ヒ陳述ハ裁判所ノ意見ニ從ヒ訴訟關係ヲ十分ニ明確ナラシムル爲メ必要ナルモノニ限り調書ヲ以テ之ヲ明確ナラシム可シ

第三百八十一條 訴ヲ起サントスルモノハ和解

訴訟手續ニ付テノ規定ヲ適用ス

第三百七十四條 訴ハ書面又ハ口頭ヲ以テ裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

第三百七十五條 起訴アリタルトキハ裁判所書記ハ訴狀ヲ被告ニ送達スル手續ヲ爲ス
準備書面ノ交換ハ之ヲ爲スコトヲ要セス

第三百七十六條 原告若クハ被告ハ其申立及ヒ事實上ノ主張ニシテ豫メ通知スルニ非サレハ相手方ニ於テ之ニ對シ陳述ヲ爲シ得ヘカササルモノヲ口頭辯論ノ前直接ニ相手方ニ通知スルコトヲ得

第三百七十七條 口頭辯論ノ期日ト訴狀送達トノ間ニ少ナクトモ三日ノ時間ヲ存スルコトヲ要ス急迫ナル場合ニ於テハ此時間ヲ二十四時マテニ短縮スルコトヲ得
送達ヲ外國ニ於テ爲スコトキハ事情ニ應ジテ時間ヲ定ム可シ

第三百七十八條 當事者ハ通常ノ裁判日ニ於テ

ノ爲メ請求ノ目的物ヲ開示シテ相手方ヲ其普通裁判籍ヲ有スル區裁判所ニ呼出スコトヲ得
申立ツルコトヲ得其中立ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

當事者雙方出頭シ和解ノ調ヒタルトキハ調書ヲ以テ之ヲ明確ナラシム可シ

和解ノ調ハサルトキハ當事者雙方ノ申立ニ因リ其訴訟ニ付キ直チニ辯論ヲ爲ス此場合ニ於ケル訴ノ提起ハ口頭ノ演述ヲ以テ之ヲ爲ス
相手方カ出頭セヌ又ハ和解ノ調ハサルトキハ此カ爲ニ生シタル費用ハ訴訟費用ノ一分ト看做ス

第二節 督促手續

第三百八十二條 一定ノ金額ノ支拂其他ノ代替物若クハ有價証券ノ一定ノ數量ノ給付ヲ目的トスル請求ニ付キ債權者ハ通常ノ訴訟手續ニ依ラヌシテ督促手續ニ依リ條件附ノ支拂命令ヲ債務者ニ對シ發セシコトヲ申立テルコトヲ

申請ノ旨越ニ依レハ申請者反對給付ヲ爲スニ非サレハ其請求ヲ主張スルコトヲ得サルトキ又ハ支拂命令ノ送達ヲ外國ニ於テ爲シ若シハ公示送達ヲ以テ爲ス可キトキハ督促手續ヲ許サズ

第三百八十三條 支拂命令ハ區裁判所之ヲ發ス此命令ハ區裁判所ノ第一審ノ事物ノ管轄ノ制限ナキモノト看做シ通常ノ訴訟手續ニ於ケル訴ノ提起ニ付キ普通裁判藉又ハ不動産上裁判籍ノ屬ス可キ區裁判所ノ管轄ニ專屬ス

第三百八十四條 支拂命令ヲ發スルコトノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得此申請ハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

- 第一 當事者及ヒ裁判所ノ表示
- 第二 請求ノ一定ノ數額目的物及ヒ原因ノ表示若シ請求ノ數額ナルトキハ其各箇ノ一定ノ數額、目的物及ヒ原因ノ表示

第三 支拂命令ヲ發センコトノ申立

第三百八十五條 裁判所ハ申請ヲ調査シ其中諸カ前三條ノ規定ニ適當セス又ハ申請ノ旨趣ニ於テ請求ノ理由ナク又ハ現時理由ナキコトノ顯ハルトキハ其申請ヲ却下ス

請求ノ一分ノミニ付キ支拂命令ヲ發スルコトヲ得サルトキハ亦其申請ヲ却下ス然レトモ數箇ノ請求中或ルモノニ理由ナクシテ其他ノモノニ理由アリト見ユルトキハ其理由アリト見ユルモノニ限り申請ヲ許容ス
右却下ノ命令ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス然レトモ通常ノ訴訟手續ニ依リ訴追スルヲ妨クルコト無シ

第三百八十六條 支拂命令ハ豫メ債務者ヲ審訊セシメテ之ヲ發ス

支拂命令ニハ第三百八十四條第一號及ヒ第二號ニ掲ケタル申請ノ要件ヲ記載シ且即時ノ強制執行ヲ避ケント欲セハ此命令送達ノ日ヨリ

十四日ノ期限内ニ請求ヲ満足セシメ及ヒ其手續ノ費用ニ付キ定ムル數額ヲ債權者ニ辨濟ス可シ又ハ裁判所ニ異議ヲ申立ツ可キ旨ノ債務者ニ對スル命令ヲ記載ス可シ

前項ノ期間ハ爲替ヨリ生スル請求ニ付テハ二十四時間其他ノ請求ニ付テハ申立ニ因リ三日マテニ之ヲ短縮スルコトヲ得

第三百八十七條 權利拘束ノ效力ハ支拂命令ヲ債務者ニ送達スルヲ以テ始マル

支拂命令ノ送達ハ之ヲ債權者ニ通知ス可シ
第三百八十八條 債務者ハ支拂命令ニ對シ書面又ハ口頭ヲ以テ異議ノ申立ヲ爲スコトヲ得

第三百八十九條 債務者カ請求ノ全部又ハ一分ニ對シ適當ナル時間ニ異議ヲ申立ツルトキハ支拂命令ノ效力ヲ失フ然レトモ權利拘束ノ效力ヲ存續ス

數箇ノ請求中或ルモノニ對シ異議ヲ申立テタルトキハ支拂命令ハ其他ノ請求及ヒ之ニ相當

スル費用ノ部分ニ付キ效力ヲ有ス

第三百九十條 適當ナル時間ニ異議ヲ申立テタル場合ニ於テ請求ニ付キ起ス可キ訴カ區裁判所ノ管轄ニ屬スルトキハ其訴ハ支拂命令ノ送達ト同時ニ區裁判所ニ之ヲ起シタルモノト看做ス其口頭辯論ノ期日ハ第三百七十七條ノ規定ニ從ヒテ之ヲ定ム

第三百九十一條 請求ニ付キ起ス可キ訴カ地方裁判所ノ管轄ニ屬スル場合ニ於テハ適當ナル時間ニ異議ノ申立アリタルコトヲ債權者ニ通知ス可シ

債權者其通知書ノ送達アリタル日ヨリ起算シ一个月ノ期間内ニ管轄裁判所ニ訴ヲ起サ、ルトキハ權利拘束ノ效力ヲ失フ

第三百九十二條 督促手續ノ費用ハ適當ナル時間ニ異議ノ申立アリタル場合ニ於テハ起ス可キ訴訟ノ費用ノ一分ト看做ス
前條ノ場合ニ於テ期間内ニ訴ヲ起サ、ルトキ

手續ノ費用ハ債權者ノ負擔ニ歸ス
 第三百九十三條 支拂命令ハ其命令中ニ掲ケタル期間ノ經過後債權者ノ申請ニ因リ之ヲ假ニ執行シ得ヘキコトヲ宣言ス但假執行ノ宣言前債務者異議ヲ申立テサルトキニ限ル
 右假執行ノ宣言ハ支拂命令ニ付ス可キ執行命令ヲ以テ之ヲ爲ス其執行命令ニハ債權者ニ於テ計算スル手續ノ費用ヲ掲ク可シ
 債權者ノ申請ヲ却下スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得
 第三百九十四條 執行命令ハ假執行ノ宣言ヲ付シタル闕席判決ト同一ナリトス其執行命令ニ對シテハ第二百五十五條乃至第二百六十四條ノ規定ニ從ヒテ故障ヲ申立ツルコトヲ得請求カ區裁判所ノ管轄ニ屬セサルトキハ區裁判所ハ其故障ヲ法律上ノ方式及ヒ期間ニ於テ申立テサルヤノ點ノミニ付キ辨論及ヒ裁判ヲ爲ス此場合ニ於テハ第三百九十一條第二項ニ定メ

タル期間ハ故障ヲ許ス判決ノ確定ヲ以テ始マル
 第三百九十五條 時期ニ後レテ申立テタル異議ハ命令ヲ以テ之ヲ却下ス
 此却下ノ命令ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス
 第三編 上訴
 第一章 控訴
 第三百九十六條 控訴ハ區裁判所又地方裁判所ノ第一審ニ於テ爲シタル終審判決ニ對シテ之ヲ爲ス
 第三百九十七條 終局判決前ニ爲シタル裁判ハ亦控訴裁判所ノ判斷ヲ受ク但此法律ニ於テ不服ヲ申立ツルコトヲ得スト明記シタルトキ又ハ抗告ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得ルトキハ此限ニ在ラス
 第三百九十八條 闕席判決ニ對シテハ期日ヲ懈怠シタル者ヨリ控訴ヲ以テ不服ヲ申立ツルコト

トヲ得ス但故障ヲ許ササル闕席判決ニ對シテハ懈怠ナカリシコトヲ理由トスルトキニ限リ
 控訴ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得
 第三百九十九條 控訴ハ口頭辯論ノ前ニ於テハ被控訴人ノ承諾ナクシテ之ヲ取下シルコトヲ得
 控訴ノ取下ハ上訴權ヲ喪失スル結果ヲ生ス
 第四百條 控訴期間ハ一个月トス此期間ハ不變期間ニシテ判決ノ送達ヲ以テ於マル
 判決ノ送達前ニ提起シタル控訴ハ無効トス
 第二百四十二條ノ規定ニ從ヒ控訴期間内ニ追加裁判ヲ以テ判決ヲ補充シタルトキハ控訴期間ノ進行ハ最初ノ判決ニ對スル控訴ニ付テモ追加裁判ノ送達ヲ以テ始マル
 第四百一條 控訴ノ提起ハ控訴狀ヲ控訴裁判所ニ差出シテ之ヲ爲ス
 此控訴狀ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス
 第一 控訴セラルル判決ノ表示

第二 此判決ニ對シ控訴ヲ爲ス旨ノ陳述
 此他控訴狀ハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ニ從ヒテ之ヲ作り且判決ニ對シ如何ナル程度ニ於テ不服ナルヤ及ヒ判決ニ付キ如何ナル變更ヲ爲ス可キヤノ申立テ掲ケ若シ新ニ主張セシトスル事實及ヒ證據方法アルトキハ其新ナル事實及ヒ證據方法ヲモ掲ク可シ
 第四百二條 判然許ス可カラサル控訴又ハ判然法律上ノ方式ニ適セス若クハ其期間ノ經過後ニ起シタル控訴ハ裁判長ノ命令ヲ以テ之ヲ却下ス
 此却下ノ命令ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得
 第四百三條 控訴狀ノ送達ト口頭辯論ノ期日トノ間ニ存スルコトヲ要スル時間ニ付テハ第九十四條ノ規定ヲ適用シ答辯書ヲ差出ス可キ期間ノ催告ニ付テハ第九十九條ノ規定ヲ適用ス

前項ノ場合ニ於テモ亦第二百三條ノ規定ヲ適用スルコトヲ得

第四百四條 答辯書ハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ニ從ヒテ之ヲ作リ且被控訴人ノ一定ノ申立及ヒ其主張セントスル新ナル事實及ヒ證據方法ヲ揭ク可シ

第四百五條 被控訴人ハ自己ノ控訴ヲ拋棄シタルトキ又ハ控訴期間ノ經過シタルトキト雖モ附帶控訴ヲ爲スコトヲ得

第四百六條 左ノ場合ニ於テハ附帶控訴ハ其效力ヲ失フ
第一 控訴ヲ不適法トシテ判決ヲ以テ棄却シタルトキ
第二 控訴ヲ取下ケタルトキ

然レトモ被控訴人カ控訴期間内ニ附帶控訴ヲ爲シタルトキハ之ヲ獨立ノ控訴ト看做ス

第四百七條 答辯書ニ新ナル事實若クハ證據方法ヲ揭ケ又ハ附帶控訴ヲ爲ス旨ノ陳述ヲ揭ケタルトキハ之ヲ控訴人ニ送達ス可シ

第四百八條 右ノ外控訴ノ訴訟手續ニハ地方裁判所ノ第一審ノ訴訟手續ノ規定ヲ準用ス但本章ノ規定ニ依リ差異ノ生スルモノハ此限ニ在ラス

第四百九條 當事者ノ雙方ヨリ控訴ヲ起シタルトキハ其兩控訴コ付キ辨論及ヒ裁判ヲ同時ニ爲スヲ以テ通例トス

第四百十條 口頭辨論ハ其期日ニ於テ被控訴人ノ控訴期間ノ未タ經過セザルトキハ其申立ニ因リ期間ノ滿了マテ之ヲ延期ス

第四百十一條 控訴裁判所ニ於ケル訴訟ハ不服ヲ得然レトモ裁判所ハ職權ヲ以テ妨訴ノ抗辨ニ付キ分離シタル辨論ヲ命スルコトヲ得

第四百十五條 當事者ハ第一審ニ於テ主張セザリシ攻撃防禦ノ方法殊ニ新ナル事實及ヒ證據方法ヲ提出スルコトヲ得

第四百十六條 新ナル請求ハ第九十六條第二號及ヒ第三號ノ場合又ハ相殺スルコトヲ得ルモノニシテ且原告若クハ被告カ其過失ニ非シシテ第一審ニ於テ提出シ能ハサリシコトヲ疏明スルコトニ限リ之ヲ起スコトヲ得

第四百十七條 事實又ハ證書ニ付キ第一審ニ於テ爲ササリシ陳述又ハ拒ミタル陳述ハ第二審ニ於テ之ヲ爲スコトヲ得

第四百十八條 第一審ニ於テ爲シタル裁判上ノ自白ハ第二審ニ於テモ亦其效力ヲ有ス

第四百十九條 控訴裁判所ハ控訴ヲ許ス可キヤ否ヤ又控訴ヲ法律上ノ方引ニ從ヒ若クハ其期間ニ於テ起シタルヤ否ヤ職權ヲ以テ調査ス

ノ申立ニ因リ定マリタル範圍内ニ於テ更ニ之ヲ辨論ス

第四百十二條 當事者ハ其控訴ノ申立及ヒ不服ヲ申立テラレタル裁判ノ當否ヲ明瞭ナラシムル爲メ必要ナル限リハ口頭辨論ノ際第一審ニ於ケル辨論ノ結果ヲ演述ス可シ

第四百十三條 訴ノ變更ハ相手方ノ承諾アルトキト雖モ之ヲ許サス

第四百十四條 妨訴ノ抗辯ハ職權ヲ以テ調査ス可カラサルモノニシテ且原告若クハ被告カ其過失ニ非スシテ第一審ニ於テ提出シ能ハサリシコトヲ疏明スルコトニ限リ之ヲ主張スルコトヲ得

本案ノ辨論ハ妨訴ノ抗辯ニ基キ之ヲ拒ムコト

可○書○要○件○一○次○機○ト○キ○ハ○判○決○ヲ○以○テ

控訴ヲ不適法トシテ棄却ス可○

第四百二十條 第一審ノ裁判ハ變更ヲ申立テマ

ル部分ニ限リ之ヲ變更スルコトヲ得

第四百二十一條 第一審ニ於テ是認シ又ハ非認

シタル請求ニ關スル總ノ争點ニシテ申立ニ從

ヒ辨論及ヒ裁判ヲ必要トスルモノハ第一審ニ

於テ此争點ニ付キ辨論及ヒ裁判ヲ爲ササルト

キト雖モ控訴裁判所ニ於テ其辨論及ヒ裁判ヲ

爲ス

第四百二十二條 控訴裁判所ハ左ノ場合ニ於テ

事件ニ付キ尙ホ辨論ヲ必要トスルハ其事件

ヲ第一審裁判所ニ差戻ス可○

第一 不服ヲ申立テラレタル判決カ闕席判

決ナルハ

第二 不服ヲ申立テラレタル判決カ闕席判

決ニ對スル故障ヲ不適法トシテ棄却シマ

ルモノトナルトキ

第三 不服ヲ申立テラレタル判決カ妨訴ノ

抗辨ノミコ付キ裁判ヲ爲シタルモノナル

トキ

第四 請求カ其原因及ヒ數額ニ付キ争アル

場合ニ於テ不服ヲ申立テラレタル判決カ

先ツ其原因ニ付キ裁判ヲ爲シタルハ

第五 不服ヲ申立テラレタル判決カ証書訴

訟及ヒ爲替訴訟ニ於テ敗訴ノ被告ニ別訴

訟ヲ以テ進行ヲ爲ス權ヲ留保シタルモノ

ナルトキ

第四百二十三條 第一審ニ於テ訴訟手續ニ付テ

ノ規定ニ違背シタルトキハ控訴裁判所ハ其判

決及ヒ違背シタル訴訟手續ノ部分ヲ廢棄シ事

件ヲ第一審裁判所ニ差戻ス可トヲ得

第四百二十四條 控訴ノ理由ナシトスルキハ判

決ヲ以テ控訴ノ棄却ヲ言渡ス可○

第四百二十五條 判決ヲ控訴人ノ不利益ニ變更

スルコトハ相手方カ控訴又ハ附帶控訴ノ方法

ヲ以テ判決ニ付キ不服ヲ申立テタル部分ニ限

リ之ヲ爲スコトヲ得

第四百二十六條 第二百十條ノ規定ニ從ヒテ防

禦ノ方法ヲ却下スルハ其防禦ノ方法ヲ主張

スル權ハ之ヲ被告ニ留保ス可○

判決ニ此留保ヲ掲ケサルハ第二百四十二條

ノ規定ニ從ヒテ判決ノ補充ヲ申立ツルコトヲ得

留保ヲ掲ケタル判決ハ上訴及ヒ強制執行ニ付

テハ終局判決ト看做ス

第四百二十七條 防禦ノ方法ニシテ被告ニ其主

張ヲ留保スルモノニ付テハ其訴訟ハ第二審ニ

繫屬ス

爾後ノ手續ニ於テ訴ヲ以テ主張シタル請求ノ

理由ナカリシコトノ顯ハルルハ前判決ヲ廢

棄シテ其訴ヲ棄却シ且申立ニ因リ判決ニ基キ

支拂ヒタルモノ又ハ給付シタルモノヲ返還ス

可キコトヲ言渡シ並ニ費用ニ付キ裁判ヲ爲ス

可○

第四百二十八條 控訴人カ口頭辨論ノ期日ニ出

頭セサルトキハ出頭シタル被控訴人ノ申立ニ

因リ闕○判決ヲ以テ控訴ノ棄却ヲ言渡ス可○

第四百二十九條 被控訴人口頭辨論ノ期日ニ出

頭セサル場合ニ於テ出頭シタル控訴人ヨリ闕

席判決ノ申立ヲ爲スハ第一審裁判ノ根據ト

爲リタルモノニ抵觸セサル控訴人ノ事實上ノ

供述ハ被控訴人之ヲ自白シタルモノト看做シ

且第一審裁判所ノ事實上ノ確定ヲ補充シ若ク

ハ辨駁スル爲メ控訴人ノ申立テタル適法ノ証

據調ハ既ニ之ヲ爲シ及ヒ其結果ヲ得タルモノ

ト看做シ闕席判決ヲ爲ス

第四百三十條 判決中ノ事實ノ摘示ニ付テハ前

審ノ判決ヲ引用スルコトヲ得

第四百三十一條 控訴裁判所ノ書記ハ控訴狀ノ

提出ヨリ二十四時間ニ第一審裁判所ノ書記ニ

訴訟記録ノ送付ヲ求ム可○

控訴完結ノ後其記録ハ第二審ニ於テ爲シタル

判決ノ認證アル謄本ト共ニ第一審裁判所ノ書記ニ之ヲ返還ス可シ

第二章 上告

第四百三十二條 上告ハ地方裁判所及ヒ控訴院

ノ第二審ニ於テ爲シタル終局判決ニ對シテ之ヲ爲ス

第四百三十三條 終局判決前ニ爲シタル裁判ハ

亦告裁判所ノ判斷ヲ湘ク但此法律ニ於テ不服ヲ申立ツルコトヲ得スト明記シタルトキ又ハ抗告ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得ルトキハ此限ニ在ラス

第四百三十四條 上告ハ法律ニ違背シタル裁判

ナルコトヲ理由トスルトキニ限り之ヲ爲ストヲ得

第四百三十五條 法則ヲ適用セズ又ハ不當ニ適用シタルハ法律ニ違背シタルモノトス

第四百三十六條 裁判ハ左ノ場合ニ於テハ常ニ法律ニ違背シタルモノトス

第一 規定ニ從ヒ判決裁判所ヲ構成セザリシトキ

第二 法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セラレタル判事カ裁判ニ參與シタルトキ但忌

避ノ申請又ハ上訴ヲ以テ除斥ノ理由ヲ主張シタルモ其效ナカリシトキハ此限ニ在ラス

第三 判事カ忌避セラレ且忌避ノ申請ヲ理由アリト認メタルニ拘ハラズ裁判ニ參與シタルトキ

第四 裁判所カ其管轄又ハ管轄違ヲ不當ニ認メタルトキ

第五 訴訟手續ニ由テ原告若クハ被告カ法律ノ規定ニ從モ代理セラレザリシトキ

第六 訴訟手續ノ公行ニ付テノ規定ニ違背シタル口頭辨論ニ基キ裁判ヲ爲シタルト

第七 裁判ニ理由ヲ付セザルトキ

第四百三十七條 上告期間ハ一个月トス此期間

ハ不變期間ニシテ判決ノ送達ヲ以テ始マル

判決ノ送達前ニ提起シタル上告ハ無効トス

第四百三十八條 上告ノ提起ハ上告狀ヲ上告裁判所ニ差出シテ之ヲ爲ス此上告狀ニハ左ノ諸

件ヲ具備スルヲ要ス

第一 上告セララルル判決ノ表示

第二 此判決ニ對シ上告ヲ爲ス旨ノ陳述

此他其告狀ハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ニ從ヒテ之ヲ作り特ニ判決ニ對シ如何ナル程度

ニ於テ不服ナルヤ及ヒ判決ニ付キ如何ナル程度ニ於テ破毀ヲ爲ス可キヤノ申立ヲ掲ケ且法

則ヲ適用セズ若クハ不當ニ適用シタルコトヲ上告ノ理由トスルトキハ其法則ノ表示又ハ訴訟

手續ニ付テノ規定ニ違背シタルコトヲ上告ノ理由トスルトキハ其欠缺ヲ明カニスル事實

ノ表示又ハ法律ニ違背シテ事實ヲ確定シ若クハ證據ニ若クハ提出シタルトテ證據ニシタルコト

テ上告ノ理由トスルトキハ其事實ノ表示ヲ揭シ可シ

第四百三十九條 上告裁判所ハ上告人ヲ呼出シ

其陳述ヲ聽キ上告ヲ許ス可カラサルモノナルトキ又ハ法律上ノ方式及ヒ期間ニ於テ起サルトキ又ハ第四百三十四條ノ規定ニ依ラサルトキハ判決ヲ以テ之ヲ棄却ス可シ

上告人カ呼出ノ期日ニ出頭セザルトキハ上告ヲ取下ケタルモノト看做ス但出頭セザリシコトヲ期日ヨリ七日ノ期間内ニ十分ナル理由ヲ以テ辯解シタルトキハ更ニ期日ヲ定ム

第四百四十條 上告狀ノ送達ト口頭辯論ノ期日トノ間ニ存スルコトヲ要スル時間ニ付テハ第

百九十四條ノ規定ニ適用シ答辯書ヲ差出ス可キ期間ノ催告ニ付テハ第百九十九條ノ規定ヲ適用ス

前項ノ場合ニ於テモ亦第百三十三條ノ規定ヲ適用スルコトヲ得

第四百四十一條 答辯書ハ準備書面ニ關スル一

般ノ規定ニ從ヒテ之ヲ作り且一定ノ申立ヲ揭

第四百四十二條 被上告人ハ附帶上告ヲ爲ス可

此附帶上告ニ付テハ附帶控訴ノ規定ヲ準用ス

第四百四十三條 答辯書ニ附帶上告ヲ爲ス旨ノ

第四百四十四條 右ノ外上告ノ訴訟手續ニハ地

第四百四十五條 上告裁判所ハ當事者ノ爲シテ

第四百四十六條 上告裁判所ハ裁判ヲ爲スニ付

第四百五十一條 上告裁判所ハ左ノ場合ニ於テ

第一 確定シタル事實ニ法律ヲ適用スルニ

第四百五十二條 上告ヲ理由ナントスルトキハ

第四百五十三條 裁判ヲ其理由ニ於テ法律ニ違

ニ揭ケタル事實ニ限り之ヲ斟酌スルヲ得

証據調ヲ必要トスルキハ上告裁判所ハ之ヲ命

第四百四十七條 上告ヲ理由アリトスルキハ不

第四百四十八條 判決ヲ破毀スル場合ニ於テハ

第四百四十九條 當事者ハ破毀セラレタル判決

第四百五十四條 左ノ諸件ニ關スル控訴ノ規定

第一 開席判決ニ對スル不服ノ申立

第二 控訴ノ取下

第三 當事者ノ雙方ヨリ控訴ヲ起シタル場

第四 口頭辨論ノ延期

第四百五十五條 抗告ハ訴訟手續ニ關スル申請

第四百五十六條 抗告ニ付テハ直近ノ上級裁判所其裁判ヲ爲ス

抗告裁判所ノ裁判ニ對シテハ其裁判ニ因リ新ナル獨立ノ抗告理由ヲ生シタルトキニ非サレバ更ニ抗告ヲ爲スコト不得

第四百五十七條 抗告ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ノ屬スル裁判所ニ抗告狀ヲ差出シテ之ヲ爲ス

訴訟ガ區裁判所ニ繫屬シ若クハ管テ繫屬シタルトキ又ハ証人、鑑定人ヨリ若クハ証書ヲ提出スル義務アリト宣言ヲ受ケタル第三者ヨリ抗告ヲ爲ストキハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコト不得

第四百五十八條 抗告ハ新ナル事實及ヒ證據方テ以テ證據ト爲スコト不得

第四百五十九條 不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長カ再度ノ考案若クハ新ナル提供ニ基キ抗告ヲ理由アリトスルハ不服ノ點ヲ更正シ又理由ナシトスルハ裁判所又ハ裁判長ハ意見ヲ付シテ三日ノ期間内ニ抗告ヲ抗告裁判所ニ送付シ又適當トスル場合ニ於テハ訴訟記録ヲモ送付ス可シ

第四百六十條 抗告ハ此法律ニ於テ別段ノ規定ヲ設ケタル場合ニ限リ執行停止ノ效力ヲ有スル裁判所又ハ裁判長ハ抗告ニ付テノ裁判アルマテ其執行ノ中止ヲ命スルコト不得

第四百六十一條 抗告ハ急迫ナル場合ニ限り直ニ抗告裁判所ニ之ヲ爲スコト不得

抗告裁判所ハ裁判ヲ爲ス前ニ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ノ意見及ヒ記録ヲ要求スルコト不得

抗告裁判所ハ事件ヲ急迫ナラスト認ムルハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所

又ハ裁判長ニ其事件ヲ送付シ且其旨ヲ抗告人ニ通知ス可シ

第四百六十二條 抗告裁判所ハ口頭辯論ヲ經スルコト不得

抗告裁判所ハ抗告人ト反對ノ利害關係ヲ有スル者ニ抗告ヲ通知シテ書面上ノ陳述ヲ爲サシムルコト不得

陳述ハ口頭ヲ以テ抗告ヲ爲シ得ヘキ場合ニ於テハ亦口頭ヲ以テ之ヲ爲スコト不得

抗告裁判所ハ口頭辯論ノ爲ニ當事者ヲ呼出スルコト不得

第四百六十三條 抗告裁判所ハ抗告ヲ許ス可キヤ否ヤ又法律上ノ方式ニ從ヒ若クハ其期間ニ於テ提出シタルヤ否ヤノ職權ヲ以テ調査スヘシ

判所又ハ裁判長ハ意見ヲ付シテ三日ノ期間内ニ抗告ヲ抗告裁判所ニ送付シ又適當トスル場合ニ於テハ訴訟記録ヲモ送付ス可シ

第四百六十條 抗告ハ此法律ニ於テ別段ノ規定ヲ設ケタル場合ニ限リ執行停止ノ效力ヲ有スル裁判所又ハ裁判長ハ抗告ニ付テノ裁判アルマテ其執行ノ中止ヲ命スルコト不得

第四百六十一條 抗告ハ急迫ナル場合ニ限り直ニ抗告裁判所ニ之ヲ爲スコト不得

抗告裁判所ハ事件ヲ急迫ナラスト認ムルハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所

又ハ裁判長ニ其事件ヲ送付シ且其旨ヲ抗告人ニ通知ス可シ

第四百六十二條 抗告裁判所ハ口頭辯論ヲ經スルコト不得

抗告裁判所ハ抗告人ト反對ノ利害關係ヲ有スル者ニ抗告ヲ通知シテ書面上ノ陳述ヲ爲サシムルコト不得

陳述ハ口頭ヲ以テ抗告ヲ爲シ得ヘキ場合ニ於テハ亦口頭ヲ以テ之ヲ爲スコト不得

抗告裁判所ハ口頭辯論ノ爲ニ當事者ヲ呼出スルコト不得

第四百六十三條 抗告裁判所ハ抗告ヲ許ス可キヤ否ヤ又法律上ノ方式ニ從ヒ若クハ其期間ニ於テ提出シタルヤ否ヤノ職權ヲ以テ調査スヘシ

若シ此要件ノ一ヲ缺クトキハ抗告ヲ不適法トシテ棄却ス可シ

第四百六十四條 抗告ヲ適法ニシテ且理由アリ

トスルハ抗告裁判所ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ廢棄シテ自ら更ニ裁判ヲ爲シ又ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ニ委任シテ裁判ヲ爲サシムルコト不得

第四百六十五條 受命判事若クハ受託判事ノ裁判又ハ裁判所書記ノ處分ノ變更ヲ求ムルコトハ先ツ受訴裁判所ノ裁判ヲ求ム可シ

抗告ハ受訴裁判所ノ裁判ニ對シテ之ヲ爲スコト不得

第一項ノ規定ハ大審院ニモ亦之ヲ適用ス

六百八十條及七百六十九條第三項ノ場合

ニ於テハ裁判ノ言渡ヨリ始マル抗告裁判所ニ抗告ヲ提出シタルトキハ急迫ナラスト認めタル場合ニ於テモ又不變期間ヲ保存ス
再審ヲ求ムル訴ニ付テノ要件存スルトキハ不變期間ノ満了後ト雖モ此訴ノ爲メ定メタル期間内ハ抗告ヲ爲スコトヲ得

前條第一項ノ場合ニ於テハ抗告提出ノ爲メ定メタル方法ニ依リ不變期間内ニ受訴裁判所ノ裁判ヲ求ムルコトヲ要ス受訴裁判所ハ其申請ヲ正當ト認めサルトキハ之ヲ抗告裁判所ニ送付ス可シ

第四編 再審

第四百六十七條 確定ノ終局判決ヲ以テ終結シタル訴訟ハ取消ノ訴又ハ原狀回復ノ訴ニ因リ之ヲ再審スルコトヲ得

當事者ノ一方又ハ雙方ヨリ此兩訴ヲ起シタルトキハ原狀回復ノ訴ニ付テノ辨論及ヒ裁判ハ

取消ノ訴ニ付テノ裁判カ確定スルマテ之中止ス可シ

第四百六十八條 左ノ場合ニ於テハ取消ノ訴ニ因リ再審ヲ求ムルコトヲ得

第一 規定ニ從ヒ判決裁判所ヲ構成セザリトキ

第二 法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セラレタル判事カ裁判ニ參與シタルトキ但忌避ノ申請又ハ上訴ヲ以テ除斥ノ理由ヲ主張シタルモ其效ナカリシトキハ此限ニ在ラス

第三 判事カ忌避セラレ且忌避ノ申請カ理由アリト認めラレタルニ拘ハラズ裁判ニ參與シタルトキ

第四 訴訟手續ニ於テ原告若クハ被告カ法律ノ規定ニ從ヒ代理セラレザリシトキ

第一號及ヒ第三號ノ場合ニ於テ上訴若クハ故障ヲ以テ取消ヲ主張シ得ヘカリシトキハ取消

第六 原告若クハ被告カ同一ノ事件ニ付テ

ノ判決ニシテ前ニ確定ト爲リタルモノヲ發見シ其判決カ不服ヲ申立テラレタル判決ト牴觸スルキ

第七 相手方若クハ第三者ノ所爲ニ依リ以前ニ提出スルコトヲ得サリシ證書ニシテ原告若クハ被告ノ利益ト爲ル可キ裁判ヲ爲スニ至ラザル可キモノヲ發見シタルトキ

第一號乃至第四號ノ場合ニ於テハ罰セラル可キ行爲ニ付テ判決カ確定ト爲リタルトキ又ハ證據欠缺外ナル理由ヲ以テ刑事訴訟手續ノ開始若クハ實行ヲ爲シ得サルトキニ限り再審ヲ求ムルコトヲ得

第四百七十條 原狀回復ノ訴ハ原告若クハ被告カ自己ノ過失ニ非スシテ前訴訟手續ニ於テ殊ニ故障又ハ控訴若クハ附帶控訴ニ依リ原狀回復ノ理由ヲ主張スルコト能ハサリシトキニ限り

ノ訴ヲ許サス

第四百六十九條 左ノ場合ニ於テハ原狀回復ノ

訴ニ因リ再審ヲ求ムルコトヲ得

第一 刑法ニ掲ケタル職務上ノ義務ニ違背シタル罪ヲ訴訟ニ關シタル判事カ裁判ニ參與シタルトキ

第二 原告若クハ被告ノ法律上代理人若クハ訴訟代理人若クハ相手方若クハ其法律上代理人若クハ訴訟代理人カ罰セラル可キ行爲ヲ訴訟ニ關シテ爲シタルトキ

第三 判決ノ憑據ト爲リタル證書カ偽造又ハ變造ナリシトキ

第四 証人若クハ鑑定人カ供述ニ因リ又ハ通事カ判決ノ憑據ト爲リタル通譯ニ因リ偽証ノ罪ヲ犯シタルトキ

第五 判決ノ憑據ト爲リタル刑事上ノ判決カ他ノ確定ト爲リタル刑事上ノ判決ヲ以テ廢棄若クハ破毀セラレタルトキ

之ヲ爲スヲ得

第四百七十一條 不服ヲ申立テラレタル判決前

ニ同一ノ裁判所又ハ下級ノ裁判所ニ於テ爲シタル裁判ニ關スル不服ノ理由ハ再審ヲ求ムル訴ト共ニ之ヲ主張スルコトヲ得但不服ヲ申立テラレタル判決カ其裁判ニ根據スルルニ限ル

第四百七十二條再審ヲ求ムル訴ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所ノ管轄ニ專屬ス
同一ノ事件ニ付キ一分ハ下級ノ裁判所又一分ハ上級ノ裁判所ニ於テ爲シタル數箇ノ判決ニ對スル訴ハ上級ノ裁判所ノ管轄ニ專屬ス
督促手續ニ依リテ區裁判所ノ發シタル執行命令ニ對シ再審ヲ求ムル訴ハ其命令ヲ發シタル區裁判所ノ管轄ニ專屬ス然レテ其請求カ區裁判所ノ管轄ニ屬セサルハ請求ニ付テノ訴訟ヲ管轄スル裁判所ニ專屬ス

第四百七十三條 訴ノ提起及ヒ其後ノ訴訟手續

第一 取消又ハ原狀回復ノ訴ヲ受クル判決

ノ表示

第二 取消又ハ原狀回復ノ訴ヲ起ス旨ノ陳述

此他訴狀ハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ニ從ヒテ之ヲ作り且不服ノ理由ノ表示、此理由及ヒ不變期間ノ遵守ヲ明白ナラシムル事實ニ付テノ證據方法ハ如何ナル程度ニ於テ不服ヲ申立テラレタル判決ヲ廢棄若クハ破毀ス可キヤノ申立又本案ニ付キ更ニ如何ナル裁判ヲ爲ス可キヤノ申立ヲモ掲ク可シ

第四百七十六條 判然許ス可カラサル訴又ハ判然法律上ノ方式ニ適セス若クハ其期間ノ經過後ニ起シタル訴ハ裁判長ノ命令ヲ以テ之ヲ却下ス可シ

此却下ノ命令ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スヲ得

第四百七十七條 原告ハ口頭辨論ノ期日ニ於テ

九十二

以下數條ニ於テ別段ノ規定ヲ設ケサル限りハ其訴ニ付キ辨論及ヒ裁判ヲ爲ス可キ裁判所ノ訴訟手續ニ關スル規定ヲ準用ス

第四百七十四條 訴ハ一个月ノ不變期間内ニ之ヲ起ス可シ

此期間ハ原告若クハ被告カ不服ノ理由ヲ知リタル日ヲ以テ始マル若シ原告若クハ被告カ判決ノ確定前ニ不服ノ理由ヲ知リタルトキハ判決ノ確定ヲ以テ始マル

判決確定ノ日ヨリ起算シテ五午ノ滿了後ハ訴ヲ爲スヲ得ス

前二項ノ規定ハ第四百六十八條第四號ノ場合ニ之ヲ適用セズ

此場合ニ於テ其訴ノ提起ノ期間ハ原告若クハ被告又ハ其法律上代理人カ送達ニ因リ判決アリタルコトヲ知リタル日ヲ以テ始マル

第四百七十五條 訴狀ニハ左ノ諸件ヲ具備スル要ヲサス

相手方ノ陳述ノ有無ニ拘ハラズ再審ヲ求ムル理由及ヒ法律上ノ期間ノ遵守ヲ明白ニスル事實ヲ疎明ス可シ

第四百七十八條 許ス可カラサル訴又ハ法律上ノ方式ニ適セス若クハ其期間ノ經過後ニ起シタル訴ハ職權ヲ以テ判決ニ因リ不適法トシテ之ヲ棄却ス可シ

第四百七十九條 本案ニ付テノ辨論及ヒ裁判ハ不服申立ノ理由ノ存スル部分ニ限り更ニ之ヲ爲ス可シ

裁判所ハ本案ニ付テノ辨論前ニ再審ヲ求ムル理由及ヒ許否ニ付キ辨論及ヒ裁判ヲ爲スヲ得此場合ニ於テハ本案ニ付テノ辨論ハ再審ヲ求ムル理由及ヒ許否ニ就テノ辨論ノ續行ト看做ス

第四百八十條 原告ノ不利益トナル判決ノ變更ハ相手方カ再審ヲ求ムル訴ヲ起シテ變更ヲ申立テタルトキニ非サレハ之ヲ爲スヲ得ス

九十三

第四百八十一條 訴カ上告裁判所ニ屬スルハ

上告裁判所ハ再審ヲ求ムル理由及ヒ其許否ニ

付テノ辯論ノ完結カ係争事實ノ確定及ヒ斟酌

ニ繫ルトキト雖モ其完結ヲ爲ス可シ

第四百八十二條 上訴ハ訴ニ付キ裁判ヲ爲シ

ル裁判所ノ判決ニ對シ一般ニ爲ス可シ得ヘキ

件ニ限リ之ヲ爲ス可シ得

第四百八十三條 第三者カ原告及ヒ被告ノ共謀

ニ因リ第三者ノ債權ヲ妨害スル目的ヲ以テ判

決ヲ爲サシメテ其主張シ其判決ニ對シ不服

ヲ申立ツルハ原告回復ノ訴ニ因レル再審ノ

規定ヲ準用ス

此場合ニ於テハ原告及ヒ被告ヲ共同被告ト爲

ス

第五編 証書訴訟及ヒ爲替訴訟

第四百八十四條 一定ノ金額ノ支拂其他ノ代替

物若クハ有價証券ノ一定ノ數量ノ給付ヲ目的

トスル請求ハ其請求ヲ起ス理由タル總テノ必

要ナル事實ヲ証書ニ依リ証スルヲ得ヘキ件

ハ証書訴訟ヲ以テ之ヲ主張スルヲ得

第四百八十五條 訴狀ニハ証書訴訟トシテ訴フ

ル旨ノ陳述ヲ掲ケ且証書ノ原本又ハ謄本ヲ添

フルヲ得

第四百八十六條 本案ノ辯論ハ妨訴ノ抗辨ニ基

キ之ヲ拒ムヲ得ス然レモ裁判所ハ申立ニ由

リ又ハ職權ヲ以テ此抗辨ニ付キ辯論ノ分離ヲ

命スルヲ得

第四百八十七條 反訴ハ之ヲ爲ス可シ得

証書ノ眞否及ヒ第四百八十四條ニ掲ケタル以

外ノ事實ニ關シテハ書証ノミヲ以テ適法ノ証

據方法ト爲ス可シ得

書証ノ申出ハ証書ノ提出ヲ以テ之ヲ爲ス

可シ得

第四百八十八條 原告ハ口頭辯論ノ終結ニ至ル

マテハ被告ノ承諾ヲ要セシテ通常ノ手續ニ

テ訴訟ヲ繫屬セシメテ証書訴訟ヲ止ムルヲ

得

第四百八十九條 訴ヲ以テ主張シタル請求カ理

由ナシト見エ又ハ被告ノ抗辨ニ因リ理由ナシ

ト見ユルトキハ原告ノ請求ヲ却下ス可シ

証書訴訟ヲ許ス可カラサル殊ニ適法ノ證據

方法ヲ以テ原告ノ義務タル證據ヲ申出テ又

ハ完全ニ之ヲ擧ケサル場合ニ於テハ被告カ口

頭辯論ノ期日ニ出頭セズ又ハ法律上ノ理由ナ

キ異議若クハ証書訴訟ニ於テ許ササル異議ノ

ミヲ以テ訴ニ對シ抗辨シタルキト雖モ此訴訟

ニ於テハ其訴ヲ許ササルモノトシテ却下ス

可シ

第四百九十條 証書訴訟ニ於テ適法ノ證據方法

ヲ以テ被告ノ義務タル證據ヲ申出テ又ハ完

全ニ之ヲ擧ケサルハ被告ノ異議ハ証書訴訟

ニ於テ許ササルモノトシテ却下ス可シ

第四百九十一條 主張シタル請求ヲ争ヒタル被

告ニハ敗訴ノ言渡ヲ受ケタル總テノ場合ニ於

テ其權利ノ行使ヲ留保ス可シ

判決ニ此留保ヲ掲ケサルハ第二百四十二條

ノ規定ニ依リ判決ノ補充ヲ申立ツルヲ得

留保ヲ掲ケタル判決ハ上訴及ヒ強制執行ニ付

テハ之ヲ終局判決ト看做ス

第四百九十二條 被告ニ權利ノ行使ヲ留保シ

ルハ訴訟ハ通常ノ訴訟手續ニ於テ繫屬ス

此手續ニ於テ証書訴訟ヲ以テ主張シタル請求

ノ理由ナカリシノ顯ハルルハ前判決ヲ廢

棄シ原告ノ請求ヲ却下シ且其生シメタル費

用ノ全部又ハ一分ノ辨濟ヲ原告ニ言渡シ又前

判決ニ基キ被告ヨリ支拂ヒ又ハ給付シタルモ

ノノ辨濟ヲ申立ニ因リ原告ニ言渡ス可シ

右手續ニ於テ原告若クハ被告カ出頭セサルハ

ハ關席判決ニ關スル規定ヲ準用ス

第四百九十三條 第四百二十六條及ヒ第四百二

十七條ノ規定ハ証書訴訟ニ之ヲ適用セズ

第四百九十四條 商法ニ規定シタル手形ニ因ル

請求ヲ証書訴訟ヲ以テ主張スルハ爲替訴訟トノ以下二條ニ掲クル特別ノ規定ヲ適用ス第四百九十五條 爲替ノ訴ハ支拂地ノ裁判所又ハ被告カ其普通裁判籍ヲ有スル地ノ裁判所ニ之ヲ起スヲ得

數人ノ爲替義務者カ共同ニテ訴ヲ受ク可キハ支拂地ノ裁判所又ハ被告ノ各人カ其普通裁判籍ヲ有スル地ノ裁判所各之ヲ管轄ス第四百九十六條 訴狀ニハ爲替訴訟トシ訴フル旨ヲ掲クルコト要ス

訴ノ許ス可キモノナルハ直チニ口頭辨論ノ期日ヲ定ム口頭辨論ノ期日ト訴狀送達トノ間ニハ少ナク且二十四時ノ時間ヲ存スルコト要ス

第六編 強制執行 第一章 總則 第四百九十七條 強制執行ハ確定ノ終局判決又ハ假執行ノ宣言ヲ付シタル終局判決ニ因リ之

証ヲ立テシメシテ強制執行ヲ一時停止ス可キコトヲ命シ又ハ保證ヲ立テシメテ強制執行ヲ爲ス可キコトヲ命シ及ヒ保證ヲ立テシメテ其爲シタル強制處分ヲ取消ス可キコトヲ命スルコトヲ得

保証ヲ立テシメシテ爲ス強制執行ノ停止ハ其執行ニ因リ債ノ一能ハサル損害ヲ生ス可キコトヲ疏明スル限リ之ヲ許ス右裁判ハ口頭辨論ヲ經スノ之ヲ爲スコトヲ得其裁判ニ對シハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第五百一條 左ノ判決ニ付テハ職權ヲ以テ假執行ノ宣言ヲ爲スヘシ 第一 認諾ニ基キ敗訴ヲ言渡ス判決 第二 証書訴訟又ハ爲替訴訟ニ於テ言渡ス判決

第三 同一審ニ於テ同一ノ原告若クハ被告ニ對シ本案ニ付キ言渡シタル第二又ハ其後ノ關府判決 第四 假差押又ハ假處分ヲ取消ス判決

第五百二條 左ノ場合ニ於テハ申立ニ因リ假執行ノ宣言ヲ爲ス可シ 第一 總テノ住家其他ノ建物又ハ其或ル部分ノ受取、明渡、使用、占據若クハ修繕ニ關シ又ハ賃借人ノ家具若クハ所持品ヲ賃借人ノ差押ヘタルコトニ關シ賃借人ト賃借人トノ間ニ起リタル訴訟

第二 占有ノミニ係ル訴訟 第三 雇主ト雇人トノ間ニ雇期限一ノ年以テ上ノ契約ニ關リ起リタル訴訟 第四 左ニ掲ケタル事項ニ付キ旅人ト旅店若クハ飲食店ノ主人トノ間ニ又ハ旅人ト水陸運送人トノ間ニ起リタル訴訟

イ 賄料又ハ宿料又ハ旅人ノ運送料又、

チ爲ス 第四百九十八條 判決ハ適法ナル故障ノ申立ハ適法ナル上訴ノ提起ニ付キ定メタル期間ノ満了前ニハ確定セサルモノトス 判決ノ確定ハ故障若クハ上訴ヲ其期間内ニ申立若クハ提起スルニ因リ之ヲ遮斷ス

第四百九十九條 原告若クハ被告カ判決ノ確定ニ付キ証明書ヲ求ムルハ第一審裁判所ノ書記ハ記録ニ基キ之ヲ付與ス

訴訟カ猶ホ上級審ニ於テ繫屬中ナルハ上級裁判所ノ書記ハ判決ノ確定ト爲リタル部分ノミニ付キ証明書ヲ付與ス 判決ニ對シ上訴ノ提起ナキ場合ニ非サレハ証明書ヲ付與スルコトヲ得サルハ限リ上訴ヲ管轄スル裁判所ノ書記カ不變期間内ニ上訴ノ提起ナキコトヲ認メタル証明書ヲ以テ足ル

第五百條 原狀回復又ハ再審ヲ求ムル申立アルハ裁判所ハ申立ニ因リ保證ヲ立テシメ又ハ

第五 養料ヲ支拂フ義務ヲ言渡ス判決但訴ノ提起後ノ時間及ヒ其提起前最後ノ三ヶ月間ノ爲ニ支拂フ可キモノナルトキニ限ル

第五百二條 左ノ場合ニ於テハ申立ニ因リ假執行ノ宣言ヲ爲ス可シ 第一 總テノ住家其他ノ建物又ハ其或ル部分ノ受取、明渡、使用、占據若クハ修繕ニ關シ又ハ賃借人ノ家具若クハ所持品ヲ賃借人ノ差押ヘタルコトニ關シ賃借人ト賃借人トノ間ニ起リタル訴訟

第二 占有ノミニ係ル訴訟 第三 雇主ト雇人トノ間ニ雇期限一ノ年以テ上ノ契約ニ關リ起リタル訴訟 第四 左ニ掲ケタル事項ニ付キ旅人ト旅店若クハ飲食店ノ主人トノ間ニ又ハ旅人ト水陸運送人トノ間ニ起リタル訴訟

イ 賄料又ハ宿料又ハ旅人ノ運送料又、

イ 賄料又ハ宿料又ハ旅人ノ運送料又、

イ 賄料又ハ宿料又ハ旅人ノ運送料又、

イ 賄料又ハ宿料又ハ旅人ノ運送料又、

之。關於手續費之運送費

旅店若シハ飲食店ノ主人又ハ運送人
旅人ヨリ保護ノ爲メ預ケタル手荷物
金錢又ハ有價物

第五 此他財産權上ノ請求ニ關シ金額又ハ
價額ニ於テ貳拾圓ヲ超過セサル訴訟但其
物ノ價額ニ付テハ第三條乃至第六條ノ規
定ヲ適用ス

第五百三條 前二條ニ掲ケタル外左ノ場合ニ於
テハ財産權上ノ請求ニ關スル判決ニ限リ債權
者ノ申立ニ因リ假執行ノ宣言ヲ爲ス可シ

第一 債權者カ執行ノ前ニ保證ヲ立テント
申出ツルトキ

第二 債權者カ判決ノ確定ト爲ルマテ執行
ヲ中止セハ債權者難キ損害又ハ計リ難キ損
害ヲ受ク可キコトヲ疎明スルトキ

第五百四條 債務者カ判決ノ確定ト爲ル前ニ判
決ヲ執行セハ回復スルヲ得サル損害ヲ受ク

第五百八條 職權ヲ以テ判決ノ假執行ヲ宣言ス
可キ場合ニ於テ假執行ニ付テノ裁判ヲ爲ササ
ルトキ又ハ判決ノ假執行ヲ宣言ス可キ債權者
ノ申立ヲ看過シタルキハ第二百四十二條及ヒ
第二百四十三條ノ規定ニ從ヒ判決ノ補充ヲ爲
スコトヲ得

第五百九條 第一審又ハ第二審ノ判決ニシテ假
執行ノ宣言ナカリシモノハ上訴ヲ以テ不服ヲ
申立テタル部分ニ限リ口頭辯論ノ進行中ニ爲
シタル原告若シハ被告ノ申立ニ因リ上級審ニ
於テ其判決ニ假執行ノ宣言ヲ付ス可シ

第五百十條 本案ノ裁判又ハ假執行ノ宣言ヲ廢
棄若シハ破毀又ハ變更スル判決ノ言渡アルト
キハ假執行ハ其廢棄若シハ破毀又ハ變更ヲ爲
ス限度ニ於テ效力ヲ失フ

假執行ノ宣言アリタル本案ノ判決ヲ廢棄若ク
ハ破毀又ハ變更スルモハ判決ニ基キ被告ノ支
拂又ハ給付シタルモノノ辨濟ヲ被告ノ申立ニ

可キコトヲ疎明マセシメハ其申立ニ因リ左ノ宣
言ヲ爲ス可シ

第一 第五百一條ノ場合ニ於テハ判決ヲ假
ニ執行ス可カラサル

第二 第五百二條及ヒ第五百三條ノ場合ニ
於テハ債權者ノ假執行ノ申立ヲ却下スル

第五百五條 總テノ場合ニ於テ裁判所ハ債務者
ノ申立ニ因リ債權者豫メ保證ヲ立ツルトキハ
假執行ヲ爲シ得ヘキ旨ヲ宣言スルヲ得
債權者カ執行ノ前ニ保證ヲ立ツルトキ申出テ
サルトキハ債務者ノ申立ニ因リ債務者ニ保證
ヲ立テシメ又ハ供託ヲ爲サシメテ執行ヲ免カ
ルルコトヲ許ス可シ

第五百六條 假執行ニ關スル申立ハ判決ニ接著
スル口頭辯論ノ終結前ニ之ヲ爲ス可シ

第五百七條 假執行ニ付テノ裁判ハ判決主文ニ
之ヲ掲ク可シ

因リ判決ヲ以テ原告ノ言渡ス可シ

第五百十一條 第二審ニ於テハ申立ニ因リ先ッ
假執行ニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ爲ス可シ

口頭辯論ノ延期ニ於テノ第四百十條ノ規定ハ
此場合ニ於テハ之ヲ適用セス
第二審ニ於テ假執行ニ付キ爲シタル裁判ニ對
シテハ不服ヲ申出ツルコトヲ得ス

第五百十二條 假執行ノ宣言ヲ付シタル判決ニ
對シ故障ヲ申立又ハ上訴ヲ起シタルトキハ第
五百條ノ規定ヲ適用ス

第五百十三條 本編ノ規定ニ從ヒ原告若シハ被
告ニ保證ヲ立ツル義務ヲ負ハシメ若シハ保證
ヲ立又ハ供託ヲ爲スヲ付シタル場合ニ於テ
ハ原告若シハ被告ハ其普通裁判籍ヲ有スル地
ノ區裁判所又ハ執行裁判所ニ保證ヲ立又ハ供
託ヲ爲スヲ得

保證申立又ハ供託ヲ爲シタルトニ付テハ求
因リ証明書ヲ付與ス可シ

第五百十四條 外國裁判所ノ判決ニ因レル強制

適執行ハ本邦ノ裁判所ニ於テ執行判決ヲ以テ其法ナルコトヲ言渡シタルトニ限り之ヲ爲スコトヲ得

執行判決ヲ求ムル訴ニ付テハ債務者ノ普通裁判籍ヲ有スル地ノ區裁判所又ハ地方裁判所之ヲ管轄シ又普通裁判籍ナキトキハ第十七條ノ規定ニ從ヒテ債務者ニ對スル訴ヲ管轄スル裁判所之ヲ管轄ス

第五百十五條 執行判決ハ裁判ノ當否ヲ調査セ

スレテ之ヲ爲ス可シ

執行判決ヲ求ムル訴ハ左ノ場合ニ於テハ之ヲ却下ス可シ

第一 外國裁判所ノ判決ノ確定ト爲リタル

コトヲ證明セサルトキ

第二 本邦ノ法律ニ依リ強テ爲サシムルコトヲ得サル行爲ヲ執行セシム可キトキ

第三 本邦ノ法律ニ從ヘハ外國裁判所カ管

制執行ノ爲メ原告某若クハ被告某ニ之ヲ付與ス

執行文ニハ裁判所書記署名捺印シ且裁判所ノ印ヲ押ス可シ

第五百十八條 執行力アル正本ハ判決ノ確定シタルトキ又ハ假執行ノ宣言アリタルトキ限り之ヲ付與ス

判決ノ執行力其旨趣ニ從ヒ保証ヲ立ツルコトニ際ル場合ノ外他ノ條件ニ際ル場合ニ於テハ債權者カ證明書ヲ以テ其條件ヲ履行シタルコトヲ証スルトキニ限り執行力アル正本ヲ付與スルコトヲ得

第五百十九條 執行力アル正本ハ判決ニ表示シタル債權者ノ承繼人ノ爲ニ之ヲ付與シ又ハ判決ニ表示シタル債務者ノ一般ノ承繼人ニ對シ之ヲ付與スルコトヲ得但其承繼カ裁判所ニ於テ明白ナルトキ又ハ證明書ヲ以テ之ヲ証スルコトニ限ル

管轄ヲ有セサルトキ

第四 敗訴ノ債務者本邦人ニシテ應訴セザリシトキ但訴訟ヲ開始スル呼出又ハ命令ヲ受助ニ依リ本邦ニ於テ本人ニ送達セザリシトキニ限ル

第五 國際條約ニ於テ相互ヲ保セサルトキ

第五百十六條 強制執行ハ執行文ヲ付シタル判決ノ正本ニ基キ之ヲ爲ス

執行力アル正本ハ第一審裁判所ノ書記又訴訟カ上級裁判所ニ際屬スルトキハ其裁判所ノ書記之ヲ付與ス

執行力アル正本ヲ求ムル申立ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第五百十七條 執行文ハ判決ノ正本ノ末尾ニ之ヲ附記ス
其文式左ノ如シ
前記ノ正本ハ被告某若クハ原告某ニ對シ強

此承繼カ裁判所ニ於テ明白ナルトキハ之ヲ執行文ニ記載ス可シ

第五百二十條 第五百十八條第二項及ヒ第五百十九條ノ場合ニ於テハ執行力アル正本ハ裁判長ノ命令アルトキ限り之ヲ付與スルコトヲ得
裁判長ハ其命令前ニ書面又ハ口頭ヲ以テ債務者ヲ審訊スルコトヲ得
右命令ハ執行文ニ之ヲ記載ス可シ

第五百二十一條 第五百十八條第二項及ヒ第五百十九條ニ依リ必要ナル證明ヲ爲ス能ハサルトキハ債權者ハ判決ニ基キ執行文ノ付與ニ付キ第一審ノ受訴裁判所ニ訴ヲ起スコトヲ得

第五百二十二條 執行文ノ付與ニ對シ債務者カ異議ヲ申立テタルトキハ其執行文ヲ付與シタル裁判所書記ノ屬スル裁判所之ヲ裁判ス
裁判長ハ其裁判前ニ假處分ヲ爲スコトヲ得殊ニ保証ヲ立テシメ若クハ之ヲ立テシメヌメテ強制執行ヲ一時停止シ又ハ保証ヲ立テシメテ強

調執行ヲ續行ス可キヲ命スルコトヲ得

第五百二十三條 債權者カ執行力アル正本ノ敷通ヲ求メ又ハ前コ付與シタル正本ヲ返還セス
テ更ニ同一判決ノ正本ヲ求ムルハ裁判長ノ命令アルハ限リ之ヲ付與スルコトヲ得
裁判長ハ其命令ノ前ニ書面又ハ口頭ヲ以テ債務者ヲ審訊スルコトヲ得

相手方ヲ審訊セスノ執行力アル正本ノ敷通ヲ付與シ又ハ更ニ正本ヲ付與シタルハ其旨ヲ相手方ニ通知ス可シ

正本ノ敷通ヲ付與シ又ハ更ニ正本ヲ付與シタルハ其旨ヲ明記ス可シ

第五百二十四條 執行力アル正本ノ付與前ニ判決ノ原本ニ原告ノ爲メ若クハ被告ノ爲メ之ヲ付與スル旨且之ヲ付與スル日時ヲ記載ス可シ
第五百二十五條 執行力アル正本ノ效力ハ之ヲ付與シタル裁判所ノ管轄内ニ止マラス總テ本郡ノ裁判區域内ニ及フモノトス

百二

第五百二十六條 債權者ハ一箇ノ地又ハ一箇ノ方法ニテ強制執行ヲ爲スモ完全ナル辨濟ヲ得ル能ハサルハ敷通ノ執行力アル正本ニ基キ數箇ノ地又ハ數箇ノ方法ニテ同時ニ強制執行ヲ爲ス權利ヲ有ス

第五百二十七條 債權者ハ執行ヲ爲ス可キ地ヲ管轄スル區裁判所ノ所在地ニ住居ヲモ事務所ヲモ有セサルハ其所在地ニ假住所ヲ選定シ其旨ヲ裁判所ニ届出ツ可シ

第五百二十八條 強制執行ハ之ヲ求ムル者及ヒ之ヲ受クル者ノ氏名ヲ判決又ハ之ニ附記スル執行文ニ表示シ且判決ヲ既ニ送達シ又ハ同時ニ送達シタルトキニ限リ之ヲ始ムルコトヲ得
判決ノ執行カ其旨趣ニ從ヒ債權者ノ證明スルキ事實ノ到來ニ繫ルトキ又ハ判決ノ執行カ判決ニ表示シタル債權者ノ承繼人ノ爲ニ爲シ又ハ判決ニ表示シタル債務者ノ承繼人ニ對シ爲ス可キトキハ執行ス可キ判決ノ外尙ホ之ニ附

記スル執行文ヲ強制執行ヲ始ムル前ニ送達スルコトヲ要ス

若シ證明書ニ依リ執行文ヲ付與シタルトキハ亦其證書ノ謄本ヲ強制執行ヲ始ムル前ニ送達シ又ハ同時ニ送達スルコトヲ要ス

第五百二十九條 請求ノ主張カ或ル日時ノ到來ニ繫ルトキハ其日時ノ滿了後ニ限リ強制執行ヲ始ムルコトヲ得

若シ執行カ債權者ヨリ保證ヲ立ツルコトニ繫ルトキハ債權者カ保證ヲ立テタルコトニ付テ公正ノ證明書ヲ提出シ且其謄本ヲ既ニ送達シ又ハ同時ニ送達シタルトキニ限リ其執行ヲ始ムルコトヲ得

第五百三十條 豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ニ對シテ爲ス強制執行ハ其上班司令官應ニ通知ヲ爲シタル後ニ限リ之ヲ始ムルコトヲ得

債權者ニ對シテ爲ス強制執行ハ其上班司令官應ニ通知ヲ爲シタル後ニ限リ之ヲ始ムルコトヲ得

與ス可シ

第五百三十一條 強制執行ハ此法律ニ於テ別段ノ規定ナキトキニ限リ執達吏之ヲ實施ス
債權者ハ強制執行ヲ委任スル爲メ區裁判所書記ノ補助ヲ求ムルコトヲ得

裁判所書記ノ委任シタル執達吏ハ債權者ノ委任シタルモノト看做ス

第五百三十二條 執達吏ハ債權者ノ委任ニ因リテ爲ス行爲及ヒ職務上ノ義務ノ違背ヨリシテ債權者其他ノ關係人ニ對シ損害ヲ生セシメタルトキハ第一ニ其責ニ任ス

第五百三十三條 債權者執行力アル正本ヲ交付シテ強制執行ヲ委任シタルトキハ執達吏ハ特別ノ委任ヲ受ケサルトキト雖モ支拂其他ノ給付ヲ受取リ其受取リタルモノニ付キ有效ニ受取ノ證書ヲ作り之ヲ交付シ且債務者ニ於テ其義務ヲ完全ニ盡シタルトキハ執行力アル正本ヲ債權者ニ交付スルコトヲ得

百三

債

第五百三十四條 執達吏ハ執行力アル正本ヲ所持スルヲ以テ債務者及ヒ第三者ニ對シ強制執行及ヒ前條ニ掲ケタル行為ヲ實施スル權利ヲ有ス債權者ハ此等ノ者ニ對シ委任ノ欠缺又ハ制限ヲ主張スルコトヲ得

執達吏ハ其正本ヲ携帶シ關係人ノ求アルトキハ其資格ヲ証スル爲ニ之ヲ示ス可シ
第五百三十五條 執達吏ハ債務者カ其義務ヲ完全ニ盡シタルトキハ執行力アル正本及ヒ受取證ヲ之ニ交付シ又其義務ノ一分ヲ盡シタルトキハ執行力アル正本ニ其旨ヲ附記シ且受取證ヲ債務者ニ交付ス可シ
債務者カ後ニ債權者ニ對シ受取ノ證ヲ求ムル權利ハ前項ノ規定ニ因リテ妨ケラレルコト無シ

第五百三十六條 執達吏ハ執行ノ爲メ必要ナル場合ニ於テハ債務者ノ住居、倉庫及ヒ筐匣ヲ搜索シ又ハ閉鎖シタル戸扉及ヒ筐匣ヲ開カシ

第五百四十條 執達吏ハ各執行行為ニ付キ調書ヲ作ル可シ
此調書ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス
第一 調書ヲ作リタル場所年月日
第二 執行行為ノ目的物及ヒ其重要ナル事情ノ略記
第三 執行ニ與カリタル各人ノ表示
第四 右各人ノ署名捺印
第五 調書ヲ其各人ニ讀聞セ又ハ閱覽セシメ其承諾ノ後署名捺印ヲ爲シタルコトノ開示
第六 執達吏ノ署名捺印
第四號及ヒ第五號ノ要件ヲ具備スルコト能ハサルハ其理由ヲ記載ス可シ
第五百四十一條 執行行為ニ屬スル催告其他ノ通知ハ執達吏口頭ヲ以テ之ヲ爲シ且調書ニ之ヲ記載ス可シ
若シ口頭ヲ以テ催告又ハ通知ヲ能ハサルトキハ

ムル權利ヲ有ス

抵抗ヲ受クル場合ニ於テハ執達吏ハ威力ヲ用井且警察上ノ援助ヲ求ムルコトヲ得若シ兵力ヲ要スルハ之ヲ執行裁判所ニ申立ツ可シ
第五百三十七條 執達吏ハ執行行為ヲ爲スニ際シ抵抗ヲ受クルトキ又ハ債務者ノ住居ニ於テ執行行為ヲ爲スニ際シ債務者又ハ成長シタル其家族若クハ雇人ニ出會ハサルトキハ成丁者二人又ハ市町村若クハ警察ノ吏員一人ヲ証人トシテ立會ハシム可シ

第五百三十八條 強制執行ニ付キ利害ノ關係ヲ有スル各人ニハ其求ニ因リ執達吏ノ記録ノ閱覽ヲ許シ及ヒ記録中ニ存スル書類ノ原本ヲ付與スルコトヲ要ス
第五百三十九條 夜間及ヒ日曜日並ニ一般ノ祝祭日ニハ執行裁判所ノ許可アルトキニ限り執行行為ヲ爲スコトヲ得
右許可ノ命令ハ強制執行ノ際之ヲ示ス可シ

第五百二十九條 第四百四條及ヒ第四百五條乃至第四百九條ノ規定ヲ準用シテ其調書ノ原本ヲ送達シ又別ニ送達證ヲ作ラサルトキハ調書ニ其送達書ヲ爲シタルコトヲ記載ス可シ
若シ強制執行ノ地ニ於テモ執行裁判所ノ管轄内ニ於テモ送達ヲ爲ス能ハサルトキハ催告其ハ通知ヲ受ク可キ者ニ郵便ヲ以テ調書ノ原本ヲ送達シ且之ヲ郵便ニ付シタルコトヲ調書ニ記載ス可シ
第五百四十二條 執行行為ノ際債務者ニ爲スルキ送達及ヒ通知ハ債務者ノ所在明カナラサルトキ又ハ外國ニ在ルトキハ之ヲ必要トセス

第五百四十三條 此法律ニ於テ裁判所ニ任カセタル執行行為ノ處分又ハ其行為ノ其力ハ執行裁判所トシテ區裁判所ノ管轄ニ屬ス
法律ニ於テ別段ニ裁判所ヲ指定セサル各個ノ場合ニ於テハ執行手續ヲ爲ス可キ地又ハ之ヲ爲シタル地ヲ管轄スル區裁判所ヲ以テ執行裁判

判所ト看做ス

執行裁判所ノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

第五百四十四條 強制執行ノ方法又ハ執行ニ際シ執行吏ノ遵守ス可キ手續ニ關スル申立及ヒ異議ニ付テハ執行裁判所之ヲ裁判ス又執行裁判所ハ第五百二十二條第二項ニ定メタル命ヲ發スル權ヲ有ス

執行吏カ執行委任ヲ受クルヲ拒ミ若クハ委任ニ從ヒ執行行為ヲ實施スルコトヲ拒ミタルトキ又ハ執行吏ノ計算セシ手數料ニ付キ異議アルトキハ執行裁判所ハ之ヲ裁判スル權ヲ有ス
第五百四十五條 判決ニ因リテ確定シタル請求ニ關スル債務者ノ異議ハ訴ヲ以テ第一審ノ受訴裁判所ニ之ヲ主張スベシ

右ノ異議ハ此法律ノ規定ニ從ヒ遅クトモ異議ヲ主張スルコトヲ要スル口頭辯論ノ終結後ニ其原因ヲ生シ且故ヲ以テ之ヲ主張スルコトヲ得

ルキニ限り之ヲ許ス
債務者カ數個ノ異議ヲ有スルトキハ同時ニ之ヲ主張スルコトヲ要ス

第五百四十六條 前條ノ規定ハ第五百十八條第二項及ヒ第五百十九條ノ場合ニ於テ債務者カ執行文付與ノ際証明シタリト認メラレタル事實ヲ到來ニシテ此ニ因リ判決ノ執行ヲ爲シ得ヘキモノヲ爭ヒ又ハ認メラレタル承繼ヲ爭フトキハ亦之ヲ準用ス但此場合ニ於テ第五百二十二條ノ規定ニ從ヒ執行文ノ付與ニ對シ異議ヲ申立ツル債務者ノ權ハ此カ爲ニ妨ケラレコト無シ

第五百四十七條 強制執行ノ續行ハ前二條ノ場合ニ於ケル異議ノ訴ノ提起ニ因リテ妨ケラレコト無シ

然レトモ異議ノ爲メ主張シタル事情カ法律上理由アリト見ユ且事實上ノ點ニ付キ説明アリタルトキハ受訴裁判所ハ申立ニ因リ判決ヲ爲

スニ至ルマテ保證ヲ立テシメ若クハ之ヲ立テシメシテ強制執行ヲ停止ス可キコトヲ命シ

又ハ保證ヲ立テシメテ強制執行ヲ續行ス可キコトヲ命シ又ハ其爲シタル執行處分ヲ保證ヲ立テシメテ取消ス可キヲ命スルコトヲ得

右裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲シ又急迫ナル場合ニ於テハ裁判長之ヲ爲スコトヲ得

急迫ナル場合ニ於テハ執行裁判所ニ亦此權利ヲ行使スルコトヲ得此場合ニ於テハ執行裁判所ハ受訴裁判所ノ裁判ヲ提出セシムル爲ニ相當ノ期間ヲ定ム可シ此期間ヲ徒過シタルトキハ債權者ノ申立ニ因リ強制裁判ヲ續行ス

第五百四十八條 受訴裁判所ハ異議ノ訴ニ付キ裁判スル判決ニ於テ前條ニ掲ケタル命ヲ發シ又ハ既ニ發シタル命ヲ取消シ之ヲ變更シ若クハ之ヲ認可スルコトヲ得

裁決中前項ニ掲ケル事項ニ限リ職權ヲ以テ假執行ノ宣言ヲ爲スコトヲ得

右裁判ニ對スル不服ニ付テハ第五百十一條ノ規定ヲ準用ス

第五百四十九條 第二者カ強制執行ノ目的物ニ付キ所有權ヲ主張シ其他目的物ノ讓渡若クハ引渡ヲ妨ケル權利ヲ主張スルキハ訴ヲ以テ債權者ニ對シ其強制執行ニ對スル異議ヲ主張シ

又債務者ニ於テ其異議ヲ正當ナリトセサルトキハ債權者及ヒ債務者ニ對シテ之ヲ主張ス可シ

右訴ハ債權者及ヒ債務者ニ對シテ起ストキハ之ヲ共同被告ト爲ス

右訴ハ執行裁判所ノ管轄ニ屬ス然レトモ訴訟物カ區裁判所ノ管轄ニ屬セサルキハ執行裁判所ノ所在地ヲ管轄スル地方裁判所之ヲ管轄ス

強制執行ノ停止及ヒ既ニ爲シタル執行處分ノ取消ニ付テハ第五百四十七條第五百四十八條ノ規定ヲ準用ス但執行處分ノ取消ハ保證ヲ立テシメスルコトヲ得

第五百五十條

強制執行ハ左ノ書類ヲ提出シタル場合ニ於テ之ヲ停止シ又ハ之ヲ制限スヘシ

第一 執行ス可キ判決若シハ其假執行ヲ取消ス旨又ハ強制執行ヲ許サストシテ宣言

シ若シハ其停止ヲ命シタル旨ヲ記載シタル執行力アル裁判ノ正本

第二 執行又ハ執行處分ノ一時ノ停止ヲ命シタル旨ヲ記載シタル裁判ノ正本

第三 執行ヲ免カルル爲メ保證ヲ立テ又ハ供託ヲ爲シタル旨ヲ記載シタル公正ノ證明書

第四

執行ス可キ判決ノ後ニ債權者カ辨濟ヲ受ケ又ハ義務履行ノ猶豫ヲ承諾シタル旨ヲ記載シタル證書

第五百五十一條 前條第一號及ヒ第三號ノ場合ニ於テハ既ニ爲シタル施行處分ヲモ取消ス可シ

第五百五十二條 強制執行ノ開始後ニ債務者カ其裁判ヲ以テ從前ノ執行行爲ノ取消ヲ命セザルトキニ限り既ニ爲シタル執行處分ヲ一時保持セシム可シ

第五百五十二條 強制執行ノ開始後ニ債務者カ死亡スルトキハ強制執行ハ遺産ニ對シ之ヲ續行ス可シ

債務者ノ知ルコトヲ要スル執行行爲ヲ實施スル場合ニ於テ相續人アラサルキ又ハ相續人ノ所在明カナラサルトキ執行裁判所ハ債權者ノ申立ニ因リ遺産又ハ相續人ノ爲メ特別代理人ヲ任ス可シ

第五百五十三條 強制執行ノ開始後ニ戸主タリシ債務者カ其地位ヲ辭シ又ハ之ヲ失ヒタルトキハ此變更ノ生セシ當時債務者ノ所持シタル財産ニ付キ前條ノ規定ヲ準用ス

第五百五十四條 強制執行ノ費用ハ必要ナリシ部分ニ限り債務者ノ負擔ニ歸ス此費用ハ強制執行ヲ受クル請求ト同時ニ之ヲ取立ツ可シ

強制執行ノ基本タル判決ヲ廢棄若シハ破毀シタルトキハ其費用ハ之ヲ債務者ニ辨濟ス可シ

第五百五十五條 執行ノ爲メ官廳ノ援助ヲ必要トスルトハ裁判所ハ其援助ヲ官廳ニ求ム可シ

第五百五十六條 豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人軍屬ニ對シ兵營及ヒ軍事、用廳舎又ハ軍艦ニ於テ強制執行ヲ爲ス可キトキハ債權者ノ申立ニ因リ執行裁判所ハ營轄ノ軍事裁判所又ハ所屬ノ長官又ハ隊長ニ囑託シタル之ヲ爲ス

囑託ニ因リ差押ヘタル物ハ債權者ノ委任シタル執達吏ニ之ヲ交付スヘシ

第五百五十七條 外國ニ於テ強制執行ヲ爲スヘキ場合ニ於テ其外國官廳カ本邦裁判所ニ法律上ノ其助ヲ爲スヘキトキハ債權者ノ申立ニ因リ第一審ノ受訴裁判所ハ之ヲ外國官廳ニ囑託スヘシ

外國駐在ノ本邦領事ニ依リ強制執行ヲ爲シ得ヘキトキハ第一審ノ受訴裁判所ハ之ヲ其領事

ハ其裁判ヲ以テ從前ノ執行行爲ノ取消ヲ命セザルトキニ限り既ニ爲シタル執行處分ヲ一時保持セシム可シ

ニ囑託ス可シ

第五百五十八條 強制執行ノ手續ニ於テ口頭辯論ヲ經スシテ爲スコトヲ得ル裁判ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第五百五十九條 強制執行ハ左ノ諸件ニ付テモ亦之ヲ爲スコトヲ得

第一 抗告ヲ以テノミ不服ヲ申立ツルコトヲ得ル裁判

第二 執行命令

第三 訴ノ提起後受訴裁判所ニ於テ又ハ受命判事若シハ受託判事ノ面前ニ於テ爲シタル和解

第四 第三百八十一條ノ規定ニ從ヒ區裁判所ニ於テ爲シタル和解

第五 公證人其權限内ニ於テ成規ノ方式ニ依リ作リタル證書但一定ノ金額ノ支拂又ハ他ノ代替物若シハ有價證券ノ一定ノ數量ノ給付ヲ以テ目的トスル請求ニ付キ作

百九

リタル證書ニシテ直ニ強制執行ヲ受ク
可キ旨ヲ記載シタルモノニ限ル

第五百六十條 前條ニ掲ケタル債務名義ニ因レ
ル強制執行ニハ第五百十六條乃至第五百五十
八條ノ規定ヲ準用ス但第五百六十一條、第五
百六十二條ノ規定ニ依リ差異ノ生スルトキハ
此限ニ在ラス

第五百六十一條 執行命令ニハ其命令ヲ發シタ
ル後債權者又ハ債務者ニ於テ承繼アル場合ニ
限リ執行文ヲ附記スルコトヲ要ス

請求ニ關スル異議ハ執行命令ノ送達後ニ生
タル原因ニ基クトキニ限リ之ヲ許ス
執行文付與ニ付テノ訴又ハ請求ニ關シ異議ヲ
主張スル訴又ハ執行文付與ノ際到來シタリト
認メタル承繼ヲ爭フ訴ハ執行命令ヲ發シタル
區裁判所之ヲ管轄ス但其請求カ區裁判所ノ管
轄ニ屬セサルモノナルトキハ管轄地方裁判所
ニ其訴ヲ起ス可シ

第五百六十二條 公證人ノ作リタル證書ノ執行
力アル正本ハ其證書ヲ保存スル公證人之ヲ付
與ス

執行文付與ニ關スル異議ニ付テノ裁判及ヒ更
ニ執行文付與ニ付テノ裁判ハ公證人職務上ノ
住所ヲ有スル地ヲ管轄スル區裁判所ニ於テ之
ヲ爲ス

請求ニ關スル異議ノ主張ニ付テハ第五百四十
五條第二項ニ規定シタル制限ニ從ハス
執行文付與ニ付テノ訴又ハ請求ニ關シ異議ヲ
主張スル訴又ハ執行文付與ノ際證明シタリト
認メタル事實ノ到來ニ係リ此ニ因リテ證書ノ
執行ヲ爲シ得ヘキモノヲ爭フ訴ハ債務者ヲ本
邦ニ於テ普通裁判籍ヲ有スル地ノ裁判所又ハ
此裁判所ナキトキハ第十七條ノ規定ニ從ヒテ
債務者ニ對シ訴ヲ起シ得ヘキ裁判所之ヲ管轄
ス

第五百六十三條 本編ニ定メタル裁判籍ハ公證
人

ナリトス

第二章 金錢ノ債權ニ付テノ強制執行

第一節 動産ニ對スル強制執行

第一款 通則

第五百六十四條 動産ニ對スル強制執行ハ差押
ヲ以テ之ヲ爲ス

差押ハ執行力アル正本ニ掲ケタル請求ヲ債權
者ニ辯濟スル爲メ及ヒ強制執行ノ費用ヲ償フ
爲メ必要ナルモノノ外ニ及ホスコトヲ得ス
差押フ可キ物ヲ換價スルモ強制執行ノ費用ヲ
償フテ剩餘ヲ得ル見込ナキトキハ強制執行ヲ
爲スコトヲ得ス

第五百六十五條 第三者カ差押ヲ受ク可キ物ニ
付キ物上ノ擔保權ヲ有スルモ差押ヲ妨ケルコ
トヲ得ス然レモ第五百四十九條ノ規定ニ從ヒ
訴ヲ以テ賣得金ニ付キ優先ノ辨濟ヲ請求スル
權利ハ此カ爲ニ妨ケラルコト無シ
此場合ニ於テ請求ノ爲メ主張シタル事情カ法

百十

律上理由アリト見ユ且事實上ノ點ニ付キ疏明
アリタルトキハ裁判所ハ賣得金ノ供託ヲ命ス
可シ但此事項ニ付テハ第五百四十七條及ヒ第
五百四十八條ノ規定ヲ準用ス

第二款 有體動産ニ對スル強制執行

第五百六十六條 債務者ノ占有中ニ在ル有體動
産ノ差押ハ執達吏其物ヲ占有シテ之ヲ爲ス
其物ハ債權者ノ承諾アルトキ又ハ其運搬ヲ爲
スニ付キ重大ナル困難アルトキハ之ヲ債務者
ノ保管ニ任ス可シ此場合ニ於テハ封印其他ノ
方法ヲ以テ差押ヲ明白ニスルトキニ限リ其效
力ヲ生ス
執達吏ハ債務者ニ其差押ヲ爲シタルコトヲ通
知ス可シ

第五百六十七條 前條ノ規定ハ債權者又ハ物ノ
提出ヲ拒マサル第三者ノ占有中ニ在ル物ノ差
押ニ付テモ亦之ヲ準用ス

第五百六十八條 果實ハ未タ土地ヨリ離レサル

前ニ雖モ之ヲ差押フルコトヲ得然レトモ其差押ハ通常ノ成熟時期ノ前一个月内ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

蠶ハ其多分カ繭ヲ成造スル爲メ揚リ蠶ト爲リ然ル後ニ非サレハ之ヲ差押フルコトヲ得ス

第五百六十九條 差押ノ效力ハ差押物ヨリ生スル天然ノ産出物ニモ當然及フモノトス

第五百七十條 左ニ掲クル物ハ之ヲ差押フルコトヲ得ス

第一 衣服、寢具、家具及ヒ厨具但此物カ債務者及ヒ其家族ノ爲メ缺ク可カラサルモノトキニ限ル

第二 債務者及ヒ其家族ニ必要ナル一个月ノ間ノ食料及ヒ薪炭

第三 技術者、職工、勞役者及ヒ穩婆ニ在テハ其營業上缺ク可カラサル物

第四 農業者ニ在テハ其農業上缺ク可カラサル農具、家畜、肥料及ヒ次ノ收穫マテ

ノ發明ニ關スル物及ヒ債務者又ハ其家族ノ未タ公ニセサル著述ノ稿本

第十三 債務者及ヒ其家族カ學校ニ於テ使用ニ供スル書籍

然レトモ債務者ノ承諾アルトキハ第三號乃至第八號ニ掲ケタル物ヲ除外之ヲ差押フルヲ得

第五百七十一條 差押物保存ノ爲メ特別ノ處分ヲ必要トスルトキハ執達吏ハ適當ノ方法ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得此カ爲ニ費用ヲ要スルトキハ債權者ヲシテ之ヲ豫納セシメ又債權者數名關係スルトキハ其要求額ノ割合ニ從ヒテ其各債權者ヨリ之ヲ豫納セシムヘシ

第五百七十二條 執達吏ハ差押ヲ實施シタル後債權者又ハ裁判所ノ特別委任ヲ要セスシテ以下數條ノ規定ニ從ヒテ公ノ競賣方法ヲ以テ其差押物ヲ賣却ス可シ

第五百七十三條 競賣ス可キ物ノ中ニ高價ノモ

農業ヲ續行スル爲メ缺ク可カラサル農産物

第五 文武ノ官吏、神職、僧侶、公立私立ノ教育場教師、辯護士、公證人及ヒ醫師ニ在テハ其職業ヲ執行スル爲メ缺ク可カラサル物並ニ身分相當ノ衣服

第六 文武ノ官吏神職僧侶及ヒ公立私立ノ教育場教師ニ在テハ第六百十八條ニ規定スル職務上ノ收入又ハ恩給ノ差押ヲ受ケサル金額但差押ヨリ次期ノ俸給又ハ恩給ノ支拂マテノ日數ニ應シテ之ヲ計算ス

第七 藥舖ニ在テハ調藥ヲ爲ス爲メ缺ク可カラサル器具及ヒ藥品

第八 勳章及ヒ名譽ノ證據

第九 實印其他職業ニ必要ナル印

第十 神體 佛像其他禮拜ノ用ニ供スル物

第十一 系譜

第十二 債務者又ハ其家族ノ未タ公ニセサルノアルトキハ執達吏ハ適當ナル鑑定人ヲシテ其評價ヲ爲サシム可シ

第五百七十四條 差押金錢ハ之ヲ債權者ニ引渡ス可シ

執達吏カ金錢ヲ取立テタルトキハ債務者ヨリ支拂ヲ爲シタルモノト看做ス但保證ヲ立テ又ハ供託ヲナシテ執行ヲ免カルルコトヲ債務者ニ許シタルトキハ此限ニ在ラス

第五百七十五條 差押ノ日ト競賣ノ日トノ間ニハ少ナクトモ七日ノ時間ヲ存スルコトヲ要ス但差押債權者執行力アル正本ニ因リ配當ヲ要求スル債權者及ヒ債務者カ競賣ヲ更ニ早ク爲サンコトヲ合意シタルトキ又ハ差押物ヲ永ク貯藏スルコト付キ不相應ノ費用若クハ其物ノ價格ノ著シク減少スル危害ヲ避ケンタメ競賣ヲ早ク爲スコトヲ必要ナルトキハ此限ニ在ラス

第五百七十六條 競賣ハ差押ヲ爲シタル市町村ニ於テ之ヲ爲ス但差押債權者及ヒ債務者カ他

地ニ於テ之ヲ爲スコトヲ合意シタルトキハ
此限ニ在ラズ競賣ノ日時及ヒ場所ハ之ヲ公告
ス但其公告ニハ競賣スヘキ物ヲ表示ス可シ

第五百七十七條 最高價競買ノ爲メノ競落ハ其
價額ヲ三回呼上ケタル後之ヲ爲ス

競落物ノ引渡ハ代金ト引換ヘ之ヲ爲ス

最高價競買人競賣條件ニ定メタル支拂期日又
ハ其定ナキトキハ競賣期日ノ終ル前ニ代金ノ
支拂ヲ爲シテ物ノ引渡ヲ求メサルトキハ更ニ

其物ヲ競賣ス可シ此場合ニ於テハ前ノ最高價
競買人ハ競買ニ加ハルコトヲ得ス且再度ノ競
落代價カ最初ノ競落代價ヨリ低キトキハ不足

ヲ擔任ス可シ其高キトキハ剩餘ヲ請求スルコ
トヲ得ス

第五百七十八條 競賣ハ賣得金ヲ以テ債權者ニ
辯濟ヲ爲シ及ヒ強制執行ノ費用ヲ償フニ足ル
ニ至ルトキハ直チニ之ヲ止ム可シ

第五百七十九條 執達吏賣得金ヲ領収シタルト

ルトキハ執行裁判所ハ其流通回復ヲ爲サシメ
及ヒ此カ爲メ必要ナル陳述ヲ債務者ニ代リテ
爲ス權ヲ執達吏ニ與フルコトヲ得

第五百八十四條 土地ヨリ離レサル前ニ差押ヘ
タル果實ノ競賣ハ其成熟ノ後始メテ之ヲ爲ス
コトヲ許ス執達吏ハ競賣ノ爲メ其收穫ヲ爲サ
シムル權利アリ

差押ヘタル蠶ノ競賣ハ全ク繭ト爲リタル後始
メテ之ヲ爲スコトヲ許ス

第五百八十五條 差押債權者、執行力アル正本
ニ因リ配當ヲ要求スル債權者又ハ債務者ノ申
立ニ因リ執行裁判所ハ前數條ノ規定ニ依ラズ

他ノ方法又ハ他ノ場所ニ於テ差押物ノ賣却ヲ
爲ス可キ旨又ハ執達吏ニ依ラズ他ノ者ヲシテ
競買ヲ爲サシム可キ旨ヲ命スルコトヲ得

第五百八十六條 執達吏ハ既ニ差押ヘタル物ニ
付キ他ノ債權者ノ爲メ更ニ差押ノ手續ヲ爲ス
コトヲ得ス

キハ債務者ヨリ支拂ヲ爲シタルモノト看做ス
但保證ヲ立テ又ハ供託ヲ爲シテ執行ヲ免ガル
ルコトヲ債務者ニ許シタルトキハ此限ニ在ラ
ズ

第五百八十條 金銀物ハ其金銀ノ實價ヨリ以下
ニ競落スルコトヲ許サズ其實價マテニ競買ヲ
爲ス者ナキトキハ執達吏ハ金銀ノ實價ニ達ス
ル價額ヲ以テ適宜ニ之ヲ賣却スルコトヲ得

第五百八十一條 執達吏有價証券ヲ差押ヘタル
トキハ相場アルモノハ賣却日ノ相場ヲ以テ適
宜ニ之ヲ賣却シ其相場ナキモノハ一般ノ規定
ニ從ヒテ之ヲ競賣ス可シ

第五百八十二條 有價証券ノ記名ナルトキハ執
行裁判所ハ買主ノ氏名ニ書換ヲ爲サシメ及ヒ
此カ爲メ必要ナル陳述ヲ債務者ニ代リ爲ス權
ヲ執達吏ニ與フルコトヲ得

第五百八十三條 無記名ノ證券ニシテ記名ニ換
ヘ又ハ他ノ方法ニ依リ流通ヲ止メタルモノナ

執達吏ハ既ニ差押ヲ爲シタル執達吏ニ差押關
書ノ照覽ヲ求メテ物ノ照査ヲ爲シ未ダ差押ニ
係ラサル物アルトキハ之ヲ差押ヘ既ニ差押ヲ
爲シタル執達吏ニ差押調書ヲ交付シ且總テノ
差押物ヲ競賣ニ付ス可キコトヲ求ム可シ

若シ差押フ可キ物アラサルトキハ照査調書ヲ
作り既ニ差押ヲ爲シタル執達吏ニ之ヲ交付ス
可シ

前項ノ求ニ因リ執行ニ關スル債權者ノ委任ハ
既ニ差押ヲ爲シタル執達吏ニ法律上移轉ス
假差押ニ係ル物ニ付テハ本條ノ規定ヲ適用セ
ス

第五百八十七條 前條ニ掲ケタル物ノ照査手續
ハ記當要求ノ效力ヲ生シ又既ニ爲シタル差押
カ取消ト爲リタルトキハ差押ノ效力ヲ生ス

第五百八十八條 適當ナル期間經過スルモ執達
吏競賣ヲ爲ササルトキハ差押債權者及ヒ執行
力アル正本ニ因リ配當ヲ要求スル債權者ハ一

百十五

定ノ期間内ニ競賣ヲ爲ス可キコトヲ催告シ其

催告ノ效アラサルトキハ相當ノ命令アラシコ

トヲ執行裁判所ニ申請スルコトヲ得

第五百八十九條 民法ニ從ヒ配當ヲ要求シ得ヘ

キ債權者ハ執行力アル正本ニ因スシテ賣得金
ノ配當ヲ要スルコトヲ得

第五百九十條 前條ノ配當要求ハ其原因ヲ開示

シ且裁判所ノ所在地ニ住居ヲモ事務所ヲモ有
セサル者ハ假住所ヲ選定シ執達吏ニ之ヲ爲ス
ヘシ

第五百九十一條 第五百八十六條第二項及ヒ第

五百九十條ノ場合ニ於テ執達吏ハ配當要求ノ
有リタルコトヲ配當ニ與カル各債權者及ヒ債
務者ニ通知スヘシ

執行力アル正本ニ因スシテ配當ヲ要求スル債
務者アルトキハ債務者ハ執達吏ノ通知アリタ
ルヨリ三日ノ期間内ニ其債權ヲ認諾スルヤ否
ヤヲ執達吏ニ申立ツヘシ

百十六

債務者カ認諾セサルコトヲ執達吏ヨリ通知ア

リタルトキハ債權者ハ其通知アリタル三日ノ
期間内ニ債務者ニ對シ訴ヲ起シ其債權ヲ確定
スヘシ

第五百九十二條 配當ノ要求ハ競賣期日ノ終ニ

至ルマテ之ヲ爲スコトヲ得

第五百九十三條 賣得金ヲ以テ配當ニ與カル各
債權者ヲ満足セシムルニ足ラサル場合ニ於テ
債權者間ニ配當ノ協議調ハサルトキハ其賣得
金ヲ供託ス可シ

數多ノ債權者ノ爲メ同時ニ金錢ヲ差押ヘタル
トキ之ヲ以テ各債權者ヲ満足セシムルニ足ラ
サル場合ニ於テモ亦同シ

右ノ場合ニ於テ執達吏ハ其事情ヲ執行裁判所
ニ届出ツ可ク其届書ニハ執行手續ニ關スル書
類ヲ添附ス可シ

第三款 債權及ヒ他ノ財産權ニ對スル
強制執行

第五百九十四條 第三者(第三債務者)ニ對スル

債務者ノ債權ニシテ金錢ノ支拂又ハ他ノ有體

物若シハ有價證券ノ引渡若シハ給付ヲ目的ト

スルモノノ強制執行ハ執行裁判所ノ差押命令
ヲ以テ之ヲ爲ス

第五百九十五條 執行裁判所トシテハ債務者ノ

普通裁判籍ヲ有スル地ノ區裁判所若シ此區裁

判所ナキトキハ第十七條ノ規定ニ從ヒテ債務

者ニ對スル訴ヲ管轄スル區裁判所管轄權ヲ有
ス

第五百九十六條 債權者ハ差押命令ノ申請ニ差

押ヲ可キ債權ノ種類及ヒ數額ヲ開示ス可シ

右申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ

得

第五百九十七條 差押命令ハ豫メ第三債務者及

ヒ債務者ノ審訊ヲ經スシテ之ヲ發ス

第五百九十八條 金錢ノ債權ヲ差押フ可キトキ

ハ裁判所ハ第三債務者ニ對シ債務者ニ支拂ヲ

爲スコトヲ禁シ又債務者ニ對シ債權ノ處分殊

ニ其取立ヲ爲スコカラサルコトヲ命ス可シ

差押命令ハ職權ヲ以テ第三債務者及ヒ債務者

ニ之ヲ送達シ又債權者ニハ其送達シタル旨ヲ
通知ス可シ

差押ハ第三債務者ニ對スル送達ヲ以テ之ヲ爲

シタルモノト看做ス

第五百九十九條 抵當アル債權ノ差押ノ場合ニ

於テハ債權者ハ債務者ノ承諾ヲ要セスシテ其
債權ノ差押ヲ登記簿ニ記入スル權利アリ

此記入ノ申請ハ裁判所ニ之ヲ爲スコシ其申請
ハ差押命令ノ申請ト之ヲ併合スルコトヲ得

裁判所ハ義務ヲ負フタル不動産ノ所有者(第
三債務者)ニ差押命令ヲ送達シタル後記入ノ
手續ヲ爲スコシ

第六百條 差押ヘタル金錢ノ債權ニ付テハ差押

債權者ノ選擇ニ從ヒ代位ノ手續ヲ要セスシテ
之ヲ取立ツル爲メ又ハ支拂ニ換ヘ券面額ニテ

差押債權者ニ之ヲ轉付スル爲メ命令アラソク
ヲ申請スルコトヲ得

右命令ノ送達ニ付テハ第五百八十九條第二項
ノ規定ヲ準用ス

第六百一條 支拂ニ換ヘ券面額ニテ債權ヲ轉付
スル命令アル場合ニ於テハ其債權ノ存スル限
リハ第五百九十八條第二項ノ手續ヲ爲スニ因
リ債務者ハ債權ノ辨濟ヲ爲シタルモノト看做
ス

第六百二條 取立ノ爲メノ命令ハ其債權ノ全額
ニ及フモノトス但執行裁判所ハ債務者ノ申立
ニ因リ差押債權者ヲ審訊シテ差押額ヲ其債權
者ノ要求額マテニ制限シ其超過スル額ノ處分
殊ニ取立ヲ爲スヲ許スコトヲ得其制限シタル
部分ニ限リ他ノ債權者ハ配當要求ヲ爲スコト
ヲ得ス

右許可ハ第三債務者及ヒ債權者ニ通知ス可シ
第六百三條 手形其他裏書ヲ以テ移轉スルコト

ヲ執行裁判所ニ届出ツ可シ

第六百九條 差押債權者ハ第三債務者ヲシテ差
押命令ノ送達ヨリ七日ノ期間内ニ書面ヲ以テ
左ノ陳述ヲ爲サシメシコトヲ裁判所ニ申立ツ
ルコトヲ得

第一 債權ノ認諾ノ有無及ヒ其限度並ニ支
拂ヲ爲ス意思ノ有無及ヒ其限度

第二 債權ニ付キ他ノ者ヨリ請求ノ有無及
ヒ其種類

第三 債權カ既ニ他ノ債權者ヨリ差押ヘラ
レタルコトノ有無及ヒ其請求ノ種類

右ノ陳述ヲ求ムル催告ハ之ヲ送達證書ニ記載
ス可シ第三債務者陳述ヲ怠リタルトキハ此ニ
因リテ生スル損害ニ付キ其責ニ任ス

第六百十條 債權者カ命令ノ旨趣ニ基キ第三債
權者ニ對シテ訴ヲ起スコ至タルトキハ一般ノ規
定ニ從ヒテ管轄ヲ有スル裁判所ニ其訴ヲ起シ
且債務者内國 在リテ住所ノ知レタルトキハ

ヲ得ル證券ニ因レル債權ノ差押ハ執達吏其證
券ヲ占有シテ之ヲ爲ス

第六百四條 係給又ハ此ニ類スル繼續收入ノ債
權ノ差押ハ債權額ヲ限トシ差押後ニ收入ス可
キ金額ニ及フ者トス

第六百五條 職務上收入ノ差押ハ債務者ノ轉官
兼任又ハ増俸ニ因ル收入ニモ亦及フモノトス
第六百六條 債務者ハ債權ニ關スル所持ノ證書
ヲ差押債權者ニ引渡ス義務アリ債權者ハ差押
命令ニ基キ強制執行ノ方法ヲ以テ其證書ヲ債
務者ヨリ取上ケシムルコトヲ得

第六百七條 第五百五條第二項ニ從ヒテ債務者
ニ保證ヲ立テシメ又ハ供託ヲ爲サシメテ執行
ヲ免カルルコトヲ許スコトキハ差押ヘタル
金錢債權ニ付テハ取立ノ命令ノミヲ爲ス可シ
但此命令ハ第三債務者ヲシテ債務額ヲ供託セ
シムル效力ノミヲ有ス

其訴訟ヲ之ニ告知ス可シ

第六百八條 債權者取立ヲ爲シタルトキハ其旨
行用ヲ怠リタルトキハ此カ爲メ債權者ニ生
タル損害ノ責ニ任ス

第六百九條 債權者ハ命令ニ因リ取立ノ爲メ
取得シタル權利ヲ拋棄スルコトヲ得但此カ爲
メ其請求ヲ害セラルルコトナシ

此拋棄ハ裁判所ニ届書ヲ差出シテ之ヲ爲ス但
其原本ハ第三債務者及ヒ債務者ニ之ヲ送達ス
可シ

第六百十三條 差押ヘタル債權條件附若クハ有
期ナルトキ又ハ反對給付ニ繫リ若クハ他ノ理
由アリテ其取立ノ困難ナルトキハ裁判所ハ申
立ニ因リ取立ニ換ヘ他ノ換價方法ヲ命スルコ
トヲ得

債務者内國ニ在リテ住所ノ知レタルトキハ其
申立ヲ許ス決定前ニ之ヲ審訊ス可シ
第六百十四條 有體物ノ引渡又ハ給付ノ請求ニ

對スル強制執行ハ以下數條ノ規定ヲ斟酌シテ
第五百九十八條乃至第六百十二條ノ規定ニ從
ヒテ之ヲ爲ス

第六百十五條 有體動産ノ請求ノ差押ニ付テハ
其動産ヲ債權者ノ委任シタル執達吏ニ引渡ス
可キコトヲ命ス可シ

右動産ノ換價ニ付テハ差押物ノ換價ニ關スル
規定ヲ適用ス

第六百十六條 不動産ノ請求ノ差押ニ付テハ債
權者ノ申立ニ因リ其不動産ヲ不動産所在地ノ
區裁判所ヨリ命シタル保管人ニ引渡ス可キコ
トヲ命ス可シ

引渡シタル不動産ニ付テハ強制執行ハ不動産
ニ對スル強制執行ニ付テノ規定ニ從ヒテ之ヲ
爲ス

第六百十七條 有體物ノ引渡又ハ給付ノ請求ニ
付テハ支拂ニ換ヘ轉付スル命令ヲ爲スコトヲ
得ス

ノ收入恩給其他ノ收入カ一年間ニ三百圓ヲ
超過スルトキハ其超過額ノ半額ヲ差押フルコ
トヲ得

第六百十九條 數名ノ差押債權者ノ爲メ同時ニ
爲スコキ債權ノ差押ニ付テハ前數條ノ規定ヲ
準用ス

第六百二十條 執行力アル正本ヲ有スル債權者
及ヒ民法ニ從ヒ配當ノ要求ヲ爲シ得ヘキ債權
者ハ差押債權者カ取立ヲ爲シ其旨ヲ執行裁判
所ニ届出ツルマテ又ハ執達吏カ賣得金ヲ領收
スルマテ配當ヲ要求スルコトヲ得但執行力ア
ル正本ニ因ラスシテ配當ヲ要求スル債權者ニ
付テハ第五百九條及ヒ第五百九十一條第二項
第三項ノ規定ヲ適用ス

支拂ニ換ヘテノ轉付ノ命令アリクハ後ハ配當
ノ要求ヲ爲スコトヲ得ス

右配當要求ハ職權ヲ以テ之ヲ第三債務者債務
者及ヒ差押債權者ニ送達シ又既ニ爲シタル差

第六百十八條 左ニ掲グル債權ハ之ヲ差押フル
コトヲ得ス

第一 法律上ノ養料

第二 債務者カ義捐建設所ヨリ又ハ第三者
ノ慈善ニ因リ受クル繼續ノ收入但債務者
及ヒ其家族ノ生活ノ爲メ必要ナルモノニ
限ル

第三 下士、兵卒ノ給料並ニ恩給及ヒ其遺
族ノ扶助料

第四 出陣ノ軍隊又ハ役務ニ服シタル軍艦
ノ乗組員ニ屬スル軍人、軍屬ノ職務下ノ
收入

第五 文武ノ官吏神職僧侶及ヒ公立私立ノ
教育場教師ノ職務上ノ收入、恩給及ヒ其
遺族ノ扶助料

第六 職工、勞役者又ハ雇人カ其勞力又ハ
役務ノ爲ニ受クル報酬
第一號、第五號第六號ノ場合ニ於テ是等ノ

押カ取消ト爲リタルトキハ執行力アル正本ニ
因リ要求シタル債權者ノ爲メ要求ノ順序ニ因
リ差押ノ效力ヲ生ス

第六百二十一條 金錢ノ債權ニ付キ配當要求ノ
送達ヲ受ケタル第三債務者ハ債務額ヲ供託ス
ル權利アリ

第三債務者ハ配當ニ與カル或ル債權者ノ求ニ
因リ債務額ヲ供託スル義務アリ

第三債務者債務額ヲ供託シタルトキハ其事情
ヲ裁判所ニ届出ツ可シ

第六百二十二條 請求カ不動産ニ關スルトキハ
第三債務者ハ其不動産所在地ノ區裁判所カ差
押債權者又ハ第三債務者ノ申立ニ因リ命シタ
ル保管人ニ事情ヲ開示シ且送達セラレタル命
令ヲ添ヘ其不動産ヲ引渡ス權利ヲ有シ又ハ差
押債權者ノ求ニ因リ之ヲ引渡ス義務アリ

第六百二十三條 第三債務者カ取立手續ニ對シ
テ義務ヲ履行セサルトキハ差押債權者ハ訴テ

以テ之ヲ履行セシムルコトヲ得

執行力アル正本ヲ有スル各債權者ハ共同訴訟人トシテ原告ニ加ハル權利アリ

訴ヲ受ケタル第三債務者ハ原告ニ加ハラサル

債務者ヲ共同訴訟人トシテ呼出アラシムコトヲ

口頭辯論ノ第一期日マテニ申立ツルコトヲ得

右ノ場合ニ於ケル裁判ハ呼出ヲ受ケタル債權

者ニ利害ヲ及ホス効力アリ

第六百二十四條 差押債權者取立手續ヲ怠リタ

ルトキハ執行力アル正本ニ因リ要求シタル各

債權者ハ一定ノ期間内ニ取立ヲ爲ス可キコト

ヲ催告シ其催告ノ効アラサルトキハ執行裁判

所ノ許可ヲ得テ自ら取立ヲ爲スコトヲ得

第六百二十五條 不動産ヲ目的トセヌ又前數條

ニ掲ケタル以外ノ財産權ニ對スル強制執行ニ

付テハ本款ノ規定ヲ準用ス

若シ第三債務者ナキトキハ差押ハ債務者ニ權

利ノ處分ヲ禁スル命令ヲ送達シタル日時ヲ以

百二十二

テ之ヲ爲シタルモノト看做ス

右ノ場合ニ於テハ裁判所ハ特別ノ處分殊ニ其

權利ノ管理若シハ讓渡ヲ命スルコトヲ得

第四款 配當手續

第六百二十六條 配當手續ハ動産ニ對スル強制

執行ニ際シ競賣期日又ハ金錢差押ノ日ヨリ十

四日ノ期間内ニ債權者間ノ協議關ハサル爲メ

金額ヲ供託シタルトキ之ヲ爲ス

第六百二十七條 裁判所ハ事情屆書ニ基キ七日

ノ期間内ニ元金、利息、費用其他附帶ノ債權ノ

計算書ヲ差出スヘキ旨ヲ各債權者ニ催告ス可

シ

第六百二十八條 前條ノ期間滿了後裁判所ハ配

當表ヲ作ル可シ

右期間ヲ遵守セサル債權者ノ債權ハ配當表ヲ

作ルコ際ニ配當要求並ニ届書ノ旨趣及ヒ其憑

據書類ニ依リ之ヲ計算ス但後ニ債權額ヲ補充

スルコトヲ許サズ

第六百二十九條 裁判所ハ配當表ニ關スル陳述

及ヒ配當實施ノタメ期日ヲ指定シ其期日ニハ

各債權者及ヒ債務者ヲ呼出ス可シ但債務者ノ

所在明カナラサルトキ又ハ外國ニ在ルトキハ

呼出ヲ爲スコトヲ要セス

配當表ハ各債權者及ヒ債務者ニ閱覽セシムル

爲メ通クトモ期日ノ三日前ニ裁判所書記課ニ

之ヲ備置シ可シ

第六百三十條 期日ニ於テ異議ノ申立ナキトキ

ハ配當表ニ從ヒテ其配當ヲ實施ス可シ

停止條件附ノ債權ノ配當額ハ仍ホ之ヲ供託シ

民法ニ從ヒテ條件ノ成否ニ依リ後ニ之ヲ支拂

ヒ又ハ更ニ配當ス可シ

第五百九十一條第三項ノ場合又ハ假差押ノ場

合ニ於テ未タ確定セサル債權其他異議アル債

權ノ配當額ハ仍ホ之ヲ供託ス可シ

配當實施ニ付テハ調書ヲ作ル可シ

第六百三十一條 異議ノ申立アルトモハ他ノ債

百二十三

權者ハ直チニ陳述ヲ爲ス可シ

若シ關係人異議ヲ正當ナリト認ムルトキ又ハ

他ノ方法ニ於テ合意スルトキハ之ニ從ヒ配當

表ヲ更正シ配當ヲ實施ス可シ

異議ノ完結セサルトキハ異議ナキ部分ニ限り

配當ヲ實施ス可シ

第六百三十二條 期日ニ出頭セサル債權者ハ配

當表ノ實施ニ同意シタルモノト看做ス

若シ期日ニ出頭セサル債權者カ他ノ債權者ヨ

リ申立テタル異議ニ關係ヲ有スルトキハ其債

權者ハ異議ヲ正當ナリト認メサルモノト看做

ス

第六百三十三條 期日ニ於テ異議ノ完結セサル

トキハ異議ヲ申立テタル債權者ハ他ノ債權者

ニ對シ訴ヲ起シタルコトヲ期日ヨリ七日ノ期

間内ニ裁判所ニ證明ス可シ若シ其期間ヲ徒過

シタル後ハ裁判所ハ異議ニ拘ハラヌ配當ノ實

施ヲ命ス可シ

第六百三十四條

異議ヲ申立テタル債權者前條ノ期間ヲ怠リタルトキト雖モ配當表ニ從ヒテ配當ヲ受ケタル債權者ニ對シ訴ヲ以テ優先權ヲ主張スル權利ハ配當實施ノ爲メ妨ケララルコト無シ

第六百三十五條

異議ヲ申立テタル債權者ノ訴ニ付テハ配當裁判所之ヲ管轄ス然レトモ訴訟物カ區裁判所ノ管轄ニ屬セサルトキハ其配當裁判所ノ所在地ヲ管轄スル地方裁判所之ヲ管轄ス若シ數箇ノ訴ノ提起アリタル場合ニ於テ一ノ訴ヲ地方裁判所カ管轄スルトキハ其地ノ訴ヲモ亦之ヲ管轄ス但各債權者總テノ異議ニ付キ配當裁判所ノ裁判ヲ受ク可キコトヲ合意シタルトキハ此限ニ在ラス

第六百三十六條

異議ニ付キ裁判ヲ爲ス判決ハ配當額ノ係争部分ヲ如何ナル債權者ニ如何ナル數額ヲ以テ支拂フ可キヤヲ定ム可シ若シ之ヲ定ムルコトヲ適當トセサルハ判決ニ於

百二十四

テ新ナル配當表ノ調製及ヒ他ノ配當手續ヲ命ス可シ

第六百三十七條

異議ヲ申立テタル債權者カ口頭辯論ノ期日ニ出頭セサルトキハ異議ヲ取下ケタルモノト看做ス旨ノ闕席判決ヲ爲ス可シ

第六百三十八條

前二條ノ判決確定ノ證明アルトキハ配當裁判所ハ其判決ニ基キ支拂又ハ他ノ配當手續ヲ命ス

第六百三十九條

裁判所ハ配當表ニ依リテ左ノ手續ヲ爲シ配當ヲ實施ス可シ
債權全部ノ配當ヲ受ク可キ債權者ニハ配當額支拂證ヲ交付スルト同時ニ其所持スル執行力アル正本又ハ債權ノ證書ヲ差出サシメ之ヲ債務者ニ交付ス可シ

債權一分ノミノ配當ヲ受ク可キ債權者ニハ執行力アル正本又ハ債權ノ證書ヲ差出サシメ之ニ配當額ヲ記入シテ返還シ且配當額支拂證ヲ交付スルト同時ニ右債權者ヨリ金額ノ證記シ

タル受取書ヲ差出サシメ之ヲ債務者ニ交付ス可シ

期日ニ出頭セサル債務者ノ配當額ハ仍ホ之ヲ供託ス可シ

右ノ手續ヲ爲シタルトキハ調書ニ記載シテ之ヲ明確ニス可シ

第二節 不動産ニ對スル強制執行

第一款 通則

第六百四十條 不動産ニ對スル強制執行ハ左ノ方法ヲ以テ之ヲ爲ス

第一 強制競賣

第二 強制管理

債權者ハ自己ノ選擇ニ依リ一箇ノ方法ヲ以テ又ハ二箇ノ方法ヲ併セテ執行セシムルコトヲ得

強制管理ハ假差押ノ執行ノ爲ニモ亦之ヲ爲ス

第六百四十一條 不動産ニ對スル強制執行ニ付テハ其不動産所在地ノ區裁判所執行裁判所ト

シテ之ヲ管轄ス若シ其不動産數箇ノ區裁判所ノ管轄區内ニ散在スルトキハ第二十六條ノ規定ヲ適用ス

強制執行ハ申立ニ因リテ裁判所之ヲ爲ス

第二款 強制競賣

第六百四十二條 強制競賣ノ申立ニハ左ノ諸件ヲ具備スルヲ要ス

第一 債權者、債務者及ヒ裁判所ノ表示

第二 不動産ノ表示

第三 競賣ノ原因タル一定ノ債權及ヒ其執行得ヘキ一定ノ債務名義

第六百四十三條 申立ニハ執行力アル正本ノ外

左ノ證書ヲ添附ス可シ

第一 登記簿ニ債務者ノ所有トシテ登記タル不動産ニ付テハ登記判事ノ認證書

第二 登記簿ニ記載アラサル不動産ニ付テハ債務者ノ所有タルコトヲ證ス可キ證書

第三 地所ニ付テハ國郡市町村、字、番地、

地目、反別若クハ坪數、土地臺帳ニ登錄シ
タル地價及ヒ其地所ニ付キ納ムヘキ一个
年ノ租稅其他ノ公課ヲ證ス可キ證書

第四 建物ニ付テハ國郡市町村、字、番地、
構造ノ種類、建坪及ヒ其建物ニ付キ納ム
ヘキ一个年ノ公課ヲ證ス可キ證書

第五 地所、建物ニ付キ賃貸借アル場合ニ
於テハ其期限並ニ借賃ヲ證スヘキ證書

第二號、第三號及ヒ第四號ノ要件ニ付テハ債
權者公簿ヲ主管スル官廳ニ其證明書ヲ求ムル
コトヲ得

第四號及ヒ第五號ノ要件ヲ證明スル能ハサル
トキハ債權者ハ競賣申立ノ際其取調ヲ執行裁
判所ニ申請スルコトヲ得但此場合ニ於テハ裁
判所ハ執達吏ヲシテ其取調ヲ爲サシム可シ
強制管理ノ爲メ既ニ不動産ヲ差押ヘタル場合
ニ於テ其執行記録ニ第一號乃至第五號ノ要件
ヲ記載シタルモノ有ルトキハ其證書ヲ添附ス

ルコトヲ要セス

第六百四十四條 競賣手續ノ開始決定ニハ同時
ニ債權者ノ爲メ不動産ヲ差押フルコトヲ宣言
ス可シ

差押ハ債務者カ不動産ノ利用及ヒ管理ヲ爲ス
コトヲ妨ケス

差押ハ其決定ヲ債務者ニ送達スルニ因リ其効
力ヲ生ス此送達ハ職權ヲ以テ之ヲ爲ス

第六百四十五條 裁判所ハ競賣手續開始ノ決定
ヲ爲シタル不動産ニ付キ強制競賣ノ申立アル
モ更ニ開始決定ヲ爲スコトヲ得ス

右申立ハ執行記録ニ添附スルニ因リ配當要求
ノ効力ヲ生シ又既ニ開始シタル競賣手續取消
ト爲リタルトキハ第六百四十九條第一項ノ規
定ヲ害セサル限りハ開始決定ヲ受ケサル效力
ヲ生ス

假差押ノ命令アリタル不動産ニ付テハ本條ノ
規定ヲ適用セス

第六百四十六條 配當要求ハ其原因ヲ開示シ且

裁判所ノ所在地ニ住居ヲモ事務所ヲモ有セサ
ル者ハ假住所ヲ選定シテ執行裁判所ニ之ヲ爲
ス可シ

右要求ハ競落期日ノ終ニ至ルマテ之ヲ爲スコ
トヲ得

第六百四十七條 執行裁判所ハ前二條ノ申立及
ヒ要求アリタルコトヲ利害關係人ニ通知ス可

シ
執行力アル正本ニ因ラヌシテ配當ヲ要求スル
債權者アルトキハ債務者ハ右通知アリタルヨ
リ三日ノ期間内ニ其債權ヲ認諾スルヤ否ヤヲ
裁判所ニ申出ツ可シ

債務者カ認諾セサルコトヲ裁判所ヨリ通知ア
リタルキハ債務者ハ其通知アリタルヨリ三日
ノ期間内ニ債務者ニ對シ訴ヲ起シ其債權ヲ確
定スヘシ

第六百四十八條 左ニ掲クル者ヲ競賣手續ニ於

テノ利害關係人ト爲ス

第一 差押債務者及ヒ執行力アル正本ニ因

リ配當ヲ要求スル債權者

第二 債務者

第三 登記簿ニ記入アル不動産上權利者

第四 不動産上權利者トシテ其債權ヲ證明

シ執行記録ニ備フ可キ届出ヲ爲シタル者
第六百四十九條 差押債權者ノ債權ニ先ツ債
權ニ關スル不動産ノ負擔ヲ競落人ニ引受ケシ
ムルカ又ハ賣却代金ヲ以テ其負擔ヲ辦濟スル
ニ足ル見込アルトキニ非サレハ賣却ヲ爲スコ
トヲ得ス

不動産ハ賣却ニ因リ登記簿ニ記入ヲ要スル總
テノ不動産上ノ負擔ヲ免カルルモノトス但競
落人其負擔ヲ引受ケタルトキハ此限ニ在ラヌ
登記簿ニ記入ヲ要セサル不動産ノ負擔ハ競落
人ニ引受クルモノトス

第六百五十條 權利ヲ取得スル第三者其取得ノ

際差押又ハ競賣ノ申立アリタルヲ知リタル
其ハ差押ノ效力ニ對シ其善意ナリシコトヲ主
張スルコトヲ得ス

若シ不動産カ差押ノ原因タル債權ノ爲メ義務
ヲ負擔スルトキハ差押後所有ノ移轉シタル場
合ニ限リ新所有者其取得ノ際差押又ハ競賣ノ
申立アリタルコトヲ知ラサルトキト雖モ競賣
手續ヲ續行ス可シ

競賣申立ノ取下ニ因リテ差押ハ消滅ス

第六百五十一條 裁判所ハ競賣手續開始ノ決定

ヲ爲ス際職權ヲ以テ競賣ノ申立アリタルコト
ヲ登記簿ニ記入スヘキ旨ヲ登記判事ニ囑託ス
可シ

登記判事ハ前項ノ囑託ニ從ヒテ記入ヲ爲ス可
シ

第六百五十二條 登記判事ハ前條ニ掲ケタル記

入ヲ爲シタル後登記簿ノ謄本ヲ裁判所ニ送付
シ不動産上權利者ヨリ差出シタル證書アルト

キハ其抄本ヲモ送付ス可シ

第六百五十三條 豫メ知ルニ於テハ手續ノ開始
ヲ妨ク可キ事實カ登記判事ノ通知ニ依リ顯ハ
ルルトキハ裁判所ハ其事情ニ因リ直チニ手續
ヲ取消シ又ハ裁判所ノ意見ヲ以テ定ムル期間
内ニ其障礙ノ消滅シタルコトヲ證明ス可キコ
トヲ債權者ニ命ス可シ其期間内ニ此證明ヲ爲
ササルトキハ期間ノ満了後職權ヲ以テ手續ヲ
取消ス可シ

第六百五十四條 裁判所ハ競賣開始ノ判決ヲ爲

シタルトキハ租稅其他ノ公課ヲ主管スル官廳
ニ通知シ其不動産ニ對スル債權ノ有無及ヒ限
度ヲ申出ツ可キコトヲ期間ヲ定メテ催告ス可
シ

第六百五十五條 裁判所ハ登記判事及ヒ租稅其

他ノ公課ヲ主管スル官廳ヨリ通知ヲ受ケタル
後鑑定人ヲシテ不動産ノ評價ヲ爲サシメ其評
價額ヲ以テ最低競賣價額ト爲ス

第六百五十六條 裁判所ハ最低競賣價額ヲ以テ

差押債權者ノ債權ニ先ツ不動産上ノ總テノ
負擔及ヒ手續ノ費用ヲ辨濟シテ剩餘アル見込
金トシタルトキハ差押債權者ニ其旨ヲ通知ス
可シ

右通知ヨリ七日ノ期間内ニ差押債權者カ前項

ノ負擔及ヒ費用ヲ辨濟シテ剩餘アル可キ價額
ヲ定メ且其價額ニ應スル競買人ナキ場合ニ於
テハ自ラ其價額ヲ以テ買受シ可キ旨ヲ申立テ
十分ナル保證ヲ立テサルトキハ競賣手續ヲ取
消ス可シ

第六百五十七條 裁判所ハ前條第一項ノ債權及

ヒ費用ヲ辨濟シ剩餘ヲ得ル見込アルトキ又ハ
差押債權者前條第二項ノ申立ヲ爲シ十分ナル
保證ヲ立テタルトキハ職權ヲ以テ競賣期日及

競落期日ヲ定メテ之ヲ公告ス

第六百五十八條 競賣期日ノ公告ニハ左ノ諸件
ヲ具備スルニ要ス

キハ其抄本ヲモ送付ス可シ

- 第一 不動産ノ表示
- 第二 租稅其他ノ公課
- 第三 賃貸借アル場合ニ於テハ其期限並ニ
借賃
- 第四 強制執行ニ因リ競賣ヲ爲ス旨
- 第五 競賣期日ノ場所、日時及ヒ競賣價爲
ス可キ執達吏ノ氏名並ニ住所
- 第六 最低競賣價額
- 第七 競落期日ノ場所及ヒ日時
- 第八 執行記録ヲ閱覽シ得ヘキ場所
- 第九 登記簿ニ記入ヲ要セサル不動産上權
利ヲ有スル者其債權ヲ申出ツ可キ旨
- 第十 利害關係人競賣期日ハ出頭ス可キ旨

第六百五十九條 競賣期日ハ公告ノ日ヨリ少ナ
クモ十四日ノ後タル可シ

此期日ハ裁判所ノ意見ヲ以テ裁判所内又ハ其

他ノ場所ニ於テ執達吏ヲシテ之ヲ開カシム
第六百六十條 競落期日ハ競賣期日ヨリ七日ヲ

競買期日ハ裁判所ニ於テ之ヲ開ク

第六百六十一條 競買期日ノ公告ハ左ノ箇所ニ

揭示シテ之ヲ爲ス

第一 裁判所ノ揭示板

第二 不動産所在地ノ市町村ノ揭示板

此他公告ハ裁判所ノ意見ニ從ヒ一箇又ハ數箇

ノ新聞紙ニ掲載スルヲ得

第六百六十二條 最低競買價額ヲ除ク外本款ニ

獨ケサル賣却條件ノ變更ハ利害關係人ノ合意

アルトキニ限リ之ヲ許ス但此合意ハ競買期日

ニ至ルマテ之ヲ爲スヲ得

第六百六十三條 競買期日ヲ開キタル後執達吏

ハ執行記録ヲ各人ノ閱覽ニ供シ又特別ノ賣却

條件アルトキハ之ヲ告知シ且競買價額申出ヲ

報告ス可シ

第六百六十四條 利害關係人カ或ル競買人ヨリ

保證ヲ立テシメシトシテ申立ツルハ其競買人

左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 不動産ノ表示

第二 差押債權者ノ表示

第三 執行記録ヲ各人ノ閱覽ニ供シタルコ

ト又特別賣却條件アルトキハ之ヲ告知シ

タルコト

第四 競買價額ノ申出ヲ催告シタル日時

第五 總テノ競買價額並ニ其申出人ノ氏名

住所又ハ許シ可キ競買ノ申出ナキト

第六 競買ノ終局ヲ告知シタル日時

第七 申立ニ因リ競買ノ爲メ保證ヲ立テタル

ルコト又ハ申立アルモ保證ヲ立テサル爲

メ其競買ヲ許ササルヲ

第八 最高價競買人ノ氏名及ヒ其價額ヲ呼

上ケタルヲ

最高價競買人及ヒ出頭シタル利害關係人ハ調

書ニ署名捺印ス可シ若シ此等ノ者調書ノ作成

前ニ退席シタルトキハ其旨ヲ附記ス可シ

保證トシテ競買價額十分ノ一ニ當ル金額ヲ

現金又ハ有價證券ヲ以テ直チニ執達吏ニ預ク

ルトキニ非サレハ其競買ヲ許サス

右申立ハ競買價額ノ申出アリタル後直チニ之

ヲ述フルヲ要ス其申立ハ同一ナル競買人ノ

其後ノ競買ニ付テモ亦效力アリ

第六百六十五條 競買ヲ許サレタル各競買人ハ

更ニ高價ノ競買ノ許アルマテ其申出テタル價

額ニ付キ拘束ヲ受クルモノトス

競買ハ競買價額ヲ申出ツヘキ催告後滿一時間

ヲ過クルニ非サレハ之ヲ終局スルヲ得ス

第六百六十六條 執達吏ハ最高價競買人ノ氏名及

ヒ其價額ヲ呼上ケタル後競買ノ終局ヲ告知ス

可シ

他ノ各競買人ハ右ノ告知ニ因リ其競買ノ責務

ヲ免カレ且預ケタル保證アルトキハ即時ニ其

返還ヲ求ムル權利アリ

第六百六十七條 競買ニ付キ作ル可キ調書ニハ

競買ノ保證ノ爲メ預リタル金銭又ハ有價證券

ヲ返還シタルトキハ執達吏ハ受取證ヲ取り之

ヲ調書ニ添附ス可シ

第六百六十八條 執達吏ハ調書及ヒ總テ競買ノ

保證ノ爲メ預リタル金銭又ハ有價證券ニシテ

返還セサルモノハ三日内ニ裁判所書記ニ之ヲ

渡ス可シ

第六百六十九條 最高價競買人執行裁判所ノ所

在地ニ住居ヲモ事務所ヲモ有セサルトキハ其

所在地ニ假住所ヲ選定シ其旨ヲ裁判所ニ届出

シ可シ若シ之ヲ怠リタルハ第四百四十三條第

三項ノ規定ヲ準用ス

住所ノ選定ハ執達吏ニ口述シ其調書ヲ作ラシ

メ之ヲ爲スコトヲ得

第六百七十條 競買期日ニ於テ許ス可キ競買價

額ノ申出ナキトキハ第六百四十九條第一項ノ

規定ヲ害セサル限リハ裁判所ハ其意見ヲ以テ

最低競買價額ヲ相當ニ低減シ新競買期日ヲ定

可シ若シ其期日ニ於テ仍ホ許ス可キ競買價額ノ申出ナキトキモ亦同シ

新競賣期日ハ少ナクトモ十四日ノ後タル可シ

第六百七十一條 裁判所ハ競落期日ニ出頭シタル利害關係人ニ競落ノ許可ニ付キ陳述ヲ爲サシム可シ

競落ノ許可ニ付テノ異議ハ期日ノ終ニ至ルマテニ之ヲ申立ツ可シ既ニ申立タル異議ニ對スル陳述ニ付テモ亦同シ

第六百七十二條 競落ノ許可ニ付テノ異議ハ左ノ理由ニ基クコトヲ要ス

- 第一 強制執行ヲ許ス可カラサルコト又ハ執行ヲ續行ス可カラサルコト
- 第二 最高價競買人賣買契約ヲ取結ヒ若クハ其不動産ヲ取得スル能力ナキ
- 第三 法律上ノ賣却條件ニ牴觸シテ競買ヲ爲シタルコト又ハ總テノ利害關係人ノ合意ヲ得スシテ法律上ノ賣却條件ヲ變更シ

カ讓渡スヲ得サルモノナルキ又ハ競賣手續ノ停止ヲ爲シタルキニ限リ第二號ノ場合ニ於テハ能力若クハ資格ノ欠缺ヲ除去セラレサルトキニ限リ第三號ノ場合ニ於テハ利害關係人手續ノ續行ニ付キ承認セサルキニ限ル

第六百七十五條 數箇ノ不動産ヲ競賣ニ付シタル場合ニ於テ或ル不動産ノ賣得金ヲ以テ各債權者ニ辨濟ヲ爲シ及ヒ強制執行ノ費用ヲ償フニ足ル可キトキハ他ノ不動産ニ付テハ競落ヲ許サス

此場合ニ於テ債務者ハ其不動産中賣却ス可キモノヲ指定スルヲ得

第六百七十六條 第六百七十二條及ヒ第六百七十四條ノ規定ニ從ヒ全ク競落ヲ許ササル場合ニ於テ更ニ競賣ヲ許ス可キハ職權ヲ以テ新競賣期日ヲ定ム可シ
新競賣期日ハ少ナクトモ十四日ノ後タル可シ
第六百七十七條 前條ノ規定ニ從ヒテ新競賣期

タルコト

第四 競賣期日ノ公告ニ第六百五十八條ニ揭ケタル要件ノ記載ナキ

第五 競賣期日ノ公告ハ法律上規定シタル方法ニ依リテ之ヲ爲ササルコト

第六 第六百五十九條ニ規定シタル期間ヲ存セサル

第七 第六百六十五條第二項及ヒ第六百六十六條第一項ノ規定ニ違背シタル

第八 第六百六十四條ノ規定ニ違背シ最高價競買人ナリト呼上ケタル

第六百七十三條 異議ハ他ノ利害關係人ノ權利ニ關スル理由ニ付テハ之ヲ許サス

第六百七十四條 裁判所ハ異議ノ申立テ正當トスルキハ競落ヲ許サス

第六百七十五條 第一號乃至第八號ニ揭ケタル事項ノ一アルトキハ職權ヲ以テモ競落ヲ許サス但第一號ノ場合ニ於テハ競賣シタル不動産

日ヲ定ムル場合ノ外競落ヲ許シ又ハ許ササル決定ノ言渡ヲ爲ス可シ
競落期日ノ調書ニ付テハ第二百二十九條乃至第三百三十二條及ヒ第三百三十四條ノ規定ヲ準用ス

第六百七十八條 競賣期日ト競落期日トノ間ニ天災其他ノ事變ニ因リ不動産カ著シク毀損シタルトキハ最高競買人タル呼上テ受ケタル者ハ其競買ヲ取消ス權利アリ其毀損ノ著シキヤ否ヤハ裁判所事情ヲ斟酌シテ之ヲ定ム

第六百七十九條 競落ヲ許ス決定ニハ競賣ヲ爲シタル不動産競落人及ヒ競落ヲ許シタル競買價額ヲ揭ケ又特別ノ賣却條件ヲ以テ競落ヲ爲シタルトキハ其條件ヲモ揭ケ可シ

右決定ハ之ヲ言渡ス外尙ホ裁判所ノ揭示板ニ揭示シテ公告ス可シ
第六百八十條 利害關係人ハ競落ノ許否ニ付テ決定ニ因リ損失ヲ被ムル可キ場合ニ於テハ其決定ニ對シ即時抗告ヲ爲スヲ得

競落ヲ許ス可キ理由ナキコト又ハ決定ニ掲ケタル以外ノ條件ヲ以テ許ス可キコトヲ主張スル競落人又ハ競落ヲ求メ之ヲ許ス可キコトヲ主張スル競買人モ又即時抗告ヲ爲ス可キコトヲ得右抗告ハ執行停止ノ效力ヲ有ス

第六百八十一條 競落ヲ許ササル決定ニ對スル抗告ハ此法律ニ掲ケタル總テノ不許ノ原因ナキコトヲ理由トスルトキニ限り之ヲ爲ス可キコトヲ得
第六百八十二條 競落ヲ許ササル決定ニ對スル抗告ハ此法律ニ掲ケタル總テノ不許ノ原因ノ一ヲ理由トスルトキ又ハ競落決定カ競落期日ノ調書ノ旨趣ニ牴觸シタルコトヲ理由トスルトキニ限り之ヲ爲ス可キコトヲ得
第六百八十三條 執行裁判所ノ決定ヲ變更シ又ハ廢棄シタル抗告裁判所ノ裁判ハ執行裁判所
第六百八十四條 競落ヲ許ササル決定確定シタルトキハ競落人及ヒ競落ヲ求メタル競買人ハ其競買ノ責務ヲ免カル
第六百八十五條 第六百七十八條ノ場合ニ於テ競買取消ノ爲メ競落ヲ許ササルコトキハ第六百五十五條乃至第六百五十七條ノ規定ヲ準用ス
第六百八十六條 競落人ハ競落ヲ許ス決定ニ因

第六百八十二條 抗告裁判所ハ必要ナル場合ニ於テハ反對陳述ヲ爲サシムル爲メ抗告人ノ相手方ヲ定ムヘシ
一ノ決定ニ關スル數箇ノ抗告ハ互ニ之ヲ併合ス可シ
第六百七十三條及ヒ第六百七十四條ノ規定ハ抗告審ニモ亦之ヲ準用ス

第六百八十三條 執行裁判所ノ決定ヲ變更シ又ハ廢棄シタル抗告裁判所ノ裁判ハ執行裁判所
第六百八十四條 競落ヲ許ササル決定確定シタルトキハ競落人及ヒ競落ヲ求メタル競買人ハ其競買ノ責務ヲ免カル
第六百八十五條 第六百七十八條ノ場合ニ於テ競買取消ノ爲メ競落ヲ許ササルコトキハ第六百五十五條乃至第六百五十七條ノ規定ヲ準用ス
第六百八十六條 競落人ハ競落ヲ許ス決定ニ因

第六百八十七條 競落人ハ代金ノ全額ヲ支拂ヒタル後ニ非サレハ不動産ノ引渡ヲ求ムルコトヲ得ス
第六百八十八條 競落人カ代金支拂期日ニ其義務ヲ完全ニ履行セサルトキハ裁判所ハ職權ヲ以テ不動産ノ再競賣ヲ命ス可シ

第六百八十九條 共有物持分ノ強制競賣ニ付テハ債權者ノ債權ノ爲メ債務者ノ持分ニ付キ強制競賣ノ申立アリタルコトヲ登記簿ニ記入ス但他ノ共有者ニハ其強制競賣ノ申立ヲ通知ス可シ
第六百九十條 競賣申立カ競落ヲ許スコト無シテ完結シタルトキハ裁判所ハ第六百五十一條ノ規定ニ應ヒテ爲シタル差押記入ノ抹消ヲ

第六百九十一條 競賣申立カ競落ヲ許スコト無シテ完結シタルトキハ裁判所ハ第六百五十一條ノ規定ニ應ヒテ爲シタル差押記入ノ抹消ヲ
第六百九十二條 競賣申立カ競落ヲ許スコト無シテ完結シタルトキハ裁判所ハ第六百五十一條ノ規定ニ應ヒテ爲シタル差押記入ノ抹消ヲ

登記簿等ニ囑託ス可シ

第六百九十一條 競落ヲ許ス決定確定スルトキ

ハ賣却代金カ配當ニ與カル各債權者ヲ満足セ
シムルニ足ラサル場合ニ於テハ民法、商法及
ヒ特別法ニ從ヒテ之ヲ配當ス可シ

第六百九十二條 各債權者ハ競落期日マテニ其
債權ノ元金、利息、費用其他附帶ノ債權ノ計
算書ヲ差出ス可シ

前項ノ規定ニ從ハサル債權者ニ付テハ第六百
二十八條第二項ノ規定ヲ準用ス

第六百九十三條 代金ノ支拂及ヒ配當ハ競落ヲ
許ス決定ノ確定後ニ裁判所カ職權ヲ以テ定ム
ル期日ニ於テ之ヲ爲ス

此期日ニハ利害關係人執行力アル正本ニ因テ
スレテ配當ヲ要求スル債權者及ヒ競落人ヲ當
出ス可シ

第六百九十四條 期日ニ於テハ先ツ配當ス可キ
不動産ノ賣却代金ノ幾許ナルヤヲ定ム可シ

左ノモノヲ賣却代金トス

第一 代金

第二 不動産カ果實其他金錢ニ見積ルコト
ヲ得ヘキ利益ヲ生スル場合ニ於テハ競落
決定言渡ヨリ代金支拂マテノ利息

代金支拂ハ裁判所ノ之ヲ爲ス可シ
最高競買價額ノ保證ノ爲メ預リタル金額ハ代
金ニ之ヲ算入ス

第六百九十五條 裁判所ハ出頭シタル利害關係
人及ヒ執行力アル正本ニ因テスレテ配當ヲ要
求スル債權者ヲ訊問シテ配當表ヲ確定ス可シ

第六百九十六條 配當表ニハ賣却代金各債權者
ノ債權ノ元金、利息、費用及ヒ配當ノ順位並
ニ配當ノ割合ヲ記載ス可シ

若シ出頭シタル總テノ利害關係人及ヒ執行力
アル正本ニ因テスレテ配當ヲ要求スル債權者
一致シタルトキハ其一致ニ基キ配當表ヲ作ル
可シ

第六百九十七條 配當表ニ對スル異議ノ完結及
ヒ配當表ノ實施ニ付テハ第六百三十條以下ノ

規定ヲ準用ス但以下數條ニ於テ別段ノ規定ヲ
設ケタルモノハ此限ニ在ラス

第六百九十八條 期日ニ出頭シタル債務者ハ各
債權者ノ債權ニ對シ又ハ其債權ノ爲メ主張ス
ル順位ニ對シ異議ヲ申立ツル權利アリ

出頭シタル各債權者ハ自己ノ利害ニ關シテハ
他ノ債權者ニ對シ前項ト同一ノ權利アリ

執行スルヲ得ヘキ債權ニ對スル債務者ノ異議
ハ第五百四十五條第五百四十七條及ヒ第五百
四十八條ノ規定ニ從ヒテ之ヲ完結ス

第六百九十九條 競落人ハ賣却條件ニ因リ不動
産ノ負擔ヲ引受クル外配當表ノ實施ニ際シ買
入代金ノ額ニ滿ツルヲ限トシ關係債權者ノ承
諾ヲ得テ買入代金ノ支拂ニ換ヘ債務ヲ引受ク
ルコトヲ得若シ債權者競落人ナルトキハ其
債權ノ配當額カ買入代金ノ額ニ滿ツル限りハ

買入代金トシテ之ヲ計算スルコト因リテ消滅ス

然レトモ引受ク可キ債務又ハ計算ス可キ競落
人ノ債權ヲ對シ適當ナル異議アルトキハ之ニ
相當スル代金ヲ支拂ヒ又ハ保證ヲ立ツ可シ

第七百條 配當表ニ實施シタル後裁判所ハ配當
調書及ヒ競落決定ノ正本ヲ登記判事ニ送付シ
テ左ノ諸件ヲ囑託ス可シ

第一 競落人ノ所有權ノ登記

第二 競落人ノ引受ケサル不動産上負擔記
入ノ抹消

第三 第六百六十一條ノ規定ニ從ヒ爲シタ
ル記入ノ抹消

右登記及ヒ抹消ニ關スル總テノ費用ハ競落人
之ヲ負擔ス可シ

第七百一條 數多ノ差押債權者ノ爲メ同時ニ爲
ス可キ不動産ノ競賣手續ニ付テハ前數條ノ規
定ヲ準用ス

第七百二條 裁判所ハ競賣期日ノ公告前利害關

係人ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ競賣ニ換ヘ
テ入札拂テ命スルコトヲ得但入札拂コ付テハ
以下數條ニ於テ別段ノ規定ナキモノハ前數條
ノ規定ヲ準用ス

第七百三條 入札ハ入札期日ニ於テ執達吏ニ之
ヲ差出ス可シ

入札ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス
第一 入札人ノ氏名及ヒ住所

第二 不動産ノ表示

第三 入札價額

第七百四條 執達吏ハ入札人ノ面前ニ於テ入札
ヲ開封シ之ヲ朗讀ス可シ
二人以上同價額ノ入札アルトキハ執達吏ハ其
者ヲシテ追加ノ入札ヲ爲サシメ最高價入札人
ヲ定ム
一定ノ金額ヲ以テ入札價額ヲ表セシテ他ノ
入札價額ニ對スル比例ヲ以テ價格ヲ表シタル
入札ハ之ヲ許サス

百三十八
第七百五條 最高價入札人タル呼上テ受ケタル
者第六百六十四條ノ規定ニ從ヒ保證ヲ立ツ可
キ求テ受ケルモノ之ヲ立テサルトキハ其次位ノ
入札人ヲ以テ最高價入札人ト定ム但此場合ニ
於テハ最初呼上テ受ケタル者ハ其入札價額ト
次位ノ入札價額トノ差金ヲ負擔スル義務アリ

第三款 強制管理

第七百六條 強制管理ニ付テハ第六百四十二條
第六百四十三條、第六百四十四條第一項第三
項及ヒ第六百五十一條乃至第六百五十四條ノ
規定ヲ準用ス

不動産カ債權者ノ債權ニ付キ不動産上ノ義務
ヲ負フタル場合ニ於テハ第六百四十三條第一
號第二號ニ依リ提出ス可キ證書ハ不動産ヲ債
務者カ占有スルコトヲ證明スル證書ヲ以テ足ル
第七百七條 裁判所ハ強制管理開始ノ決定ニ於
テ債務者カ管理人ノ事務ニ干渉スルコト及ヒ
不動産ノ収益ニ付キ處分スルコトヲ禁シ又不動

産ノ收益ノ給付ヲ爲ス可キ第三者アルトキハ
其第三者ニ其後ノ給付ヲ管理人ニ爲ス可キコ
ト命ス可シ

既ニ收穫シ若シハ收穫ス可シ又ハ期限ノ到來
シ若シハ到來ス可キ果實ハ收益ニ屬ス
開始決定ハ第三者ニ對シテハ之ヲ送達スルニ
因リ其效力ヲ生ス此送達ハ職權ヲ以テ之ヲナ
ス

第七百八條 裁判所ハ強制管理開始ノ決定ヲナ
シタル不動産ニ付キ強制管理ノ申立アルモ更
ニ開始決定ヲ爲スコトヲ得ス

有申立ハ執行記録ニ添附スルニ依リ配當要求
ノ效力ヲ生シ又既ニ開始シタル強制管理ノ取
消トナリタルトキハ開始決定ヲ受ケタル效力
ヲ生ス

假差押ノ命令アリタル不動産ニ付テハ本條ノ
規定ヲ適用セス

第七百九條 配當要求ハ執行力アル正本ニ因リ

且裁判ノ所在地ニ住居シモ事務所ヲモ有セザ
ル者ハ假住所ヲ選定シテ執行裁判所ニ之ヲ爲
ス可シ

第七百十條 執行裁判所ハ前二條ノ申立及ヒ要
求アリタルコトヲ債權者、債務者及ヒ代理人
ニ通知ス可シ

第七百十一條 代理人ハ裁判所之ヲ任命ス但債
權者ハ適當ノ人ヲ推薦スルコトヲ得

管理人ハ管理及ヒ收益ノ爲メ自ラ不動産ヲ占
有スル權ヲ有ス此ノ場合ニ於テ抵抗ヲ受ケル
トキハ執達吏ヲ立會ハシムルコトヲ得

管理人ノ任命ハ債務者ニ代リ第三者ノ給付ス
可キ収益ヲ取立ツル權ヲ授與スルモノトス

第七百十二條 裁判所ハ債權者及ヒ債務者ヲ審
訊シタル後又適當トスル場合ニ於テハ鑑定人
ヲ立會ハシメタル上管理人ノ管理ニ關シ必要
ナル指揮ヲ爲シ又管理人ニ與フ可キ報酬ヲ定
メ且管理人ノ業務施行ヲ監督ス可シ

裁判所ハ管理人ニ保證ヲ立テシメ又ハ貳拾圓以下ノ過料ヲ言渡シ又ハ其職ヲ免スルコトヲ得

第七百十三條 第三者不動産ニ付キ強制管理ヲ許スコト妨クル權利ヲ主張スルトキハ第五百四十九條ノ規定ヲ準用ス

第七百十四條 管理人ハ直チニ不動産ニ付キ得ル收益ヨリ其不動産ノ負擔ニ係ル租稅其他ノ公課ヲ控除セタル後別段ノ手續ヲ要セスシテ管理ノ費用ヲ辨濟シ其剩額ノ配當ニ付キ債權者間ニ協議調ハサルトキハ其旨ヲ裁判所ニ届出ツ可シ

前項ノ届出アリタルトキハ裁判所ハ第六百九十一條、第六百九十六條乃至第六百九十八條ノ規定ヲ準用シテ配當表ヲ作り其配當表ニ基キ管理人ヲシテ債權者ニ支拂ヲ爲サシム可シ
第七百十五條 管理人ハ毎年及ヒ其業務施行ノ終了後各債權者、債務者及ヒ裁判所ニ計算書

ヲ差出ス可シ
各債權者及ヒ債務者ハ計算書ノ送達アリタルヨリ七日ノ期間内ニ執行裁判所ニ異議ノ申立ヲナスコトヲ得

右期間内ニ異議ノ申立ナキトキハ計算ニ付キ全ク異議ナク且管理人ノ卸任ヲ承諾シタルモノト看做ス

異議ノ申立アルトキハ裁判所ハ管理人ヲ審訊セタル後之ヲ裁判ス可シ若シ異議ノ申立ナク又ハ申立タル異議ヲ完結シタルトキハ裁判所ハ管理人ヲシテ卸任セシム可シ

第七百十六條 強制管理ノ取消ハ裁判所ノ決定ヲ以テ之ヲ爲ス
此取消ハ各債權者不動産ノ收益ヲ以テ辨濟ヲ受ケタルトキハ職權ヲ以テ之ヲ爲ス
若シ管理續行ノ爲メ特別ノ費用ヲ要スルトキ債權者カ必要ナル金額ヲ豫納セサルニ於テハ裁判所ハ強制管理ノ取消ヲ命スルコトヲ得

裁判所ハ右ノ取消ヲ決定スル際登記判事ニ強制管理ニ關スル記入ノ抹消ヲ囑託ス可シ

第三節 船舶ニ對スル強制執行

第七百十七條 商船其他ノ海船ニ對スル強制執行ハ不動産ノ強制競賣ニ關スル規定ニ從ヒテ之ヲ爲ス但事物ノ性質ニ因リテ差異ノ顯ハルルトキ又ハ以下數條ニ於テ別段ノ規定ヲ設ケタルトキハ此限ニ在ラス

艦舟其他艦艇ノミチ以テ運轉シ又ハ主トシテ運轉シ以テ運轉スル舟ニハ本節ノ規定ヲ適用ス

第七百十八條 船舶ノ強制競賣ニ付テハ船舶カ差押ノ當時碇泊スル港ノ區裁判所ヲ以テ管轄執行裁判所トス

第七百十九條 船舶ハ執行手續中差押ノ港ニ之ヲ碇泊セシム可シ然レトモ商業上利益ノ爲メ適當トスル場合ニ於テハ裁判所ハ總テノ利害關係人ノ申立ニ因リ航行ヲ許スコトヲ得

第七百二十條 強制競賣ニ付テノ申立ニハ左ノ證書ヲ添附ス可シ

第一 債務者カ所有者ナル場合ニ於テハ其所有者トシテ船舶ヲ占有スルコト又船長ナル場合ニ於テハ船長トシテ船舶ヲ指揮スルコトヲ證明スルニ足ル可キ證書

第二 船舶カ船舶登記簿ニ登記アル場合ニ於テハ其船舶ニ關スル有效ナル各登記事項ヲ包含シタル登記簿ノ抄本

債權者ハ公簿ヲ主管スル官廳カ遠隔ノ地ニ在ルトキハ第二號ノ抄本ノ求アラソコトヲ執行裁判所ニ申立ツルコトヲ得

第七百二十一條 裁判所ハ債權者ノ申立ニ因リ船舶ノ監守及ヒ保存ノ爲メ必要ナル處分ヲ爲サシム可シ

此處分ヲ爲シタルトキハ開始決定ノ送達前ト雖モ差押ノ效力ヲ生ス
若シ此處分ヲ續行スル爲メ債權者カ必要ナル

金額ヲ豫納セサルハ裁判所ハ之ヲ取消ス可
ク得

百四十二

第七百二十二條 船長ニ對シテ爲シタル判決ニ基

キ船舶債權者ノ爲メ船舶ノ差押ヲ爲ストキハ

其差押ハ所有者ニ對シテ效力アリ此場合ニ於

テハ所有者モ亦利害關係人トス

差押後所有者若シハ船長ノ變更アルモ手續ノ

續行ヲ妨ケヌ差押後新ニ船長ト爲リタル者ハ

之ヲ利害關係人トス此場合ニ於テハ前船長ハ

其關係人タル責務ヲ免カル

第七百二十三條 船舶カ差押ノ當時其裁判所管

轄内ニ存セサルコトノ顯ハルトキハ其手續

ヲ取消ス可ク

第七百二十四條 競賣期日ノ公告ニハ第六百五

十八條第一號ニ掲ケタル旨趣ニ換ヘテ船舶ノ

表示及ヒ其碇泊ノ場所ヲ掲ク可ク

第七百二十五條 定繫港ノ區裁判所管轄外ニ於

テ差押ヲ爲シタルトキハ執行裁判所ハ競賣期

日ノ公告ヲ定繫港ノ區裁判所ニ送付シ其裁判

所ノ揭示板ニ揭示ス可キコトヲ囑託ス可ク

第七百二十六條 船舶ノ股分ニ對スル強制執行

第六百二十五條ノ規定ニ從ヒテ之ヲ爲ス其

執行ニ付テハ定繫港ノ區裁判所之ヲ管轄ス

第七百二十七條 債權者ハ差押命令ヲ申請シ債

務者カ船舶ノ股分ニ付キ所有權ヲ有スルコト

ヲ證ス可キ船舶登記簿ノ抄本ハ又ハ信用ス可

キ證明書ヲ添附ス可ク

差押命令ハ債務者ノ外船舶管理人ニ之ヲ送達

ス可ク

差押ハ此命令ヲ船舶管理人ニ送達スルニ因リ

債務者ニ送達スルト同一ノ効力ヲ生ス

第七百二十八條 船舶股分ノ競賣代金ノ配當ニ

付テハ第六百二十六條以下ノ規定ヲ準用ス

第七百二十九條 外國ノ船舶ヲ差押ヘタルトキ

又ハ登記簿ニ登記セサル船舶ヲ差押ヘタルト

キハ登記簿ニ記入ス可キ手續ニ關スル規定ヲ

適用セズ

第三章 金錢ノ支拂ヲ目的トセサル債權ニ

付テノ強制執行

第七百三十條 債務者カ特定ノ動産又ハ代替物

ノ一定ノ數量ヲ引渡ス可クトハ執達吏ハ之ヲ

債務者ヨリ取上ケテ債務者ニ引渡ス可ク

第七百三十一條 債務者カ不動産又ハ人ノ住居

又ハ船舶ヲ引渡シ又ハ明渡ス可キトキハ執達

吏ハ債務者ノ占有ヲ解キ債務者ニ其占有ヲ得

セシメ可ク

此強制執行ハ債權者又ハ其代人理カ受取ノ爲

メ出頭シタルトキニ限り之ヲ爲スコトヲ得

強制執行ノ目的物ニ非サル動産ハ執達吏之ヲ

取除キテ債務者ニ引渡ス可ク若シ債務者不在

ナルトキハ其代理人又ハ債務者ノ成長シタル

家族若シハ雇人ニ之ヲ引渡ス可ク

債務者及ヒ前項ニ掲ケタル者不在ナルトキハ

執達吏ハ右ノ動産ヲ債務者ノ費用ニテ保管ス

付テ可ク

債務者カ其動産ノ受取ヲ怠ルトキハ執達吏ハ

執行裁判所ノ許可ヲ得テ差押物ノ競賣ニ關シ

ル規定ニ從ヒテ之ヲ賣却シ其費用ヲ控除シテ

爾後其代金ヲ供託ス可ク

第七百三十二條 引渡ス可キ物カ第三者ノ手中

ニ存スルトキハ債務者ノ引渡ノ請取ハ申立ニ

因リ金錢債權ノ差押ニ關スル規定ニ從ヒテ之

ヲ債權者ニ轉付ス可ク

第七百三十三條 債務者カ爲ス可キ行為ヲ爲サ

サル場合ニ於テ第三者之ヲ爲シ得ヘキモノナ

ルトキハ第一者ノ受訴裁判所ハ申立ニ因リ民

法(財産編第三百八十二條第三項第四項)ノ

規定ニ從ヒテ決定ヲ爲ス

債權者ハ同時ニ其行為ヲ爲スニ因リ生ス可キ

費用ヲ豫メ債務者ニ支拂ヲ爲サシムル決定ノ

宣言アランコトヲ申立ツルコトヲ得但其行為ヲ爲

スニ因リ此ヨリ多額ノ費用ヲ生スルトキ後日

百四十三

其請求ヲ爲ス權利ヲ妨ケス

第七百三十四條 債務者カ其意思ノミニ因リ爲
得ヘキ行爲ニシテ第三者之ヲ爲シ得ヘカラ
サルモノナルトキハ第一審ノ受訴裁判所ハ申
立ニ因リ民法(財産編第三百八十六條第三項)
ノ規定ニ從ヒテ決定ヲ爲ス

第七百三十五條 前二條ノ決定ハ口頭辯論ヲ經
テ之ヲ爲スコトヲ得但決定前債務者ヲ審
訊ス可シ

第七百三十六條 債務者カ權利關係ノ成立ヲ認
諾ス可キコト又タハ其ノ他ノ意思ノ陳述ヲ爲
ス可キコトノ判決ヲ受ケタルトキハ其ノ判決
ヲ確定シ以ツテ認諾又ハ意思ノ陳述ヲ爲シタ
ルモノト看做ス反對給付ノ有リタル後認諾又
ハ意思ノ陳述ヲ爲ス可キモ場合ニ於テハ第
五百十八條及ヒ第五百二十條ノ規定ニ從ヒ執
行力アル正本ヲ付與シタルトキ其ノ效力ヲ生
ズ

百四十四

第四章 假差押及ヒ假處分

第七百三十七條 假差押ハ金錢ノ債權又ハ金錢
ノ債權ニ換フルコトヲ得ヘキ請求ニ付キ動産
又ハ不動産ニ對スル強制執行ヲ保全スル爲メ
之ヲ爲スコトヲ得

假差押ハ未タ期限ニ至ラサル請求ニ付テモ亦
之ヲ爲スコトヲ得

第七百三十八條 假差押ハ之ヲ爲セサレハ判決
ノ執行ヲ爲スコト能ハス又ハ判決ノ執行ヲ爲
スニ著シキ困難ヲ生スル恐アルトキ殊ニ外國
ニ於テ判決ノ執行ヲ爲スニ至ル可キトキハ之
ヲ爲スコトヲ得

第七百三十九條 假差押ノ命令ハ假ニ差押ヲ可
キ物ノ所在地ヲ管轄スル區裁判所又ハ本案ノ
管轄裁判所之ヲ管轄ス

第七百四十條 假差押ノ申請ニハ左ノ諸件ヲ揭
シ可シ

第一 請求ノ表示若シ其請求カ一定ノ金額

ニ係ラサルトキハ其價額

第二 假差押ノ理由タル事實ノ表示

請求及ヒ假差押ノ理由ハ之ヲ疏明ス可シ

申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第七百四十一條 假差押ノ申請ニ付テノ裁判ハ

口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

請求又ハ假差押ノ理由ヲ疏明セサルトキト雖

モ假差押ニ因リ債務者ニ生ス可キ損害ノ爲メ

債權者カ裁判所ノ自由ナル意見ヲ以テ定ムル

保證ヲ立テタルモハ裁判所ハ假差押ヲ命スル

コトヲ得

又請求及ヒ假差押ノ理由ヲ疏明シタルトキト

雖モ裁判所ハ保證ヲ立テシメ假差押ヲ命スル

コトヲ得

保證ヲ立テタルトキハ其保證ヲ立テタルコト

及ヒ如何ナル方法ヲ以テ之ヲ立テタルコトヲ

假差押ノ命令ニ記載ス可シ

第七百四十二條 假差押ノ申請ニ付テノ裁判ハ

口頭辯論ヲ爲ス場合ニ於テハ終局判決ヲ以テ
之ヲ爲シ其他ノ場合ニ於テハ決定ヲ以テ之ヲ
爲ス

假差押ノ申請ヲ却下シ又ハ保證ヲ立テシムル

裁判ハ債務者ニ之ヲ通知スルコトヲ要セス

第七百四十三條 假差押ノ命令ニハ假差押ノ執

行ヲ停止スルコトヲ得ル爲メ又ハ執行シタル

假差押ヲ取消スコトヲ得ル爲メ債務者ヨリ供

託ス可キ金額ヲ記載ス可シ

第七百四十四條 債務者ハ假差押決定ニ對シ異

議ヲ申立ツルコトヲ得

此異議ニ付テハ假差押ノ取消又ハ變更ヲ申立

ツル理由ヲ開示ス可シ

異議ノ申立ハ假差押ノ執行ヲ停止セズ

第七百四十五條 異議ノ申立アリタルトキハ裁

判所ハ口頭辯論ノ爲メ當事者ヲ呼出ス可シ

裁判所ハ終局判決ヲ以テ假差押ノ全部若シハ

一分ノ認可、變更又ハ取消ヲ言渡シ又自由ヲ

意見ヲ以テ定ムル保證ヲ立ツ可キコトノ條
件ヲ附シテ之ヲ言渡スコトヲ得

第七百四十六條 本案ノ未ダ繫屬セザルトキハ
假差押裁判所ハ債務者ノ申立ニ因リ口頭辯論
ヲ經スルテ相當ニ定ムル期間内ニ訴ヲ起ス可
キコトヲ債權者ニ命ス可シ

此期間ヲ徒過シタル後ハ債務者ノ申立ニ因リ
終局判決ヲ以テ假差押ヲ取消スヘシ

第七百四十七條 債務者ハ假差押ノ理由消滅シ
其他事情ノ變更シタルトキ又ハ裁判所ノ自由
ナル意見ヲ以テ定ムヘキ保證ヲ立テントノ提
供ヲナシタルトキハ假差押ノ認可後ト雖モ假
差押ノ取消ヲ申立ツルコトヲ得

此申立ニ付テハ終局判決ヲ以テ之ヲ裁判ス其
裁判ハ假差押ヲ命シタル裁判所又本案カ既ニ
繫屬シタルトキハ本案ノ裁判所之ヲ爲ス

第七百四十八條 假差押ノ執行ニ付テハ強制執
行ニ關スル規定ヲ準用ス但以下數條ニ於テ差

百四十六

異ノ生スルトキハ此限ニ在ラズ

第七百四十九條 假差押ノ命令ニハ其命令ヲ發
シタル後債權者又ハ債務者ニ於テ承繼アル場
合ニ限り執行文ヲ附記スルコトヲ要ス

假差押命令ノ執行ハ命令ヲ言渡シ又ハ申立人
ニ命令ヲ送達シタルヨリ十四日ノ期間ヲ徒過
スルトキハ之ヲ爲スコトヲ許サズ
右執行債務者ニ差押命令ヲ送達スル前ト雖モ
之ヲ爲スコトヲ得

第七百五十條 動産ニ對スル假差押ノ執行ハ假
差押ト同一ノ原則ニ從ヒテ之ヲ爲ス
債權ノ假差押ニ付テハ其命令ヲ發シタル裁判
所ヲ以テ管轄執行裁判所トス
債權ノ假差押ニ付テハ第三債務者ニ對シ債務
者ニ支拂ヲ爲スコトヲ禁スル命令ノミヲ爲ス
可シ

假差押ノ金錢ハ之ヲ供託ス可シ其他假差押物
ノ競賣及ヒ假差押有價證券ノ換價ハ一時之ヲ

爲サス然レトモ假差押物ニ著シキ價額ノ減少

ヲ生スル恐アルトキ又ハ其貯藏ニ付キ不相應
ナル費用ヲ生ス可キトキハ執行裁判所ハ申立
ニ因リ其物ヲ競賣シ賣得金ヲ供託ス可キ旨ヲ
執達更ニ命スルコトヲ得

第七百五十一條 不動産ニ對スル假差押ノ執行
ハ假差押ノ命令ヲ登記簿ニ記入スルニ因リテ
之ヲ爲ス

第七百五十二條 假差押執行ノ爲メ強制管理ヲ
爲ス場合ニ於テハ保全ス可キ債權ニ相當スル
金額ヲ取立テ之ヲ供託ス可シ

第七百五十三條 船舶ニ對スル假差押ノ執行ハ
假差押ノ當時碇泊スル港ニ碇泊セシムルコト
ニ因リ之ヲ爲ス裁判所ハ債權者ノ申立ニ因リ
船舶ノ監守及ヒ保存ノ爲メ必要ナル處分ヲ爲
ス

第七百五十四條 假差押命令ニ於テ定メタル金
額ヲ供託シタルトキハ執行裁判所ハ執行シタ

ル假差押ヲ取消ス可シ

假差押ノ續行ニ付キ特別ノ費用ヲ要シ且ツ之
レカ爲メ必要ナル金額ヲ債權者カ豫納セザル
トキハ亦執行裁判所ハ假差押ノ取消ヲ命スル
コトヲ得

右裁判ハ口頭辯論ヲ經スルテ之ヲ爲スコトヲ
得

假差押ヲ取消ス決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲
スコトヲ得

第七百五十五條 係争物ニ關スル假處分ハ現狀
ノ變更ニ因リ當事者一方ノ權利ノ實行ヲ爲ス
コトヲ能ハス又ハ之ヲ爲スコ著シキ困難ヲ生
スル恐アルトキ之ヲ許ス

第七百五十六條 假處分ノ命令其他ノ手續ニ付
テハ假差押ノ命令及ヒ手續ニ關スル規定ヲ準
用ス但以下數條ニ於テ差異ノ生スルトキハ此
限ニ在ラズ

第七百五十七條 假處分ノ命令ハ本案ノ管轄裁

判所之ヲ管轄ス右裁判ハ急迫ナル場合ニ於テハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

第七百五十八條 裁判所ハ其意見ヲ以テ申立ノ目的ヲ達スルニ必要ナル處分ヲ定ム

假處分ハ保管人ヲ置キ又ハ相手方ニ行爲ヲ命ジ若クハ之ヲ禁ジ又ハ給付ヲ命スルコトヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

假處分ヲ以テ不動産ヲ讓渡シ又ハ抵當ト爲スコトヲ禁シタルトキハ裁判所ハ第七百五十一條ノ規定ヲ準用シテ登記簿ニ其禁止ヲ記入セシム可シ

第七百五十九條 特別ノ事情アルトキニ限り保證ヲ立テシメテ假處分ノ取消ヲ許スコトヲ得

第七百六十條 假處分ハ爭アル權利關係ニ付キ假ノ地位ヲ定ムル爲ニモ亦之ヲ爲スコトヲ得但し其處分ハ殊ニ繼續スル權利關係ニ付キ著シキ損害ヲ避ケ若クハ急迫ナル強暴ヲ防ク爲メ又ハ其他ノ理由ニ因リ之ヲ必要トスルトキニ限

第七百六十一條 急迫ナル場合ニ於テハ係争物ノ所在地ヲ管轄スル區裁判所ハ假處分ノ當否ニ付テノ口頭辯論ノ爲メ本案ノ管轄裁判所ニ相手方ヲ呼出ス可キ申立ノ期間ヲ定メ假處分ヲ命スルコトヲ得

此期間ヲ徒過シタル後區裁判所ハ申立ニ因リ其命シタル假處分ヲ取消ス可シ

右裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

第七百六十二條 本章ノ規定ニ於ケル本案ノ管轄裁判所ハ第一審裁判所トス但本案カ控訴審ニ繫屬スルトキニ限り控訴裁判所トス

第七百六十三條 急迫ナル場合ニ於テ口頭辯論ヲ要セサルモノニ限り裁判長ハ本章ノ申立ニ付キ裁判ヲ爲スコトヲ得

第七編 公示催告手續
第七百六十四條 請求又ハ權利ノ届出ヲナサン

ムルヲメノ裁判上ノ公示催告ハ其届出ヲナササルトキハ失權ヲ生スル效力ヲ以テ法律ニ定メタル場合ニ限り之ヲナスコトヲ得

公示催告手續ハ區裁判所之ヲ管轄ス

第七百六十五條 公示催告ノ申立ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲナスコトヲ得此申立ニ付テノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲナスコトヲ得

申立ヲ許ス可キトキハ裁判所ハ公示催告ヲ爲ス可ク其公示催告ニハ殊ニ左ノ諸件ヲ掲ク可シ

第一 申立人ノ表示

第二 請求又ハ權利ヲ公示催告期日マテニ届出ツ可キコトノ催告

第三 届出ヲ爲ササルニ因リ生ス可キ失權ノ表示

第四 公示催告期日ノ指定

第七百六十六條 公示催告ニ付テノ公告ハ裁判所ノ掲示板ニ掲示シ及ヒ官報又ハ公報ニ掲載

シテ之ヲナシ其他法律ニ別段ノ規定ヲ設ケサルトキハ第五百五十七條第三項ノ規定ニ從ヒテ之ヲナス

第七百六十七條 公示催告ヲ官報又ハ公報ニ掲載シタル日ト公示催告期日トノ間ニハ法律ニ別段ノ規定ヲ設ケサルトキハ少ナクモ二个月ノ時間ヲ存スルコトヲ要ス

第七百六十八條 公示催告期日ノ終リタル後ト雖モ除權判決前ニ届出ヲナスキハ適當ナル時間ニ之ヲナシタルモノト看做ス

第七百六十九條 除權判決ハ申立ニ因リテ之ヲナス

右判決前ニ詳細ナル探知ヲナスヘキ旨ヲ命スルコトヲ得

除權判決ノ申立ヲ却下スル決定及ヒ除權判決ニ付シタル制限又ハ留保ニ對シテハ即時抗告ヲナスコトヲ得

第七百七十條 申立人ノ申立ノ理由トシテ主張

シタル權利ヲ争フコトノ届出アリタルハ其事情ニ從ヒ届出テタル權利ニ付テノ裁判確定スルマテ公示催告手續ヲ中止シ又ハ除權判決ニ於テ届出テタル權利ヲ留保スヘシ

第七百七十一條 申立人カ公示催告期日ニ出頭セサルトキハ其申立ニ因リ新期日ヲ定ムヘシ

此申立ハ公示催告期日ヨリ六ヶ月ノ期間内ニ限リ之ヲナスコトヲ許ス

第七百七十二條 公示催告手續ヲ完結スルタメ新期日ヲ定メタルトキハ其期日ノ公告ヲナスコトヲ要セス

第七百七十三條 裁判所ハ除權判決ノ重要ナル旨趣ヲ官報又ハ公報ニ掲載シテ公告ヲナスコトヲ得

第七百七十四條 除權判決ニ對シテハ上訴ヲナスコトヲ得ス

除權判決ニ對シテハ左ノ場合ニ於テ申立人ニ對スル訴ヲ以テ催告裁判所ノ所在地ヲ管轄ス

號及第六號ニ掲ケタル不服申立ノ理由ノ一ニ

基キ訴ヲ起シ且原告カ右ノ日ニ其理由ヲ知ラ

カリシ場合ニ於テハ其期間ハ不服ノ理由ノ原告ニ知レタル日ヲ以テ始マル

除權判決ノ言渡ノ日ヨリ起算シテ五ヶ年ノ満了後ハ此訴ヲ起スコトヲ得ス

第七百七十六條 裁判所ハ第二百十條ノ條件ノ應セサルトキト雖モ數箇ノ公示催告ノ併合ヲ命スルコトヲ得

第七百七十七條 盜取セラレ又ハ紛失若クハ滅失シタル手形其商法ニ無効ト爲シ得ヘキコトヲ定メタル證書ノ無効宣言ノ爲ニ爲ス公示催告手續ニ付テハ以下數條ノ特別規定ヲ適用ス

此規定ハ法律上公示手續手續ヲ許ス他ノ證書ニ付キ其法律中ニ特別規定ヲ設ケサル限リハ之ヲ適用ス

第七百七十八條 無記名證券又ハ裏書ヲ以テ移轉シ得ヘシ且略式裏書ヲ付シタル證書ニ付テ

ル地方裁判所ニ不服ヲ申立ツルコトヲ得

第一 法律ニ於テ公示催告手續ヲ許ス場合ニアラサルトキ

第二 公示催告ニ付テノ公告ヲ爲サヌ又ハ法律ニ定メタル方法ヲ以テ公告ヲ爲サヌルハ

第三 公示催告ノ期間ヲ遵守セサルトキ

第四 判決ヲ爲ス判事カ法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セラレタルトキ

第五 請求又ハ權利ノ届出アリタルニ拘ハラズ判決ニ於テ其届出ヲ法律ニ從ヒ願ミサルハ

第六 第四百六十九條第一號乃至第五號ノ場合ニ於テ原狀回復ノ訴ヲ許ス條件ノ存スルトキ

第七百七十五條 不服申立ノ訴ハ一个月ノ不變期間内ニ之ヲ起ス可シ此期間ハ原告カ除權判決ヲ知リタル日ヲ以テ始マル然レモ前條第四

ハ最終ノ所持人公示催告手續ヲ申立ツル權アリ

此他ノ證書ニ付テハ證書ニ因リ權利ヲ主張シ得ヘキ者此申立ヲ爲ス權アリ

第七百七十九條 公示催告手續ハ證書ニ表示シタル履行地ノ裁判所之ヲ管轄ス若シ證書ニ其履行地ヲ表示セサルトキハ發行人カ普通裁判

判籍ヲ有スル地ノ裁判所之ヲ管轄シ其裁判所ナキハ發行人カ發行人ノ當時普通裁判籍ヲ有セシ地ノ裁判所之ヲ管轄ス

證書ヲ發行スル原因タル請求ヲ登記簿ニ記入シタルハ其物ノ所在地ノ裁判所ノ管轄ニ專屬ス

第七百八十條 申立人ハ申立ノ憑據トシテ左ノ手續ヲ爲ス可シ

第一 證書ノ謄本ヲ差出シ又ハ證書ノ重要ナル旨趣及ヒ證書ヲ十分ニ認知スルニ必要ナル諸件ヲ開示スルコト

百五十一

第二 證書ノ盜竊、紛失、滅失及ヒ公示催告

手續ヲ申立ツルコトヲ得ルノ理由タル事實ヲ疏明スルコト

第八百七十一條 公示催告中ニ公示催告期日ヲ權利ヲ裁判所ニ届出テ且ツ其證書ヲ提出ス可キ旨ヲ證書ノ所持人ニ催告ス可ク又失權トシテ證書ノ無効宣言ヲ爲ス可キ旨ヲ戒示ス可ク

第七百八十二條 告示催告ノ公告ハ裁判所ノ掲示板ニ揭示シ且官報又ハ官報ニ掲載シ及ヒ新聞紙ニ三回掲載シテ之ヲ爲ス
公示催告裁判所ノ所在地ニ取引アルトキハ取引所ニモ亦此公告ヲ揭示ス可ク

第七百八十三條 公示催告ヲ官報又ハ公報ニ掲載シタル日ト公示催告期日トノ間ニハ少ナクトモ六個月ノ時間ヲ存スルコトヲ要ス
第七百八十四條 除權判決ニ於テハ證書ヲ無効ナリト宣言ス可ク

百五十二

除權判決ノ重要ナル旨趣ハ官報又ハ公報ヲ以テ之ヲ公告ス可ク

不服申立ノ訴ニ因リ判決ヲ以テ無効宣言ヲ取消シタルトキハ其判決ノ確定後官報又ハ公報ヲ以テ之ヲ公告ス可ク

第七百八十五條 除權判決アリタルトキハ其申立人ハ證書ニ因リ義務ヲ負擔スル者ニ對シテ證書ニ因レル權利ヲ主張スルコトヲ得

第八編 仲裁手續
第七百八十六條 一名又ハ數名ノ仲裁人ヲシテ争ノ判斷ヲ爲サシムル合意ハ當事者カ係争物ニ付キ和解ヲ爲ス權利アリ協合ニ限リ其效力ヲ有ス

第七百八十七條 將來ノ争ニ關スルモ仲裁契約ハ一定ノ權利關係及ヒ其關係ヨリ生スル争ニ關セサルトキハ其效力ヲ有セス
第七百八十八條 仲裁ニ契約仲裁人ノ選定ニ關スル定ナキトキハ當事者ハ各一名ノ仲裁人ヲ

選定ス

第七百八十九條 當事者ノ雙方カ仲裁人ヲ選定スル權利ヲ有スルトキハ先コ手續ヲ爲ス一方ハ書面ヲ以テ相手方ニ其選定シタル仲裁人ヲ指示シ且七日ノ期間内ニ同一ノ手續ヲ爲ス可キ旨ヲ催告ス可ク

右期間ヲ徒過シタルトキハ管轄裁判所ハ先コ手續ヲ爲ス一方ノ申立ニ因リ仲裁人ヲ選定ス

第七百九十條 當事者ノ一方ハ相手方ニ仲裁人選定ノ通知ヲ爲シタル後ハ相手方ニ對シテ其選定ニ拘束セラル

第七百九十一條 仲裁契約ヲ以テ選定シタルコト非サル仲裁人カ死亡シ又ハ其他ノ理由ニ因リ欠缺シ又ハ其職務ノ引受若シハ施行ヲ拒ミタルトキハ其仲裁人ヲ選定ス可シ當事者ハ相手方ノ催告ニ因リ七日ノ期間内ニ他ノ仲裁人ヲ選定ス可シ此期間ヲ徒過シタルトキハ管轄裁判所ハ其催告ヲ爲シタル者ノ申立ニ因リ仲裁

ハヲ選定ス可ク

第七百九十二條 當事者ハ判事ヲ忌避スル權利アルト同一ノ理由及ヒ條件ヲ以テ仲裁人ヲ忌避スルコトヲ得

此他仲裁契約ヲ以テ選定シタルコト非サル仲裁人カ其義務ノ履行ヲ不當ニ遅延スルトキハ亦之ヲ忌避スルコトヲ得

無能力者、聾者、啞及ヒ公權ノ剝奪又ハ停止中ノ者ハ之ヲ忌避スルコトヲ得

第七百九十三條 仲裁契約ハ當事者ノ合意ヲ以テ左ノ場合ノ爲メ豫定ヲ爲サ、リシトキハ其效力ヲ失フ

第一 契約ニ於テ一定人ヲノ裁人ニ選定シ其仲裁人中ノ或ル人カ死亡シ又ハ其他ノ理由ニ因リ欠缺シ又ハ其職務ノ引受ヲ拒ミ又ハ仲裁人ノ取結ヒタル契約ヲ解キ又ハ其義務ノ履行ヲ不當ニ遅延シタルトキ

第二 仲裁人カ其意見ノ可否同數ナル旨ヲ
當事者ニ通知シタルトキ

第七百九十四條 仲裁人ハ仲裁判斷前ニ當事者
ヲ審訊シ且必要トスル限リハ争ノ原因タル事
件關係ヲ探知ス可シ

仲裁判断手續ニ付キ當事者ノ合意アラサル場合
ニ於テハ其手續ハ仲裁人ノ意見ヲ以テ之ヲ定
ム

第七百九十五條 仲裁人ハ其面前ニ任意ニ出頭
スル證人及ヒ鑑定人ヲ訊問スルコトヲ得
仲裁人ハ證人又ハ鑑定人ヲシテ宣誓ヲ爲サシ
ムル權ナシ

第七百九十六條 仲裁人ノ必要ト認ムル判斷上
ノ行爲ニシテ仲裁人ノ爲スコトヲ得サルモノ
ハ當事者ノ申立ニ因リ管轄裁判所之ヲ爲ス可
シ但其申立ヲ相當ト認メタルトキニ限ル
證人又ハ鑑定人ニ供述ヲ命ジタル裁判所ハ證
據ヲ述フルコト又ハ鑑定ヲ爲スコトヲ拒ミタ
ル

ル場合ニ於テ必要ナル裁判ヲモ亦爲ス權アリ
第七百九十七條 仲裁人ハ當事者カ仲裁手續ヲ
許ス可ラサルコトヲ主張スルトキ殊ニ法律
上有効ナル仲裁契約ノ成立セサルコト仲裁契
約カ判斷ス可キ争ニ關係セサルコト又ハ仲裁
人カ其職務ヲ施行スル權ナキコトヲ主張スル
トキト雖モ裁判手續ヲ續行シ且裁判斷ヲ爲ス
コトヲ得

第七百九十八條 數名ノ仲裁人カ仲裁判斷ヲ爲
ス可キトキハ過半数ヲ以テ其判斷ヲ爲ス可シ
但仲裁契約ニ別段ノ定アルトキハ此限ニ在ラ
ス

第七百九十九條 仲裁判斷ニハ其作リタル年月
日ヲ記載シテ仲裁人之ニ署名捺印ス可シ
仲裁人ノ署名捺印シタル判斷ノ正本ハ之ヲ當
事者ニ送達シ其原本ハ送達ノ證書ヲ添ヘテ管
轄裁判所ノ書記課ニ之ヲ預ケ置ク可シ
第八百條 仲裁判斷ハ當事者間ニ於テ確定シタ
ル

ル裁判所ノ判決ト同一ノ效力ヲ有ス

第八百一條 仲裁判斷ノ取消ハ左ノ場合ニ於テ
之ヲ申立ツルコトヲ得

第一 仲裁手續ヲ許ス可カラサリシトキ

第二 仲裁判斷カ法律上禁止ノ行爲ヲ爲ス
可キ旨ヲ當事者ニ言渡シタルトキ

第三 當事者カ仲裁手續ニ於テ法律ノ規定
ニ從ヒ代理セラレサリシトキ

第四 仲裁手續ニ於テ當事者ヲ訊審セサリ
シトキ

第五 仲裁判斷ニ理由ヲ付セサリシトキ

第六 第四百六十九條第一號乃至第五號ノ
場合ニ於テ原狀回復ノ訴ヲ許ス條件ノ存
スルトキ

仲裁判斷ノ取消ハ當事者カ別段ノ合意ヲ爲シ
タルトキハ本條第四號及ヒ第五號ニ掲ケタル
理由ニ因リ之ヲ爲スコトヲ得ス

第八百二條 仲裁判斷ニ因リ爲ス強制執行ハ執

行判決ヲ以テ其許ス可キコトヲ言渡シタルト
キニ限リ之ヲ爲スコトヲ得

右執行判決ハ仲裁判斷ノ取消ヲ申立ツルコト
ヲ得ヘキ理由ノ存スル限リハ之ヲ爲スコト得ス

第八百三條 執行判決ヲ爲シタル後ハ仲裁判斷
ノ取消ハ第八百一條第六號ニ掲ケタル理由ニ
因リテノミ之ヲ申立ツルコトヲ得但當事者カ
自己ノ過失ニ非スシテ前手續ニ於テ取消ノ理
由ヲ主張スル能ハサリシコトヲ疎明シタルト
キニ限ル

第八百四條 仲裁判斷取消ノ訴ハ前條ノ場合ニ
於テハ一个月ノ不變期間内ニ之ヲ起ス可シ
右期間ハ當事者カ取消ノ理由ヲ知リタル日ヲ
以テ始マル然レトモ執行判決ノ確定前ニハ始
マラサルモノトス
但執行判決ノ確定ト爲リタル日ヨリ起算シテ
五個年ノ滿了後ハ此訴ヲ起スコトヲ許サス仲
裁判斷ヲ取消ストキハ執行判決ノ取消ヲモ亦

言渡ス可シ

第八百五條 仲裁人ヲ選定シ若クハ忌避スルコト、仲裁契約ノ消滅スルコト、仲裁手續ヲ許ス可カラサルコト、仲裁判斷ヲ取消スコト又ハ執行判決ヲ爲スコトヲ目的トスルコト訴付テハ仲裁契約ニ指定シタル區裁判所又ハ地方裁

百五十六

判所之ヲ管轄シ其指定ナキトキハ請求ヲ裁判上主張スル場合ニ於テ管轄ヲ有ス可キ區裁判所又ハ地方裁判所之ヲ管轄ス
前項ニ依リ管轄ヲ有スル裁判所數箇アルトキハ當事者又ハ仲裁人カ最初ニ關係セシメタル裁判所之ヲ管轄ス

民事訴訟法

朕民事訴訟法ノ補則トシテ婚姻事件養子縁組事件及ヒ禁治産事件ニ關スル訴訟規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十六年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

御名 御璽

明治二十三年十月六日

内閣總理大臣 伯爵 山縣 有朋
司法 大臣 伯爵 山田 顯義

法律第四百號

婚姻事件養子縁組事件及ヒ禁治産事件ニ關スル訴訟規則

第一章 婚姻事件及ヒ養子縁組事件ノ訴訟手續

第一條 婚姻ノ無效、離婚又ハ同居ヲ目的トス

ル訴訟ハ夫カ普通裁判籍ヲ有スル地ノ地方裁判所ノ管轄ニ專屬ス
縁組ノ無效又ハ離縁ヲ目的トスル訴訟ハ養子ヲ爲シタル者カ普通裁判籍ヲ有スル地ノ地方裁判所ニ專屬ス

婚姻又ハ縁組ノ不成立ニ關ズル訴訟ハ被告カ

普通裁判籍ヲ有スル地ノ地方裁判所ニ專屬ス

第二條 婚姻事件及ヒ縁組事件ニ付テハ檢事ハ口頭辯論ニ立會フノ外受命判事若クハ受託判事ノ面前ニ於テ爲ス審問ニモ亦立會フコトヲ得檢事ニハ職權ヲ以テ總テノ期日ヲ通知ス可シ

檢事ハ婚姻又ハ縁組ヲ維持スル爲メ新ナル事實及ヒ證據方法ヲ提出スルコトヲ得

調書ニハ檢事ノ氏名及ヒ其申立ヲ記載ス可シ
第三條 婚姻ノ不成立、無效、離婚及ヒ同居訟訴ハ之ヲ併合スルコトヲ得縁組ノ不成立、無效及ヒ縁組ノ訴モ亦同シ

婿養子縁組ノ場合ニ於テハ婚姻ノ不成立、無效、離婚又ハ同居ノ訴ニ縁組ノ不成立、無效又ハ縁組ノ訴ヲ併合スルコトヲ得

本條ノ訴ニ他ノ訴ヲ併合シ及ヒ他ノ種類ノ反訴ヲ提起スルコトヲ得ス但本條ノ訴ノ原因タル事實ヨリ生スル損害賠償及ヒ養料ノ請求ニ

付テハ此限ニ在ラス

第四條 判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結ニ至ルマテハ訴ニ於テ提出シタル以外ノ理由ヲ主張スルコトヲ得

第五條 婚姻ノ無效若クハ離婚ノ訴又ハ縁組ノ訴ニ付キ棄却ノ言渡ヲ受ケタル原告ハ前訴訟ニ於テ又ハ訴ノ併合ニ因リ主張スルヲ得ヘカリシ事實ヲ獨立ナル訴ノ理由トシテ主張スルコトヲ得ス被告ニ在テハ反訴ノ理由ト爲スヲ得ヘカリシ事實ニ付テモ亦同シ

第六條 民事訴訟法第百一十一條第二項、第三項第百一十條及ヒ第三百二十五條乃至第三百四十一條ノ規定ハ之ヲ適用セス

第七條 口頭辯論ノ期日ニ被告カ出頭セサルトキハ原告ノ申立ニ因リ新期日ヲ定ム可シ被告ノ在廷セサル場合ニ於テ期日ヲ定メタルトキハ其都度被告ヲ呼出ス可シ

闕席判決ハ本條ノ手續ノ效アラサルトキニ限

リ被告ニ對シテ之ヲ爲スコトヲ得

第八條 裁判所ハ原告若クハ被告ノ自身出頭ヲ命ジテ其原告若クハ被告又ハ其相手方若クハ檢事ノ主張シタル事實ニ付キ原告若クハ被告ヲ審訊スルコトヲ得

審訊ヲ受ク可キ原告若クハ被告カ受訴裁判所ニ出頭スル能ハサルトキハ又ハ受訴裁判所ノ所在地ヨリ遠隔ノ地ニ在ルトキハ受命判事若クハ受託判事ニ依リ審訊ヲ爲スコトヲ得

出頭セサル原告若クハ被告ニ對シテハ審訊期日ニ出頭セサル證人ニ對スル規定ヲ適用ス

第九條 和諧ノ調フ可キ見込アルトキハ裁判所ハ職權ヲ以テ離婚又ハ縁組ノ訴ニ關スル手續ヲ長クトモ一个年間中止スルコトヲ得

第十條 裁判所ハ婚姻又ハ縁組ヲ維持スル爲メ當事者ノ提出セサル事實ヲモ斟酌シ且職權ヲ以テ證據調ヲ爲スコトヲ得但裁判前ニ當事者ヲ審訊ス可シ

二

第十一條 婚姻及ヒ縁組ノ不成立若クハ無效又ハ離婚若クハ縁組ヲ言渡ス判決ハ職權ヲ以テ之ヲ當事者ニ送達ス可シ

第十二條 婚姻事件及ヒ縁組事件ノ判決ニ付テハ假執行ノ宣言ヲ付スルコトヲ得ス

第十三條 假處分ニ關シ殊ニ配偶者ノ一方又ハ養子カ住家ヲ去ルノ許可及ヒ養料ノ供給ヲ申立テタル場合ニ於テハ民事訴訟法第七百五十六條乃至第七百六十三條ノ規定ヲ準用ス

第十四條 婚姻及ヒ縁組ノ不成立若クハ無效又ハ離婚若クハ縁組ヲ言渡シタル判決確定シタルトキハ裁判所ノ揭示板ニ揭示シテ之ヲ公告ス可シ

第十五條 民法ノ規定ニ從ヒ檢事ノ職權ヲ以テ起スコトヲ得ヘキ無効ノ訴ニ付テハ以下數條ニ定メタル特別ノ規定ニ從フ

第十六條 檢事又ハ第三者ヨリ訴ヲ起ストキハ夫婦又ハ養親子ヲ以テ相手方ト爲ス

三

夫婦又ハ養親子ノ一方ヨリ訴ヲ起ストキハ他
ノ一方ヲ以テ相手方ト爲ス

第十七條 檢事ハ自ラ訴ヲ起サルトキト雖モ

訴訟ヲ進行シ殊ニ獨立シテ申立ヲ爲シ及ヒ上
訴ヲ爲スコトヲ得

第十八條 檢事上訴ヲ爲シタルトキハ上訴手續

ニ於テ前審ノ當事者雙方ヲ相手方ト看做ス。
檢事カ訴訟人タル場合ニ於テ當事者ノ一方カ
上訴ヲ爲シタルトキハ上訴手續ニ於テ他ノ一
方ト檢事トヲ相手方ト看做ス

第十九條 訴訟人タル檢事カ敗訴スル場合ニ於

テハ民事訴訟法第一編第二章第五節ノ規定ニ
從ヒ勝訴者タル相手方ニ生シタル費用ハ國庫
ノ負擔トス

第二章 禁治産事件ノ訴訟手續

第二十條 禁治産ノ申立ハ治産ヲ禁セラル可キ
者カ普通裁判籍ヲ有スル地ノ區裁判所ノ管轄
ニ專屬ス

四

第二十一條 申立ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲
スコトヲ得其申立ニハ申立ノ理由タル事實及

ヒ證據方法ノ表示ヲ包含ス可シ

第二十二條 裁判所ハ申立ニ表示シタル事實及
ヒ證據方法ニ依リ職權ヲ以テ心神喪失ノ常況
ニ在ルヤ否ヲ定ムル爲メニ必要ナル探知ヲ爲
シ且適當トスル證據方法ヲ調フ可シ

裁判所ハ訴訟手續ヲ開始スルノ前診斷書ヲ提
出ヲ命スルコトヲ得

檢事ハ總テノ場合ニ於テ申立ヲ爲シテ訴訟手
續ヲ進行スルコトヲ得

證人及ヒ鑑定人ノ訊問及ヒ宣誓ニ付テハ民事
訴訟法第二編第一章第六節及ヒ第七節ノ規定
ヲ適用ス

第二十三條 裁判所ハ公開セサル法廷ニ於テ一

人又ハ數人ノ鑑定人ノ立會ヲ以テ治産ヲ禁セ
ラル可キ者ヲ訊問ス可シ此訊問ハ受託判事ヲ
シテ之ヲ爲サシムルコトヲ得

右訊問ハ裁判所ノ意見ニ從ヒ實施シ難ク又ハ

裁判ノ爲メニ必要ナラス又ハ治産ヲ禁セラル
可キ者ノ健康ニ害アリトスルトキハ之ヲ爲サ
サルコトヲ得

第二十四條 禁治産ノ宣言ハ決定ヲ以テ之ヲ爲

ス

右宣言ハ豫メ治産ヲ禁セラル可キ者ノ心神喪
失ノ常況ニ付キ一人又ハ數人ノ鑑定人ヲ訊問
シタル後ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第二十五條 裁判所ハ治産ヲ禁セラル可キ者ノ

身體ノ監護又ハ財産ノ保存ニ付キ必要ナル處
分ヲ命スルコトヲ得

第二十六條 訴訟手續ノ費用ハ治産ヲ禁シタル

場合ニ於テハ禁治産者之ヲ負擔シ其他ノ場合
ニ於テハ禁治産ノ申立ヲ爲シタル者之ヲ負擔
ス可シ但檢事カ申立ヲ爲シタルトキハ國庫之
ヲ負擔ス

第二十七條 禁治産ニ付キ爲シタル決定ハ職權

ヲ以テ申立人及ヒ檢事ニ之ヲ送達ス可シ

第二十八條 禁治産ヲ宣言スル決定ハ法律上ノ
後見人アルトキハ其後見人ニ職權ヲ以テ之ヲ
通知ス可シ

第二十九條 申立人及ヒ檢事ハ禁治産ノ申立ヲ
却下スル決定ニ對シ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

抗告裁判所ノ訴訟手續ニハ第二十二條ノ規定
ヲ適用ス

第三十條 禁治産ヲ宣言スル決定ニ對シテハ一
个月ノ期間内ニ訴ヲ以テ不服ヲ申立ツルコト
ヲ得

訴ヲ起スノ權利ハ禁治産者、其後見人及ヒ民
法ノ規定ニ從ヒ禁治産ノ申立ヲ爲スノ權ヲ有
スル者ニ屬ス

右期間ハ禁治産者ニ對シテハ禁治産ヲ知リテ
ル日ヲ以テ始マリ其他ノ者ニ對シテハ後見人
ノ選定ヲ以テ始マリ又法律上ノ後見ノ場合ニ
於テハ其決定ヲ法律上ノ後見人ニ通知スルヲ

五

以テ始マル

第三十一條 訴ハ裁判所ノ所在地ヲ管轄スル地方裁判所ノ管轄ニ專屬ス

第三十二條 禁治産ニ對シテ不服ヲ申立ル訴ニハ他ノ訴ヲ併合スルコトヲ得ス

反訴ハ之ヲ爲スコトヲ許サス

第三十三條 禁治産者カ訴ヲ起サントスルトキハ其申立ニ因リ受訴裁判所ノ裁判長ハ訴訟代理人トシテ辯護士ヲ之ニ附添ハシム可シ

第三十四條 第六條及ヒ第七條ノ規定ハ本章ニモ之ヲ準用ス

第三十五條 第二十三條及ヒ第二十四條第二項ノ規定ハ不服申立ノ訴ニ付テハ訴訟手續ニ之ヲ準用ス

裁判所ハ區裁判所ニ於テ爲シタル鑑定ヲ十分ナリト認ムルトキ鑑定人ノ訊問ヲ爲ササルコトヲ得

第三十六條 不服申立ノ訴ヲ理由アリトスルト

六

キハ禁治産ヲ宣言シタル決定ヲ取消ス可シ然レトモ此取消ノ判決ハ後見人ノ既ニ爲シタル行爲ノ效力ニ影響ヲ及ボサス

第三十七條 不服申立ノ訴ニ關スル訴訟費用ニ付テハ第二十六條ノ規定ヲ準用ス

第三十八條 受訴裁判所ハ禁治産事件ニ付キ爲シタル總テノ終局判決ヲ區裁判所ニ通知ス可シ

第三十九條 禁治産ノ解止ニ付テハ第二十五條ヲ除クノ外本章ノ規定ヲ準用ス

第四十條 準禁治産ニ付テハ左ノ特別ナル規則ヲ除クノ外本章ノ規定ヲ準用ス

第二十二條第二項ハ浪費者ニ之ヲ適用セス又同條第三項、第二十五條、第三十三條及ヒ檢事ニ關スル規定ハ總テノ準禁治産者ニ之ヲ適用セス

準禁治産ヲ解止スル決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

朕刑事訴訟法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治二十三年十月六日

農商務大臣	文部大臣	海軍大臣	外務大臣	遞信大臣	陸軍大臣	大藏大臣	司法大臣	內務大臣	內閣總理大臣
		子爵	子爵	伯爵	伯爵	伯爵	伯爵	伯爵	伯爵
陸奥宗光	芳川顯正	樺山資紀	青木周藏	後藤象二郎	大山巖	松方正義	山田顯義	西郷從道	山縣有朋

法律第九十六號

刑事訴訟法目錄

- 第一編 總則
 - 第二章 裁判所
 - 第一章 裁判所ノ管轄
 - 第二章 裁判所職員ノ除斥及ヒ忌避、回避
 - 第三編 犯罪ノ捜査、起訴及ヒ豫審
 - 第一章 捜査
 - 第一節 告訴及ヒ告發
 - 第二節 現行犯罪
 - 第二章 起訴
 - 第三章 豫審
 - 第一節 令狀
 - 第二節 密室監禁
 - 第三節 證據
 - 第四節 被告人ノ訊問及ヒ對質
 - 第五節 檢證、搜索及ヒ物件差押
 - 第六節 證人訊問
 - 第七節 鑑定
- 第八節 現行犯ノ豫審
- 第九節 保釋
- 第十節 豫審終結
- 第四編 公判
 - 第一章 通則
 - 第二章 區裁判所公判
 - 第三章 地方裁判所公判
 - 第五編 上訴
 - 第一章 通則
 - 第二章 控訴
 - 第三章 上告
 - 第四章 抗告
 - 第六編 再審
 - 第七編 大審院ノ特別權限ニ屬スル訴訟手續
 - 第八編 裁判所執行、復權及ヒ特赦
 - 第一章 裁判執行
 - 第二章 復權
 - 第三章 特赦

刑事訴訟法

第一編 總則

- 第一條 公訴ハ犯罪ヲ證明シ刑ヲ適用スルコトヲ目的トスルコトヲ法律ニ定メタル區別ニ從ヒ檢事之ヲ行フ
- 第二條 私訴ハ犯罪ニ因リ生シタル損害ノ賠償、贓物ノ返還ヲ目的トスルモノニシテ民法ニ從ヒ被害者ニ屬ス
- 第三條 公訴ハ被害者ノ告訴ヲ待テ起ルモノニ非ス又々告訴私訴ノ拋棄ニ因テ消滅スルモノニ非ス但法律ニ於テ特ニ定メタル場合ハ此限ニ在ラス
- 第四條 私訴ハ其金額ノ多寡ニ拘ハラズ公訴ニ付キ第二審ノ判決アルマテ何時ニテモ其公訴ニ附帶シテ之ヲ爲スコトヲ得
- 第三者ハ民事訴訟法ノ規定ニ從ヒ公訴附帶ノ私訴ニ參加スルコトヲ得
- 第五條 被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタリ

ト雖モ民法ニ從ヒ被害者ヨリ賠償返還ヲ要ムル妨礙ト爲ルコトナカル可シ

- 第六條 公訴ヲ爲ス權ハ左ノ事項ニ因テ消滅ス
 - 第一 被告人ノ死去
 - 第二 告訴ヲ待テ受理ス可キ事件ニ付テハ告訴ノ拋棄
 - 第三 確定判決
 - 第四 犯罪ノ後頒布シタル法律ニ因リ其刑ノ廢止
 - 第五 大赦
 - 第六 時效
- 第七條 私訴ヲ爲ス權ハ左ノ事項ニ因テ消滅ス
 - 第一 拋棄又ハ和解
 - 第二 確定判決
 - 第三 時效
- 第八條 公訴ノ時效ハ左ノ期間ヲ經過スルニ因テ成就ス
- 第一 違警罪ハ六月

第二 輕罪ハ三年
第三 重罪ハ十年

第九條 私訴ノ時効ハ被害者無能力ナルトキ又ハ公訴ニ附帶セスシテ其訴ヲ爲シタルトキト雖モ公訴ノ時効ト其期間チ同クス
公訴ニ付キ既ニ刑ノ言渡アリタルトキハ民法ニ定メタル時効ノ例ニ從フ

第十條 公訴、私訴ノ時効ハ犯罪ノ日ヨリ其期間チ起算ス但繼續犯罪ニ付テハ其最終ノ日ヨリ起算ス

第十一條 時効ハ起訴、豫審又ハ公判ノ手續アリタルニ因リ其期間ノ經過チ中斷ス其未タ發覺セサル正犯、從犯及ヒ民事擔當人ニ付テモ亦同シ
時効ノ經過チ中斷シタルトキハ起訴、豫審又ハ公判ノ手續チ止メタル日ヨリ更ニ其期間チ起算ス

第十二條 起訴、豫審又ハ公判ノ手續其規定ニ

四

背キタルニ因リ無効ニ屬スルトキハ時効ノ經過チ中斷スル效ナカル可シ但裁判所ノ管轄達ナルニ因リ其手續ノ無効ニ屬スルトキハ此限ニ在ラス

第十三條 被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタル場合ニ於テ其訴訟ノ原由告訴人、告發人又ハ民事原告人ノ惡意若クハ重過失ニ出テタルトキハ是等ノ者ニ對シ損害ノ償ヲ要ムルコトヲ得
被告人刑ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ告訴人、告發人又ハ民事原告人ヨリ惡意若クハ重過失ニ因リ其犯罪ニ付キ過實ノ申立ヲ爲シタルトキ亦同シ

民事原告人上訴ヲ爲シ敗訴シタルトキハ被告人其上訴ニ因リ生シタル損害ノ償ヲ要ムルコトヲ得
要償ノ訴ハ本案ノ判決アルマテ何時ニテモ其裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

第十四條 被告人無罪ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ

判事、檢事、裁判所書記、執達吏、司法警察官又ハ巡查、憲兵卒ニ對シ要償ノ訴ヲ爲スコトヲ得大但是等ノ官吏被告人ニ對シ故意ヲ以テ損害ヲ加ヘ又ハ刑法ニ定メタル罪ヲ犯シタル場合ハ此限ニ在ラス

第十五條 此法律ニ於テ期間チ計算スルニ時ヲ以テスルモノハ即時ヨリ起算シ日ヲ以テスルモノハ初日ヲ算入セス若シ最終ノ日休暇ニ當ルトキハ期間ニ算入ス可カラズ但時効ノ期間ハ此限ニ在ラス
一日ト稱スルハ二十四時ヲ以テシ一月ト稱スルハ三十日ヲ以テシ一年ト稱スルハ曆ニ從フ

第十六條 此法律ニ定メタル期間ニハ海陸路八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ加フ八里ニ滿サルモノト雖モ三里以上ナルトキ亦同シ
島嶼又ハ外國ニ付テハ裁判所ニ於テ特ニ附加期間チ定ムルコトヲ得

第十七條 此法律ニ於テ訴訟ヲ爲スニ付キ定メタル期間チ經過シタルトキハ特別ノ場合ヲ除ク外其訴訟ヲ爲ス權ヲ失フ可シ

第十八條 訴訟關係人ハ裁判所所在ノ地ニ住セサルトキハ其地ニ假住所ヲ定メ裁判所ニ届出ツ可シ否ヲサルトキハ書類ノ送達ナシト雖モ異議ヲ申立ルコトヲ得ス

第十九條 書類ノ送達ハ此法律ニ於テ別ニ規定アラサルトキハ民事訴訟法ノ規定ヲ準用ス

第二十條 官吏、公吏ノ作ル可キ書類ハ其所屬官署、公署ノ印ヲ用ヒ年月日及ヒ場所ヲ記載シテ署名捺印シ每葉ニ契印ス可シ若シ官署、公署ノ印ヲ用ユルコト能ハサル場合ニ於テハ其事由ヲ記載ス可シ此規定ニ背キタルトキハ其書類ノ效ナカル可シ
官吏、公吏ニ非サル者ノ作ル可キ書類ニハ本人自ラ署名捺印ス可シ若シ署名捺印スルコト能ハサルトキハ官吏、公吏ノ面前ニ於テ作リ

タル場合ヲ除ク外立會人代署シ其事由ヲ記載ス可シ

第二十一條 官吏其他何人ニ限ラズ訴訟ニ關スル書類ノ原本、正本又ハ謄本ヲ作ルニ付キ文字ヲ改竄ス可カラズ若シ挿入、削除及ヒ欄外ノ記入アルトキハ之ニ認印ス可シ文字ヲ削除スルトキハ之ヲ讀得ヘキ爲メ字體ヲ存シ其數ヲ記載ス可シ此規定ニ背キタルトキハ其變更増減ノ效ナカル可シ

第二十二條 此法律ハ頒布以前ニ係ル犯罪ニモ亦之ヲ適用ス

頒布以前ニ爲シタル訴訟手續當時ノ法律ニ背カサルトキハ其效アリトス

第二十三條 此法律ハ陸海軍ニ關スル法律ヲ以テ處分ス可キ者ニ適用スルコトヲ得ス

第二十四條 此法律ニ於テ親屬ト稱スルハ刑法第百十四條第百十五條ノ規定ニ從フ

第二編 裁判所

第一章 裁判所ノ管轄

第二十五條 犯罪ノ種類ニ關スル裁判所ノ管轄ハ裁判所構成法ノ規定ニ從フ

管轄ヲ異ニスル數箇ノ犯罪ニ付キ同時ニ同一ノ被告人ニ對シ訴アリタルトキハ上級ノ裁判所併セテ之ヲ管轄ス

第二十六條 同等ノ裁判所ニ於テハ犯罪ノ地又ハ被告人所在ノ地ノ裁判所ヲ以テ豫審及ヒ公判ノ管轄ナリトス

第二十七條 數箇ノ裁判所ノ管轄ナル場合ニ於テハ其中ニテ最初豫審又ハ公判ニ著手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

第二十八條 從犯ハ正犯ヲ管轄スル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

數箇ノ裁判所ノ管轄ニ屬スル正犯數名アルトキハ其中ニテ最初豫審又ハ公判ニ著手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

裁判所構成法第五十條第二號ニ記載シタル皇

族ノ犯罪ニ付テハ其正犯、從犯ハ身分ノ如何ヲ問ハズ大審院ニ於テ之ヲ管轄ス

第二十九條 外國ニ在テ犯シタル罪本邦ノ法律ニ依リ處斷ス可キモノニシテ内地ニ於テ被告ハ逮捕シタルトキハ逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス又外國ヨリ送致シタルトキハ送致ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

第三十條 海般内ノ犯罪ニ付テハ定繫港又ハ犯罪後最初ニ著船シタル地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

第三十一條 管轄裁判所ノ指定ニ付キ申請ヲ爲ス場合及ヒ其決定ヲ爲ス裁判所ハ裁判所構成法第十條ノ規定ニ從フ

第三十二條 管轄裁判所ノ指定ニ付テノ申請ハ檢事其他訴訟關係人ヨリ之ヲ爲スコトヲ得

大審院ニ於テ管轄裁判所ヲ指定ス可キ場合ニ

於テハ檢事總長ハ司法大臣ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其申請ヲ爲スコトヲ得

第三十三條 管轄裁判所ノ指定ニ付キ申請ヲ爲サントスル者ハ申請ニ付管轄權ヲ有スル裁判所ニ其趣意書ヲ差出ス可シ

第三十四條 犯罪ノ性質、被告人ノ身分、員數、地方ノ民心其他重大ナル事情ニ由リ裁判ニ對シ紛擾又ハ危險ヲ生ズル恐アルトキハ公安ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移スコトヲ得

第三十五條 公安ノ爲メ裁判管轄ヲ移ス申請ハ司法大臣ノ命ニ因リ大審院檢事總長ヨリ其院ニ之ヲ爲ス可シ

大審院ニ於テハ訴訟關係人ノ申立ヲ聽クコトナリ其申請ヲ決定スヘシ

第三十六條 被告人ノ身分、地方ノ民心又ハ訴訟ノ模様ニ因リ裁判ノ公平ヲ維持スルコト能

ハサル恐アルトキハ嫌疑ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移スコトヲ得

第三十七條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移ス申請ハ管轄裁判所ノ檢事其他訴訟關係人ヨリ上級裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

民事原告ハ嫌疑アル裁判所ニ私訴ヲ爲シ又被告人其裁判所ニ於テ異議ノ申立ナクシテ本案ニ付キ辯論ヲ爲シタルトキハ前項ノ申請ヲ爲スコトヲ得ス

第三十八條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移ス申請ヲ爲スニハ其趣意書ニ一通ヲ原裁判所ニ差出ス可シ裁判所書記ハ速ニ一通ヲ相手方ニ送達シ相手方ハ其送達アリタルヨリ三日内ニ答辯書ヲ差出スコトヲ得

裁判所ニ於テ前項ノ申請ヲ受ケタルトキハ其訴訟手續ヲ停止ス可シ

第三十九條 前條ノ申請ニ付キ管轄權ヲ有スル裁判所ニ於テハ書類ニ依リ其申請ヲ決定ス可

其他訴訟關係人ヨリ之ヲ忌避スルコトヲ得

第四十二條 忌避ノ申請及ヒ其裁判ニ付テハ民事訴訟法第三十四條乃至第三十八條ノ規定ニ從フ

第四十三條 忌避ノ申請アリタルトキハ公判ニ付テハ其辯論ヲ中止ス可シ豫審ニ付テハ仍ホ其處分ヲ繼續ス可シ但急速ヲ要セサル事件ニ付テハ豫審手續ヲ中止スルコトヲ得

第四十四條 判事自ラ第四十條ニ定メタル理由アルコトヲ認メ又ハ回避ス可キモノト思料シタルトキハ忌避申請ノ管轄裁判所ニ回避ノ申立ヲ爲ス可シ

其裁判所ニ於テハ回避ノ申立ヲ裁判ス可シ

第四十五條 本章ノ規程ハ裁判所書記ニモ之ヲ準用ス但其裁判ハ書記所屬裁判所之ヲ爲ス可

第三編 犯罪ノ捜査、起訴及ヒ豫審
第一章 捜査

第二章 裁判所職員ノ除斥及ヒ忌避、回避

第四十條 判事ハ左ノ場合ニ於テ法律ニ依リ其職務ノ執行ヨリ除斥セラル可シ

- 第一 判事被害者ナルトキ
- 第二 判事又ハ其配偶者ト被告人、被害者又ハ是等ノ者ノ配偶者ト親屬ナルトキ但姻族ニ付テハ婚姻ノ解除シタルトキト雖モ亦同シ

第三 判事其事件ニ付キ證人、鑑定人ト爲リタルトキ又ハ被告人若クハ被害者ノ法律上代理人ナルトキ

第四 判事其事件ノ豫審終結ニ干與シ又ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ノ前審ニ干與シタルトキ

第四十一條 判事法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セラルル場合及ヒ偏頗ナル裁判ヲ爲スコト疑フニ足ル可キ情況アル場合ニ於テハ檢事

第四十六條 檢事ハ後ニ記載シタル告訴、告發、

現行犯其他ノ理由ニ因リ犯罪アルコトヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタルトキハ其證據及ヒ犯人ヲ捜査ス可シ

第四十七條 警視總監及ヒ地方長官ハ各其管轄地内ニ於テ司法警察官トシテ犯罪ヲ捜査スルニ付キ地方裁判所檢事ト同一ノ權ヲ有ス但東京府知事ハ此限ニ在ラス

左ニ記載シタル官吏、公吏ハ檢事ノ補佐トシテ其指揮ヲ受ケ司法警察官トシテ犯罪ヲ捜査ス可シ

- 第一 警視警部長、警部、警部補
- 第二 憲兵將校、下士
- 第三 嶋司
- 第四 郡長
- 第五 林務官
- 第六 市町村長

第四十八條 海船内ノ犯罪ニ付テハ船長ニ於テ

司法警察ノ職務ヲ行フ可シ

第一節 告訴及ヒ告發

第四十九條 何人ニ限ラス犯罪ニ因リ損害ヲ受ケタル者ハ犯罪ノ地若シハ被告人所在ノ地ノ檢事又ハ司法警察官ニ告訴スルコトヲ得

司法警察官告訴ヲ受ケタルトキハ違警罪ニ付キ即決ヲ爲ス場合ヲ除ク外速ニ其書類ヲ管轄裁判所ノ檢事ニ送致ス可シ

第五十條 告訴人ハ成ル可ク其證據及ヒ事實參考ト爲ル可キコトヲ申立ツ可シ

第五十一條 告訴ハ告訴人ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲ス可シ

又告訴ハ口述ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得其告訴ヲ受ケタル官吏ハ調書ヲ作り告訴人ニ之ヲ讀聞カセ共ニ署名捺印ス可シ若シ告訴人署名捺印スルコト能ハサルトキハ其旨ヲ附記ス可シ

第五十二條 官吏、公吏其職務ヲ行フニ因リ犯罪アルコトヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタルトキハ速ニ其職務ヲ行フ地ノ檢事ニ告發ス可シ

十

ルトキハ速ニ其職務ヲ行フ地ノ檢事ニ告發ス可シ

告發ハ官吏、公吏ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲シ成ル可ク證據及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ添フ可シ

第五十三條 何人ニ限ラス犯罪アルコトヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタルトキハ第五十條第五十一條ノ規定ニ從ヒ其所在ノ地若シハ犯罪ノ地ノ檢事又ハ司法警察官ニ告發スルコトヲ得

告發ヲ受ケタル司法警察官ハ第四十九條ノ規定ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ

第五十四條 告訴、告發ハ代人ニ委任シテ之ヲ爲スコトヲ得但第五十二條ノ場合ハ此限ニ在ラス

無能力者ノ告訴ハ法律上代理人之ヲ爲スモ其効アリトス

第五十五條 告訴、告發ハ其取下ヲ爲シ又ハ其

申立ヲ變更スルコトヲ得此場合ト雖モ第十三條ノ規定ニ從ヒ被告人ヨリ要償ノ訴ヲ受ケルコトアル可シ

第二節 現行犯罪

第五十六條 現行犯罪トハ現ニ行ヒ又ハ現ニ行ヒ終リタル際ニ發覺シタル罪ヲ謂フ

第五十七條 重罪、輕罪ニ付キ左ノ場合ハ現行犯罪ニ准ス

第一 犯人トシテ一人又ハ數人ニ追呼セラ

ルルトキ
第二 兇器、贓物其他ノ物件ヲ携帯シ又ハ身體、被服ニ顯著ナル犯罪ノ痕跡アリテ犯人ト思料ス可キトキ

第三 家宅内ニ於テ犯シタル罪ヲ檢證スル爲メ又ハ其犯人ト思料ス可キ者ヲ逮捕スル爲メ戸主ヨリ官吏ニ其處分ヲ求メタルトキ

第五十八條 司法警察官及ヒ巡查、憲兵卒其職

務ニ行フニ當リ重罪又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタルトキハ令狀ヲ待タズシテ被告人ヲ逮捕ス可シ

罰金ノ刑ニ該ル可キ輕罪又ハ違警罪ノ現行犯アルコトヲ知リタルトキハ被告人ノ氏名住所ヲ問ヒ輕罪ニ付テハ檢事、違警罪ニ付テハ即決ヲ爲ス可キ官署ニ告發ス可シ其氏名、住所分明ナラス又ハ逃亡ノ恐アル者ハ檢事若クハ官署ニ引致スルコトヲ得

第五十九條 巡查、憲兵卒被告人ヲ逮捕シタルトキハ速ニ之ヲ司法警察官ニ引致ス可シ其被告人ヲ受取りタル司法警察官ハ逮捕及ヒ告發ニ付テノ調書ヲ作ル可シ

第六十條 何人ニ限ラス重罪又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ノ現行犯アル場合ニ於テハ直チニ被告人ヲ逮捕スルコトヲ得

第六十一條 前條ノ場合ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル者ハ之ヲ司法警察官ニ引致ス可シ若シ引

致スルコトヲ得サルトキハ自己ノ氏名、職業住所及ヒ其逮捕ノ事由ヲ陳述シ假ニ之ヲ巡查憲兵卒ニ引渡スコトヲ得

被告人ヲ巡查、憲兵卒ニ引渡シタルトキハ速ニ告訴又ハ告發ヲ爲スコシ

被告人又ハ巡查憲兵卒ハ逮捕ヲ爲シタル者ニ對シ共ニ官署ニ至ルコトヲ求ムルヲ得但逮捕ヲ爲シタル者ハ正當ノ事由アルニ非サレハ其求ヲ拒ムコトヲ得ス

第二章 起訴

第六十二條 地方裁判所檢察犯罪ノ搜查ヲ終リタルトキハ左ノ手續ヲ爲スコシ

第一 重罪ト思料シタル事件ニ付テハ豫審判事ニ豫審ヲ求ム可シ

第二 輕罪ト思料シタル事件ニ付テハ其輕重難易ニ從ヒ豫審ヲ求メ又ハ直チニ其裁判所ニ訴ヲ爲スコシ

第三 裁判所構成法第十六條第二號第三號ニ

キ場所逮捕ス可キ人名及ヒ證人ト爲ル可キ者ヲ指示ス可シ

第三章 豫審

第六十七條 現行ノ重罪、輕罪ヲ除ク外豫審判事ハ檢事ノ請求アルニ非サレハ豫審ニ取掛ルコトヲ得ス此規定ニ背キタルトキハ其請求ヨリ以前ニ係ル手續ノ效ナカル可シ

第六十八條 檢事ハ豫審中何時ニテモ豫審判事ニ請求シテ訴訟記録ヲ檢閱スルコトヲ得但二十四時内ニ之ヲ還付ス可シ
又必用ナリトスル處分ニ付キ臨時其請求ヲ爲スコトヲ得

第一節 令狀

第六十九條 豫審判事ハ檢事ノ記訴ニ因リ重罪輕罪ノ事件ヲ受理シタルトキハ被告人ニ對シ先ツ召喚狀ヲ發ス可シ但召喚狀ノ送達ト被告人出頭トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫アル可シ

記載シタル輕罪又ハ違警罪ト思料シタル事件ニ付テハ證據書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ區裁判所檢事ニ送致ス可シ

第六十三條 區裁判所檢察犯罪ノ搜查ヲ終リタル上裁判所構成法第十六條第一號第二號ニ記載シタル事件ト思料シタルトキハ其裁判所ニ訴ヲ爲スコシ

第六十四條 檢事ハ被告事件其裁判所ノ管轄ニ屬セサル者ト思料シタルトキハ之ヲ管轄裁判所ノ檢事ニ送致ス可シ
被告事件罪ト爲ラス又ハ公訴受理ス可カラサルモノト思料シタルトキハ起訴ノ手續ヲ爲スコカラス

第六十五條 前數條ノ場合ニ於テ被告事件告訴ニ係ルトキハ檢事ヨリ其處分ヲ被害者ニ通知ス可シ

第六十六條 檢事豫審ヲ求ムルトキハ證據及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ送致シ且臨檢ス可シ

召喚狀ニ因リ出頭シタル被告人ハ即時ニ之ヲ訊問ス可シ又遲クトモ出頭ノ日ヲ過クルコトヲ得ス

第七十條 豫審判事ハ召喚狀ヲ受ク可キ被告人其管轄地内ニ住セサルトキハ訊問ス可キ條件ヲ明示シテ被告人所在ノ地ノ豫審判事又ハ區裁判所判事ニ其處分ヲ囑託スルヲ得

第七十一條 豫審判事又ハ受託判事ハ召喚狀ヲ受ケタル被告人其日時ニ出頭セサルトキハ勾引狀ヲ發スルコトヲ得

七十二條 豫審判事又ハ受託判事ハ左ノ場合ニ於テ直チニ勾引狀ヲ發スルコトヲ得

第一 被告人定リタル住所アラサルトキ
第二 被告人罪證ヲ湮滅シ又ハ逃亡スル恐アルトキ

第三 被告人未遂罪又ハ脅迫罪ヲ犯シ仍ホ其目的ヲ遂ケントスル恐アルトキ
第七十三條 勾引狀執行ノ命ヲ受ケタル者ハ其

合狀ヲ發シタル判事ニ被告人ヲ引致ス可シ
勾引狀ヲ以テ引致シタル被告人ハ四十八時内
ニ之ヲ訊問ス可シ若シ其時間ヲ經過スルトキ
ハ勾留狀ヲ發スルニ非サレハ當然之ヲ釋放ス
可シ

第七十四條 豫審判事又ハ受託判事ハ召喚狀又
ハ勾引狀ヲ受タル被告人疾病其他正當ノ事由
アリテ合狀ニ應スル能ハサルコトヲ疏明シタル
キハ被告人ノ所在ニ就テ之ヲ訊問スルコトヲ得
第七十五條 勾留狀ハ被告人ヲ訊問シタル後禁
錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料スルニ非レハ
之ヲ發スルコトヲ得ス但被告人逃亡シタル場合
ニ於テハ其訊問ヲ爲サスノ之ヲ發スルコトヲ得
第七十六條 總テ合狀ニハ被告事件及ヒ被告人
ノ氏名、職業、住所ヲ記載ス可シ但召喚狀ヲ除
ク外其氏名分明ナラサルトキハ容貌、體格等
ヲ明示ス可シ
又合狀ニハ之ヲ發スル年月日時ヲ記載シ判事

十四

及ヒ裁判所書記署名捺印ス可シ
召喚狀ハ執達吏ヲシテ被告人ニ送達セシメ勾
引狀、勾留狀ハ巡查、憲兵卒ヲシテ之ヲ執行
セシム

第七十七條 勾引狀、勾留狀ハ時宜ニ因リ正本
數通ヲ作り巡查、憲兵卒數人ニ分付スルコト
アル可シ
前項ノ合狀ヲ執行スルニハ被告人ニ正本ヲ示
シ其謄本ヲ下付ス可シ此場合ニ於テハ其正本
、謄本ニ執行ノ場所、日時ヲ記載シ被告人ヲシ
テ署名捺印セシム若シ署名捺印スルコト能ハ
サルトキハ其旨ヲ附記ス可シ
第七十八條 合狀執行ノ命ヲ受ケタル巡查、憲
兵卒ハ被告人其家宅若クハ他人ノ家宅ニ潛匿
シタリト思料シタルトキハ其他ノ市町村長又
其差支アルトキハ隣佑二名以上ノ立會ヲ求メ
之ヲ搜索ス可シ
前項ノ場合ニ於テハ被告人ヲ發見シタルト否

トニ拘ハラヌ搜索調書ヲ作り立會人ト共ニ署
名捺印ス可シ

家宅搜索ハ日出前日没後之ヲ爲スコトヲ得ス
但旅店、割烹店、其他夜間ト雖モ衆人ノ出入ス
ル場所ニ付テハ其公開時間内ニ限り何時ニテ
モ搜索ヲ爲スコトヲ得

第七十九條 豫審判事ハ被告人他ノ管轄地内ニ
潛匿シタルコトヲ知り又ハ潛匿シタリト思料
シタル場合ニ於テ被告事件急速ヲ要スルトキ
ハ巡查、憲兵卒ニ合狀ヲ帶行セシムルコトヲ
得

巡查、憲兵卒ハ被告人所在ノ地ノ豫審判事、
檢事又ハ司法警察官ニ合狀ヲ示シテ即時ニ執
行ヲ求ム可シ

第八十條 豫審判事ハ被告人所在ノ地ヲ覺知ス
ルコト能ハサルトキハ各檢事長ニ被告人ノ人
相書ヲ送致シ搜查及ヒ逮捕ヲ爲スコトヲ
請求スルヲ得

請求ヲ受ケタル檢事長ハ其管轄地内ノ檢事ヲ
シテ搜索及ヒ逮捕ノ處分ヲ爲サシム可シ此場
合ニ於テ檢事ノ發シタル逮捕狀ハ勾留狀ト同
一ノ效ヲ有ス

第八十一條 豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル下士
以下ノ軍人、軍屬ニ對シ合狀ヲ發シタルトキ
ハ其所屬ノ長官又ハ隊長ニ合狀ヲ示ス可シ其
長官又ハ隊長ハ已ムコトヲ得サル差支アルニ
非サレハ本人ヲシテ速ニ合狀ニ應セシム可シ

第八十二條 勾留狀ヲ受ケタル被告人ハ速ニ其
合狀ニ記載シタル監獄署ニ引致ス可シ若シ其
監獄署ニ引致スルコト能ハサルトキハ假ニ最
近ノ監獄署ニ引致スルコトヲ得
何レノ場合ニ於テモ監獄署長ハ合狀ヲ檢閱シ
テ被告人ヲ受取り其證書ヲ渡ス可シ

第八十三條 合狀執行ノ命ヲ受ケタル巡查、憲
兵卒ハ之ヲ執行シタルコト又執行スルコト能
ハサルトキハ其事由ヲ合狀ノ正本ニ記載ス可

十五

巡査、憲兵卒ハ令狀執行ニ關スル書類ヲ檢事ニ差出ス可シ

第八十四條 勾留狀ヲ受ク可キ被告人既ニ監獄署ニ在ルトキハ執達吏ヲシテ之ヲ本人ニ送達セシム可シ

第八十五條 密室監禁ノ場合ヲ除ク外被告人ハ監獄則ニ從ヒ官吏ノ立會ニ依リ其親屬、故舊又ハ辯護士ニ接見スルコトヲ得

檢閱ヲ經タル後ニ非サレハ被告人ト外人ト之ヲ授受スルコトヲ許サス但豫審判事又ハ檢事ハ其書類ヲ留置クコトヲ得

第八十六條 豫審判事ハ被告事件禁錮以上ノ刑ニ該ル可キモノニ非スト思料シタルトキハ豫審中何時ニテモ勾留狀ヲ取消ス可シ

第二節 密室監禁

第八十七條 豫審判事ハ豫審中事實發見ノ爲メ

必要ナリト思料シタルトキハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ勾留狀ヲ受ケタル被告人ヲ密室ニ監禁スル言渡ヲ爲スコトヲ得

第八十八條 密室監禁ノ言渡ヲ受ケタル被告人ハ一名毎ニ之ヲ別室ニ置キ豫審判事ノ允許ヲ得ルニ非サレハ他人ト接見シ又ハ書類其他ノ物品ヲ授受スルコトヲ許サス

第八十九條 密室監禁ハ十日ヲ超過ス可カラズ但十日毎ニ其言渡ヲ更改スルコトヲ得言渡ヲ更改スルトキハ其事由ヲ裁判所長ニ報告ス可シ

豫審判事ハ十日間ニ少クモ二度被告人ヲ訊問ス可シ

第三節 證據

第九十條 被告人ノ自白、官吏ノ檢證調書、證據物件、證人及ヒ鑑定人ノ供述其他諸般ノ徵憑ハ判事ノ判斷ニ任ス

第九十一條 豫審判事ハ檢事若クハ被告人ノ請

求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル證據徵憑ヲ集取ス可シ

第九十二條 豫審判事臨檢、搜索、物件差押又ハ被告人、證人ノ訊問ヲ爲スニハ裁判所書記ノ立會ヲ必要トス書記ハ調書ヲ作り豫審判事ト共ニ署名捺印ス可シ

裁判所外ニ於テ急遽ノ際書記ノ立會ヲ得ルコト能ハサルトキハ立會人二名アルヲ要ス但監獄署ニ就テ被告人ヲ訊問スルトキハ其監獄署ノ官吏一名ヲシテ立會ハシム可シ

前項ノ場合ニ於テハ豫審判事自ラ調書ヲ作り之ヲ讀聞カセ立會人ト共ニ署名捺印ス可シ書記又ハ立會人ナクシテ爲シタル處分ハ其效ナカル可シ

第四節 被告人ノ訊問及ヒ對質

第九十三條 豫審判事ハ先ツ被告人ヲ訊問ス可シ但檢證ヲ爲シ又ハ證人ヲ訊問スルニ付キ急速ヲ要スルトキハ此限ニ在ラズ

第九十四條 豫審判事ハ被告人ヲシテ其罪ヲ自白セシムル爲メ恐嚇又ハ詐言ヲ用ユ可カラズ

第九十五條 裁判所書記ハ訊問及ヒ供述ヲ錄取シ被告人ニ之ヲ讀聞カス可シ

豫審判事ハ被告人ニ其供述ノ相違ナキヤ否ヤヲ問ヒ署名捺印セシム可シ若シ署名捺印スルコト能ハサルトキハ其旨ヲ附記ス可シ

第九十六條 被告人其供述ニ付キ變更増減スルギコトヲ申立タルトキハ更ニ訊問ヲ爲シ其可問及ヒ供述ヲ錄取シ之ヲ讀聞カセ署名捺印ス可シ

第九十七條 被告人ハ供述書ノ謄本ヲ求ムルコトヲ得

第九十八條 豫審判事ハ被告人ノ共犯ナルコト、人違ナキコト其他事實ヲ發見ス可キ一切ノ模様ヲ證スル爲メ必要ナリトスルトキハ被告人ノ他ノ被告人、證人又ハ其他ノ者ト對質セシムルコトヲ得

第九十九條 書記ハ對質人ノ供述及ヒ對質ニ因リ生スル一切ノ事件ヲ錄取シ對質人ニ其對質ニ關スル部分ヲ讀聞カス可シ

トスルトキハ犯所又ハ其他ノ場所ニ臨ミ檢證ヲ爲ス可シ

第九十五條 第九十六條ノ規定ハ對質ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第三百三條 豫審判事ハ犯罪ノ性質、方法、日時、場所及ヒ被告人ノ人達ナキコトヲ證明ス可キ模樣ニ付キ調書ヲ作ル可シ

第一百條 被告人又ハ對質人聾ナルトキハ書面ヲ以テ問ヒ哑ナルキハ書面ヲ以テ答ヘシム若シ聾者、哑者文字ヲ知ラサルトキハ通事ヲ命ス可シ

第四百條 豫審判事ハ被告人ノ住居又ハ事實ヲ證明ス可キ物件ヲ藏匿スル疑アル者ノ住居ニ臨檢シ搜索ヲ爲スコトヲ得

被告入又ハ對質人國語ニ通セサルトキ亦同シ
第一百一條 通事ハ正實ニ通譯ス可キ宣誓ヲ爲ス可シ

被告入ハ又ハ物件ヲ藏匿スル者其住居ニ在ラサルトキハ同居ノ親屬若シ其在ラサルトキハ市町村長ノ立會アルヲ要ス

書記ハ通事ニ調書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム可シ

第七十八條 第三項ノ規定ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第三百三十六條 第三百三十七條 第四百一十一條ノ規定ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第二百五條 豫審判事ハ被告人又ハ事實ヲ證明ス可キ物件ヲ藏匿スル疑アル者ノ身體及ヒ之ニ屬スル物件ニ就キ搜索ヲ爲スコトヲ得

第五節 檢證、搜索及ヒ物件差押

第二百二條 豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリ

第一百十五條 以下ノ規定ニ從ヒ之ヲ訊問ス可シ

第一百六條 豫審判事ハ臨檢、搜索ニ因リ發見シタル物件其事實ヲ證明スルニ足ル可シト思料シタルトキハ之ヲ差押ヘテ認印ヲ爲シ目錄ヲ作ル可シ但其物件ヲ監護シ又ハ遞送スルハ裁判所書記之ヲ擔任ス可シ

第一百十條 豫審判事ハ臨檢、搜索ノ場所ニ於テ証人ノ供述ヲ聽クコトヲ必要ナリトスルトキハ第一百十五條以下ノ規定ニ從ヒ之ヲ訊問ス可シ

第一百七條 豫審判事ハ臨檢、搜索、物件差押ニ付キ其日ニ處分ヲ終ラサルトキハ場所ノ周圍ヲ閉鎖シ又ハ看守者ヲ置クコトヲ得

第一百十一條 豫審判事ハ前數條ニ記載シタル處分中何人ニ限ラス允許ヲ得スシテ其場所ニ出入スルコトヲ禁スルヲ得

第一百八條 被告人ハ臨檢、搜索、物件差押ノ處分ニ立會ヒ又ハ代人ヲシテ立會ハシムルコトヲ得

第一百十二條 豫審判事ハ其管轄地内ト雖モ時宜ニ因リ臨檢、搜索、物件差押ノ事ヲ區裁判所判事ニ囑託スルコトヲ得

若シ被告人勾留ヲ受ケタルトキハ自ラ立會フコトヲ得ス但豫審判事本人ノ立會ヲ必要ナリトスルトキハ此限ニ在ラス

第一百十三條 豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスルトキハ驛遞、電信、鐵道ノ官署、諸會社ニ其事由ヲ通知シ被告人又ハ豫審事件ニ關係アル者ヨリ發シ若クハ此等ノ者ニ對シ發シタル書類、電報又ハ物件ヲ受取開披スルコトヲ得但受取證書ヲ渡ス可シ

第九十九條 豫審判事ハ被告人物件差押ノ處分ニ立會ヒタルトキハ此限ニ在ラス

立會ヒタルトキハ此限ニ在ラス
示シ辯解ヲ爲サシム可シ

其訊問及ヒ供述ハ之ヲ調書ニ記載ス可シ

第十四條 証言ヲ拒ムコトヲ得ル者ノ所持スル物件ニシテ其默秘ス可キ義務アル事情ニ關スルモノハ其承諾アルニ非サレハ之ヲ差押ヘ及ヒ開披スルコトヲ得ス

第六節 証人訊問

第十五條 証人ノ呼出狀ニハ其氏名、住所及職業ヲ記載ス可シ

又出頭ノ日時場所及ヒ呼出ニ應セサルトキハ罰金ヲ言渡シ且勾引スルコトアル可キ旨ヲ記載ス可シ

呼出狀ノ送達ト出頭トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫アル可シ

第十六條 証人疾病其他正當ノ事故ニ因リ呼出ニ應スル能ハサルコトヲ証明シタルトキハ豫審判事其所在ニ就テ之ヲ訊問ス可シ

第十七條 証人ト爲ル可キ者豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ナルトキハ其所屬ノ長官又ハ隊長ヲ經由シテ呼出狀ヲ送達ス其長

官又ハ隊長ハ即時ニ出頭セシム可キコトヲ認可シ又ハ職務上已ムコトヲ得サル差支アルトキハ其事由ヲ付シテ出頭ノ延期ヲ豫審判事ニ請求ス可シ

第十八條 豫審判事ハ前二條ニ定メタル差支ノ場合ヲ除ク外証人呼出ニ應セサルトキハ檢事ノ意見ヲ聽キ其不參ニ因リ生シタル費用ノ賠償及ヒ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ言渡ス可シ但其決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル效力ヲ有ス

豫審判事ハ其証人ニ對シ罰金ノ言渡書ト共ニ再度ノ呼出狀ヲ送達シ又ハ直チニ勾引狀ヲ發スルコトヲ得

若シ証人再度ノ呼出ニ應セサルトキハ費用賠償ノ外二倍ノ罰金ヲ言渡ス可シ又勾引狀ヲ發スルコトヲ得

豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ニ對スル罰金ノ言渡及ヒ執行ハ軍事裁判所又ハ所屬

ノ長官又ハ隊長ニ囑託シテ之ヲ爲ス可シ其勾引狀ニ付テモ亦同シ

第十九條 豫審判事ハ証人罰金言渡書ノ送達アリタルヨリ三日内ニ其出頭セサリシコトヲ

正當ノ理由ヲ以テ辯解シタルトキハ檢事ノ意見ヲ聽キ其罰金及ヒ賠償ノ決定ヲ取消ス可シ

第二十條 証人呼出狀ニ因リ出頭シタルトキハ其呼出狀ヲ差出ス可シ若シ之ヲ遺失シタルトキハ其人違ナキコトヲ説明ス可シ

第二十一條 豫審判事ハ証人トシテ呼出シタル者ニ對シ其氏名、年齢、職業、住所及ヒ第二十三條ニ記載シタル者ナリヤ否ヤヲ問フ可シ

第二十二條 豫審判事ハ証人ヲシテ良心ニ從ヒ眞實ヲ述ヘ何事ヲモ默秘セズ又何事ヲモ附加セサル旨ヲ宣誓セシム可シ

裁判所書記ハ証人ニ宣誓書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム若シ署名捺印スルコト能ハサル

トキハ其旨ヲ附記ス可シ

第二十三條 左ニ記載シタル者ハ証人ト爲ルコトヲ許サス但宣誓ヲ爲サシメスシテ事實參考ノ爲メ其供述ヲ聽クコトヲ得

第一 民事原告人

第二 民事原告人及ヒ被告人ノ親屬但姻族ニ付テハ婚姻ノ解除シタルトキト雖モ亦同シ

第三 民事原告人及ヒ被告人ノ後見人又ハ此等ノ者ノ後見ヲ受クル者

第四 民事原告人及ヒ被告人ノ雇人又ハ同居人

第二十四條 左ニ記載シタル者亦前條ニ同シ

第一 十六歳未滿ノ幼者

第二 知覺精神ノ不十分ナル者

第三 瘡啞者

第四 公權ヲ剝奪セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタル者

第五 重罪事件又ハ重禁錮ノ刑ニ該ル可キ
輕罪事件ニ付キ公判ニ付セラレタル者

第六 現ニ供述ヲ爲ス可キ事件ニ付キ曾テ
訴テ受ケ其證據十分ナラサルニ因リ免訴
ノ言渡ヲ受ケタル者

第二百二十五條 左ニ記載シタル場合ニ於テハ證
言ヲ拒ムコトヲ得

第一 官吏、公吏又ハ官吏、公吏タリシ者其
職務上黙秘ス可キ義務アル事情ニ關スル
トキ

第二 醫師、藥商、穩婆、辯護士、辯護人、公
證人、神職、僧侶其身分職業ノ爲メ委託ヲ
受ケタルニ因テ知リタル事實ニシテ黙秘
ス可キモノニ關スルトキ

證言ヲ拒ム者ハ拒絕ノ原因タル事實ヲ開示シ
且之ヲ説明ス可シ

第二百二十六條 證人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ
供述ヲ肯セサルトキハ豫審判事檢事ノ意見ヲ

聽キ刑法第八十條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ
但其決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得此抗
告ハ執行ヲ停止スル效力ヲ有ス

豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人軍屬ニ對ス
ル罰金ノ言渡及ヒ執行ハ軍事裁判所ニ囑託シ
テ之ヲ爲ス可シ

第二百二十七條 證人ハ他ノ證人及ヒ被告人ト各
別ニ之ヲ訊問ス可シ但事實發見ノ爲メ必要ナ
リトスルトキハ證人ト他ノ證人又ハ被告人ト
對質セシムルコトヲ得

第二百二十八條 豫審判事ハ證人ノ供述ヲ確實ナ
ラシムル爲メ必要ナリトスルトキハ犯所又ハ
其他ノ場所ニ同行スルコトヲ得

若シ證人同行スルコトヲ肯セサルトキハ第百
十八條ノ規定ニ從フ

第二百二十九條 第百條第百一條ノ規定ハ證人ニ
付テモ亦之ヲ適用ス

第二百三十條 皇族證人ナルトキハ豫審判事其所

在ニ就キ訊問ヲ爲ス可シ

各大臣ニ付テハ其官廳ノ所在地ニ於テ之ヲ訊
問ス若シ其所在地外ニ滞在スルトキハ其現在
地ニ於テ之ヲ訊問ス可シ

帝國議會ノ議員ニ付テハ開會期間其議會ノ所
在地ニ滞在中ハ其所在地ニ於テ之ヲ訊問ス可
シ

第三百三十一條 豫審判事ハ證人ニ其供述ノ相違
ヲキヤ否ヤヲ知ラシムル爲メ裁判所書記ヲシ
テ調書ヲ讀聞カセシム可シ

證人ハ其供述ヲ變更増減センコトヲ請求スル
ヲ得書記ハ其請求アリタルコト及ヒ變更増減
ノ條件ヲ調書ニ記載ス可シ

調書ニハ豫審判事、書記及ヒ證人共ニ署名捺
印ス可シ若シ證人署名捺印スルコト能ハサル
トキハ其旨ヲ附記ス可シ

第三百三十二條 豫審判事ハ證人裁判所所在ノ地
ニ住セサルトキハ其住居ノ地ノ區裁判所判事

ニ訊問ノ事ヲ囑託スルコトヲ得

若シ證人管轄地外ニ在ルトキハ其所在ノ地ノ
豫審判事又ハ區裁判所判事ニ訊問ノ事ヲ囑託
スルコトヲ得

第三百三十三條 第百十八條第百十九條及ヒ第百
二十六條ニ掲ケタル證人ニ對スル豫審判事ノ
權ハ受託判事ニモ屬ス

第三百三十四條 證人ハ出頭ニ付テノ旅費日當ヲ
要ムルコトヲ得

第七節 鑑定

第三百三十五條 豫審判事ハ犯罪ノ性質、方法及
ヒ結果ヲ分明ナラシムル爲メ鑑定ヲ必要ナリ
トスルトキハ學術、職業ニ因リ鑑定スルコト
ヲ得ヘキ者一名又ハ數名ヲシテ鑑定ヲ爲サシ
ム可シ

鑑定ノ爲メ必要ナリトスルトキハ死體ノ解剖
ヲ命ジ又既ニ埋葬シタル死體ヲ解剖シ若クハ
檢視スル爲メ墳墓ノ發掘ヲ命スルコトヲ得

第三百二十六條 鑑定ニ付テハ第一百五條第一百

八條乃至第二百一十一條第二百二十三條乃至第百

二十五條及ヒ第二百二十八條ノ規定ヲ準用ス但

鑑定人ニ對シテハ勾引狀ヲ發スルコトヲ得ス

第三百二十七條 鑑定人ハ公平且正實ニ鑑定ス可

キ宣誓ヲ爲ス可シ其宣誓ハ第二百二十二條ノ式

ニ從フ

第三百二十八條 鑑定人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シ

テ鑑定ヲ肯セサルトキハ豫審判事檢事ノ意見

ヲ聽キ刑法第七十九條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス

可シ但其決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得

此抗告ハ執行ヲ停止スル效力ヲ有ス

第三百二十九條 豫審判事ハ鑑定人ノ請求ニ因リ

又ハ職權ヲ以テ鑑定人ヲ増加シ又ハ別人ヲシ

テ鑑定セシムルコトヲ得

第四百十條 鑑定人ハ鑑定書ヲ作り其手續、結

果及ヒ鑑定ヲ爲シタル時間ヲ詳記ス可シ

若シ結果ヲ得サルトキハ其推測スル所ヲ記載

ス可シ

鑑定人意見ヲ異ニスルトキハ各自鑑定書ヲ作

リ又ハ各自ノ意見ヲ一箇ノ鑑定書ニ記載ス可

シ

第四百十一條 鑑定人ハ旅費、日當及ヒ立替金

ノ辨濟ヲ要ムルヲ得

第八節 現行犯ノ豫審

第四百十二條 豫審判事ハ檢事ヨリ先ニ重罪又

ハ地方裁判所ノ管轄ニ屬スル輕罪ノ現行犯ア

ルコトヲ知リタル場合ニ於テ其事件急速ヲ要

スルトキハ檢事ノ請求ヲ待タズ直チニ其旨ヲ

通知シ豫審ニ取掛ルコトヲ得

豫審判事ハ犯所ニ臨檢シ令狀ヲ發シ其他此章

ノ規定ニ從ヒ豫審ノ處分ヲ爲スコトヲ得

第四百十三條 前條ノ場合ニ於テハ檢事ノ起訴

ナシト雖モ豫審判事檢證調書ヲ作ルヲ以テ公

訴ヲ受理シタルモノトス其調書ニハ現行ノ重

罪又ハ輕罪ナルコトヲ記載ス可シ

豫審判事ハ速ニ書類ヲ檢事ニ送致ス可シ但檢

事ヨリ其豫審手續ヲ繼續ス可キモノニ非サル

意見アリト雖モ通常ノ規定ニ從ヒ之ヲ終結ス

可シ

第四百十四條 地方裁判所檢事及ヒ區裁判所檢

事ハ豫審判事ヨリ先ニ重罪又ハ地方裁判所ノ

管轄ニ屬スル輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタ

ル場合ニ於テ其事件急速ヲ要スルトキハ豫審

判事ヲ待ツコトナシ其旨ヲ通知シ犯所ニ臨檢

シ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得但罰

金及ヒ費用賠償ノ言渡ヲ爲スコトヲ得ス

證人及ヒ鑑定人ノ供述ハ宣誓ヲ用ユルコトナ

ク之ヲ聽ク可シ

第四百十五條 前條ノ場合ニ於テ地方裁判所檢

事ハ證憑書類ニ意見書ヲ添ヘ速ニ之ヲ豫審判

事ニ送致シ區裁判所檢事ハ之ヲ地方裁判所檢

事ニ送致ス可シ

第四百十六條 區裁判所檢事其裁判所ノ管轄ニ

屬スル輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル場合

ニ於テ其事件急速ヲ要スルトキハ第四百十四

條ニ規定シタル處分ヲ爲スコトヲ得

若シ被告人ニ對シ勾留狀ヲ發シタルトキハ三

日內ニ起訴ノ手續ヲ爲ス可シ

第四百十七條 第四百十四條第四百十六條ニ於

テ檢事ニ許シタル職務ハ司法警察官モ亦假ニ

之ヲ行フコトヲ得但勾留狀ヲ發スルコトヲ得

ス

司法警察官ハ證憑書類ニ意見書ヲ添ヘ速ニ之

ヲ管轄裁判所ノ檢事ニ送致シ且被告人ヲ逮捕

シタルトキハ共ニ之ヲ送致ス可シ

第四百十八條 地方裁判所檢事ハ區裁判所檢事

又ハ司法警察官ヨリ事件ノ送致ヲ受ケタルト

キハ一切ノ書類ニ請求書ヲ添ヘ豫審判事ニ送

致ス可シ

若シ同時ニ被告人ヲ受取リタルトキハ二十四

時内ニ之ヲ訊問シ勾留狀ヲ發シ又ハ發セズシ

テ前項ノ手續ヲ爲ス可シ

第四百十九條 地方裁判所檢察ハ何レノ場合ニ於テモ輕罪ノ現行犯ニ係リ豫審ヲ求ムルニ及ハスト思料シタルトキハ勾留狀ヲ發シタルト否トニ拘ハラス直チニ其裁判所ニ訴ヲ爲スコトヲ得

被告事件罪ト爲ラス又ハ公訴受理ス可カラサルモノト思料シタルトキハ起訴ノ手續ヲ爲ス可カラズ

第九節 保釋

第五百十條 豫審判事ハ豫審中勾留狀ヲ受ケタル被告人ノ請求ニ因リ檢察ノ意見ヲ聽キ何時ニテモ呼出ニ應シ出頭ス可キ證書ヲ差出シ且保釋ヲ立テシメ保釋ヲ許スコトヲ得
被告人無能力ナルトキハ法律上代理人ヨリ保釋ヲ求ムルコトヲ得

第五百十一條 保釋ノ金額ハ豫審判事之ヲ定メ保釋ヲ許ス言渡書ニ記載ス可シ

二十六

第五百十二條 保釋ヲ爲スニハ被告人又ハ法律上代理人ヨリ金錢若クハ有價證券ヲ差出ス可シ

又裁判所ノ管轄地内ニ住シ且十分ナル資力アル者ヨリ金額ニ充ツ可キ保證書ヲ差出スコトヲ得

第五百十三條 保釋人被告人ヲ呼出ストキハ出頭ヨリ二十四時前ニ其報告ヲ爲ス可シ

第五百十四條 保釋中被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出頭セサルトキハ保釋金ノ全部又ハ一分ヲ沒收ス可シ

第五百十五條 保釋金ヲ沒收スルニハ檢察ノ意見ヲ聽キ豫審判事其言渡ヲ爲ス可シ

第五百十六條 豫審判事保釋金ヲ沒收シタルトキハ保釋ノ言渡ヲ取消ス可シ

又豫審中保釋ノ言渡ヲ取消スコトヲ必要ナリトスルトキハ檢察ノ意見ヲ聽キ其言渡ヲ取消ス可シ

第五百十七條 豫審判事保釋金ヲ沒收シタル後免訴ノ言渡、違警罪又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ公判ニ付スル言渡ヲ爲シタルトキハ檢察ノ意見ヲ聽キ前ニ沒收シタル金額ヲ還付ス可シ

第五百十八條 豫審判事免訴ノ言渡、違警罪又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ公判ニ付スル言渡ヲ爲シ若クハ保釋ノ言渡ヲ取消シタルトキハ保釋金ヲ還付ス可シ

第五百十九條 豫審判事ハ保釋ノ請求アルト否トヲ問ハス檢察ノ意見ヲ聽キ被告人ヲ其親屬又ハ故舊ニ責付スルコトヲ得

責付ヲ爲スニハ親屬又ハ故舊ヨリ何時ニテモ呼出ニ應シ被告人ヲ出頭セシムヘキ證書ヲ差出サシムヘシ

第六十條 責付中被告人ヲ呼出ストキハ出頭ヨリ二十四時前ニ其報知ヲ爲スヘシ
被告人正當ノ事由ナクシテ出頭セサルトキハ

檢察ノ意見ヲ聽キ責付ノ言渡ヲ取消スヘシ

第十節 豫審終結

第六十一條 豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非ストシ又ハ他ニ取調ヲ要スルコトナシト思料シタルトキハ豫審終結ノ處分ニ付キ檢察ノ意見ヲ求ムル爲メ訴訟記録ヲ送致ス可シ

檢察ハ訴訟記録ニ意見ヲ付シ三日内ニ之ヲ還付ス可シ

第六十二條 檢察ハ豫審十分ナラスト思料シタルトキハ其條件ニ付キ更ニ取調ヲ請求スルコトヲ得若シ豫審判事其請求ヲ肯セサルトキハ檢察ハ訴訟記録ニ意見ヲ付シ二十四時内ニ之ヲ還付ス可シ

第六十三條 豫審判事ハ檢察ノ意見如何ナルヲ問ハス後數條ニ記載シタル決定ヲ以テ豫審ヲ終結ス可シ

第六十四條 豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非サルコトヲ認メタルトキハ其旨ヲ言渡ス可シ

二十七

若シ勾留ヲ要スルモノト認メタルトキハ前ニ發シタル令狀ヲ存シ又ハ新ニ令狀ヲ發シ其事
件ヲ檢事ニ交付ス可シ

第百六十五條 豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ免訴
ノ言渡ヲ爲シ且被告人勾留ヲ受ケタルトキハ
放免ノ言渡ヲ爲ス可シ

第一 犯罪ノ證據十分ナラサルトキ

第二 被告事件罪ト爲ラサルトキ

第三 公訴ノ時効ニ罹リタルトキ

第四 確定判決ヲ經タルトキ

第五 大赦アリタルトキ

第六 法律ニ於テ其罪ヲ全免スルトキ

第百六十六條 被告事件違警罪ナリト思料シタ
ルトキハ區裁判所ニ移ス言渡ヲ爲シ且被告人
勾留ヲ受ケタルトキハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

第百六十七條 被告事件裁判所構成法第十六條
第二號ニ記載シタル輕罪ナリト思料シタルト
キハ區裁判所ニ移ス言渡ヲ爲シ其他ノ輕罪ナ

免訴ノ言渡ヲ爲スニハ被告事件罪ト爲ラサル
コト公訴受理ス可カラサルコト及ヒ其原由又
犯罪ノ證據十分ナラサルトキハ其旨ヲ明示ス
可シ

區裁判所ニ移ス言渡又ハ公判ニ付スル言渡ヲ
爲スニハ犯罪ノ性質、模様、證據ノ十分ナルコ
ト及ヒ其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條ヲ明示ス可
シ

第百七十條 前條ノ決定ニハ第七十六條ノ規定
ニ從ヒ被告人ノ氏名等ヲ明示ス可シ

第百七十一條 豫審終結ノ決定ノ正本ハ速ニ檢
事及ヒ被告人ニ送達ス可シ

第百七十二條 檢事ハ重罪公判ニ付スル決定又
ハ免訴若シハ管轄違ノ決定ニ對シ抗告ヲ爲ス
コトヲ得

被告人ハ重罪公判ニ付スル決定ニ對シ抗告ヲ
爲スコトヲ得

リト思料シタルトキハ其裁判所ノ輕罪公判ニ
付スル言渡ヲ爲ス可シ

被告人勾留ヲ受ケタル場合ニ於テ罰金ノ刑ニ
該ルモノト思料シタルトキハ釋放ノ言渡ヲ爲
ス可シ

禁錮ノ刑ニ該ル可キモノト思料シタルトキハ
保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲スコトヲ得

若シ被告人未タ勾留ヲ受ケサルトキハ令狀ヲ
發スルコトヲ得

第百六十八條 被告事件重罪ナリト思料シタル
トキハ其裁判所ノ重罪公判ニ付スル言渡ヲ爲
ス可シ若シ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ爲シタルト
キハ其言渡ヲ取消シ被告人未タ勾留ヲ受ケサ
ルトキハ令狀ヲ發ス可シ

第百六十九條 豫審終結ノ決定ニハ事實及ヒ法
律ニ依リ其理由ヲ付ス可シ

管轄違ノ言渡ヲ爲スニハ其原由ヲ明示シ若シ
被告人ヲ勾留ス可キトキハ其原由ヲ明示ス可

第百七十三條 重罪公判ニ付スル場合ニ於テ被
告人ニ送達ス可キ決定ニハ其決定ニ對シ抗告
ヲ爲スヲ得ヘキコト及ヒ其期間ヲ記載ス可シ
其記載ナキトキハ更ニ通常ノ規定ニ從ヒ決定
ノ送達アルマテ抗告期間ノ經過ヲ停止ス

第百七十四條 豫審終結ノ決定ハ抗告ノ期間内
又抗告アリタルトキハ其決定アルマテ執行ヲ
停止ス但保釋責付ノ言渡ヲ取消ス決定ハ其執
行ヲ停止セス

第百七十五條 豫審ニ於テ被告人免訴ノ言渡ヲ
受ケ其決定確定シタルトキハ罪名ノ變更アル
モ同一ノ事件ニ付キ再ヒ訴ヲ受ルコトナカル
可シ但新ニ證據アルトキハ此限ニ在ラス
新ナル證據アルトキハ檢事ヨリ之ヲ其裁判所
ニ差出シ裁判所ニ於テハ其起訴ヲ許ス可キヤ
否ヤ決定ス可シ

第四編 公判
第一章 通則

第七十六條 公判ハ判事、檢事、裁判所書記出
廷シテ之ヲ爲スモノトス

第七十七條 被告人ハ公廷ニ於テ身體ノ拘束
ヲ受クルコトナシ但守卒ヲ置クコトアル可シ

第七十八條 裁判所ニ於テハ何時ニテモ禁錮
以上ノ刑ニ該ル可キ被告人ニ對シ勾引狀又ハ
勾留狀ヲ發スルコトヲ得

第七十九條 被告人ハ辯論ノ爲メ辯護人ヲ用
ユルコトヲ得

辯護人ハ裁判所所屬ノ辯護士中ヨリ之ヲ選任
ス可シ但裁判所ノ允許ヲ得ルトキハ辯護士ニ
非サル者ト雖モ辯護人ト爲スコトヲ得

第八十條 辯護人ハ裁判所ニ於テ訴訟記録ヲ
閱讀シ且之ヲ抄寫スルコトヲ得

第八十一條 被告人ノ法律上代理人ハ其補佐
人ト爲リ辯論ニ與カルコトヲ得

第八十二條 被告人出頭シテ辯論スルコトヲ
肯セサルトキハ對席トシテ裁判ヲ爲ス可シ

被告人審問ヲ妨ケ又ハ不當ノ行狀ヲ爲シ裁判
長ヨリ退廷又ハ勾留ヲ命セラレタルトキ亦同
シ若シ辯論二日ニ渡ルトキハ更ニ被告人ヲ出
頭セシム可シ

第八十三條 被告人精神錯亂又ハ疾病ニ因リ
出頭スルコト能ハサルトキハ痊癒ニ至ルマテ
辯論ヲ停止ス但罰金以下ノ刑ニ該ル可キ事件
ニ付キ被告人代人ヲ差出シタルトキハ此限ニ
在ラス

辯論ニ取掛リタル後被告人精神錯亂シタルト
キハ其痊癒ノ後新ニ辯論ヲ爲ス可シ其他ノ疾
病ニ罹ルトキハ痊癒ノ後前ニ停止シタルヨリ
以後ノ手續ヲ爲ス可シ但五日間辯論ヲ停止シ
又ハ檢事其他訴訟關係人ノ請求アリタルトキ
ハ新ニ辯論ヲ爲ス可シ

若シ被告事件及ヒ法律ノ適用ニ付キ既ニ辯論
ヲ終リタルトキハ其痊癒ノ後更ニ取調ヲ爲ス
コトナク裁判ヲ爲ス可シ

裁判所ニ於テハ職權ヲ以テ管轄違又ハ公訴受
理スヘカラサル言渡ヲ爲スコトヲ得

第八十七條 裁判所ニ於テ前條ノ申立ヲ却下
シタルトキハ本案ノ判決ヲ待タズ直チニ控訴
又ハ上告ヲ爲スコトヲ得此場合ニ於テハ本案
ノ辯論ヲ停止ス

第八十八條 調書ヲ作りタル司法警察官ハ檢
事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ裁判所ノ
職權ヲ以テ證人トシテ之ヲ呼出スコトヲ得

第八十九條 豫審ニ於テ訊問シタル證人又ハ
鑑定ヲ爲シタル鑑定付ハ更ニ之ヲ呼出スコト
ヲ得

豫審ニ於ケル證人ノ供述書又ハ鑑定人ノ鑑定
書ハ更ニ其證人、鑑定人ヲ呼出ササルトキ證
人、鑑定人呼出ヲ受ケ出頭セサルトキ又ハ豫
審及ヒ公判ニ於ケル供述、鑑定ヲ比較ス可キ
トキハ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ
裁判長ノ職權ヲ以テ之ヲ朗讀セシムルコトヲ
得

第八十四條 裁判所ニ於テハ訴ヲ受ケサル事
件ニ付キ裁判ヲ爲ス可カラズ但辯論ニ因リ發
見シタル附帶ノ犯罪ニ付テハ此限ニ在ラス

若シ附帶ノ犯罪ニ付キ豫審ヲ必要ナリトスル
トキハ本案ノ辯論ヲ停止スルコトヲ得

第八十五條 左ノ場合ニ於テハ附帶ノ犯罪ヲ
リトス

第一 同一ノ場所ニ於テ同時ニ一人又ハ數
人ニテ數罪ヲ犯シタルトキ

第二 數人通謀シテ日時又ハ場所ヲ異ニシ
數罪ヲ犯シタルトキ

第三 自己又ハ他人ノ犯罪ヲ容易ニスル爲
メ又ハ其罪ヲ免カルル爲メ他ノ罪ヲ犯シ
タルトキ

第八十六條 檢事及ヒ被告人ハ第一審第二審
ヲ問ハス本案ノ判決アルマテ何時ニテモ管轄
違又ハ公訴受理ス可カラサル申立ヲナスコト
ヲ得

得

第九十條 第一百五條以下ノ規定ハ公判ノ證人ニ第三百二十五條以下ノ規定ハ公判ノ鑑定人ニモ亦之ヲ準用ス

第九十一條 證人疾病其他正當ノ事故ニ因リ出頭スル能ハサルコトヲ疎明シタルトキハ裁判所ハ其部員一名ニ命シ又ハ區裁判所判事ニ囑託シ其所在ニ就テ之ヲ訊問セシムルコトヲ得

第九十二條 檢事、被告人及ヒ民事原告人ノ請求ニ因リ呼出ス證人ノ氏名目錄ハ開廷ヨリ一日前之ヲ各相手方ニ送達ス可シ

第九十三條 證人ハ互ニ言語ヲ接ス可カラヌ又供述前辯論ニ立會フ可カラヌ既ニ供述ヲ爲シタル後ハ公廷ニ留ル可シ但裁判長ヨリ退去ノ允許ヲ得タルトキハ此限ニ在ラス

第九十四條 證人及ヒ被告人ノ訊問ハ裁判長之ヲ爲スモノトス

陪席判事及ヒ檢事ハ裁判長ニ告ケ證人及ヒ被告人ヲ訊問スルコトヲ得

訴訟關係人ハ辯論ニ必要ナリトスル事項ヲ分明ナラシムル爲メ證人ヲ訊問ス可キコトヲ裁判長ニ求ムルヲ得

第九十五條 證人又ハ鑑定人ノ供述不實ニシテ故意ニ出テ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタルトキハ裁判所ニ於テ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ取押ヘ勾引狀ヲ發シ裁判所長ニ送致ス可シ

其證人又ハ鑑定人ノ供述ハ裁判所書記之ヲ錄取シ豫審判事ニ送致ス可シ
本條ノ場合ニ於テハ裁判所ニテ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ本案ノ辯論ヲ停止スルコトヲ得

第九十六條 被告人聾者、啞者又ハ國語ニ通セサル者ナルトキハ第九十條第一百一條ノ規定ニ從フ

第九十七條 裁判所ニ於テハ證人被告人ノ面前ニ於テ十分ナル供述ヲ爲スコトヲ得サル可シト思料シタルトキハ其證人ノ供述中被告人ヲ退廷セシムルコトヲ得但裁判所長ハ證人供述ヲ終リタル後被告人ヲ入廷セシメ其供述シタル事項ヲ告知ス可シ

本條ノ規定ハ共同被告人ニモ亦之ヲ適用ス

第九十八條 裁判長ハ各證憑ノ取調終リタル毎ニ被告人ニ意見アリヤ否ヤヲ問ヒ且其利益ト爲ル可キ證憑ヲ差出スヲ得ヘキコトヲ告知ス可シ

又證憑物件ハ被告人ニ示シテ辯解ヲ爲サシム可シ

第九十九條 辯論中公判ノ手續ニ付キ異議ノ申立アリタルトキハ裁判所ニ於テ檢事ノ意見ヲ聽キ直チニ之ヲ裁判ス可シ

第二百條 裁判所ニ於テハ公訴ノ判決ト同時ニ私訴ノ判決ヲ爲ス可シ

私訴ニ付キ取調未タ十分ナラサルトキハ公訴ノ判決アリタル後其判決ヲ爲スコトヲ得

第二百一條 被告人有罪ト爲リタルトキハ裁判所ノ職權ヲ以テ公訴ニ關スル訴訟費用ノ全部又ハ一分ヲ負擔ス可キ言渡ヲ爲ス可シ

免許又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テ公訴ニ關スル訴訟費用ハ國庫之ヲ負擔ス
私訴ニ關スル訴訟費用ノ負擔ハ民事訴訟法ノ規定ニ從フ

第二百二條 被告人有罪ト爲リタルト否トヲ問ハス沒收ニ係ラサル差押物ハ所有者ノ請求ナシト雖モ之ヲ還付スル言渡ヲ爲ス可シ

第二百三條 刑ノ言渡ヲ爲スニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ明示シ且犯罪ノ證憑ヲ明示ス可シ

無罪又ハ免訴ノ言渡ヲ爲スニ付テモ亦其理由ヲ明示ス可シ
第二百四條 判決ノ言渡ハ辯論ヲ終リタル後即

日又ハ次ノ開廷日ニ之ヲ爲ス可シ
判決ノ言渡ハ判決主文ノ朗讀ニ因リ之ヲ爲ス
其判決ノ理由ハ判決ノ言渡ト同時ニ之ヲ朗讀
シ又ハ口頭ニテ其要領ヲ告ク可シ

第二百五條 判決ノ原本ニハ其裁判ヲ爲シタル
裁判所、年月日、其事件ニ干與シタル檢事ノ官
氏名ヲ記載シ判事、裁判所書記共ニ署名捺印
ス可シ

第二百六條 訴訟關係人ハ其費用ヲ以テ判決ノ
正本、謄本又ハ抄本ヲ求ムルコトヲ得但上訴
ノ爲メ其求ヲ爲シタルトキハ書記ヨリ二十四
時内ニ之ヲ下付ス可シ

第二百七條 對席判決ニ因リ刑ノ言渡アリタル
トキハ裁判長ヨリ其言渡ヲ受ケタル者ニ前條
ノ請求及ヒ其判決ニ對シ上告ヲ爲スヲ得ヘキ
コト及ヒ其期間ヲ告知シ又闕席判決ニ因リ刑
ノ言渡アリタルトキハ其判決ニ對シ故障ヲ爲
スヲ得ヘキコト及ヒ其期間ヲ記載ス可シ

若シ其告知又ハ記載ナキトキハ更ニ其通知ア
ルマテ上訴及ヒ故障期間ノ經過ヲ停止ス
第二百八條 裁判所書記ハ公判始末書ヲ作り左
ノ事項其他一切ノ訴訟手續ヲ記載ス可シ

第一 公ニ辯論ヲ爲シタルコト又ハ公開ヲ
禁シタルコト及ヒ其事由
第二 被告人ノ訊問及ヒ其供述
第三 證人、鑑定人ノ供述及ヒ宣誓ヲ爲シ
タルコト若シ宣誓ヲ爲ササルトキハ其事
由

第四 證據物件
第五 辯論中異議ノ申立アリタルコト、其
申立ニ付キ檢事其他訴訟關係人ノ意見及
ヒ裁判所ノ裁判

第六 辯論ノ順序及ヒ被告人ヲシテ最終ニ
供述セシメタルコト
第二百九條 公判始末書ニハ前條ニ記載シタル
事項ノ外裁判ヲ爲シタル裁判所、年月日、裁判

長、陪席判事、檢事及ヒ裁判所書記ノ官氏名ヲ
記載ス可シ

辯論數日ニ涉ルトキハ其旨及ヒ同一ノ判事出
席シタルコトヲ記載ス可シ

辯論中補充判事ヲシテ代ラシメタルトキハ其
旨ヲ記載ス可シ

第二百十條 公判始末書ハ判決言渡ヨリ三日内
ニ之ヲ整頓シ裁判長及ヒ裁判所書記署名捺印
ス可シ

裁判長ハ署名捺印セサル以前ニ公判始末書ヲ
檢閱シ若シ意見アルトキハ其紙尾ニ記載ス可
シ

第二百十一條 判決及ヒ公判始末書ノ原本ハ訴
訟記録ニ添付シ其裁判所ニ保存ス可シ若シ上
訴アリタルトキハ之ヲ上訴裁判所ニ送付ス可
シ

第二章 區裁判所公判

第二百十二條 區裁判所ハ左ノ場合ニ於テ其管

轄ニ屬スル違警罪及ヒ輕罪ノ公訴ヲ受理ス

第一 檢事ノ起訴アリタルトキ

第二 豫審判事又ハ上級裁判所ヨリ事件ヲ
移ス裁判アリタルトキ

第二百十三條 檢事ハ何レノ場合ニ於テモ被告
人ニ對シ呼出狀ヲ發ス可キコトヲ裁判所ニ請
求ス可シ

裁判所ハ裁判所書記ヲシテ被告人ニ對シ呼出
狀ヲ發セシム可シ

第二百十四條 呼出狀ニハ呼出ヲ受ク可キ者ノ
氏名、職業、住所、出頭ノ日時場所及ヒ被告事
件ヲ記載シ且被告事件違警罪又ハ罰金ニ該ル
可キ輕罪ナルトキハ代人ヲシテ出頭セシムル
コトヲ得ヘキ旨ヲ記載ス可シ

若シ被告事件ノ記載ナキ場合ニ於テ被告人未
タ其事件ニ付キ取調ヲ受ケサリシトキハ辯護
準備ノ爲メ二日ヲ猶豫ヲ求ムルコトヲ得

第二百十五條 呼出狀ノ送達ト出頭トノ間少ク